徳川三国志

柴田錬三郎

文春文庫

著者紹介

柴田錬三郎（しばた・れんざぶろう）
大正6(1917)年岡山県に生れる。慶応大学支那文学科卒。在学中より『三田文学』に作品を発表、昭和27年「イエスの裔」で第26回直木賞を受賞。31年「眠狂四郎無頼控」を週刊誌に連載、ニヒルな剣士狂四郎と円月殺法は圧倒的なブームを呼ぶ。一貫して〝おもしろい小説〟を追求し、「剣は知っていた」「赤い影法師」ついで連作〈柴錬立川文庫〉を執筆、時代小説の第一人者となる。著書多数。53年6月没。

徳川三国志

柴田錬三郎

文春文庫

徳川三国志　柴田錬三郎　し 3 12　文春文庫　560

9784167143121

1910193005609

江戸城のお濠端、千鳥ヶ淵から半蔵門に向う闇の中を一人の武士、松平伊豆守が歩いていた……。と真の闇のなかに「伊豆守、今宵は殺すぞ」の声がひびいた——。将軍家光と対立する紀伊大納言頼宣の野望を松平伊豆守はなんとかおさえようと尽力する。軍学者、剣豪、忍者いり乱れて展開される寛永時代活劇。　解説・磯貝勝太郎

し 3 12

ISBN4-16-714312-7

C0193 P560E

定価560円（本体544円）

文春文庫

文春文庫
柴田錬三郎の本

- 猿飛佐助 柴錬立川文庫(一)
- 真田幸村 柴錬立川文庫(二)
- 裏返し忠臣蔵 柴錬立川文庫(三)
- 柳生但馬守 柴錬立川文庫(四)
- 嗚呼江戸城 (上)(中)(下)
- われら九人の戦鬼 (上)(中)(下)
- 徳川太平記 (上)(下)
- 徳川三国志

カバー・村上　豊

文春文庫

徳川三国志

柴田錬三郎

文藝春秋

徳川三国志
柴田錬三郎
文春文庫

文春文庫

徳川三国志

柴田錬三郎

文藝春秋

徳川三国志／目　次

一章

服部一夢斎 12
忠長様ご乱心 24
節分会総登城 34
血風箱根路 44
隠密十兵衛 54
駿府城異聞 66

二章

旗本やくざ 80
吉原堤の対決 92
賭場荒し 104
張孔堂楠流軍学 116
南無阿弥陀剣 128
伊豆守襲撃 141

三章

一夢斎対幻幽斎 154
将門塚切腹 165
吉姫まんだら 176
正雪恋慕 188
毒　酒 199
修羅街道 211
犠　牲 223

四章

明国からの使者 238
少林寺拳法 250
運命の絆 262
お庭番 274

五章

春日局 288
姿不見橋 299
お鷹狩 311
秘伝・夢想剣 323
幽霊騒動 336
おそで失踪 348

六章

賞金相撲 364
流水月 377
忍法胡蝶陣 391
伊賀三十六人衆 402
久能山代参 415
獅子奮迅刀 428
死　闘 443

終章

武蔵野 456
解説　磯貝勝太郎 461

徳川三国志

一章

服部一夢斎

一

江戸城のお濠端、千鳥ヶ淵から半蔵門に向う闇の中を一人の武士が歩いていた。

黒の紋服に、同じく黒鞘の大小の落し差し、すでに凩の季節だというのに、この武士は、素足に雪踏、顔は朧富士のま新しい編笠でかくしていたが、その姿は、どこから見ても、一人の浪人者にしか見えない。

しかし、その歩きぶり、物腰には、不思議に威のようなものがあった。

武士は、番町、前田丹後守の上屋敷の手前で西に折れ、武家屋敷の間をぬけるだらだら坂を四谷御門の方角に向って下っていく。

ときは、既に酉の刻をすぎていて、凩が闇の空を、うなりをあげて吹きぬけていた。

やがて、武士は、麹町から四谷にぬける小路に出てきた。

このあたり、すでに武家屋敷はない。左右には寺の土塀が長々とつづき、巨大な松や樫などの大枝が路の上まで張出してきている。ふと、武士の足が止った。突然、その足もとを犬が走りぬけた。

武士は、身じろぎもせず、闇の中に立っていた。

あたりに、殺気があった。

しかし、人の気配はない。目の前の寺のくぐり戸から、提灯をぶら下げた坊主が一人、出てきて、大通りの方へ塀にそって歩いていった。

はて？　武士の編笠がわずかに揺れた。提灯をぶら下げた坊主の姿は、すでに、闇の中に消えていた。

また、一頭の犬が、音もなく、編笠の武士の前を横切った。

ぱっと、崩れかかった寺の土塀の上へはね上って、消えた。

そのとき、小さな人影が、すっと、武士の脇を通りぬけた。老婆だった。細い杖をつき左手をうしろにまわして、曲った腰の上に置き、藁草履を突っかけて、すたすたとゆく。しかし、不思議なことに、足音がない。

「……？」

武士は、編笠の中から、老婆のうしろ姿を睨んだ。とたん、老婆は、くるりと振りかえり、フフフゥ……と含み笑った。ぶきみな笑い声だった。しかし、武士は身動きもせず、凝然と闇の中に佇んでいた。

老婆も、無言で前へ出てきた。

あたりは、真の闇だというのに、老婆の姿だけが、月光の中にでもいるかのように、おぼろに、光っている。

背丈は、四尺にも足りなかろう。泥亀のような蒼黒い顔には、表情がない。皺の中にうずまったような細い目だけが、正体不明の妖しい光芒を放っていた。

「フフフゥ、松平伊豆守」

と、老婆は言った。

「生命を落したくなくば、しのびあるきは、止めにせい」

しかし、武士はこたえない。

「伊豆守、今宵は殺すぞ」
老婆は、杖を片手にぶら下げて、すっと、一歩前に出た。
「おのれ、忍者じゃな」
「ほほう。わが正体がわかったか、伊豆。さすがは、ときの老中じゃ。知恵伊豆といわれるだけのことはあるわ。フフフゥ」
この浪人ていの武士は、たしかに幕府の老中、松平伊豆守信綱であった。
「誰に頼まれた」
「誰に頼まれたとは虚仮なことをぬかす。われらは、根来から来たといえばそれでわかろう」
老婆は、すっと杖をあげると、ぱっと伊豆守の喉笛めがけて、突いてきた。稲妻のような突きだった。
う！　と伊豆守は、とびのいた。
とたん　四方から、一度に数本の棒手裏剣が、伊豆守の目、頸、心の臓を狙って、飛来した。
空中で、火花が散った。
一瞬の間に地に這った伊豆守の頭上で、四方から飛来した棒手裏剣が嚙み合ったのだ。
伊豆守は、また一挙に、二間もうしろにとんだ。しかし、その背後から、また、すさまじい忍刀の一撃がきた。
がっ！
伊豆守は、反射的に大剣をぬいて、これをはねあげていた。
いつのまにか、雲が流れて、耿々たる月光の中に、五個の黒装束が浮出していた。
その後方に、老婆が杖を手にして立っていた。

「フフフゥ。よい月光になったの、伊豆守。今宵は、もはや逃れられぬ。ゆるゆると殺して進ぜる。フフフゥ」
老婆は利鎌のような目に、もの凄い光を浮かべて、せせら笑った。
そのとき、どこかで鴉が一声鳴いた。
大剣をぶら下げて、うっそりと立った、伊豆守を押し包んで、五個の黒装束がじりじりと寄ってきた。いずれも忍刀をぶらさげている。
しかし、伊豆守は逃げなかった。剣先をわずかにあげて、逆に、じりっと、前に出た。
気合もかけず一個の黒影が、地を蹴って跳躍した。伊豆守の大剣が、月光をはじいて、ひらめいた。
頸骨が断たれるすさまじい音と一緒に、黒装束の首は宙にとんでいた。
同時に、四個の黒装束が音もなく地にくずおれていた。
いずこからか飛来した、四本の手裏剣が、いちどきに、これら忍者の心の臓を射ぬいていたのだ。
うっ！　と老婆の腰が伸びた。同時に、土塀の上から、声がかかった。
「殿、あの化けもんも、わしがお引受けいたす」
影のように伊豆守信綱を護衛してきた伊賀者、鴉の甚兵衛であった。
しかし、そのとき老婆は、すでに身をひるがえしていた。甚兵衛が、その背へ向って跳躍した。
とたん、伊豆守の鋭い声が、かかった。
「甚兵衛、追うなッ」
「へ！」

「無駄な殺生はせんでもよい」
「さようでござるか」
　甚兵衛は、不服げに、天を仰いで言った。
「しかし、殿。あやつ、生かしておくと、たたり申すぞ」
「よい。放っておけい」
「殿は、あやつが何者か知るまいが」
「知らぬ」
　ぱしっと、大剣を鞘に納めて、伊豆守は笑った。
「あやつが、根来の六郎太の化け姿でござるよ」
　伊豆守は、もう、甚兵衛に背を向けて歩き出していた。

二

　しばらくののち、松平伊豆守信綱は、四谷西念寺の境内を歩いていた。経堂の脇に、小さな藁葺の草庵が建っていた。雨戸の隙間から灯がもれていた。
　信綱は、観音堂の横手の樫の大樹の下に、彳んで、しばらく草庵の灯を見ていた。
　客があるらしく、草庵からは、ときどき、笑い声がもれてくる。信綱の背後に、音もなく現れた鴉の甚兵衛が、にやりと笑って言った。
「柳生の若でござるな、客は」
　信綱は、無言で歩き出した。
　草庵の前に信綱が立つと、待ちかまえていたように板戸が開いて、十七、八の美しい娘が、信綱を迎え、丁寧に腰を折った。この草庵の主服部一夢斎の孫娘志乃であった。
　囲炉裏端には、甚兵衛が言った通り、主の一夢斎と柳生但馬守の嫡男柳生十兵衛三厳がいた。
　信綱は編笠をとって、志乃に渡した。
「また、お忍びでござるか、伊豆守殿」
　十兵衛三厳が、まっ黒に陽焼けした顔を向けて言った。
「ふむ」
　信綱は、口もとに微笑を浮かべて、うなずき、炉端にあがると、
「わしにも、茶を振舞うてくれぬか」
と、一夢斎にも笑顔を向けた。
　一夢斎も微笑して茶碗を手にとったが、その目は笑っていなかった。茶を点てながら、下から、すくいあげるように信綱を見て、言った。
「人を斬ってきましたな、伊豆守様」
「ふむ、それより駿府の方の動きは、どうじゃ」
「それは、わしより十兵衛殿のほうが、ようお知りじゃ」
　十兵衛は、目をつむってしまっていた。その陽焼けした顔を焼くように、一瞬、囲炉裏の火が、メラっと燃えあがった。戸外では凩が、ひょうひょうと吹き荒れていた。
　信綱は、一夢斎からまわされた茶を静かに喫している。やがて、十兵衛が、ぼそりと言った。
「駿河大納言様、いけませぬな」
「どのようにいかぬ」
「諸侯に先だって範をたれていただかねばならぬ上様の弟君が、殺生禁断の駿州浅間山で、公然、

幕府の禁を破って、狩をなさる。ささいなことで、家来を手討になさる……」
「すると、噂は……まことか」
「いかにも。すべて。そればかりではござらぬ。大納言様のうしろには、どうやら、紀州様の手が動いているもよう……」
「さようか。それも、どうやら真実らしいの」
懐中に手を入れると、信綱は、一本の手裏剣を取出して、十兵衛の膝もとに置いた。先ほど、根来忍者が放ってきた棒手裏剣である。信綱は、いつのまにか、それを路上から拾ってきていたのだ。
その手裏剣を手にとってみて、十兵衛は、うなるように言った。
「これは、まさしく、根来流の棒手裏剣じゃ。伊豆守殿、おてまえが今宵斬って来られたのは、この一党でござるか」
信綱は、うなずいて、茶碗を一夢斎に返した。
「根来者といえば、紀州の忍者、幻幽斎の手のものじゃ」
ぼそりと言った一夢斎の目には、異様な光が浮いていた。一夢斎は、根来忍者の頭領根来幻幽斎の怖しさは骨身にしみて思い知っていたからである。
この服部一夢斎という痩身鶴のごとき老人、実は、伊賀甲賀の忍者群を組織して、東照神君徳川家康を助け、化性のような働きをした初代服部半蔵正成の実兄であった。術も、弟半蔵をはるかにしのいでいたという。しかし、表だった働きはすべて弟半蔵に任せ、つねに裏から公儀隠密団を動かして来たおそるべき陰の人物だったのである。
かつて――。

天正十年六月二日、明智光秀によって織田信長が本能寺で討たれたとき、徳川家康は、穴山梅雪らと泉州堺に遊んでいた。
家康が、もし軍旅にあったのならば、あるいは家康は、このとき秀吉にかわって、天下を奪っていたかも知れぬ。しかし、家康に従っていたのは、本多忠勝、酒井忠次、榊原康政、井伊万千代らの旗本、三十余名にすぎなかった。
家康は、ただちに、本国岡崎に還ると決めた。しかし、街道は、すでに、明智光秀の軍勢に押さえられ、間道には、異変を聞いた土匪の群が蜂起していた。
枚方より、河内の内尊延寺を通り、草地の渡をわたり、宇治田原へ出て、ここから、近江国信楽へぬける順路をえらんだものの、家康主従は、土匪一揆の主力が、甲賀の地侍の組んだ徒党ときいて、ハタと立往生してしまった。名にし負う甲賀忍者の集団に襲われては突破はおろか、生命さえ危なかったからだ。
このとき、忽然として、家康の前へ現れ、護衛を申し出たのが、服部半蔵正成であった。
家康は、半蔵が伊賀者と知って、眉をひそめた。しかし、本多忠勝が半蔵の父左衛門尉保長と旧知の間柄であると知って、山中突破の先導は半蔵に任すと、決断した。
おかげで、家康の一行は、勢多から信楽、伊賀の境の土岐峠を越えて、伊勢の白子浜へ出、無事、岡崎城へ入ることが出来た。
この功によって、服部半蔵は、以来、伊賀者を束ねて、徳川家に仕えることになったのだが、この脱出行を陰から援助し、実際に甲賀忍者群とすさまじい闘争をして、家康一行の血路を開いたのは、若き日の半蔵の兄一夢斎であった。
そればかりではない。険隘な山中に土着し相対してゆずらず、争闘に明けくれていた伊賀甲賀

の地侍らを連合させ、徳川隠密団として、組織したのも、実は、この服部一夢斎だったのである。

「十兵衛どの」

と一夢斎は言った。

「駿河大納言様は、今、江戸じゃの」

「いかにも」

一夢斎は、無言で、天井を見あげて言った。

「甚兵衛」

とたん、藁屋根の上から、

「ここにござる」

ただちに、鴉の甚兵衛の忍者声が返ってきた。

「駿河大納言家の江戸屋敷を探って参れ」

「かしこまった。されど、お師。今宵殿を襲ったのは、根来の六郎太でござった。あやつが、このまま退くとも思えぬ」

鴉の甚兵衛は、一夢斎の子飼いの弟子だったのである。信綱の護衛につけたのも、一夢斎であった。

「心配はいらぬ。帰途は十兵衛殿も一緒じゃ」

「さようか」

声と一緒に、鴉の羽ばたく音がした。凩の空をカアカアと、鴉の鳴き声が遠ざかっていった。

一夢斎が苦々しげに、吐き出した。

「甚兵衛め、下らぬ遊びをしよる」

三

このころ、寛永年間は、まだ桃山時代の遺風をのこしていて、各大名屋敷は、それぞれ、豪壮を競っていた。二重の櫓門、大棟門を表門とし、別に将軍家の御成りに備えて、御成門を設け、屋敷の周囲には、長屋をつらねて家中の住居とし、公式部分は書院造り、廊下をまわし、庭前には、能舞台という結構である。常住の部分は、壺庭をへだててあり、その中間に台所が設けられ、夫人や女中たちの住居である長局は、表から廊下でつながっていた。

幕府は、大名がたに、その屋敷を築かせるのに、いかに豪壮をきわめようとも出費はとがめず、むしろ、奨励さえしたが、その構造は、厳重に取締ったのである。

駿河大納言家も例外ではない。

三重の櫓門、大棟門をそそり立て、屋敷の周囲は、ぐるり、家中の士の長屋で、とりかこまれていた。しかも、大納言家には、寝ずの番の忍者たちが飼われていた。まず、金城鉄壁の戦構えといっていい。

その塀したに、音もなく、ひとつの黒影が浮いて出た。鴉の甚兵衛であった。無造作に、一挙動で、塀の上に、はね上った。そのまま塀の平瓦に蜘蛛のように張りついた。しかし、鼻の孔はふくらみ、両耳は、ピンと立っている。屋敷中の、人の気配を嗅いでいるのだ。

やがて、甚兵衛は、ふわりと、邸内に降りた。闇の中を泳ぐように、建ち並んだ長屋の脇をぬけ、雑木林をぬけ、泉水のまわりをまわっていった。

奥書院の板戸の前に、甚兵衛の黒影が泳ぎついた。すっと、縁の下にもぐった。やがて、縁の

下から這い出してきた甚兵衛は、腰からクナイをぬくと、戸袋の脇の板戸の上端に、すっと、差した。手くびをひねった。コトリと桟がはずれた。同様に下端の桟もはずした。音もなく板戸を一尺ほど繰り、するりと入った。入ったとたん、板戸は閉っていた。風のような素早さである。

廊下の闇の底を甚兵衛は、泳ぐように這っていく。突然、甚兵衛の黒影は、天井に舞上って、消えた。

廊下の角から、一人の武士が現れた。この武士、足音を消している。

武士は奥書院の脇を通りぬけ、納戸に入った。

納戸の暗がりに一人の年齢不詳の黒装束が坐っていた。根来幻幽斎であった。

武士は言った。

「仕止めたか」

「いや、このたびは、ちと、嚇したまでのことでござる。いま、伊豆守殿を殺しては、ことが面倒になり申す」

「……」

「実は、柳生の小倅めが、駿河から紀州まで足を延ばして参り申しましたのでな」

「十兵衛がか」

「さようでござる」

「さればとて、何ほどのこともあるまい。紀州様は将軍家の叔父御、わが君は、弟君じゃ。両家とも、将軍家とは、血を分けたお家柄ではないか。将軍家もまさか、わが殿の謀叛に紀州様がお味方遊ばすとは思われますまい。それより、幻幽斎、紀州様のお心が、十兵衛ごときがうろつきまわっただけで、お変りになったのではござるまいな」

「これは、また牧野様とも思われぬお言葉。そのようなことが、あるわけはござりませぬ。まずは、ご安心あれとのことでござります」

「ふむ」

この武士は、駿河大納言忠長の寵臣、牧野備後であった。備後は、念を押すように言った。

「それは、紀州様直々のお言葉か」

「いや、それがしのごとき一介の忍者に大納言さま直々のお言葉など、あろうはずはござりませぬ。すべて、関口様の肚裡より出でたるものでござる」

「関口殿から、ほかに何か言づてはないか」

「ござりませぬ。ただ、百万石加増の一件、願い出された後は、駿河大納言家より幕閣への根まわしは、ご無用とのことでござります。すべて、われらが致しますゆえ」

「ふむ、相わかった。関口殿には、よしなに」

〈紀州の狸め、また、何か企みおったな〉

天井裏で、鴉の甚兵衛が、にやりと笑った。関口某とは、紀伊大納言家の国家老関口隼人正であった。

忠長様ご乱心

一

江戸城中、御座の間で、将軍家光は、苦りきっていた。
その脇に控えた老中筆頭土井大炊頭利勝も、唇をへの字に引結んだまま、押し黙っている。
二人の間には、一通の書状が投げ出されていた。
家光は膝もとに置かれた茶碗を手にとった。茶は、すでに、冷えていた。ぐいっと、一口で飲み干して、音をたてて茶碗を置いた。
そのとき、襖の向うから声がかかった。
「松平伊豆守、参上仕りました」
「入れい」
家光は、嚙みつくような声で、言った。
伊豆守は、敷居ぎわから膝行してきた。
「ちこうッ」
家光は、また、わめくように、言った。
伊豆守信綱は、驚いたように、顔をあげた。
「何ごとでございます」
「伊豆、それを見い。駿河の忠長めが、また駄々をこねて来おった」
伊豆守は、するすると寄って、二人の間に投出されている書状を拾いあげた。

大炊頭利勝も、不機嫌な声で言った。
「こともあろうに、百万石賜りたいとのご要求じゃ」
書状を読み終ると、伊豆守は、目を閉じた。伊豆守は、この書状が今日駿河大納言徳川忠長から提出されることは、甚兵衛の報告で、すでに知っていたのだ。
家光が、また、わめいた。
「伊豆、そちの考えをいえいッ」
「はは、おそれながら……」
「おそれながら、何じゃ」
「この書状に書れてありますような百万石加増の要求は、果して、駿河大納言様のご本意でござりましょうや」
「本意じゃ。本意でなくて、何で朱印まで押して要求して来るか」
また紀伊大納言様の何ごとかの策謀でござりましょう——危うくそういいかけて伊豆守は辛うじて押さえた。
紀州大納言頼宣は、資質英明で武勇を好み、戦国風を誇示して浪人を庇護し、これまでも、ことあるごとに幕閣に対抗してきた。謀叛の企てあり、という風聞まである。家光には極めて迷惑な存在であった。
しかし、頼宣は、神君家康の第十子であり、紀州五十五万石の大守である。人を納得させ得るたしかな証拠もなくて、今、それを口にすることはできない。
また、駿河大納言忠長に対する家光の複雑な心のうちも、九歳の折から家光の側近に侍ってきた伊豆守信綱は、知りすぎるほど知っていた。

駿河大納言忠長は、家光より二歳年少の弟である。幼名を国松という。家光の幼名は竹千代である。

幼時、竹千代は気が小さく、気転の利かぬ無口な子であった。これに反して、国松は、才気煥発、機敏な少年であった。そのため、二人の母浅井氏（崇源院夫人）は国松を偏愛し、父秀忠も夫人の影響を受けて、国松の方を可愛がった。乳母の春日局をはじめとする竹千代づきの人々は、ゆくゆくは、国松が兄竹千代を差しおいて、将軍職を襲うのではないか、という懸念さえ持った。

十二歳のとき、竹千代は、自分が父母に気に入られないのを悲しみ、ついに、自殺しようとした。この事実を知って動転した春日局は、ただちに駿府に行き、大御所家康に、将軍夫妻の竹千代に対する態度を訴えた。

春日局の忠誠心に感動した家康は、わざわざ江戸城を訪れて、

「竹千代が十六歳になった暁は、余が伴って上洛し、三代将軍の宣下を受けよう」

と秀忠夫妻に告げた。

このため、竹千代の世継としての地位は決定したのだが、竹千代自身の父母に対する反撥と、弟国松に対する女性の嫉妬にも似た鬱屈した感情は、将軍職を襲いでからもなお心の底でくすぶっていた。

この点は、国松の方も同じで、駿河、遠江、甲斐にわたる五十五万石という大封を与えられ、官位も従二位、権大納言にまで昇りながら、それに満足せず、将軍を無視するような我儘も度々だったのである。

「伊豆守、何故、ものをいわぬッ」

目をつむり、沈黙してしまった信綱にじれて、家光はまたわめいた。

「しばし、ご猶予をいただけませぬか……伊豆めも、あまりのことに口が利けませせぬ」

伊豆守は、なお、目を閉じたまま、沈痛な声で答えた。

「伊豆守殿、幕閣をあずかる身で、口が利けぬということはござるまい」

利勝も、じれたように言った。

「いかに弟君におわすとはいえ、今の忠長様は上様の臣下。臣下が主に領地を強要するという無法はござらぬ。先年は、大坂城をくれろと要求したばかりか、このたびは百万石の無心じゃ。そればかりではない。法度を無視した忠長様のご乱心の数々、これ以上放置しておいては、天下の法が立ちますまい」

「いかにも……」

「かかる場合、かく処置するというのが、われわれ政治をあずかるものの、つとめではござらぬか、伊豆守殿。すでに、改められた武家諸法度にも明らかに……」

君臣の別は定められてあり申す。駿河大納言家は取潰し……といいかけて、利勝も、さすがに口をつぐんだ。

しかし、それは利勝の言う通りであった。

たとえ、兄弟一門でも、将軍との主従関係を明確にうち立てる方針は、家康の晩年から、きびしく励行され、これにそむく行動を幕府は許さなかった。そのため、元和二年（一六一六）には、家康の第六子忠輝が伊勢（三重県）の朝熊に流され、同九年には、秀忠の兄秀康の子忠直が、豊後（大分県）萩原に流されている。

寛永九年（一六三二）には、家康十九回忌の法要のため、家光が、日光東照宮に参詣した留守中、土井利勝を首謀者として、徳川の天下を覆そうという計画書を、旗本の家に持ちこんだもの

が捕えられた。
　その男は、加藤忠広の子光広の家来で、光広は、いたずらのつもりで、怪文書を家来に持ちまわらせていたという。
　幕府は、これを咎め、日ごろの忠広の身持の悪いこと、江戸で生れた子を無断で国許へ送ったことなどをあわせて、肥後熊本五十万石を奪い、忠広を出羽（秋田県）庄内の酒井氏に、光広を飛騨（岐阜県）の金森氏に召し預け、加藤家を断絶させた。忠広は、戦国の梟雄加藤清正の子である。
　四半刻にわたる沈黙ののち、伊豆守は、ぼそりと、言った。
「おいたわしきことながら、もはや、これは……」
「忠長を処断せよとか」
　と答える家光には、もはや、先刻のいら立ちは消えていた。
　利勝も、今や、沈痛な面もちで、目を閉じてしまっている。
　信綱の四半刻にわたる沈黙は、たしかに、二人の興奮を鎮めるのに役立っていたのである。それだけ信綱は、家光と利勝とに信頼されていたといえる。
「しかしながら」
　信綱は、なお、目を閉じたままで言った。
「政治にも情が無うてはかないますまい。ここは、ひと度、忠長様にご反省の機会をお与え遊ばしては如何かと存ずる」
「反省のときを与えよとか」
「かと存じまするが、この信綱も、坐して傍観するつもりではござりませぬ。百万石加増などという途方もない要求を何故忠長様がお持出しになられたか、その辺の理由を、今しばらく探ってみたく存じまする」
「よかろう。では、万事、そちに任した。利勝、そちもよきに計らえ」
「ははっ」
　家光は袴を鳴らして立ち上った。

二

　それから、十日ほどすぎたある夜更け――。
　旅姿の一人の武士が、お濠の橋を渡って、神田一ツ橋御門の前に立った。大兵である。たっつけ袴に、草鞋ばき、葛布紬の打裂羽織は旅塵にまみれ、編笠のひさしから、わずかにのぞいた目は隻眼であった。一目で、ただものではないとわかる。柳生十兵衛三厳であった。
　番士は、慌てて六尺棒をとりなおして言った。
「何用でござる」
　十兵衛は笠もとらずに言った。
「松平伊豆守殿御屋敷に罷り通る」
　番士は、むっとしたが、一応、
「名は何と申される」
　と訊いた。
「仔細あって名乗るわけには参らぬ」
　いい終らぬうちに、十兵衛は、すっと番士の脇をすりぬけていた。
「あっ！」

と番士が声をあげたときは、十兵衛の姿は御門内の闇の中に消えていた。
「おのれ！」
番士は追おうとした。
とたん、闇の中から、声があった。
「大事はない。あの仁は殿の待ちもうけておられた客人じゃよ」
鴉の甚兵衛である。
番士も、甚兵衛が、伊豆守信綱を陰から護衛していることは知っていた。むっとした顔のままで、また御門前に戻り、いまいましげに舌うちした。
十兵衛が名乗らなかったのには理由がある。
十兵衛は、父宗矩以上の腕と称せられ、なお嫡男であるにも拘らず、このころは、若隠居して、大和の柾木坂に道場を開いていた。つねに、三千余の門弟を擁していたが、柾木坂の道場にいるのは、一年のうち、わずか一カ月あまり。十兵衛は、表面は武者修行と見せかけながら、実は、幕府の隠密として、諸侯の動静探索のために諸国を遍歴していたのである。そして、このたびは、伊豆守に頼まれて、紀州藩探索にとんでいたのだ。
しばしのち、十兵衛は、松平屋敷の裏書院で信綱と対座していた。
十兵衛の隻眼に暗鬱な陰がういている。
「と……、関口隼人正が、駿河大納言様を」
「さよう。されど、いまだに、さしたる証拠はござらぬ。ただ、紀州の忍者、根来幻幽斎が、しばしば、駿府を訪れ、大納言様のお小姓、牧野備後と、何やら密談いたしておったことはまちがいござらぬ」

「牧野備後が……」
信綱は、うっすらと半眼に閉じた目を、天井にあげて、言った。
「過日も、駿河様の江戸屋敷にて、備後がその幻幽斎とやらと、何やら密談しておったそうな。甚兵衛の探ったところによると、駿河様には謀叛のお心があり、これに、紀州様が味方するとか、しないとか……。だが、わしには、紀州様がそのような無謀なことをお企てになるとは思えぬのじゃ」
「いかにも」
十兵衛は語気荒く言い放った。
「それがしも、ここ数カ月の間、一夢斎殿の手のものをかりて、和歌山城中奥ふかく忍ばせていたのでござるが、そのような動きは毛ほどもござらなんだ。頼宣様には、朝、お庭にて弓を引かれるほかは、狩にもお出にならず、まこと、お静かな日常でござる。関口隼人正との密談のご様子も見え申さぬ」
「なるほど……。しかし、頼宣様が狩にもお出かけにならぬとは、ちと解せぬ」
「………」
「十兵衛殿、六韜にござるな。聖人のまさに動かんとするや、まず愚色あり、猛獣のまさに搏たんとするや、首を垂れて伏すと……」
「ふむ」
「その幻幽斎とやらいう人物は、一体、どのような人物でござる」
「まず、怪物と申してよかろう。尋常一様の人物ではござらぬ」
「ふむ」
腕組をしたまま、信綱は、吐息ともつかぬうめきをもらした。

「かつて、根来衆は、ただの野伏り、乱破の類でござった。しかし、この一族から、いぼむじりと呼ばれる怪物が出てから後、この一党は、畿内はもとより、遠く甲斐・信濃・飛驒にかけて、隠然たる勢力を張るようになったのでござる。いぼむじりは、その名のごとく、蟷螂のごとき痩身で、肌あくまで浅緑、飛翔力鳥のごとく、忍術とも幻術ともつかぬ摩訶不思議な妖術を使ったと伝えられており申す。一時、松永弾正久秀に雇われて、戦国の野に跳梁したのでござるが、その術の無残さたるや、伊賀忍者の頭領戸沢白雲斎も顔をそむけるほどだったとか……。

根来衆は、このいぼむじりのあとにも、印南の祇園院、壇家の千丈斎、逢坂の魔仁など、諸国まで聞こえた数多くの手練者を生んでおり申す。かの幻幽斎は、逢坂の魔仁の子飼いの弟子で、その術は、師の魔仁を超えているとか。しかも、いま、紀州家に仕えた幻幽斎の手には、根来の一郎太、次郎太をはじめとして、三郎太から十郎太まで、怖るべき術者がひかえており申す」

十兵衛は、そこまで語ると、ふと、天井を見上げて言った。

「敵として、おそらく、これほど厄介な人物はござるまい」

「なるほどな」

伊豆守も依然として、半眼に閉じた目を天井にむけている。その目には、かすかな光が浮いていた。

「されば、駿河様ご謀叛、それに紀州様の後楯があるとすれば……、伊豆殿」

「ふむ、このたびの忠長様のご無体なお申し出の裏には、たしかに企みがあるな」

「いかにも」

と、答えたとたん、さっと膝をたてた十兵衛、抜く手も見せず、頭上の天井に脇差を投じた。

三寸以上も天井板を貫いた脇差の刃を伝わって、たらたら、と、一筋、血がしたたった。同時

に、屋敷の一角で一声、鴉が鳴いた。

甚兵衛がいち早く血臭を嗅いで、敵を追った証拠である。

十兵衛は、天井板から脇差をぬきとり、ぱちり、鞘に納めて、言った。

「で、上様のご意向は」

「うむ。忠長様も根は決してお悪い方ではないのじゃが、余りにも世間というものを御存じなさすぎる。上様もそこのところは承知なされておられるはずじゃが……」

「では、大炊頭殿が、駿河大納言様のご処断を上様に……」

「今一度だけ、忠長様にも反省のご機会を、と、わしからも申しあげてあるのじゃが、紀州大納言家が裏で何やら企んでおるとすると、これも、無駄かも知れぬな。忠長様のご気性では、なかなかのことでは、折角の上様のお言葉もお聞入れにはなりますまい」

「伊豆守殿」

十兵衛は、その隻眼をぎょろりとむいて、言った。

「諸大名列座の席で、それとなく忠長様にご注意申し上げるのは如何でござろう」

「なるほど、それで、忠長様のご本意をたしかめ得れば、もし、事が最悪の場合にいたろうとも、上様のご威光には傷はつき申さぬというわけじゃな」

「あわせて、紀州様の動きも、牽制できようというもの」

にやりと笑って、十兵衛は、

「それにしても、甚兵衛は遅うござるな」

とたん、襖のむこうから、甚兵衛が鴉のようなしゃがれ声で、答えた。

「ご安心あれ。根来の鼠は、この甚兵衛が、片づけ申した」

節分会総登城

一

松平伊豆守信綱は、慶長元年（一五九六）幕府代官大河内久綱の嫡男として生れたが、代官の子では、直接将軍に仕えることは叶わぬと考え、叔父で、十八松平家のひとつ、長沢松平家正綱の養子となった。このとき、信綱は六歳であった。早熟の才子であったといえる。

信綱は、望みどおり、慶長九年（一六〇四）家光誕生とともに、九歳で江戸城に召し出され、家光に仕えた。

元和八年（一六二二）五百石、同九年には三百石の加増を受け、小姓組番頭に任ぜられ、従五位下、伊豆守に叙任された。

この間、信綱には、逸話が多い。

家光がまだ将軍世子だった元和年間、「流れ衣紋」という衣紋の型が流行し、家光もそれを着ていた。これは、小袖の袖の部分に厚く綿をいれ、袖の重みで、肩が大きく抜けるように着るものだったが、信綱は、家光がこれを着ているのを見るや、襟をつかんで着崩れを正し、

「将軍になるべきお方が、このような衣紋の型に心を使うは何事でござりまする」

と諫めた。

またあるとき、家光が踊りに凝って、合せ鏡を見ながら、化粧したり、髪を結ったりしていた。このとき信綱は、その鏡をつかみざま庭石に投げつけ、さらに足蹴にして、泉水に蹴込んでしまった。

さすがに、家光もこのときは激怒したとみえ、信綱は、しばらく側近から遠ざけられ、憂鬱な日々を送らねばならなかった。

世子時代の家光は、また、夜ひそかに、側近の者数名だけをひき連れて、しばしば、城外を微行した。そして、ときにはためし斬りまでした。

守り役青山忠俊らの老臣が、いくら諫めても、ききいれようとはしなかった。しかし、家光は、夜行のつど、草履が暖められているのに気付いた。注意していると、草履を暖めていたのは、合せ鏡を泉水に蹴込んだ信綱だと知れた。家光は、それほどまでに、信綱が自分の微行に心を痛めているのか、と感動し、以後、忍び歩きはぱったり止めたという。

それから十有余年、今や、信綱は将軍家光から最も信頼される側近の一人になっていたのである。

信綱が十兵衛と語らってのち、突如、三百諸侯に総登城のお触れが出されたのは、年の瀬もおし迫った、師走二十九日のことであった。

この日は、節分会であり、申の下刻（午後五時）には、江戸城中でも城中諸役が登城し、年番の老中が、熨斗目長上下を着用、節分会の儀式が行われることになっていた。

しかし、諸侯を節分会に参会させるためだけに総登城のお触れが出されたのではない。

集会時刻は、辰の下刻（午前九時）、場所は、江戸城本丸、白書院、豪華絢爛たる二百畳敷きの広間であった。

伊豆守は、老中御用部屋に端座して、瞑目していた。

やがて、辰の刻を知らせる時の太鼓が荘重に鳴り響きはじめた。

「紀伊大納言様お上り——」

まず、紀伊大納言徳川頼宣の登城を告げる声があがり、つづいて、
「水戸中納言様お上り――」
「島津宰相様お上り――」
「伊達陸奥守様お上り――」
「前田加賀守様お上り――」
続々と登城してくる大名の名を告げ知らせる声があって、大廊下を小腰をかがめてゆく、茶坊主たちのすり足の音が、忙し気に聞こえはじめた。
しかし、肝心の駿河大納言忠長の登城を知らせる声は聞こえてこない。
やがて、三河田原藩一万石三宅土佐守を最後に、呼び声は止んだ。すでに、勘定奉行をはじめとする諸役の登城する、時の太鼓が鳴りはじめている。襖をあけて、突如、土井利勝が入ってきた。
「伊豆守、駿河大納言様より、いま使いがまいった。大納言様ご不例につき、本日の登城は見合せると伝えて参ったわ」
「大納言様が御不例とは」
「なに、仮病にきまっておる」
「しかし、本日の総登城が何を意味するか、大納言様もご存じのはず」
「さよう。これに洩(も)れては、いかなるお咎めを受けても申し開きはできまい。世上すでに、大納言様のご乱行の噂はひろがっておる。諸侯らも、この総登城の意味は、うすうす感づいておろうに……、なんたることか！」
利勝は、もはや救いようはないという面つきで、舌打ちした。

忠長の不参を知らされたとたん、家光の面上に、一瞬、青すじが立った。家光は無言で座を立つと、大廊下へ出た。太刀持が周章(あわ)ててあとを追った。
しかし、白書院上段の座についた家光の顔からは、すでに怒気は消えていた。
一斉に平伏した諸侯に、家光は、おだやかな声で言った。
「おのおのに、申しきかせる一条がある。祖父東照神君、父秀忠は、諸侯に助けられ、ともに戦って、天下人となられた。諸侯のなかには、朋輩として待遇を受けたものもおろう。それぞれの感情によって遇されたものもおろう。しかし、余はちがう。余は生れながらの将軍である。諸侯はわが臣である。すべて、天下の政治のもと、平等であり、公平である。本日、諸侯に総登城を命じたは、ともに節分会を祝い、併せてこのことを申し伝えるためであった」
諸侯は、家光の大胆不敵な宣言に息をのんだ。これまでは、家康も秀忠も、表向きはどうであれ、腹の底では、諸侯の協力を得て、幕府の体制を確立するために汲々(きゅうきゅう)としていたことは知っていたからである。
この日、家光は、徳川幕府開府以来はじめて、天下万民に、徳川幕府の威をあびせて、畏怖(いふ)せしめる幕府の絶対性を宣言したのだ。
家光は、しかし、淡々としてつづけた。
「天下の政治とは、他でもない。天下一統の政治である。特別はゆるされぬ。余も、諸侯も、武士も、町人も、あまねく天下万民の政治である。天下は、万民が各々その所をえて、はじめて治まる。その基は法である。法の下に差別はない」
諸侯のあいだに、かすかなざわめきが起った。家光の言葉は、幕政の在り方にことよせて、あ

きらかに、駿河大納言忠長の乱行、不参を咎めだてていると知れたからだ。

その途端、家光は、じろりと紀州頼宣を一瞥し、声をはげまして、言った。

「不服があれば遠慮は要らぬ。ただちに、今ここで申されよ。聞こう。紀州どの、如何」

頼宣は、一瞬、かたわらに控えた伊豆守に忌々しげな視線を投げたが、たちまち、昂然と顔をあげて、言った。

「上様のお言葉、有難く拝聴つかまつった。全くもって道理至極と存ずる。もし、諸侯のうちに上様のお心に叛く不埒者あらば、お手をわずらわすまでもござらぬ。この頼宣が紀州の軍勢を引っさげて、ひと揉にもみ潰してごらんに入れ申す。何卒、心安う思し召されよ」

家光は、莞爾として言った。

「その言葉を聞いて、余も安心いたした。紀州殿、今後ともよろしゅう頼むぞ」

「ははっ」

頼宣は、思わず、この小面憎い甥の前に平伏していた。

二

年が明けて、寛永九年——。

正月から、松平伊豆守の顔付は冴えなかった。

病気と称して、年賀にも登城しなかった駿河大納言忠長が、正月十日、突然、駿河へ帰ってしまったからである。

参勤中の大名が、幕府に無断で国許へ帰れば、それだけで謀叛と看做されても言い開きはできない。最悪の場合は、——駿河五十五万石はお取潰し、大納言忠長は切腹——、である。

将軍職を継いでから、個人的な感情は、めったに表にださなくなっていた家光も、忠長様ご帰国の報に接したときだけは、

「百万石の墨付きの代りに、駿府で、問責の上使を待つつもりかっ!」

と、わめいた。

駿府から聞こえてくる忠長の行状は、いずれも芳しいものではなかった。譜代の臣と新参の士に真剣勝負をさせたり、幕府の付家老鳥居淡路守を、江戸へ帰れと怒鳴りつけたり、遂には、隠密詮議の布告まで出すにいたっていた。ひそかに隠密を斬るならともかく、布告まで出しての隠密詮議は、幕府に対する挑戦である。殺生禁断の地、浅間山での狩も依然としてつづいていた。

春日局などは、

「忠長様には、御幼少の頃から、狂気の兆しがありましたゆえ」

と、大奥で言うまでになった。

忠長には、たしかに、異常なところがあった。

十二歳の頃である。

鉄砲を習って大変な上達をみせた忠長は、ある日、西の丸の鴨を撃って、近習に拾わせ、これを母に献じた。

母の浅井氏は、たいへん喜んで、これを羹として、将軍家の夕食の膳にのせた。将軍秀忠は、国松が撃ちおとした鴨だと聞いて、おおいに満足して盃をあげたが、鉄砲を放った場所が西の丸の橋上だと聞くと、突然、箸をおき、

「それはいかぬ。本丸にむけて発砲したとなると、無心の振舞として見すごすわけにはいかぬ」

と言った。

結局、供をした近習三名が切腹して、責任を負ったが、忠長自身は、近習の士三人の屍をみても平然として、

「城というものは、矢玉を浴びるために造られたものではないか」

と、言い放ったという。

十二歳の幼児としては、これは、たしかに異常であった。

伊豆守は、忠長に、兄家光と天下を争わんとするほどの野望がある、とは思えなかった。

幼児から、兄家光とほとんど同格に育てられ、しかも、両親からは兄以上に偏愛され、甘やかされた忠長は、家光が将軍になった現在も、おのれの態度を変えることができない、一種の大人子供だ、とおもっていた。

しかし、この大人子供の忠長も、後楯に紀州大納言頼宣がついているとなれば、ことは重大である。

天下には浪人が溢れていた。

大坂の役後、この年までに、改易された諸大名のうち、おもだったものを数えてみても、

元和二年七月、家康第六子松平忠輝、四十五万石。
元和五年六月、福島正則、四十九万八千二百十三石。
元和六年八月、田中忠政、三十三万五千石。
元和八年八月、最上義俊、五十七万石。
元和八年八月、本多上野介正純、十五万五千石。
元和九年三月、松平忠直、六十七万石。

寛永四年正月、蒲生忠郷、六十万石。

これら取潰された家々の浪人の群が、大坂の役で滅びた豊臣方の浪人とともに、天下に溢れて、事あれかしと望んでいた。数十万のこれらの浪人が、もっとも期待し、夢をよせているのが、紀州大納言頼宣であった。

ちなみに、頼宣は、家康の第十子で、母は蔭山氏広の女、阿万。慶長七年（一六〇二）三月、伏見城で生れた。慶長十四年（一六〇九）、七歳で駿河、遠江五十万石に封じられ、元和五年、和歌山城に入り、紀伊国五十五万石の太守になっている。

十四歳で大坂の役に出陣し、合戦の経験があるだけでなく、常に戦国風を誇示し、幕府が目の仇にしていた浪人たちにも同情的で、既に太平の世であるにもかかわらず、めぼしい浪人たちは、禄を惜しまず、召しかかえていたのである。

いまひとたび戦乱の世となれば——、と期待している浪人たちは、公然と三代将軍に楯つきはじめた忠長に、紀州家が後楯している、と知れば、どのような動きに出るかわからない。

伊豆守の憂慮はそれであった。

また、紀州頼宣の陰然たる勢力と人気とは、将軍家光にとっても、迷惑至極なことであった。本心をいえば、家光は、折あらば、事由を捏造してでも、頼宣を隠居させてしまいたかった。

だから、家光は、公儀からの付人として、三家老を送っていたが、その監視だけでは物足らず、更に三人の目付を頼宣の許へ派遣していたのだった。

そろそろ梅の蕾もふくらみかけたある夜。

久し振りに、家光は、頭巾で顔をつつみ、近習ただ一人を従えただけで、一ツ橋御門内の松平

伊豆守の屋敷に微行してきた。
　家光は、伊豆守と対座するなり、ずばり言った。
「もはや、忠長を庇うことはできぬ」
「申し訳ございませぬ」
　信綱は、忠長の乱行の数々が自分の責任であるかのように平伏した。
　紀州頼宣が、あの総登城のあと、
「伊豆めが、こざかしくも一本とりおったわ」
と、呻いたということは、信綱も知っていた。この夜、鴉の甚兵衛が、紀州屋敷に忍んでいたのである。また、忠長が江戸を去ったときには紀州の家老関口隼人正が、
「駿府に問責の上使として赴くのは、おそらく伊豆めでござりましょう。忠長様はあのご気性ゆえ、上使に責められたからとて、むざむざ腹切るようなことはござりますまい。とすれば城を枕に一戦ということになりましょうか。こうなれば、いよいよ殿のご出馬でござるな」
と、大袈裟な言葉を吐いたということも、知っていた。
　しばらくの沈黙ののち、家光は言った。
「詫びることはない。すべては、忠長自らが播いた種じゃ。しかし、伊豆、そちは駿河へ行け。ただし、微行じゃぞ」
「上様……」
「あるいは殺されるやも知れぬ」
「覚悟はできており申す。かくなるうえは、この伊豆守、身命にかけて、ことは処理いたしますゆえ、上様には」

「わかっておる。問題は紀伊の叔父御じゃ。しかし、伊豆、死ぬなよ」
　裏門から、そっと忍び出てゆく家光を信綱は、闇の底に平伏して見送った。
　これが、あるいは、上様の見納めになるやも知れぬ……そういう予感が信綱にはあった。

血風箱根路

一

箱根路には、まだ空っ風が吹いていた。

しかし、木々の葉にはえる陽光は、すでに春のものであった。

湯元から、川ばたを経て、さいかち坂にいたる坂道を、一人の武士が歩いていた。

色褪せた紋服の着流しに、黒鞘の落し差し、編笠で、顔はかくれていたが、この武士、松平伊豆守信綱にまぎれもなかった。

しかし、供の小者一人つれていない。

登り下りの、旅人にまじって、足元に目を落したまま、すたすたと歩いていく。

箱根お関所の手前、権現坂入口に差しかかったときである。鬱蒼と茂る杉の大木の陰から、突然、一人の娘があらわれた。萌黄色の小袖をすそ短かに着て、手甲脚絆、手には細い黒竹の杖を持っている。

娘は、何気なく、信綱の脇にならんだ。

服部一夢斎の孫娘、志乃である。

笠のなかの笑顔が、あどけない。

「お供つかまつります」

志乃は笑顔で言った。

「おことほどのくノ一がお供でもあるまい。わしの方こそ守ってもらわねばならぬ」

信綱も笑って言った。

「いいえ、関所破りは御法度ゆえ、やはり、守っていただかねばならぬのは、この志乃の方でございます」

と、信綱を見上げる志乃の目は、嬉しげだった。志乃は、一夢斎から、信綱の護衛を命ぜられるのが、たまらなく嬉しいのだ。

やがて、関所が見えてきた。

箱根御関所
上り男女御手形上る。
江戸に入には男女とも手形いらず。
但し、女は行先を申して通るべし。

幕府は〝入り鉄砲と出女〟この二つだけは徹底的に目を光らせていた。箱根の関所は、もっぱら、この二つの取締を目的に設けられたようなものだった。

それには、理由がある。

幕府は、人質として、諸大名の正室と娘を江戸藩邸に常住させていた。藩主が参勤交代で国許へ帰っている留守中に、これらの人質が逃げだすのを防がねばならない。これが出女であり、鉄砲の方はもちろん、御府内で、銃器のような、危険な飛び道具を携えた徒党に、変を起こされてはたまらないからである。

関所の門前には、六尺棒を持った足軽が二人立っていた。

御門を入ると、旅人を調べる面番所である。そのうしろが屏風山で、屏風山の中腹には遠見番所があり、往来の者たちを監視していた。

ここは、小田原十二万石大久保加賀守の持ち場で、藩士が一カ月交代で勤めていた。細かく調べなければならないときは、女は女が調べる。

関所破りは、磔であった。

しかし、関所には、必ず裏道があって、志乃ほどのくノ一なら、箱根の関所を抜けるぐらいのことは、雑作もないことであった。

信綱と志乃は、道中道づれになった二人のように、ふらりと面番所の前に立った。

床几に腰掛けた番士が、横柄にわめいて、信綱の笠のうちを覗いた。

「これはご無礼つかまつった」

その面体には、粗末な衣服とはおよそ不釣合な威があったからである。

しかも、信綱がとった笠の裏からは、三本扇の丸の隠し紋がのぞいていた。

三本扇の紋所といえば、武州川越七万石松平家の紋所であるくらいのことは、小田原藩士も知っていた。そして、ときの老中松平伊豆守信綱が、自ら、公儀隠密団を指揮して、探索活動に従事していることも。

「これはこれは」

番士は周章てて腰をあげると、ちらり、志乃を一瞥して、

「お役目御苦労に存じまする」

ふかぶかと一揖すると、

「こら、茶を持たんかッ！」

と、脇に突っ立っている足軽を一喝した。

そのときはもう、信綱は志乃と連れだって、三島へ抜ける道を下っていた。

道は、笹原、三ツ尾、一の山、塚原を通って、三島に至る。

この頃、三ツ尾の辺りは、昼間でも地獄の亡霊がでるといわれたほどの場所である。山道の両側には、鬱蒼とした森がひろがり、楢や松や、杉や樫などの大枝が、道のうえまで張出していた。空は遮られ、薄っすら陽光がもれる。突然、木洩陽の道に、人の気配が浮いた。

とたん、志乃の姿は消えていた。

玉沢へでる脇道の藪の中から、一人の武士が、ふらりと出てきた。月代は伸び放題、垢じみた羊羹色の紋服の着流しで、朱鞘の大剣を、一本腰に落している。素足の爪先には、馬の草鞋のような足半をつっかけていた。武士というよりは、山賊にちかい服装である。

これが、懐手をした左手で、顎を撫でながら、ふらりふらり、信綱の前を歩きだした。背の丈五尺五、六寸、一見、枯木に紋服を着せたような痩身である。しかし、これが、ただ者でないことは、信綱にもひと目でわかった。

何奴！

信綱は、足を早めて、その武士の左脇をすり抜けようとした。

と、武士はふらりと左へ寄った。右へ抜けようとすると、右へ寄る。

「どかれい」

思わず、信綱は声をかけた。

しかし、武士は、振りむきもせずに、ぴたっと足をとめた。

「ここは、天下の公道、通行は自由でござろう」

「ならば、邪魔いたすな」
「邪魔いたしておるわけではござらぬのだがな、からだの方で、勝手にふらつき申す。と申すのは、多分、一昨日より何も喰ろうておらぬためでござろう」
「……」
「おぬしの懐にある兵糧、それがしにも一粒めぐんで呉れぬか」
信綱は、懐の握り飯のつつみを、竹の皮ごと、ぽっと、武士の背に放った。
振りむきもせず、これを片手摑みにした武士は、握り飯をがつがつと頰ばりながら歩きだした。
何とも無邪気な食い方である。
〈ふむ……、こやつ、たしかに腹を減らしておる……〉
そう思ったとたん、信綱にわずかな隙ができた。
その隙を見事について、武士は跳躍した。抜きつけの一撃が、唸りをあげて、信綱の肩にきた。
あやうく、信綱、一間を跳び退いて、これを躱したが、抜き合せるゆとりはなかった。二撃、三撃、電光のような刃風に追われて、いつの間にか、信綱は、脇道の藪の中へ追いこまれていた。
ようやく信綱が抜きあわせたとき、街道からは、すでに二人の姿は見えなかった。
信綱とて、剣は、柳生但馬守宗矩直伝、十兵衛と同じく、柳生新陰流皆伝の腕である。そういう信綱の剣の前に、この乞食のような浪人武士は、まるで、子供の前にでもいるかのように無雑作に立っていた。
「飯を恵んでいただいたうえ、刃物三昧とはちと無風流じゃが、おれはおぬしが気に入った。姓名を名乗られい」
こやつ、わしの正体を知っておるな、と読んだ信綱は、じりっと一歩下って、言った。

「松平伊豆守信綱」
「なるほど、おぬしが伊豆守か。駿府へむかって微行とは聞きおよんでいたが……。それにしても、よくぞ正直に名乗ってくれたもんじゃあ、ウフフフ」
武士は、ぱちりと、剣を鞘に納めた。
「わしの名は金井半兵衛。天下無禄の素浪人。いや、何なら、駿府まで一緒に行くとするか、伊豆守」
「断る」
とは言ったものの、信綱、心の奥では、この男、憎めぬ、と思った。と、金井半兵衛と名乗る浪人者が、
「では、伊豆守殿、路銀を、ちと拝借できぬか……」
と、手を出したのである。
信綱は苦笑して、財布を渡してやった。

二

信綱が、行列も整えず、供も連れず、唯一人で駿府へ向ったのには訳がある。忠長には、たしかに、罰せられても言い開きのできない落度があった。しかし、忠長は、改易を命じられれば、窮鼠の奮起をなす怖れがあった。忠長が叛旗を翻せば、天下に溢れた浪人どもは、〝好機ござんなれ〟とばかり、駿府へ馳せ参ずるに相違ない。これに、紀州大納言の後楯があるとすれば、なお更のことである。
このために、全土に兵が動き、夥しい人馬が倒れるであろう……、伊豆守は、この国土を再

び戦火の巷(ちまた)にしてはならぬ、と決意したのだ。そのためには、将軍家の問責上使として、表面から駿府に乗りこみ、かえって、忠長を刺戟(しげき)するようなことがあってはならぬ。伊豆守は、唯一人で駿府に赴いて、忠長を説こうとしたのである。

一の山より、塚原を経て、信綱が、三島の本陣樋口伝左衛門方に入ったのは、日の暮れ方であった。

その頃、同じ三の町の宿(しゅく)はずれ、七面大明神裏のお堂の中に、ごろりと寝ころがっている二人の浪人者がいた。

一人は六尺豊かな大男で、樺色の小袖の着流しに、熊毛の行縢(むかばき)、いま一人は、五尺二、三寸の小男。これは、総髪で袴をつけ、黒革の蝙蝠(こうもり)羽織といういでたちだが、服も袴も、おそろしく擦(す)り切れていて、羽織の裾はささらだち、袴からは襤褸(ぼろ)がぶらさがっていた。

この二人、服装も異常なら、その面付きも尋常ではなかった。

大男は、天井を見上げたまま、

「腹がへった」

ぼそりと一言呟(つぶや)いたが、その目には炯々(けいけい)たる光が浮かんでいて、とても腹を減らしてくたばるような人間には見えない。小男の方とて同様であった。

この男、乞食も顔負けの粗衣はまとっていたが、色あくまで白く、眉も目も鼻も唇も、すべての造作は、繊細、優美、典雅ともいえる美貌(びぼう)の若者だった。齢は二十五、六。いずれも、その双眸にたたえられた光は、鍛えぬかれた兵法者のものだった。

小男が、その優美ともいえる顔に似合わぬ大欠伸(あくび)をして、ごろりと寝がえりをうったとたん、

「来たな」

と、大男が言った。

同時に、堂の前の小道に足音がして、ぱっと一人の武士が飛びこんできた。金井半兵衛であった。

半兵衛は、二人の前にどかっと胡座(あぐら)をかくと、

「来たぞ」

と、言った。

「飯がか！」

と、聞いたのは大男の方である。

「馬鹿ぬかせ。伊豆じゃ」

「ほう、やっぱり一人でか」

と、美貌の若者が言った。

「いかにも、由比氏。一人じゃ、供もおらぬ」

「斬ったか……」

と、由比と呼ばれた浪人者が訊いた。

「いや、斬らぬ」

「それは、上々」

にやりと笑って、

「半兵衛、懐のものをだせ」

と、言った。

半兵衛が懐から取りだした餅を、三人は黙々と喰いだした。やはり、腹が減っていたとみえる。
半兵衛の前に坐り、夢中で餅を頬ばっているのは、丸橋忠弥。その横で、素早く手と口を動かしているのは、由比弥五郎という。
三人とも、街道で知りあった素浪人であった。
出羽浪人丸橋忠弥だけは、宝蔵院流の槍の使い手として、江戸でも少しは名のきこえた男だったが、あとの二人は、氏も素性もわからない。半兵衛などは、物ごころついたときは、既に浪人だったといっており、由比弥五郎と称するこの白面の浪人は、駿州浅間山の狐の子だと嘯いているが、いずれも、口から出まかせであることは間違いない。
半兵衛は東軍流、弥五郎は心貫流をよく使った。
おまけに——、うまが合うというのか、この三人、金谷の宿で大井川の川どめにあって、偶然同宿してから、喧嘩ひとつせずに、藤枝、駿府、蒲原、三島と、江戸へむかって東海道を下ってきたのである。
三人が、駿河大納言忠長様ご謀叛、の風聞を耳にしたのは、鞠子の宿であったが、半兵衛は、駿府の宿に入ると、ふらっと姿を消し、夜更けて戻ってくると、噂の真実を二人に保証した。
このとき、しからば、駿府城に入城し、関東勢を迎え討つか——、と、いい出したのは、丸橋忠弥だが、これを抑えたのは弥五郎である。弥五郎は、松平伊豆守信綱が、たった一人で、駿河大納言問責のために江戸を立ったという情報を、いつのまにか手に入れていたのである。
しかも、弥五郎は、駿府城入城を主張する忠弥を抑えて、伊豆の身辺を探ることを主張し、半兵衛がこれに和した。
この一行三人が、いま腹を減らしているのは、伊豆の身辺を探ると決めてから、街道沿いの道

場破りをぴたりと止めていたからである。
すさまじい早さで、餅を喰いながら、弥五郎が訊いた。
「松平伊豆守信綱、たしかに一人か」
「いや、やはり、前後は伊賀者がかためておる」
半兵衛が懐いっぱい買込んできた餅は、またたく間になくなっていく。ほとんど、一番柄の小さい弥五郎が食ってしまった。
最後の一切をさっと摑みあげた弥五郎の手から、ぱっと餅を奪って、忠弥が言った。
「柳生の小倅は見えぬか」
「見えぬ」
「ふむ」
忠弥は、解せぬという顔で、最後の一枚の餅をぱくりと頬ばると、
「おぬし」
と、半兵衛に言った。
「いや」
「この餅、盗んで参ったのか」
にやりと笑って、半兵衛は答えた。
「天下の金蔵から頂戴して参った」
そのとき、どこかで、鴉が一声鳴いた。

隠密十兵衛

一

大納言忠長は、居間の欄干に寄って、空を眺めていた。城壁のむこうは、茫々たる駿河湾である。
　しかし、忠長が見ているのは、空でもなく、駿河の海でもなかった。
　忠長の目の前には、江戸城本丸の楼閣が、うすらぼんやりと浮きあがっていたのである。
　やがて、紅葉山を越して西の丸が、巽櫓が、桜田櫓が、三の丸の塗籠が……、本丸の空に、兄家光の顔が浮かんだ。
　家光は、あざ笑うように、忠長を見下ろして、言った。
「国松、もはやどう足掻いても無駄じゃ……、余は将軍じゃ」
　とたん、カッ！　として、忠長は叫んだ。
「誰かある！」
「ははぁ、牧野備後、これに控えており申す」
　ふーっと、忠長は吐息をついた。
〝幻を見るほど、余も虚たか〟
　であった。
　もはや、百万石のお墨付きか、駿府五十五万石取潰しのための上使か、いずれかが、やってくるのみだと覚悟した忠長は、実は、ここ数カ月、居ても立ってもおれなかったのである。

　また、吐息をついて、忠長は言った。
「ここは駿府城じゃな」
「いかにも」
　と、答えた牧野備後の顔に、何故か、うすら笑いが浮いた。
「備後、余の百万石の無心は当然じゃというたのは、そちじゃったな」
「ははは、いかにも、この備後でござりました」
「すでに、あれから四カ月じゃ。百万石の墨付きは参ったか」
「いえ」
　と、備後は目を伏せて、言った。
「しかし、今しばらくの後には、必ずやまいりましょう」
「たしかか」
「ははっ。殿は、将軍にとりましては、たった一人の弟君でおわします。百万石はおろか、天下の半分を寄こせと仰せられても、将軍家にはご異存はござりますまい」
「ふむ」
　と、忠長は、また天を見上げて、言った。
「紀州の叔父御は、たしかに、この一件にお口添え下さっておるのじゃな」
「いかにも。今宵も、紀州様お小姓頭、関口隼人正様より、根来幻幽斎が使いして参るはずでございます」
　駿府城内の牧野備後の屋敷に、根来幻幽斎が密かに忍んできたのは、その夜、亥の下刻（午後

十一時）をすぎた頃であった。
奥書院の、淡い燭台の灯のなかに、影のように座した幻幽斎に、備後は言った。
「殿はまだ、百万石のお墨付きが来るものと信じておられる」
「さようでござるか。……結構でござる」
「しかし、もし、公儀から、改易のご沙汰が下ったら……」
「そのときこそ、あなた様は、忠長様を助けて、駿府城に旗をあげられい」
ずばりそう言って、牧野備後を凝視した幻幽斎の目は、氷のように冷えていた。
「ふむ。しかし、紀州様は、間違いなく後楯になって下さるのであろうな。土壇場でお心変りなさるようなことはござるまいな」
「ご心配はご無用でござる」
また、風のような声で答えて、幻幽斎は、懐から一通の書状をとり出して、牧野備後の膝前に置いた。
備後が取りあげた書状には、
――駿府様お旗挙げの折は、紀州五十五万石を挙げて、後援仕るべく候。事成就の暁には、貴殿所望の地にて、十万石宛行うべきこと、主人より確約を得候こと実証也。

関口隼人正

牧野備後殿――

とあった。
「うーむ」
と、うなって、備後が書状を懐へ入れると、幻幽斎は、ぼそりと言った。

「関口様に受け書を」
「心得た」
備後は、筆硯をとって一通の書状を認めると、脇差の鯉口を切り、拇指の腹にあててすっと引き、書状の名の下に血判をした。
幻幽斎は、低く、梟を一声鳴いた。
とたん、襖のむこうで、梟がまた一声。つづいて、
「六郎太でござる」
心得のある者だけに聞こえる、忍び声がかえってきた。
襖がわずかに開いた。その隙間に、さっと、幻幽斎は、牧野備後が血判した書状を投げた。
黒い手が伸びて、これを掴んだ。
「関口様への受け書じゃ。まっすぐに紀州へ飛べい」
「うけたまわった」
声と同時に、襖は音もなく閉じ、やがてどこかで、梟が一声鳴いた。

駿府伝馬町、こうや丁、大町から、みろくに至る闇の中を、六郎太は風のように疾駆していた。
やがて、安倍川の渡しである。
渡し場を避けて、六郎太は、茫々たる芒っ原の中へ飛びこんだ。六郎太の前後をかためて、数人の黒装束が走っている。
突如、先頭を走っていた黒装束が、凄まじい音をたてて、河原につんのめった。
う！　と立ち止った六郎太の脇で、いま一人の根来衆が、がくっと膝をついた。その胸には、

いずれも、棒手裏剣が突刺さっていた。
何者!
闇の底で、六郎太の目が、凄まじい光を放って光った。
しかし、あたりに、人の気配はない。季節はずれの蟋蟀が、ケロケロ鳴いた。
うむ、伊賀者じゃな——。
六郎太は、密かに忍刀の鯉口をきった。
また、ケロケロと、蟋蟀が鳴いた。鳴いているのは……甚兵衛であった。
六郎太は、ふっと笑った。甚兵衛か……、と、猫目頭巾のなかで耳をたてた。
この鳴き方に、聞き覚えがあったのである。この伊賀者には、六郎太も幾度か、してやられていた。江戸では伊豆守を仕止めそこなっている……。
六郎太は、甚兵衛の鳴く蟋蟀の声を聞きながら、するすると闇の底をすべった。
蟋蟀は、いつの間にか、六郎太のすぐ脇で鳴いていた。それが、伊賀流偽音術であると、六郎太は知っている。
しかし、六郎太の前後を守っていた、五人の根来者は、既に、屍となって芒っ原に横たわっているということまでは、さすがに気が付かなかった。
六郎太は、渡し用の小舟のつないである岸まで出ようとした。
その出鼻を押さえて、一本の手裏剣が飛来した。
六郎太は、首を縮めてこれを躱した。
甚兵衛め、一人か、と六郎太は思った。六郎太の勘は正しかった。
鴉の甚兵衛はたった一人で、六郎太の一党を襲ったのである。

六郎太は、自分の勘に賭けた。
よしっ! 河原で殺る!
ぱっと、六郎太は川岸めざして飛び出した。
小舟が、川面でゆらゆらと揺れていた。
六郎太は、一挙に、芒っ原を駆け抜け、小石だらけの川原に出た。
とたん、目の前の小舟のなかから、むくりと一人の黒装束が起きあがった。
「おいでなせえ」
鴉の甚兵衛であった。
六郎太の五人の郎党を、音もなく殺戮した鴉の甚兵衛は、不敵にも小舟のなかに寝そべって、蟋蟀を鳴いていたのである。
「おのれ、甚兵衛」
「ふむ、おぬしの下忍はすべて殺した。六郎太よ」
ぱっと小舟から躍りでた鴉の甚兵衛は、そろりと、背中に負った伊賀忍刀の柄に手をかけると、
「今度こそは屍にしてくれる。密書はもらうぞ」
じりっと、一歩前に出た。

二

「ふウウウ、甚兵衛、驕るでない。取れるものなら取ってみろ」
「よかろう。六郎太。今宵は、われら二人じゃ。尋常の勝負をしてくれる。抜けい」
とたん、無言で跳躍した六郎太の凄まじい一撃が、甚兵衛の頭上に降った。

がっ！
と、これを抜きあわして、払った甚兵衛、振りむきざま、
「死ねいっ」
必殺の一刀を横に薙いだ。が、すでに、六郎太はそこにいなかった。
「逃げられたか！　チィッ！」
と、甚兵衛は舌を鳴らした。
とたん、川岸で、血飛沫が噴いた。
同時に、風に乗って、可愛げなふくみ笑いが聞こえた。
甚兵衛は、う！　と、目を剝いた。
川原のうす明りのなかに、旅姿の娘が一人立っていた。
志乃であった。
右手に、刀幅三分ばかりの両刃の直刀をぶら下げていた。志乃の足元には、すでに首のない六郎太の屍が転がっていた。
志乃は、ぱちりと黒竹の鞘に仕込刀を納めると、また、可愛げに笑った。
「甚兵衛殿、忍者が尋常の勝負とは、ちと遊びがすぎはしませぬか」
「申し訳ござらぬ」
甚兵衛は、ぺこりと頭を下げると、首のない六郎太の黒装束を、びりっと毟り取った。胴着のなかに、密書は油紙でつつんで忍ばせてあった。
ひらりと、小舟に跳び乗って、志乃は言った。
「伊豆守様は、今宵は、三島本陣泊り。甚兵衛殿、早う」

「かしこまった」
甚兵衛は、ぱっと身を翻すと、音もなく、芒っ原に消えた。
川原には、志乃を乗せた小舟が、ゆらりゆらり安倍川を下っていくのを見送って、にやりと笑った今ひとつの黒影があった。
根来幻幽斎であった。
あくる日の昼さがり、ふらりと、伊豆守は、三島の宿を出た。
今日の伊豆守の顔は明るい。
甚兵衛が手に入れた密書から、紀州大納言頼宣の本心を知った、と思ったからだ。
頼宣が自ら忠長を唆して、謀叛を企てるわけはない、と江戸を立つ前から、伊豆守は睨んでいた。
これがすべて、牧野備後の野望から出たものであるとすれば、公には駿河大納言忠長様乱心として、忠長の命だけは、救うことができる。公式の問責上使として、駿府にくだって来なくてよかった、と信綱は思った。
たとえ、紀州頼宣に謀叛の企てがあったとしても、伊豆守が一個人として忠長自身に会って、事の理非、幕府のゆく末を説いたら、忠長公とて、まさか、紀州大納言と手を握って、幕府に弓引くような軽率な行動には走るまい……、牧野備後だけ密かに斬ってしまうか……。
ふらりふらり、東海道をゆく伊豆守のあとを、今日は、旅の商人姿に化けた鴉の甚兵衛が、ぷつりぷつりと鼻毛を抜きながら歩いていた。

その頃、駿府城内では、大納言忠長が、広間上段の間にただ一人、うっそりと坐っていた。傍に、太刀持の小姓さえ侍らせていなかった。

やがて、忠長の面前へ膝行してきたのは、柳生十兵衛三厳であった。十兵衛が、家光の密命を帯びて、諸侯の動静探索のために諸国を遍歴していることは、忠長も知っていた。

この十兵衛の探索の結果、すでに、十指に余る大名が取潰されている。特に、十年の歳月を費やして、肥後、薩摩に亘る地図を作成、人情風俗の端々まで調べあげて、これを密かに薩摩藩主島津宰相に示して、薩摩藩を恫喝し、九州の外様諸大名の動きを封じた十兵衛の働きを、知らぬ者はなかった。

忠長は、面前五間まで、するすると膝行してきて、ぴたりと平伏した十兵衛に、鋭い一瞥を呉れて、言った。

「面をあげい」

「はは……」

わずかに顔をあげた十兵衛に、忠長は皮肉な声で言った。

「見事な兵法者になったな、十兵衛。その方の剣名は既に、天下に響いておる」

「はは、有難きお言葉。されど、この度は、十兵衛、剣士として参上仕ったのではござりませぬ」

「ふむ」

不快そうに、忠長は唇を歪めた。

「わかっておる。百万石頂戴の儀は取下げよ、との、将軍家の密命を伝えに参ったのか」

十兵衛は、無言で頭を下げた。

一瞬、忠長の面貌に狂気の色が浮いた。

「十兵衛、出すぎるなっ」

忠長は、声を荒らげて叱咤した。

「余は駿河大納言忠長じゃ。そちのごとき一介の陪臣に、わが進退まで指図される覚えはないわっ」

「おそれながら」

と、顔をあげ、何事か言いかけた十兵衛に、忠長は言った。

「十兵衛、もうよい。余が、そちを引見したのは他でもない。いま城中に、宮本伊織なる兵法者が滞在しておる。円明流の上手じゃ。これと仕合してみよ。もしそちが伊織に打ち勝ったならば、それから改めて、そちの申し分を聞こう」

そのまま、十兵衛に応える間も与えず、忠長は、さっと座を立ってしまった。

宮本伊織は、駿府城の一隅のお長屋の一室に、身動ぎもせず坐っていた。

やがて、ぽつりと言った。

「お労しや。大納言、お狂い遊ばされたか」

宮本伊織は、豊前小倉藩細川家の兵法指南役であった。

宮本武蔵の養嗣子として、その剣名は、既に、諸国に知れわたっていた。

この度は、藩主に二カ年の暇を乞い、武者修行に出て諸国遍歴中、たまたま、駿府城に足を止めていたのである。

数年前、伊織は、養父武蔵に従って、駿府城に招かれ、半年あまり滞在したことがあった。そ

の間、大納言忠長の剣術稽古の相手を務め、伊織は、忠長に身分を越えた信愛感を持った。
そのため、伊織は、この度も駿府城に立寄り、忠長に勧められるままに滞在していたのだが、まさか、柳生十兵衛三厳と立ち合わされる破目に陥るとは思いもよらなかった。
伊織は、忠長のすすめとはいえ、十兵衛との立合いは固辞した。しかし、忠長は聞き入れなかったのである。
伊織とて、本心では、天下にその剣名を謳(うた)われた十兵衛三厳とは、是非とも一度、技をきそってみたかった。
しかし、余りにも、場所と時が悪すぎた。
忠長は、将軍家に異心を抱くものとして、今、公儀隠密に付け狙われている身であった。しかも、相手の十兵衛は、廃嫡になったとはいえ、将軍家兵法指南役の嫡男である。
十兵衛を打ち負かせば、「御流儀」が破れたことになる。ということは、将軍家光の剣が問われたということだ。
それは、将軍家師範柳生但馬守宗矩が、職を辞すれば、ことは済む、というような単純な問題ではなかった。十兵衛を叩(たた)きのめすことは、家光の面上を一撃することと同断だったのである。
忠長の狙いは、そこに在った。
しかし、今の忠長の立場でそれをすることは、まさに狂ったといわれても仕方なかろう。勿論(もちろん)、十兵衛が勝てば、問題はない。が、伊織とて、兵法者としての面目があった。二天一流——円明流にかけても負けられなかった。
しかし今、お長屋に正座し、大納言様お狂い遊ばしたか、と呟いた伊織の心境を説明するのは難しい。

瞑目した伊織の面上には、ほとんど何の表情も浮いていなかった。敢(あ)えて言えば、それは、凡夫の茫然自失の様に似ていた。養父武蔵の無慚(むざん)なまでの教導が、伊織を、こうした不可解な、喪神者に育てあげたのである。

駿府城異聞

一

十三歳で、武蔵の養嗣子となったとき、伊織は、天下一の兵法者たらんとする気概に胸をふくらませていたものだった。気質も沈着であり、天稟の才も明らかであった。

ところが、武蔵は、自身で木刀を執って、伊織に教えることをしなかった。まず、命じたことは、身を翻して泉水に飛びこむことだった。春夏秋冬、伊織は、池中にもんどりうちつづけた。

理由を訊くことは許されなかった。

一年が経つと、武蔵は、泉水に落下する瞬間、水面に映った己の貌を見よ、と命じた。これは、容易な業ではなかった。しかし、やがて、伊織は、宙を回転して落下する一瞬、己が貌をはっきりと見ることが出来るようになった。

六尺の高さの空中から見下ろす瞬間、己が貌は、水鏡のなかで更に六尺の奥にある。落下とともに、水面に浮きあがってくる貌を見ながら、伊織は、充分の時を数えることが出来たのだ。

瞬間の動きを見てとるに、これ以上の修行はなかった。

おかげで、伊織には、道場で他人の立合いを見ていても、双方の木刀の動きが、まるで、能の舞う手差す手のごとく、緩慢におもえるくらい、はっきりと見えた。

更に一年を経て、伊織が命ぜられたのは、水鏡のなかの己が貌を、空中から抜きつけに両断する迅業であった。伊織は夢中で修行した。

二年が経った。

伊織は、水面上三尺の空間で、白刃を鞘走らせ、己が貌を切ったばかりか、水中に落ちる瞬間には、刀を鞘に納めている迅業を身につけていた。

或日、伊織は、道場の修行を欲して、武蔵の前に坐り、

「この上は、お父上の兵法の太刀筋を修得仕りとう存じます」

と、願った。すると武蔵は、

「水中の己を斬るとき、空中の己は如何いたすか」

と問うた。

伊織は愕然となった。

自分が水中の自分を斬ったとき、水中の自分はまた空中の自分を斬っていたからだ。

それから、数日後、武蔵は伊織を連れて、人里離れた林の中に入り、はじめて、二刀を構えさせた。

伊織は、夢中で養父に打ちかかった。それにたいして、武蔵は伊織と全くかわらぬ動きを示した。すなわち、伊織は、鏡に映った己の姿と闘うのと同様の位置に置かれたのである。対手は武蔵であって、己自身であった。武蔵には間合いを見切る神技があったので、悠々として、伊織の動きに伴わせて己が五体を移動させ得たのである。

「円も明も、これは鏡の意だ。円明流とは、鏡に向う剣法と心得るがよい。鏡の影よりも早く、鏡の影を撃て」

それが、武蔵の教えであった。

鏡の影より迅く鏡の姿を撃つことは、不可能事であった。不可能事と知りつつ、それを可能にしようと刻苦するのが、兵法修行であった。

伊織は、武蔵を撃ちこもうと、物の怪に憑かれたような日々を重ねた。
或日、武蔵は、突如として凄まじい攻撃に出た。
とたん、伊織は反射的に、対手と全く同じ動きをして闘っていた。
「できた」
武蔵はそういうと、以来、伊織とはもう立合わなかった。
かくて――、伊織は、行住坐臥、いついかなる場所にあっても、一瞬たりとも、己の前に己が在る意識を捨てぬようになった。床に就いているときも、夜具を被った己が、凝っと闇の宙から己を見下ろしているのを見ていた。
「その独りを慎む」
それを十年間に亘って、実行してきた伊織が、喜怒哀楽の表情を、己が貌から失ってしまったのは当然であった。

伊織は、ふうっと目を開いた。静かに座を立って、庭に降りた。
庭の隅に、ひと叢の糸萩が茂り、椿が夜露を溜めて咲いていた。
夜風に、そよと、糸萩の葉叢が揺れて、ひと滴の露が、はらりと落ちた。
とたん、伊織は、ぱっと身を翻しざま、腰の二刀を抜きとっていた。
糸萩の葉叢の中に、一個の黒影が、うっそりと立っていた。その両手には、伊織と同じく、ふた振りの刀が揺られ、だらりと垂れていた。その立姿は、まさに円明流――二天一流の自然体であった。
伊織の目には、それが、黒装束をつけた養父武蔵の立姿に見えた。

突如、黒影は地を蹴って、跳躍した。
二刀が流星のように、伊織の胸元めがけて飛んだ。
伊織に――、体を躱すゆとりはなかった――、とみた刹那、伊織の手からも、二刀は黒影めがけて宙を走った。間髪をいれぬ、迅業であった。
黒影は、伊織の頭上を翔けすぎて、背後の地、二間のかなたに、降り立つや、そのまま、煙のごとく消えた。
しかし、なお、伊織の手には二刀が握られていた。
黒影が投じた二刀であった。
伊織は、庭に置き捨てられた鞘を拾いあげて、二刀を納めた。
そのとき、どこからか、乾いた声が流れてきた。
「伊織殿、柳生十兵衛殿との仕合はお止しなされや。この城内で立合っては、どちらが勝ったとしても誉にもならぬでの。それに、いまや忠長様には物の怪が憑いておられる。おぬしと十兵衛殿との仕合は、天下を戦乱の巷と化すやも知れぬ。仕合はお止めなされや。念のため名を告げておく。わしは、伊賀の一夢斎、既に世捨人じゃ」
宮本伊織が、忠長に無断で駿府城下を発し、どこかへ消えたのは、その夜であった。
同じく、その夜、十兵衛三厳の姿も、駿府城から消えていた。
忠長乱心の噂が、俄に高くなったのは、この頃からである。
噂は、十兵衛指揮下の公儀隠密団がばら撒いたのではあったが、この噂が信じられる根拠は、徳川家そのものにあった。

くあったからだ。

先ず第一は、家康の長子信康である。

母築山殿が、良人家康を怨んで、復讐(ふくしゅう)を謀(はか)り、信康を唆(そそのか)したためもあるが、信康は、妻である織田信長の女(むすめ)徳姫をかえりみず、漁色(りょうしょく)に耽(ふけ)った挙句、徳姫の女房小侍従を、信長の間者であろうと疑って、徳姫の居間まで引き摺っていき、その面前で、喉を貫き、血まみれの顔を踏みにじった。

また、信康は、京から招いた踊り子が、自分を武辺者と侮(あなど)る踊り振りを見せた、と激怒し、これを弓で射殺している。

家康が、最も愛したこの長男を殺したのも、止むをえぬことであった。

次子、結城秀康にも常軌を逸した行動が多かった。秀康の子忠直も、忠義の家臣と立合って、わざと自分に勝を譲ったのだろうと憤怒して、これを手討にしたのをはじめ、乱行の限りを尽している。

家康の第六子忠輝にも非常識な振舞いが多く、遂に自ら死を招いている。

忠長にも、このような狂気の要素は、たしかにあった。その証拠に、柳生十兵衛と宮本伊織が、忠長に無断で駿府城を立ったと知るや、まるで、人が変ったように落着きをなくして、意気消沈してしまったのである。

三島を立ってから三日後、松平伊豆守信綱は駿府城に入った。

しかし、忠長は居間に引籠(ひきこも)ったまま、伊豆守に会おうとしなかった。

また、三日経った。

伊豆守が駿府城に入った日、牧野備後の手の者が、備後の密命をおびて紀州へ向ったということは、鴉の甚兵衛の手で、その日のうちに伊豆守に知らされていた。

三日間、忠長は、近侍を相手に、碁ばかり打っていた。

駿府城は、いまや桜花の真っ盛りであった。

二

城中に一間を与えられた伊豆守は、凝っと何事かを待っていた。

五日目の明け方、鴉の甚兵衛が、密かに伊豆守の居間に忍びこんできた。

伊豆守は、既に目覚めていた。

「紀州は……」

甚兵衛にだけ聞こえる含み声で、伊豆守は訊いた。

「動きませぬ。どうやら、忠長様乱心の風聞は、頼宣様のお耳にまで入っている模様でござる」

「十兵衛も働き甲斐(がい)があったというわけじゃな」

「いかにも、十兵衛は忠長様にお目通りしたのち、ただちに紀州に参り、頼宣様を密かに恫喝なされたげにございます」

「関口隼人正はいかがいたしておる」

「こやつは曲者(くせもの)でござる。殿」

「ふむ」

「牧野備後からの使者に、この度の伊豆めは、微行であろう。ならば、駿府の海にでも……、と

嘯きもうした」
「なるほどな……、関口隼人正殿はまこと賢いわ」
むくりと起上って、床から抜け出した伊豆守は、窓を開いた。
目の下に広がる馬場の桜は、すでに散りはじめていた。
風に舞う花びらを賞でながら、伊豆守は、ぼそりと言った。
「甚兵衛」
「はっ」
「今日は、忠長様に会う」
「強談でござるか」
「いや、余が当城に入ってから、既に五日目じゃ。大納言様もそろそろ焦れ出しておられるであろう……。いまだ紀州からの便りが戻らぬではな」
と、伊豆守は笑って、ぽんぽんと手を鳴らした。
と、同時に、
「松平伊豆守様、お目覚めじゃ」
と、甚兵衛がわめいた。
廊下に摺足の音がして、茶坊主が一人、襖の前に平伏した。
その時、もう甚兵衛の姿は部屋から消えていた。
いち早く隣室に消えた甚兵衛は、そこに密かに忍んでいた武士を、ものもいわずに当て落していたのである。
そればかりではない。

あっという間に、その武士の衣服を剝ぐと、武家姿になっていた。
伊豆守が予測した通り、その日、忠長は伊豆守を引見した。
しかし、引見の場は、忠長の居間だった。
御目付部屋、御小姓部屋の間の畳廊下を歩き、中奥に入ったとき、伊豆守は、廊下の左右の武者隠しに潜んでいる武士達の気配を嗅いだ。
忠長は、脇息に倚って、うっそりと坐っていた。
その傍に、牧野備後が控えていた。
伊豆守は、襖際から膝行していって平伏した。
じろりと、伊豆守を見た忠長の目は赤く濁り、その唇には皮肉な微笑が浮いていた。
「松平伊豆守信綱めにござりまする」
「遠路、大儀であった」
「ははっ」
と、平伏した信綱に、甲高い声で、忠長は言った。
「百万石の墨付き、しかと持参したであろうな」
微行で駿河に来た信綱が、百万石の墨付きなど持参するわけがない……、その位のことは、忠長とて知らぬはずはなかった。
「怖れながら」
伊豆守は頭をあげて、言った。
「左様なものは持参してはおりませぬ」
「何だと！　伊豆。この忠長を愚弄する気かっ！」

一瞬、伊豆守は、忠長様、すでにご乱心か、と思った。

「墨付きも持参せず、伊豆、そちは、何用あって当駿府城へ推参した！」

「お静まり下されい。大納言様、私めが参ったのは余の儀ではございませぬ。上様のお心をお伝えに参ったのでございます。百万石ご無心の儀は、何卒……」

「取下げよ、と申すのか」

「いかにも。それ以外に、もはや駿府大納言家の安泰はございませぬ。これも、上様の深いご仁慈より出たるものにございまする」

「仁慈とかや、伊豆守。余が誰に情をかけてくれと申した。余は忠長じゃ。忠長は情をかけられねば生きられぬほど、耄碌してはおらぬわ」

「御意。されど、今となっては」

「今となっては何じゃっ」

「このままでは、御家は改易、御身は切腹」

「黙れ！　伊豆守。何故、余が腹を切らねばならぬ。将軍家の弟に相応した知行を求めたが何故に悪い！」

「大納言様……」

伊豆守信綱は、目を伏せたままで言った。

「怖れながら、たとえ将軍家の弟君におわすとも、大納言様は、同時に、上様の臣におわします。臣下には臣としての道がござりましょう。しかも、わが国は、大納言様もご承知のとおり、国土にもかぎりがござりまする。幕府にも法度がござりまする。臣下の分を越えなされれば、大納言様とて、ご謀叛。神君、ご先祖様、当上様、三代にわたって積みあげて来られました御法度を忽

がせになされましては、反逆、御公儀に対する謀叛にござりまする」

「言うたな、伊豆。成上り者の分際で、この忠長に説教か！」

じろりと、信綱を睨んだ忠長の目には、すでに、狂気ともみえる怪しい光が浮いていた。

「備後、刀を持てい！」

「ははっ」

「ここな増長者、余が手討にしてくれる」

備後が、すかさず差し出した佩刀を引っ摑みざま、ギラリと抜いて、忠長は、突っ立ち上った。

「お待ち下さりませい」

手をあげて、忠長を制した伊豆守、ぱっと両手を懐に入れて、肌ぬぎになった。

「うっ！」

と、忠長は唸った。

信綱の下着は、白絹の死装束であったのだ。

再び、さっと畳に両手を突いて、信綱は言った。

「不肖伊豆守、お手討は覚悟の上で参上いたしましてござる。しかし、大納言様、百万石ご加増、総登城の欠席も、参勤無視のお振舞いも、それが、忠長様お一人の胸のうちから出ましたものならば、もはや何も申しあげませぬ。しかしでござります。大納言様、あなた様は、逆臣にたばかられておいで遊ばす」

「なっ、なにっ！」

「これを」

一通の書状を、懐から取出した伊豆守、さらりと、これを大納言忠長の足元に広げると、声を

はげまして言った。

「牧野備後、控えい！　これなる書状は、そこな逆臣牧野備後が、紀州家家老関口隼人正に送った密書にござりまする」

とたん、備後は、無言で伊豆守を抜き撃った。さっと片膝を立て、これを払った信綱の拳が、不気味な音をたてて備後の脾腹に喰いこんだ。

がくっと膝をついた備後を、じろりと横目で見て、伊豆守は言った。

「ご覧下さりませい、大納言様」

再び、低く呻いた大納言忠長の目が、畳の上にのびた密書のうえへ落ちた。

――かねてお約束の通り、主人忠長を唆し、駿府に於て旗上げのこと手筈通り進みおり候。事成就の暁には、紀州様のお声掛りにて十万石下しおかれ、一国一城の主にお取立て下さるとの由、確かに承り候。この上は粉骨砕身誓って……。

と、書状の文言に目を走らせて、忠長は言った。

「余りといえば、子供欺しな……」

「いかにも、これは、紀州大納言様には係わり知らぬことでござりまする。すべて、関口隼人正と牧野備後の策謀にござりまする」

「まことか」

「何で、この伊豆守が虚言など弄しましょうや。関口隼人めは、既に、紀州城内で相果て申した」

これは、咄嗟に口から出た、伊豆守の虚言であった。

それから一カ月後、自ら申し出て、駿河五十五万石を公儀に返上し、駿河大納言忠長は、上州

高崎城主、安藤右京之進重長の許にお預けとなった。

すべて、忠長の命だけは救おうとした、伊豆守の計らいであった。

二章

旗本やくざ

一

江戸は、すでに夏が訪れ、天では、はじけるような雷鳴月の陽が照っていた。

慶長、元和を経て、ようやく、幕府の基礎も固まった江戸の街は、総面積三十万歩の江戸城を中心に、八方にのび、日本橋から京橋、いづも町から芝口までの下町も、目がまわるような活況を呈していた。

江戸城も、慶長九年（一六〇四）の第一次修築から四次の修築をへて、いまや周囲七十余丁の外濠には、満々たる碧水がたたえられていたし、巨岩を積んだ城壁の上では、若松が汐風に吹かれて鳴っていた。

日本橋を渡れば、騒然たる魚市場である。

中橋には、歌舞伎芝居、操人形などの見せ物小屋が建ち並び、堺町からの傾城街からは、真っ昼間から、もう脂粉の暈気が立ちのぼっていた。

その傾城町の一角、幅三間ばかりの濠を巡らした女郎屋の太鼓橋の脇に、一人の薄汚ない浪人者が床几を据えて、ぎょろりぎょろりと、通行人を睨めまわしていた。

三島の七面大明神裏のお堂に寝ころんでいた、由比弥五郎であった。

通りには、雑多な人間が行き交っていた。

戦国の遺風をついだ革の陣羽織に、物干竿のような長刀を携えた髭もじゃの武士が行くかと思えば、羽二重の小袖に緞子の上下を着けた若侍がなよッなよッと通りすぎ、その後を、異様な風体の旗本奴が、肩肘いからせてゆく。

菖蒲革の裁着に、鉢巻を締めたのは武者修行者であろう。

市女笠を被った妻を連れ、きょろきょろとあたりを見回しながらゆく茶筌頭の侍は、大方はじめて出府した勤番侍にちがいない。

雲水が、荷売りが、騎馬の武士が、飛脚が、若衆が……、引きもきらず行き交う。

これらの通行人を見回しながら、由比弥五郎は、やがて、その右手に持った大鉄扇で、ばしりばしりと己が膝を打ち出した。

いつの間にか、弥五郎のまわりに人垣ができ、

「何だ、この浪人者は」

「食えなくなって気がふれたんだべえ」

などと囁きはじめていた。

頃合を見て、弥五郎、

「軍談を仕る」

と、ぎょろりと目を剝いた。

弥五郎が始めたのは、太平記・楠公子別れの場であった。

弥五郎、節をつけて朗々と読んでいく。

時には、目を瞑り、声色まで入れる。

はじめはざわざわしていた弥次馬も、次第に静かになって、話に聞き惚れはじめた。

前の方に屈んだ娘などは、前掛で顔を被って泣きはじめていた。

名調子である。

とても、初めてのこととは思えない。
しかし、凡、今の時間にして二十分ほど読み進んだとき、突然、
「どけ、どけ」
とわめいて、四、五人の大男が傍若無人に人垣を突き崩して、歩み出てきた。
群衆は、仕方ねぇー、といったふうに道を開け、中には、もう半分逃腰になっているのもいる。
大男どもの中でも、一等獰猛そうな面付きで、達磨髭を生やした男が、
「こら！　天下の往来を誰に断って邪魔しておる！」
と、わめいた。
目の前に、突っ立ち並んだ大男どもを見て、弥五郎は、ふん、かぶき者か、と目を閉じた。
この頃、江戸府内には、水野十郎左衛門を筆頭とする白柄組、大小神祇組、閻魔組などの旗本奴と、幡随院長兵衛を頭とする町奴が双方角つきあいながら、異様な風体で徒党を組み、乱暴狼藉の限りを尽しているということは弥五郎も知っていた。
なにしろ、戦国の余風がまだ生々しく漂っていた時代である。
暗夜、街辻に立って、人を斬り、刀の利鈍を試す人間がいても、斬られた方が斬られ損。刃傷、喧嘩沙汰は日常茶飯で、堂々たる大名国守が、些細なことから殿中で刃物をひらめかして、人を殺傷し、己の領土を失い、家名を絶たれても、少しも怖れなかった時代である。
ましてや、戦いを業とする武士や旗本が、一言のゆき違いや、路上で袂が触れたなどという些細なことから果し合いをし、血達磨になって争っても、人々は不思議とも思わなかったのである。
町人たちも上に倣って、暴力沙汰を以って勇気のある振舞いとした。いうならば、女郎買いと喧嘩と博打が、この頃の最大の娯楽だったのである。

旗本奴の頭領、水野十郎左衛門などは、己が屋敷を賭場として開放していたほどであった。
ちなみに——。
十郎左衛門は、出雲守成貞の嫡男である。
成貞は、備後福山藩（十万石）水野日向守勝成の三男だが、三千石を賜って、幕府の旗本に加えられた名門である。
成貞は生れながらの豪傑で、頗る豁達な武士であった。
頭髪はつねに糸鬢奴に結い、定紋は髑髏、羽織と衣類は、鼠地に野晒模様、羽織の腰のあたりには、右に花切鎌、左に輪違いを大きく浮き出させ、糸鬢奴の、「奴」という字を、「ぬ」に利かせて、右からこれを「鎌輪ぬ」と読ませる凝りようである。衣類の丈を羽織丈と同じように仕立て、臑は、常に五、六寸もあらわれていた。
これが、刀の柄は棕櫚で巻き、天秤棒のような朱鞘の大剣を閂に差して、高足駄をはいて闊歩するのだから異様であった。
この成貞の歩きっ振りがまた独創的で、舞台で踏む「六方」に似ているところから、「六方者」という呼名がうまれたほどだった。六方と無法の語呂合せである。
成貞には逸話が多い。
或時、成貞はこういう気負った風姿で、蜂須賀侯の屋敷前を、斜にかまえて通りすぎた。たまたま、蜂須賀侯の姫君がこれを見て、あれこそ武士の中の武士である、と成貞に想いをかけた。恋煩いである。
さいわい、この恋は遂げられて、二十五万七千石の国持大名の姫君が、三千石の旗本水野家へ、自ら望んで輿入ったのである。

その子が、水野十郎左衛門成之であった。
こういう両親の子が尋常であるわけがない。
十郎左衛門は、幼時から、常住坐臥、奇を衒うことのみに腐心する天邪鬼ぶりで、遂に、父成貞も目を剝くほどの無法者に成果てたのである。
弥五郎の前に立ちふさがったのは、この水野十郎左衛門を頭領とする白柄組の大鳥権之介、芝山勘兵衛、水口魔衛門、鳥居夢之介、坂部三十郎らの無法者どもであった。
揃って、赤柄糸の大太刀、大脇差を横たえ、揃いの太布の渋染に、赤天鵞絨の襟をつけ、立髪(長髪)。馬の皮の太帯を締め、白綾の袖無し羽織という、ひと目で、かぶき者と知れる異様ないで立ちである。
「こら、立去らんか。天下の堺町の太鼓橋脇を、うぬがごとき乞食浪人に荒されてたまるか」
達磨髭が、再度、雷のような声で吠えた。
しかし、弥五郎、耳がないかのように、うっそりと目を閉じている。
弥次馬は、遠巻にして、目を輝かしていた。
この連中、かぶき者には、初中終ひどい目にあっていながら、他人がやられるのを見るのは面白くて仕方がないのだ。
「こら!」
達磨髭が、また、わめいた。
とたん、ふっと目を開いた弥五郎、
「俺も武士のはしくれだ。こら、などといわれては黙っておるわけにはいくまい。おぬし、名は何という」

と、そろりと立ちあがった。
が、弥五郎、背丈は達磨髭の肩までもない。おまけに、乞食のような身窄らしい服装である。迫力のないこと夥しい。
そんな弥五郎の立姿を見て、図にのった達磨髭、
「こらっ、われらを知らぬのか、白柄組じゃ」
と、目を剝いた。
「さようか。名は何という」
「何だと！　人の姓名を尋ねたくば、まずおのれから名乗れい！」
「名無しの権之介という者でござる」
「うむ！」
達磨髭の顔に、さっと血がのぼった。
この達磨髭大鳥権之介は、自分の名を知っていてからかわれたと思ったのである。

二

「おのれっ！　白柄組を虚仮にするか！　粉にしてくれるっ！」
わめきざま、権之介は、むずと、弥五郎の襟がみを摑んだ。この男には、よほど弥五郎が弱く見えたとみえる。
しかし、権之介は、そのまま、動かなくなってしまった。
一瞬の間に、弥五郎に睾丸を摑まれてしまっていたのである。
やがて、

「ううううう……」
白眼を剝いて、権之介は弥五郎の足元に崩れ落ちてしまった。
「おのれ！」
白柄組の面々は、いっせいに抜刀した。
坂部三十郎が、
「おりゃあー」
と、凄まじい気合いとともに突いてきた。
これを、手にした鉄扇で、カッ！　と跳ねあげざま弥五郎は、一挙に、三間もうしろに飛んでいた。しかし、うしろは濠である。逃げるわけにはいかない。
これを、にやりと嗤って覗きこんで、弥五郎は言った。
「泳いで逃げようか」
まわりの弥次馬が、わぁー、と笑った。
「いいぞ、軍談屋ッ」
半畳を入れたのもいた。
弥五郎、いつのまにか、床几を畳んで脇に携えていた。
白柄組の面々、もう弥五郎を甘くみていない。
〈こやつ、意外にできる！〉
四人とも白眼を剝き出して、じりじり間合いを詰めてきた。
弥五郎、驚いたふうもない。
「てめえら」

抜刀して、凄い形相になった四人を、等分に見ながら、
「幾らずつ持っておる」
と、言った。
「何だとっ！」
左端の大撫付芝山勘兵衛が言った。
「銭を持っておるかと聞いておる。客にかわって軍談料を戴く」
「おのれっ！」
四方から、白柄組の白刃が風を切って、弥五郎を襲った。
とたん、弥五郎の短軀が、跳ねて飛んだ。
あっという間に、水口魔衛門と鳥居夢之介の二人が鉄扇で叩き伏せられ、芝山勘兵衛は横っ面を、がつっと、畳んだ床几で張倒されて地に這った。
残った坂部三十郎は、すでに、顔面蒼白になっていた。
その前へずかっと出て、弥五郎は言った。
「白柄組といえば、大将は水野十郎左衛門じゃな。帰ったら、十郎左衛門に伝えよ。今夕、申の上刻（午後四時）由比弥五郎が、水野の屋敷に落し前をつけに行くとな」
「お、おのれっ！」
と、三十郎はわめいた。が、次の瞬間は、カッと目を剝いて、天を睨んでいた。
いつの間にか、背後に現れていた浪人者が、三十郎の髻を摑んで、捩っていたのだ。
三十郎、刀を振る暇もなかった。
浪人者は、背後から三十郎の耳に口を寄せて、囁くように言った。

「逃げた方がいいぞ、おぬし」
逃げられるわけがなかった。白刃は捥ぎ取られ、首は髻を摑んで捩られている。
「ううう……」
三十郎は呻いた。
浪人者は、また言った。
「十郎左衛門に伝えよ、腹が減った人間は、怖しいとな」
この浪人、丸橋忠弥にまぎれもなかった。
忠弥、ぱっと足払いを呉れて、三十郎を濠に叩き込むと、
「江戸というところは面白い。しかし、腹の減るところじゃ」
と、弥五郎を見て、嗤った。
どっと、弥次馬がわいた。
弥五郎も、にやっと嗤って言った。
「さて、参ろうか」
しかし、忠弥は、意外な行動に出たのである。
地に這って唸っていた四人の白柄組の腰から、ぱっぱっと、鞘ごと脇差を抜きとると、大刀まで、その手から捥ぎとり、これを、ひとまとめにして、刀の下緒でひっくくった。
髀腹を押さえてうなっていた鳥居夢之介が、さすがに、これには動転して、わめいた。
「おっ、おのれ、何をする！」
「何をするだと。聞きたいか」
忠弥は、せせら嗤って言った。

「聞きたければ、聞かせてやろう。すでに世は泰平といえ、武士が剣を抜いたからには、これは戦と同じじゃ。武士が戦に負ければ、どうなる。領地を失い、妻子は殺され、おのれらも死ぬるのが定めじゃ。おのれら、いやしくも武士たるものが、喧嘩を売っておきながら、張倒されただけでことは済むと思うか。だが、まあ、このたびは、生命だけは助けて仕わす。有難く思えいっ」
「おのれ！　大小は武士の魂じゃ！」
「ふむ。利いた風をぬかす。ならば、首を掻こうか。剣を抱いて、魂だけあの世に参る意気地があるなら、それも、よかろう」
忠弥は、ぐいっと一歩前へ出て、
「どうじゃッ」
と、わめいた。
しかし、夢之介には、すでに、闘う力はない。無念の歯を喰いしばって、犬のように唸った。
「ふん、首を掻かれるのも嫌か。侍どころか、餓鬼同然じゃな。ならば、今ひとつ聞かせてやる。戦場ではな、あわや首を掻かれんとするとき、武士の情けで、生命だけは拾ったものは、のちに首代として、何がしかの謝礼をするのが慣習であった。これが〝落し前〟という文句の謂じゃよ。よいか、俺は、別に非道を働いておるのではないぞ。後刻、必ずや落し前はつけにいくが、おのれら、武士は像だけと見た。逃げまわるのがおちじゃろうて。だから、この大小は、わが朋友の講釈代、並びに、首代の抵当として、俺が預かっておく」
これでは、まるで、忠弥の方が喧嘩を売っているようなものである。ところが、忠弥にも理由があったのだ。

ひきつづく大名家の取潰しで、世には、仕官の望みも絶たれ、その日の食にも事欠く、何十万という浪人が溢れているというのに、これらの旗本奴らは、先祖の功で手に入れた禄を食らって、のうのうと遊び暮しているばかりか、これを見よがしの乱暴狼藉、これは許せぬ——いつかは痛撃を喰らわしてくれるぞ、と忠弥はかねがね、この一党をつけ狙っていたのである。

坂部三十郎、鳥居夢之介は、加賀爪甲斐と並んで、旗本奴の頭領水野十郎左衛門の義兄弟である。忠弥にとって、これほど恰好の相手はない。

「おのれ、何者じゃ！」

これも脾腹を打たれて地に這っていた芝山勘兵衛がわめくや、得たりとばかり、忠弥は言った。

「丸橋忠弥と申す。宿は、御茶の水上神田御中間町、御中組頭大岡源右衛門殿の屋敷うちじゃ。苦情があったら、いつでも参れ。宝蔵院流十文字槍の一手なりとも御指南つかまつろうわえ。俺の方は、参れといわれなくとも行くがの。水野十郎左とやらいう馬鹿者にはそう伝えよ。うふふゥ」

よいしょ、と分奪った刀の束を肩に担ぐと、地上に這って、無念のうめきをあげている四人の旗本奴を、じろりと、もの凄い目つきで睨みつけ、

「では、参ろうか。由比氏」

うなずいた由比弥五郎は、その身体に似合わぬ大目玉を剝いて、ぎょろりとあたりを見まわすと、

「我ら、物盗りではないぞ。大小は講釈代に戴いたのだぞ。物盗りではないぞ」

と、念を押すように大声でわめくと、あっけにとられて茫然としている弥次馬を尻目に、すたりすたりと立ち去った。

そういう二人の姿を編笠の中から、じっと見送っていた一人の武士があった。

色褪せた紋服の着流しで大小の柄糸はささら立ち、鞘などは火搔棒にでも使ったかのように、はげちょろけていたが、その紋服の紋は、三本扇の丸。松平伊豆守信綱の忍び姿であった。

吉原堤の対決

一

浅草花川戸――。

六間間口の瓦葺の廂から、店先いっぱいに、紺地に〝幡随院〟という大文字を白ぬきにした、一間幅の大暖簾が四流、往来にはみ出すように斜にかかった大店があった。

このあたり、一歩裏通りに入ると、諸国から集まってきた小商人や、浮世の掟から喰みだした極道者らが巣くっている薄汚ない長屋がびっしりと建ち並び、鼻が曲るような臭気のたちのぼっている一角だが、この六間間口の大店の前はすがすがしい。

丸に幡随院と染めだした紺の香が匂うような法被をまとった若い衆が、忙し気に出入りし、槍持、供侍を従えた由緒ありげな武士までが出入りする。

この店、旗本奴のむこうを張った町奴の頭目、幡随院長兵衛の店であった。

その店先へずっかりと入ってきた、薄汚ない一人の浪人者がいた。肩に、下緒でひっくくった刀の束を担いでいる。丸橋忠弥であった。

店先にいた若い衆が、何だこやつは、という顔で、これをじろりと見た。

とたん、忠弥は、ぱっと手をのばして、そいつの襟がみを摑むと、

「主はおるか」

と言って、にやりと嗤った。

並の力ではない。

若い衆は、

「へい、おりやす」

思わず応えて、しまった。これは強請か、とでも思い直したのか、

「どなた様で」

へっぴり腰で、訊きなおした。

「槍の丸橋じゃ」

聞いたことのねえ名だ、と若い衆は首をひねった。

とたん、忠弥は、ぱっと手を離した。突き飛ばされたわけでもないのに、若い衆は音をたてて土間に転がった。

「うむ！」

と唸ったが、起きあがれない。したたか腰を打ってしまったのだ。

いつの間にか、店先には、長兵衛の子分たちが集まってきていた。なかには、既に薪雑棒を握っている奴もいた。

長兵衛の一の乾分、唐犬の権兵衛が、ぬっと、奥から顔を出して、

「お武家様、乱暴なさっちゃあいけません」

白眼を剝きだして嚇かしたつもりだったが、忠弥、ふふんと鼻で笑って、どさりと刀の束を権兵衛の足元に放り出すと、

「なるほど、長兵衛という奴は高慢な奴じゃ。武家には立ったままで挨拶せいと教えているとみえる」

と、言った。

「なにをっ！」
と権兵衛が、自慢の紗綾縮緬の小袖の裾をぱっと捲ったとき、
「待て、権兵衛」
と、奥の方から出てきた六尺を超える大男がいた。
これは、権兵衛とは違って、地味な盲縞の単衣に法被、挙措動作にはどことなく品がある。
幡随院長兵衛であった。
ときに、長兵衛三十二歳、男盛りであった。
長兵衛は、板の間に、きちんと膝を折って坐ると、
「丸橋様でいらっしゃいますか。手前が長兵衛でござります。こいつらのご無礼は、この長兵衛がかわってお詫びさせていただきやす。何とぞ、ご勘弁下せえまし」
ぴたりと、忠弥の顔に目を据えたままそういうと、土間に放り出された刀束を見て、
「お！」
と、声をあげた。
堺町の太鼓橋脇で、先刻、坂部三十郎をはじめとする白柄組の面々が、叩きのめされた挙句、大小を奪われたという噂は、既に、長兵衛の耳に入っている。しかも、目の前に投出されている大小は、いずれも、柄は棕櫚巻、白鞘である。坂部らのものにまちがいなかった。
長兵衛は、にやりと笑って言った。
「白柄組の大小でござりまするな」
「左様」
「ところで丸橋様、どのような御用件で」

忠弥は、むっとしたままの顔で言った。
「それらの大小を引きとってもらおう」
さすがに、長兵衛は唸った。
白柄組の大小と知って、幡随院がこれを買ったとなれば、長兵衛が、旗本奴との喧嘩を買ったことと同断である。ただでさえ、旗本奴と幡随院長兵衛を頭領とする町奴は、ことごとにいがみ合ってきた。水野十郎左衛門も、長兵衛を目の仇にしていた。しかし、十郎左衛門は、いやしくも三千石の直参である。十郎左衛門のほうから、町奴風情に喧嘩を売るわけにはいかない。
だから、長兵衛が、諸家に奉公人を周旋する人入れ稼業を表看板に、みるみる顔を売っていくのを、歯ぎしりしたいような気持で眺めていたのである。
しかし、長兵衛が、白柄組の面々の大小を、それと知って買取ったとなれば、充分に喧嘩の口実になる。
ことの真偽を改めると称して、幡随院に乱入することも、また、長兵衛を屋敷まで呼びつけて詰問することもできる。得たりとばかり、十郎左衛門が動き出すのはまちがいなかった。
それを知っていて、忠弥は、白柄組の大小を幡随院に持ちこんだのである。
しかし、長兵衛め、どう出る——。
と、とぼけ顔で見ている忠弥に、幡随院長兵衛は、ずばりと言った。
「よろしゅうござんす。お引取りいたしやしょう。お値段はいかほどで……」
「どうせ、只でふんだくってきた代物じゃ。いくらでもよい」
忠弥は、鼻で笛でも吹いているような声で言った。
「とは申しましても、これだけの逸品がそろいましては」

「ふむ。そうじゃな、直参の馬鹿息子どもの差料だけあって、鈍刀はないの」

と、白鞘の一本をひき取ると、忠弥、これを無雑作に抜放って、鍔元から切っ先までじろりと睨めあげると、

「綱広じゃ」

と、ぴたりと言い当てた。

綱広とは、相州住綱広である。元の名は正広、後、北条氏綱から綱の一字を与えられて、綱広と改めたという。相州刀工の逸材である。国清、安綱らと並べても毫もひけをとらない逸品であった。

拵えも、白塗金蛭巻大刀拵え。白塗の鞘に大小の金の延べ板を巧みに蛭巻にしたという絢爛たるもの。正当に手に入れたなら、優に百両は超えるという代物であった。

これを、また、無雑作にぱちりと鞘に納めると、忠弥は、

「おれは、お中間町の丸橋じゃ。では」

あっ！　と長兵衛が膝を立てたときは、もう往来に出ていた。

長兵衛は唸った。

あの服装では、さぞや御内所も苦しかろう、それがこの無欲、見事だ——、と感動したのである。

長兵衛とて、今は割元だが、出生は武家である。

肥前唐津の、浪人の子だが、本名は塚本伊太郎という。若年の頃、花房大膳という旗本に仕えたこともあるが、男の意地から武士を殺し、あわや死罪になるところを、幡随院の和尚に救われた。

以後、身を慎み、江戸の武家屋敷に年季奉公の仲間を世話する口入れ屋に奉公したのだが、腕も度胸も抜群で、もともと人の上に立つ器量の持主であった長兵衛は、まもなく独立し、この頃は、唐犬権兵衛、放駒四郎兵衛らをはじめとして、数百人の子分達を統率する大親分になっていたのである。

もっとも、口入れ屋というのは、仲間を世話するだけでなく、工事も請負ったし、町方の世話もするのだから、血気盛んな若い衆から破落戸まで出入りする。口入れ屋というのは、表むきの看板で、博打、強請たかりの町奴の親分、といった方が、はっきりするだろう。

長兵衛、今は多くの子分を抱えているから、表むきは落着いているが、もともと、喧嘩は飯より好きな男だ。

これが忠弥を一目で気に入ってしまった。で、大小は預かったのである。

長兵衛は、水野十郎左衛門とやる決心をしたといっていい。

二

忠弥の飲みっぷりは凄い。

大盃に波々と注がせると、息もつかせずぐいーっと一気に傾ける。で、膳のものをひと摑み、ぱくりとやる。また、ぐいーっとやる。

こんな調子で、もう半刻（一時間）も飲んでいた。

往来に出て、一丁も歩かぬうちに、周章てて追いかけてきた長兵衛の子分が、

「とりあえずこれを」

と差し出した、ずしりと重い金袋を、数えもせずに懐に入れた忠弥は、街辻で待っていた弥五

郎と落合うと、
「十郎左の屋敷へ押しかける前に一献くむか」
と、真直ぐ、天下の傾城町吉原に乗りこんできていたのだ。
既に三升は楽に飲んでいるはずなのに、酔った風もない。
昼遊びだから、目の前の庭は、目がくらむような夏の陽だ。
二人をぐるり取囲んだ幇間から禿まで、汗達磨になって、三味線、太鼓の類を鳴らしている。
喧しいこと、色気のないこと夥しい。
忠弥は、庭前の満天星や躑躅、萩の葉叢に輝く陽を賞でながら、ぐびりぐびりとやっていた。
弥五郎は酒を飲まぬから、食ってばかりいた。早食いだから、もう腹が太鼓のようになっていた。
順序としては、これから娼家に上って、ということになるのだが、もうそんな気分もなくなっている。
両人とも無言である。忠弥は飲む、弥五郎は食うの一点ばりである。歌ひとつ唄うわけではない。
おまけに、二人とも相変らず、埃だらけの服装である。幇間が、この田舎っぺぇめ、という顔をちらりとした。
とたん、忠弥は、手にしていた大盃の酒を、ぱっとその幇間に浴びせた。
勘がいい。
鳴物の手をちょっとでも休める者があると、忠弥はこれに凄まじい一瞥をくれた。
粋とか通とかとは、まるで無縁の二人である。これでは幇間でなくても、眉をひそめるのは、

当然であった。
何しろ、場所は天下の傾城町吉原の茶屋である。
ちなみに——。
当時の吉原は元吉原で、慶長十七年（一六一二）小田原浪人庄司甚左衛門が、幕府に傾城町の取立てを願い出て、慶長年間までは、麹町八丁目と鎌倉河岸に、十四、五軒ずつ、内柳町に二十軒ばかりあった女郎屋を、灘町から堺町にいたる二丁（約二百米）四方の土地に集めて傾城町としたものだ。遊女屋が店開きしたのは元和三年（一六一七）十二月からである。
この地は、もと葭茅が繁っていた湿地帯だったので、はじめ、「葭原」と名付けられたが、のち、「吉原」と改められたのである。
この頃は、既に吉原四丁を巡って、びっしりと町屋が建ち並び、昼すぎには早くも絃歌の音が湧きはじめる程の賑わいをみせていた。とはいっても、当時は、新吉原のような夜遊びが主ではなく、遊びは昼間だけだった。日暮れまでには、たいていの客は帰ってしまう。
万治期の仙台侯、寛保期の姫路侯などの話でもわかるように、当時はどんな上流でも、白昼堂々、御愉快とやってきていたのである。
やがて、五升ほどを腹に納めると、
「では、由比氏、登楼といたすか」
と、丸橋忠弥は腰をあげた。
両人は、幇間、禿らをぞろぞろと引き連れて、江戸町二丁目の伏見楼にくり込んだ。
一刻後、弥五郎と忠弥は、肩を並べて大門を出て、芳町の通りを歩いていた。風に乗って、

汐の香が運ばれてくる。
「いかがであった」
と、忠弥は訊いた。
「まずまず」
というのが弥五郎の答えであった。
「ふん、おれの方は身体がとけそうであったわ。うふふ……。では、由比氏、これからゆるりと十郎左の屋敷へ落し前をつけに乗りこもうかい」
「うむ」
道は小網町からおやじ橋にかかり、新堀端に出ていた。当時、このあたりは一面の葭原で、陽が落ちてしまえば、人っ子一人通らなかった。
あたり一面、漆黒の闇である。
突然、弥五郎の目がすーっと細くなった。
目前の闇がかすかに動いた。
ふっと、弥五郎の足が止った。
同時に、忠弥がすっと寄ってきて言った。
「いるぞ……、奴(やっこ)どもが。やっぱり来たわえ」
「よしっ！　離れろ」
ぎらりと、弥五郎の目が光った。
「おぬしは路上をいけ、おれは下から」
と、いい捨てたとき、弥五郎はもう路上から消えていた。

相手の人数の知れぬ闇中での喧嘩ではかたまるな、これが喧嘩の定法(じょうほう)である。下手をすると同志討になるからだ。
挟んで撃つ！
そう決めた弥五郎の策を、忠弥、一瞬のうちに呑(の)みこんでいた。闇の路上を、忠弥の巨体がゆらゆらと行く。
やがて、忠弥は、調子はずれのうかれ節を歌いだした。
酔ったふうを装っている。
〈あやつ、中々やるわえ〉
にいっと嗤って、弥五郎は、葭の中を音もなく走った。
川辺に出た。
新堀淵から路上までは約半丁（五十米）。水辺に身を屈めてあたりの気配を探ると、いた。
揃って、立髪だ、白柄組にまちがいない。
五人と数えたとき、左の方で葭の穂ががさりと揺れた。
ふん、六人かと思ったとき、五間ほど前方の闇のなかにうずくまった影が見えた。
七つの影が、前後から路上の忠弥を狙って、じりじりと葭原を動いていく。
弥五郎、まるで蜚蠊(ごきぶり)のように、この後を這っていった。
ぱっと一人が、忠弥の背後にとび出した。
うっ！
と、弥五郎が目を剝いたとき、既に、その男の首はなかった。
忠弥が、振りむきもせずに抜き撃ったのだ。

とたん、たあーっと、六人が路上に飛出した。
血刀をだらりとぶら下げた忠弥が、囁くような声で言った。
「奴か。馬鹿もんめ……。おぬしら、皆殺す」
声が低くなったのは、この男、怒った証拠である。
忠弥は、昼間、叩きのめされ、大小まで奪われた白柄組が、必ず復讐の挙に出てくることは計算ずみで、妓楼に上って遊んでいたのだ。
でなければ、わざわざ人気のない新堀淵に出て来はしない。堺町からは江戸橋にそって、真直ぐ民家の並ぶ往還に出る道もあるのだ。
既に、六人とも抜いていた。皆、手応えのありそうな剣さばきだ。昼間の五人とは筋がちがう。
弥五郎、するすると葭の間を走った。
走りながら、忠弥が気合もかけずに、左端の一人を斬って落すのを見た。
ぱっと路上に飛出した弥五郎、一人の背後から、
「おい」
と呼んだ。
「う！」
と、振りむいたその胴を抜きうちに斬り払うと、天に上った剣先をひらりと返して、
「とう！」
今一人を真向う微塵に叩き斬った。
「由比氏、おみごと」
声と一緒に忠弥の剣が闇にひらめき、一人の首を、がっ！　と斬っぱなした。

目が覚めるほどの腕の冴えである。
既に、残りは二人に減っていた。
いつの間にか、雲間を割って月が光っていた。
「こやつらは任せておけい。逃げたら頼むぞ」
ぱっと、大上段に、大剣をふりかぶった忠弥の目には、凄まじい光が浮いていた。
「おう！」
弥五郎、ぴたり、大剣を正眼につけて、二人の退路を押さえた。
とたん、一人が振りかぶりざま、
「おりゃあ！」
捨身の双手突きに出た。
すっと片膝をついた弥五郎、まる空きになった胴をぱっと薙いだ。
胴切りになった男の胴体が、剣を突き出したまま、弥五郎の頭上を飛びこした。
その時、最後の一人も、既に忠弥に頭蓋を叩き斬られて即死していた。
忠弥は月光に刀を翳して、まことに満足げにつぶやいた。
「こいつは斬れるわえ」
忠弥は坂部三十郎の差料とおのれのものを、いつのまにかすりかえていたのであった。

賭場荒し

一

戌の刻（午後八時）を知らせる江戸城の時の太鼓が鳴り終った頃、水野十郎左衛門の屋敷の裏地に一人の武士が立った。

武士とはいっても、その姿は乞食にも劣る。よれよれの麻の帷子に荒縄の帯、毛臑まる出しで足半をつっかけ、頭には、醤油で煮しめたような手拭を被っていた。腰には赤鞘の大剣が一本――、金井半兵衛であった。

門番小屋の小者に、壺を振る手付きをして見せて、にやりと笑うと、

「遊ばせていただく」

すいっと、半兵衛、門内に入った。

遊ぶ金子はあるのか、この乞食浪人め、という面付きで、門番はこれを見すごした。

同じころ――。

表門に二人の武士が立った。

由比弥五郎と丸橋忠弥である。

忠弥も、裏門の半兵衛と同じことを言った。

「遊ばせていただく」

しかし、忠弥が半兵衛と違っていたのは、周章てて前に立ちはだかった門番の足元に、慶長小判を二枚、ちゃらりと投げ出したことである。こちらは、刀を売った金を持っているから氣前がいい。

忠弥と弥五郎は、大手を振って門内に入った。二人を遮る者はいなかった。

邸内の闇を透かして見て、忠弥が言った。

「どうやら坂部らは、昼の一件は親玉に洩らしていないようだな」

「ふむ。とすると、あの闇打ちは、坂部らに雇われた浪人達の仕業であったか」

弥五郎は、忌々しげに足元に唾を吐いた。

水野家の大広間に開帳された賭場には、種々雑多な人間が入りこんでいた。

旗本も浪人も勤番侍も町人も、仲間小者も、奉行所の同心らしいのまで交っていた。

しかし、やはりここにも、坂部三十郎らの姿は見えない。

賭場の上座に、床の間を背負って大胡座をかいた水野十郎左衛門は、手一束に切放った総髪に、白縮緬の単衣を着て、白絹の帯といえば立派そうだが、胸ははだけて、熊のような胸毛をのぞかせ、朱の大盃を片手に、今一方の腕には、吉原からでも掠めて来たのか、立兵庫に伊達巻という、凄まじいいでたちの女をひきつけ、まるで山賊さながらの形で、勝負の模様を眺めていた。

のそりのそりと入ってきた弥五郎と忠弥を見て、ぐいっと大盃を傾けると、

「おぬしら、金子は持参か！」

三千石の直参にはあるまじき野卑な言葉を吐いて、剝きだしになった女の胸に手を入れた。

忠弥は、無言で盆御座の前に坐った。そのまま、うっそりと勝負の成ゆきを眺めている。

弥五郎といえば、壁に寄りかかって胡座をかき、ぷつりぷつりと鼻毛を抜いていた。

裸にちかい恰好の壺振が、いやな野郎めらが来やがった、という面で、じろりと、目の前の忠

弥の顔を見上げたが、瞬間、びくっとしたように面を伏せた。忠弥に、凄い眼付で睨まれたからだ。その目には、とても人間のものとは思われぬような、凄まじい光が浮いていた。
　そのまま、一刻ほどの時が過ぎた。
　寺銭の詰った金箱を抱えて、水野家の家士が立ちあがり、女を抱えて、今はいぎたなく肱枕(ひじまくら)をついた十郎左衛門の傍に置いた。
　とたん、忠弥がすいっと立った。ずかずかっと寄っていって、箱を摑んでぶら下げると、忠弥は言った。
「十郎左！　不浄な金じゃが、もらってゆく」
「なにい！」
　突っ立ちあがった十郎左の前へ、ぬっと顔を突きだして忠弥は言った。
「理由は坂部三十郎らに聞けい。これは落し前じゃ。三千石の大禄を喰(は)みながら、己の屋敷で賭場を開帳するごとき腐れ武士に、落し前などといっても判らぬじゃろうがな」
　ぎらりと、十郎左衛門は大剣をひっこ抜いてわめいた。
「おのれ！　おのれらじゃな、この白柄組に楯(たて)ついたのは」
「知っておったか、十郎左。ならばよい」
　そう言い捨てると、忠弥は、不敵にも抜刀した十郎左衛門にくるりと背をみせた。
　とたん、十郎左衛門の大剣が唸りをあげて、忠弥の首を襲った。
　しかし、これは空を斬った。
　みごとに間合を見切って、忠弥は前へ出ていたのである。
　そればかりではない。樫の五分板を組み合せ、鉄の枠で締めた、巨大な銭箱を、力一杯、庭石

にたたきつけた。
　めりっと銭箱は割れて、煌々(こうこう)たる燭台の灯に照された庭前に、金銀銅いりまじった寺銭が四散した。
　賭場の客十数名がわっと、総立ちになった。
　その音を聞いて、水野の家士数名が、おっとり刀で躍り出てきた。
　とたん、弥五郎の小柄な身体が跳躍した。
　あっという間に、大広間を跳びまわって、十数本の燭台の灯をことごとく吹き消した。
　闇の中で、刃物と刃物が嚙み合い、火花が散った。
「われら殺生は好まぬ。無用の者は去れいっ！」
　と、弥五郎がわめいた。
　その声めがけて、
「きえっ――」
　風を切って、白刃が振り下された。
　がっ！
　と、その胴を弥五郎の剣が薙いだ。が、血は噴かない。峰打である。
　忠弥も弥五郎も闇に目が利く。
　水野の家士達は、あっという間に叩き伏せられ、悶絶(もんぜつ)してしまった。
　忠弥は、既に十郎左衛門をねじ伏せていた。
「このうつけ者、首ねじ切ってくれる」
　と、忠弥は呻いた。

本当に捩じ切りかねない勢いである。
「待て、忠弥」
周章てて、弥五郎が止めた。
「その者、まだ殺すな。使い道がある」
「さようか。では、殴る」
がっ！
と、忠弥の拳が十郎左衛門の頭で鳴った。
既に、賭場の客は一人残らず逃げ散っていた。
門長屋の方角から足音が起った。
だだっと庭を駆けてきたのは、芝山勘兵衛、坂部三十郎らの旗本奴どもであった。
総勢八人。
多数に奢った芝山勘兵衛がわめいた。
「飛んで火にいる夏の虫、とは、おのれらのことじゃっ！　素浪人、庭へ出ろ」
「ふふふ、われらは戌の刻に参上すると言ってあった筈じゃ。遅れて参らば、生命だけは助かると思っておったか」
廊下に突っ立って、忠弥がせせら嗤ったのと、弥五郎が庭に跳出したのは、ほぼ同時だった。
抜撃ちの一閃がその胴にきた。しかし、地に降りたとたん、弥五郎はまるで鼬のように横に跳んで、すっくと泉水わきの庭石に立っていた。
八人が、どっと抜刀した。
その一人の足元を地を這うように、弥五郎が駆けぬけた。

臑を両断されて、一人がのけ反った。
と、同時に、芝山勘兵衛の首が宙にとんでいた。忠弥が廊下から跳躍しざま叩き斬って通り抜けたのだ。
「あと六人」
と、忠弥がわめいた。とたん、
「こやつらは、おれがやる」
闇の中から、声がかかった。
ぬっと、泉水脇の石灯籠のうしろから顔を出したのは、金井半兵衛であった。
「おのれ！」
と、坂部がわめいた。
その前へずかりと出て、半兵衛は言った。
「わしはおのれらに怨みはないがの、その服装が気にくわぬ。それっ！」
ぱっと、赤鞘の大剣が鞘走った。半兵衛の痩身が独楽のように庭土を走った。
あっというまに、坂部をはじめ四人までが血飛沫をあげてのけ反っていた。
稲妻のような迅業であった。
「ほほう、半兵衛殿もやるわい」
忠弥は嬉しそうに嗤ったが、そのとき忠弥は既に、残りの二人を斬り伏せていた。
水野十郎左衛門は、虚脱したように大広間にへたりこんでいた。

二

およそ半刻後、弥五郎と忠弥と半兵衛の三人が、お茶の水下の暗がりを歩いていた。
「これで十郎左も、もう黙ってはおれまい。必ずや旗本奴を糾合して押し寄せてくる。今度こそは、あやつら、捻り潰してくれるわ」
忠弥は、心地よげに嘯(うそぶ)いた。
「いや、来まいな。奴どもは直参じゃ。禄あればこそ乱暴狼藉も働ける理屈じゃわえ。おまけに、あれだけやっておけば、いくら十郎左がいきり立っても、配下の奴どもが動くまい」
「されば、これが役にたつ」
と、半兵衛は懐から一枚の図面を取り出して、月光に翳(かざ)してみた。半兵衛は、いつの間にか、水野家の絵図面を写しとってきていたのだ。
「さよう」
と、弥五郎が言った。
「それをたねに水野三千石を揺さぶる。軍資金は水野十郎左に出させる。これが、この由比弥五郎の策じゃよ」
「軍資金を出させて、どうする」
と、忠弥が訊いた。
「軍学道場を開く」
「ふーむ。それで雑兵を集めるわけか」
と、半兵衛。

「さよう。大事を為(な)すには人数がいるからな。まず、兵を養う。それには、軍学道場を開いて、天下の浪人に扶持(ふち)するのが一等じゃろう」
「ふふう……、扶持するとは気に入った」
ぱしりと膝を叩いて、半兵衛が言った。
「それなら、一人、恰好の人物をひき合せよう。おぬしのごとき、浅間山の白狐の子じゃ、などという素性の知れぬ人間のところへ、通ってくるような物好きもあるまいからのう」
「どんな化け者じゃ」
「楠不伝という。これに、水野の金蔵を併せれば、ひとまず道場の体裁は整う」
「うむ。由比氏の講釈なら、人も集まろうて。あの太平記は見事なあちゃらかであったからの」
と、傍から、忠弥が嗤った。
「知っておったか」
と、弥五郎も笑った。
しかし、弥五郎、もともと軍学には興味を持っていた。この男、自分では、駿州浅間山の白狐の子だなどと称しているが、出生は、東海道由比宿の紺屋の子であった。
八歳のとき、興津(おきつ)の清見寺に入れられたが、まもなく寺は出て、当時、由比の宿はずれに道場を開いていた高松半兵衛なる浪人について、心貫流を学んだ。
半兵衛は、当時の剣客としては稀にみる教養人で、剣とともに、『戦国策』『春秋左氏伝』『孫子』『呉子』などの史記や軍記の類も、弥五郎に教えた。
『太平記』も、弥五郎は高松半兵衛の塾で、読み憶えたのである。
「お前には素質がある。剣とともに軍学の一流を編み出して名を挙げよ」

と、半兵衛に言われたこともある。

弥五郎が、由比を出て天下をうろつき出したのは、実は、師半兵衛のこの一言からであった。

当時、江戸で軍学者として名のあったのは、小幡勘兵衛景寛と北条安房守長氏の二人であった。勘兵衛は、「甲州流」とも、「山本勘介流」とも称し、門弟三千人という盛況であり、北条安房守は、この小幡勘兵衛門から出ている。勘兵衛には、『甲陽軍鑑』の著書もあり、当時、江戸で軍学を学ばんと志す者は、この二人に付くのが常道とされていた。

楠不伝には『南木拾要』という著書もあり、弥五郎も一応これは読んでいたが、この不伝という人物は、まことに評判の悪い男だった。

――一巻の楠氏系図と一流の菊水の旗を作って唐櫃（からびつ）に納め、あらかじめこれを、高野山の遍照尊院の裏の樟（くすのき）の根方に埋めておき、後年、江戸に出て、神田連雀町に兵学の塾を開くや、一夜、楠公の夢を見て、この唐櫃の本所を知らされたと称して、これを発掘し、世人を誑（たぶら）かし、俄（にわか）に門弟を増やした――。

などともいわれている。

「一度会ってみようか」

と、弥五郎は言った。

すると、半兵衛、ぼそりと言った。

「土産もある」

懐中へ手を入れて、ずしりとした財布を取出した。半兵衛は、水野屋敷の絵図面を奪（と）ると同時に、金まで奪ってきていたのである。

「これは、これは」

と忠弥が手を伸ばすと、

「ざっと、二百両はござる」

半兵衛、忠弥には渡さずに、さっと懐にしまってしまった。

「盗賊め！」

と、忠弥が嗤った。

弥五郎は、まだ不伝のことを考えていた。

『南木拾要』を読んだ弥五郎は、不伝が噂のような人物ではないことを知っていた。

これは、弥五郎の勘といってもよい。

実は、不伝は――、まさしく、楠公の末裔（まつえい）であったのだ。

楠正成の末子正儀（まさのり）には四人の子があった。正儀の末子は正平（まさひら）という。この正平の十代の裔に正虎という人物が現れる（一説には、九代の裔ともいう）。

正虎は、天文五年（一五三六）十七歳のとき、縁あって、足利将軍義輝に仕えた。が、当時、楠氏はいまだ朝敵の汚名を着せられていた。それで、正虎は、大饗（おおあえ）正虎と名乗った。ところがである。この正虎というのは、大変に融通のきく人物で、のち、織田信長に仕え、永禄二年（一五五九）、信長のとりもちで、正親町（おおぎまち）天皇から朝敵の汚名を勅免され、この年、晴れて楠正虎と名乗ったのである。のち、従四位で、河内守に叙任された。これといった軍功があったという記録もないから、相当の才覚のあった人物とみなければなるまい。

長諳（ちょうあん）と号して、信長や秀吉の右筆（ゆうひつ）を務め、後陽成にも書を教えている。この子に甚四郎とい

うのがあり、名は正辰、これが、後の楠不伝なのである。
不伝は山科言経の娘を娶った関係で、当時の公卿社会に頻繁に出入りした。不伝の伝える軍学は、「楠正辰伝楠流」と称するものだが、これは義理の兄山科言経から伝授されている。
『言経卿記』天正十一年八月十一日の項に、
――楠甚四郎訪来ル。軍記の儀教授サレタシト。是ヲ許シ、起請文書ス。熊野誓紙ナリ。兵書『気巻』貸与ス也――
とあることからも知れる。
軍記とは軍配団扇の意で兵学、軍学のことである。
この甚四郎――楠不伝が寛永のはじめに、江戸に出てきて、神田連雀町に、軍学塾を開いていたわけである。
あくる日の午後、由比弥五郎、丸橋忠弥、金井半兵衛の三人は、肩を並べて不伝の軍学塾へやってきた。
連雀町は、町人の町だった。慶長の頃には、物を背負うれんじゃくを造る職人が多く住んでいたため、この名ができたが、この頃は、表通りには暦問屋、煙草屋、駕籠屋などが建ち並び、横丁に入ると、床屋にならんで歯磨売り屋があったり、魚屋が二間間口の小店を開いていたりするという具合。
不伝の塾は、こともあろうに風呂屋の隣にあった。当時の風呂屋というのは、一種の淫売宿である。
昼ちかくになると、もう二階から絃歌の音が響きだし、白粉お化けのような淫売や湯女たちが、猥雑きわまる腰の振り方で横丁を出入りした。喧嘩争論は絶えまもない。そういう横丁の中の一

軒、四間ばかりの小汚ない家が、不伝の学塾であった。それでも玄関はあった。
張孔堂楠流軍学指南、楠不伝正辰――
看板も揚げてある。達筆である。が、その看板は、どうやら張板の古手を断ちきっただけのもののようであった。家、看板ともに、まこと羽振は悪そうだったが、家の裏手には、高さ二十間(約三十六米)もある欅の大樹が聳え立っていた。
〈なるほど〉
と、弥五郎は首肯いた。
〈蒟蒻だな、家は小汚なくても、あの大樹があればよろしかろうとの魂胆じゃろう。面白い老人らしい……。が、当今の侍には、この風はわかるまい。流行らぬわけだ〉

張孔堂楠流軍学

一

半兵衛は玄関からまわらず、すたり、すたりと裏庭にまわりこんだ。
濡縁に、粗末な布子を着た老人が、胡座をかいていた。痩せていた。頭は医師のような慈姑頭で、その姿は、どうみても軍学者、兵学者のかたちではない。
この老人、半兵衛を一瞥して、
「おう、来たか」
とぼけた顔で言った。
「お久しゅうござる」
半兵衛は、礼儀正しく一揖した。
〈ふーむ、相手は蒟蒻じゃ……、こういう人物を見知っておるとは、半兵衛め、並の狸ではないわ……〉
と、弥五郎は思った。
「こちらは由比弥五郎殿、こちらは丸橋忠弥殿でござる。このたびの道中、金谷の宿で、偶然泊り合せ、以後、同道仕ったものでござる。お見知りおきください」
「さようか」
ぽりぽりと剝きだしになった瘦臑をかいて、不伝は言った。
「わしが不伝じゃ。以後、昵懇に願いたい」

「はは」
二人とも、ここでは神妙であった。
弥五郎も忠弥も、こういうふうな老人が、好きなのだ。
この二人とも、人間に限らず、物事の好悪は泥くさいほど極端なのだが、ひとたび気に入ったとなると、利害など忘れてしまう性質である。
「これはほんの手土産でござる」
と、半兵衛が、水野十郎左衛門の屋敷から奪ってきた財布を丸ごと差出してしまっても、二人とも何も言わなかった。
しかし、受取った不伝の方も見事だった。
中味を改めもせず、これを、ぱっと背後の衣裳箱に放りこむと、
「まあ、あがらぬか。何もないがの」
ぺたぺたと膝を叩いて、立上った。
この家、たしかに何もなかった。
表の方の十畳ほどの部屋は、講義のとき弟子に宛がうのか、円坐が十五、六枚積みあげてあったが、家具だとか装飾品などというものは一切ない。襖もない。襖のかわりに、簾がぶら下げてある。
裏の一間には、四尺ばかりの巨大な囲炉裏がきってあった。すべて、家中板敷である。が、これは、当時の家としては珍しいことではない。しかし、囲炉裏端に通されたとき、弥五郎は目を剝いた。
簾のかげになってよくは見えなかったが、次の間には、厖大な量の書籍が積みあげてあった。

当時、書籍というものは、今日のように手軽に手に入るものではなかった。

値も高い。金子にして、数百両か、この仁、米塩までつめて、これを購ったか、それとも……、

と、弥五郎は考えた。が、わけを知る前に、痛烈に読みたいと思った。

旅に出て三年有余、兵法修行だけに精出してきたため、本を読む暇どころか、買う金さえなかった。

旅の浪人に秘蔵の書籍を貸すなどという風流人は、そう沢山いるものではない。いたとしても、止宿して読んでいる暇は弥五郎にはなかった。

〈これはまず、どうあっても読ませてもらわねばならぬな〉

弥五郎、涎のたれそうな面付きで、顎を撫でた。その面付きを見て、

「おぬし、書物が好きそうじゃな」

と、不伝は言った。

「はあ、まあ」

弥五郎の答えは曖昧だったが、その目には光が浮いていた。しかし、書物の話は、それで断たれた。

不伝老は、囲炉裏に粗朶を折ってくべて、火をつけた。下女ひとりいないらしい。

「半兵衛」

と、不伝は、金井半兵衛ほどの臍曲りを呼び捨てにした。よほどの付合いと知れる。

「酒を一樽買って参れ」

「金がござらぬ」

と、半兵衛は顎を撫でた。

「さようか。懐中さらっての寄進とは、相変らず、かわゆい奴じゃ。財布はあっちじゃ」

と、衣裳箱の方に顎をしゃくり、

「そのなかから持ってゆけ。酒はなるべく大量の方がよかろうな。この仁は大分いける口らしいでの」

忠弥を見上げて、にやりと嗤った。

財布から、小判を二、三枚摑み出していった半兵衛は、またたく間に、四斗樽をひとつ荷車にのせて、酒屋の小僧に引かせて来た。これを、でんと囲炉裏端に据えて、不伝に言った。

「燗はようござろう」

「いや、酒は燗酒、女は年増という文句もござる。まずは、燗酒で参ろう」

と、忠弥は、金床の上に置いてあった鉄鍋をとって自在鉤にかけ、四斗樽を両手で抱えて、これに酒を充たした。これなら、一度に五升の燗はつく。

半兵衛が塩をひとつかみ握り出してきて、三人の前の小皿に分けて置いた。

不伝老は、剝げちょろけた大盃を四杯、箱膳から摑み出して、囲炉裏端に並べた。

それに、頃あいをみ計らって、半兵衛が竹柄杓で酒を注ぐ。

見事に呼吸があっていた。

「では参ろうか」

と、不伝が盃をあげた。

「頂戴仕る」

およそ、三合は入る大盃を、忠弥は、ぐいっと一気に干して、唇を舐めた。同時に、不伝も盃を空にしていた。

「結構な酒でござる」
と、忠弥。
「ふん、昼酒はからだによい」
ブー！　と、不伝は屁をひった。
しかし、誰も笑わない。
弥五郎は、兵学の話でも聞ければ上々と思ってやってきたのに、不伝をはじめ、忠弥も半兵衛も兵学のへの字も口にしなかった。塩をぺろりと舐めては、黙々と飲んでいる。
弥五郎は、酒を呑めない。肴もなく、塩を舐めてはただ飲んでいる三人を見ているうちに、だんだん苛々してきた。しかし、三人は一向に盃を置く気配もない。
やがて、鉄鍋は空になった。
「燗はもうよかろう」
と、不伝が言った。
「左様でござるな」
と、忠弥が答えた。
既に、囲炉裏の火は消えていた。半兵衛がまた鉄鍋一杯に酒を充たした。不伝の手が、まず竹柄杓に伸びた。ついで、忠弥。半兵衛は酒樽から直に盃に酒を充たした。
かくて、黙々と飲むこと、一刻半。この三人は、みごと四斗樽を空にしてしまったのである。
まさに、鯨のごとき酒徒といわねばなるまい。
弥五郎は腕組をして、目を瞑ってしまっていた。

既に、夏の陽も暮れかけていた。
不伝は、いつの間にか、炉端に肱枕をして眠っていた。
最後の一杯の酒を、惜しそうにちびりちびり舐めていた半兵衛が、鼾をかいて寝ている不伝に顎をしゃくって、
「これで、このご老体は幕政批判の巨魁じゃよ」
と、言った。
すると、不伝は目を瞑ったまま、
「ほう、そうか」
と、言った。
で、また鼾をかきはじめた。
並のとぼけようではない。
弥五郎は、生れてはじめて、怖しい人間を見たと思った。
天下は既に、徳川家の治世となり、幕府の基礎はかたまっていた。一見、それは磐石のごとく揺がぬものにみえた。全国の三百余藩は、いずれの藩も、その隣藩とは〝連合不可能〟のように配置され終った。
甲藩に対して乙藩は監視者となり、乙藩に対しては丙藩が監視者となり、さらに丙藩に対して甲藩が監視者となり、いずれの藩も独自で、あるいは隣藩や、他の藩と密かに謀議し、幕府を覆すべく運動をすることは封じられていた。
譜代と親藩は、力を併せて外様にのぞみ、旗本八万騎と称する将軍の親衛隊は、譜代と親藩を牽制する。しかも、旗本は禄するところは乏しく、個々の力は弱い。すべての者は、幕府、すな

わち徳川家の仁恵のもとに首を垂れ、尾を振って、その命に従うよう、既に法度の大綱はなっていたのである。

しかし、いまだ徳川家の天下を覆そうとする野心家は野にいるのだ。

二

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦と、大坂冬の陣は、一時に大量の浪人を生んだ。その数、おおよそ、十六、七万にのぼる。関ヶ原合戦のとき、大坂城にいた毛利勢を合せると、西軍の総勢は十五万七千人を数えたが、それがそのまま、そっくり浪人になったのである。

更に、大坂の陣の後、息もつかせぬ大名家の取潰しが続いた。

まっ先に槍玉に上ったのは、元和二年（一六一六）家康の第六子忠輝だが、以後、福島正則（四十九万八千石）をはじめとして、蒲生忠郷の六十万石まで、七家およそ三百四十一万八千石が取潰される。以下めぼしいものだけでも、堀尾忠晴、蒲生忠知、鳥居忠恒、京極忠長、生駒高俊、堀直定、加藤明成など、合計二百六十万石の大名が取潰された。

慶長年間（一五九六〜一六一五）の大名家臣数は、高一万石につき、約二百三十人だから、大雑把にみても、六万一千余人の浪人が出た勘定になる。これに関ヶ原、大坂の陣後の十六、七万人を加算すると、少なくとも浪人の数は二十二万人を突破する。当時の人口を二千五百万とみつもれば、失業浪人の数は全人口の〇・八八パーセントにものぼる。

これは、今日からみても、驚くべき数である。しかも、浪人の子供は浪人であるから、その数は増えるばかりだ。

当然のことながら、当時の浪人、つまり失業武士の生活は、無残なものであった。誇り高い者

は餓死を待ち、破廉恥なるものは、強請（ゆすり）たかりから辻斬りまで働く。

江戸本郷に住む関織部は、迫りくる餓死を覚悟、武具や刀を弔い費用に残して、はや、朦朧（もうろう）となったところへ、古河藩主堀田備中からの迎えがきて、あやうく助かった。逆に、食えぬから死ぬると、大名屋敷の前で双肌（もろはだ）ぬぎになり、白刃をちらつかせる者もあった。門前での流血騒ぎは迷惑だから、大名屋敷では、幾らか握らせて立ち去らせるのが習慣であったが、中には薄情な殿様がいて、切りたければ切れ、と、存分に飯を食わせて、家令に介錯（かいしゃく）までさせたのがいる。井伊掃部頭（かもんのかみ）がこれである。

幕藩体制が固まり、仕官の口が閉ざされると、これらの浪人達は、誇りも意地も何のその、食うためには見世物まがいの剣技まで演じるものもいた。

これらの浪人達が、すべて、対徳川戦の敗者、または将軍の権力絶対化への犠牲者だったことに、問題がある。中には、密かに結社を組み、幕府打倒を狙っている一党もいたのである。

喰らい酔って、だらしなく鼾をかいて寝ている楠不伝の姿に、弥五郎は、幕府に対するこれら失業武士の怨念（おんねん）の不気味な塊のようなものを見た。

これは、忠弥も同様だった。

一斗をこえる酒を飲み干して、眦（まなじり）を決した忠弥は、じろりと弥五郎と半兵衛を見て、

「敵は、旗本奴などというちんぴらではないな。幕府じゃ」

と、わめいた。

とたん、鼾をかいて寝ていた不伝が、今度は薄っすらと目をあけて、

「これ、丸橋氏。穏やかでないことをいうものではない」

と、言ったと思ったら、また、すやすやと寝息をかきはじめた。

「うーむ」

と唸って、忠弥は言った。

「おれは、このじい様が気に入った。おぬしら、ここに落着けい。隣は湯屋じゃ。その気になれば、毎日でも女は抱けるぞ」

そのままごろりとひっくり返ったと思ったら、忽ち、轟々と天地を揺するような鼾をかきはじめた。

半兵衛は、すでに、囲炉裏端に仰むけにひっくり返り、臍をだして眠っていた。

徳川幕府の江戸市街の経営は、先ず、江戸城を中心として譜代の武士の屋敷どりをなし、その周辺に町割をすることから始まった。つまり、大名、旗本たちには、思うさま豪壮華麗な屋敷を建造させ、諸国から集まって来た商人達には、只で土地を与えて町を作らせたのである。

江戸を慕って、諸国からやって来た商人の中には、伊勢、三河、駿河の者が圧倒的に多く、伊勢屋とか三河屋の暖簾をかかげる店は、一町に二、三軒は必ずあった。

江戸の俗諺にも、数の多いのを、

伊勢屋、稲荷と犬の糞

と、唄われているくらいである。

江戸は、まさに武士と町人の町であった。

慶長十一年の江戸城の大修築にあたって、郭内にあった四日市町、大伝馬町、小伝馬町、南伝馬町が郭外に移され、いよいよ八方へ広がったが、寛永の世になっても、まだ外濠の開鑿は進められ、あちこちに櫓が立ち、地固めの人数が繰りだされ、石垣工事が始まっていた。

ここは、虎の門脇の埋立地。

赤土の剝きだしになった空地の真ん中に、にわか造りの櫓が組まれ、笛や太鼓の威勢のいいお囃子の音が爆発していた。

若い娘や子供、老人までが、笛や太鼓に合せて踊り狂っていた。

櫓の上に立っている派手な法被姿の大男は、幡随院長兵衛であった。

「さあ、皆の衆、踊った、踊った。踊って腹がへったら餅がある。上戸の衆には酒がある。さあさあ、遠慮なく踊って、食って、飲んで下され」

大声でわめきながら、長兵衛の脇で、これも派手な法被姿で踊っているのは、長兵衛の一の子分、唐犬の権兵衛であった。

「そうれ、子供衆には餅じゃ、餅じゃえ」

踊りに合せて、ぱっぱと櫓の上から紅白の餅を撒いているのは花川戸の店で、丸橋忠弥に襟髪を摑まれて三和土に這わされた、蛤の三太であった。

わき立つような踊りの渦の中で、差す手引く手も鮮やかに踊っている一人の美しい娘の姿が、ひときわ目立つ。

それを涎の垂れそうな顔で見下して、蛤の三太が言った。

「お吉さんはいつ見ても綺麗だねえ。あれが、親分の妹さんでござんすかねえ、信じられねえ」

これを、

「馬鹿野郎っ、めったなことをいうんじゃあねえっ」

と、唐犬の権兵衛が怒鳴りつけた。

そのとき、見物の群の中から、編笠で顔を隠した二人の武士が出てきて、葭簀張の接待小屋に

むかって歩きだした。それをいち早く見付けて、
「おっ！」
と、長兵衛が声をあげた。
「権兵衛、あれぁ、松平の殿様じゃあねえか」
「なあるほど、ちげえねえ」
と、蛤の三太。
三太は、一ツ橋御門内の松平伊豆守の屋敷にも、ちょくちょく出入りしていたのだ。
伊豆守の連れの武士は、幡随院の身内の者は知らなかったが、柳生十兵衛である。
鏡をぶち抜いた酒樽をでんと据え、葭簀張の接待小屋では、放駒四郎兵衛、小仏小平らの、幡随院の身内が、若い衆と一緒に小まめに立ち働いていた。
「さあ、飲んだり、飲んだり。いける人はいくらでも飲んで下さいよ。はい、枡で一升、こちらのお兄さんッ。あっしはね、幡随院の身内で、豆伊豆てえ三下でござんす。これをご縁に以後、ご昵懇にお願い申しあげやす。はい、こちらのおねえちゃんに、串団子三本ッ」
伊豆の豆吉が大声でわめいているところへ、伊豆守と十兵衛が入ってきた。
「おっ！　嬉しいねえ。お武家様まで踊りにきて下すったよっ。さあさあ、まずいっぺえやっておくんなさい」
豆吉、本当に嬉しがって、伊豆守と十兵衛に酒柄杓を突き出した。
「うむ」
と、伊豆守は気さくに、柄杓を取って、口をつけると、
「うまいの」

と、隣で、これも一口やったばかりの十兵衛に言った。
「うまい。へえ、ありがてえことを仰って下さるお武家だ。この酒はね、正真正銘の灘の生一本。あっしの名前はね、これでも豆伊豆ってんで」
「馬鹿野郎」
周章てて飛んできた長兵衛が、いきなり豆吉の頭を張倒した。
「痛え！　何をしやがるんでえ。あッ！　親分！　勘弁だあ」
「何をいってやがる。こちらのお武家は、正真正銘の松平伊豆守様だ。その前で、豆伊豆だなんていいやがって、このうす馬鹿野郎！」
また、がっ！　と豆吉を張倒しておいて、
「どうもわざわざお運びいただきまして、ご無礼はご勘弁願います」
長兵衛は、大きな身体を二つに折ってへりくだった。

南無阿弥陀剣

一

伊豆守は、笑って言った。
「気にするではない。今日は忍びじゃ」
「はあ、有難うごぜえます。長兵衛。さあ、殿様、どうぞこっちぃへえっておくんなさい」
「うん。それにしても賑やかなものじゃな」
「へえ。天下祭でござります」
「天下祭……」
「天下の公方(くぼう)様のお濠のための前祝のお祭で」
「ほほう……、それにしても豪勢なものじゃな、飲み放題とは」
「いえ」
と長兵衛は笑って、
「有体(ありてい)に申しあげますと、この辺から日比谷、桜田村あたりにかけちゃあ、以前は蘆(あし)の生えた海っぺりでござんして、へい。神田山を崩して泥を運んで埋めたんでござんすが、何とも地盤が落着きません。よっぽど踏み固めねえと、石垣を積んでも崩れっちまいますんでね」
「なるほど。それで、踊りにことよせて人を集め、地固めをしているというわけか」
「さいでござんす。これだけの大勢が三日も踊ってくれりゃあ、いい加減、地面も固まろうって寸法で」

十兵衛、柄杓の酒をぐいっと一口に呑んで言った。
「餅や酒の振舞いぐらい、その人夫賃にくらべれば安いものというわけじゃな。長兵衛、お前、大した軍師じゃな」
「いや、実の所をいいやすと、こいつぁ、あっしの計略じゃあねえんでござんす」
「ほう。すると、別に軍師がいるわけか」
と、これは伊豆守。
「へえ。お殿様も噂ぐらいはお聞きおよびかと存じますが、神田連雀町に張孔堂てえ兵学道場がごぜえやして、楠不伝てえ先生が教えていなさるんでござんすがね」
「ふむ。あの大楠公の子孫だと称する男じゃな」
「へえ。あの先生には、あっしもかわいがっていただいておりますもんですから、軍学といやあ、満更お城普請とは関係なくはねえ、一丁何かいいお知恵があったら拝借しやしょうと思いましてね。角樽ぶら下げて行ってみたんでござんすが……」
「ふむ。すると、この計略は楠不伝の計略か」
「いや。そうじゃあねえんで。この手を教えてくれたのは、先生とこに居候している由比弥五郎てえご浪人さんでござんす。こう背はちびっちゃい人でござんすが、あれぁ、お殿様、大した仁(ひと)でござんすね……」
「ふーむ、由比弥五郎か」
と、伊豆守は、また柄杓の酒を一口呑んで、
「知っておる」
と、言った。

「ほう。お殿様も知ってるんで」
「うむ。堺町で旗本奴を相手に大暴れしおった浪人者がおっての。その浪人の名が、たしか、由比弥五郎といったと覚えておる。背の低い、色の白い」
「へえ、顔だけがいやにでっけえお侍でござんす」
「ああ、それじゃ、それじゃ。あやつが軍師であったか」
と、伊豆守が答えた。
「大した知恵者でござんす。知恵伊豆といわれるお殿様の前で、こういうのも何でございますが、あれは老先生より、もしかしたら、人間はでっけえかも知れやせん。悪くいやぁ、底が知れねえてぇますか、何か気味の悪いようなところのある、お侍でござんすね。あれッ」
と、踊りの輪から抜け出してきたお吉を見て、大声で呼んだ。
「おい、お吉。こっちへ来て挨拶しねえか」
「ほう、別嬪じゃ」
と、駆寄ってくるお吉を見て、
「女房どのか」
と、笑った。
長兵衛は慌てて言った。
「いえ。嬶なんてもんじゃあねえんで。へえ、嬶は家におりやす。妹でござんす。お吉ってんで、はい」
「お吉でございます。よろしくお願い申しあげます」
お吉は、伊豆守と十兵衛に丁寧なお辞儀をした。

「うむ」
と、伊豆守は二人を見較べて、
「なるほどな。しかし、これだけ似とらん兄妹は珍しい。兄が羅漢とすれば、妹の方は菩薩じゃの。十兵衛殿、おぬしも、そろそろ身を固めたらどうじゃ」
十兵衛は苦笑いしたが、驚いたのは長兵衛の身内である。
「お！」
と、伊豆の豆吉などは声まであげて、
「へーっ！　こっちのお方が柳生の若殿様で！　うーん、道理で片目だと思った！」
などと目を剝いて、また、長兵衛にぶっとばされた。
伊豆守と十兵衛の柄杓が空なのを見て、お吉は周章てて酒をつぐと、
「どうぞ、ごゆっくりなさって下さいませ」
丁寧に小腰をかがめて、二人に床几をすすめた。
その横顔に、柳生十兵衛の隻眼が、一瞬、鋭く光った。
長兵衛は妹だと紹介したが、お吉の物腰はどうみても武家娘のもの、と十兵衛には見えたからである。
それから半刻後、大名小路を、十兵衛と並んで歩きながら、伊豆守はぽつりと言った。
「由比……弥五郎か……」
それに応えて、十兵衛は言った。
「楠不伝という男は、紀伊大納言様の懐に入りこもうとした男でござる。それに、あの老人には

奇怪な一党がついてござる」
「ふむ」
「山者と呼ばれる忍者のような連中でござるわ」
「ほう。捨ておけぬか」
「いや。しかし、不伝め一人では、いまだ何ほどのこともござるまい。問題は、その由比という浪人者でござるな。知恵の方は、それがしもいかほどの者か知り申さぬが、腕は立ちもうす。この間も、水野家に乱入し、坂部三十郎ほかの直参を、まるで苧殻(おがら)の如く斬り倒し申した」
「ただの喧嘩か」
「いや。あやつ、何事か、企んでおるもようでござるわ」
「なるほど。槍の丸橋も、今や不伝の一党じゃな」
「ふふふ」
十兵衛は、編笠のうちで、その隻眼を光らせて、不気味に嗤った。
「やってみるか……」
と、伊豆守はぼそりと言った。
「それより、伊豆殿、あの長兵衛の妹だとかいうお吉という女、あれは、まこと妹でござろうな」
今度は、伊豆守が意味深長に笑って、言った。
「おぬし、さすがじゃの。お吉のあの物腰、あれは武家のものじゃ。しかし、長兵衛も、もとはといえば武士じゃ。もっともと思えるところもあるがひっかかる。あの女には、何か憑いておるな。那須野の白狐でも憑きおったか」

二

月が冴えて、足もとの明るい夜だった。
黒頭巾で面をかくした武士が四人、すでに抜きつれて、一人の白面の浪人者をおしつつんでいた。
柳原の籾蔵(もみぐら)脇であった。
「何やつ！」
低いが、鋭い声が浪人者の唇からほとばしった。由比弥五郎であった。
しかし、四人の武士は答えない。
八つの目だけが、凄まじい光を浮かべて、光っている。
弥五郎は、まだ抜いていない。両手をだらりと下げて、ふわりと立っていた。
針一本落ちても聞こえるような静寂が、あたりに立ちこめていた。
ふっと、弥五郎は嗤った。
「おぬしら、誰に頼まれた。およその見当はついているがの」
無言で、左手の着流しがじりじり出てきた。その五体からは、凄まじい殺気が噴出していた。
尋常の使い手ではない、と一目でわかる。
弥五郎は、また言った。
「おのれら、奴(やっこ)どもではないな。水野十郎左に頼まれたか。おれは浪人は斬らぬ」
とたん、右手の一人が、すっと天に剣先をあげた。筋の通った剣さばきであった。
その姿を見て、すっと、弥五郎の目が細くなった。

〈柳生か？〉

四本の剣が、一は正眼に、一は大上段に、一は八双に、一は地ずりの下段に、それぞれ、一撃必殺の気迫をこめて、じりじり包囲の輪を縮めてきた。

しかし、弥五郎はいまだ抜かず、

「おのれらを斬るのは、無用かもしれぬ」

と、嘯いた。

「うぬ！」

四本の白刃が、一瞬、憤怒を噴かして、ぴくりと慄(ふる)えた。

とたん、ぱっと弥五郎の大剣が鞘走った。しかし、それは、次の瞬間には、まるで、四人の黒覆面を嘲笑(あざわら)うように、ゆるやかに空中に輪を描いて、ぴたっと八双におさまった。

「む！」

左手の着流しが呻いた。

余りにも人もなげな、弥五郎の振舞いだったからである。屈辱と威圧を同時に感じて、四人の男はその場に吸付けられたように、動かなくなった。

やがて、弥五郎は口辺に微笑を浮かべて、言った。

「今一度いう。おれは由比弥五郎という、一介の浪人者じゃ。故に、同じ浪人は斬らぬ」

「おのれ！」

正面の男が、剣先を慄わせて唸った。

「ふーむ。おのれら、柳生じゃな。柳生が何故におれを斬る」

とたん、右手の一人が、無言で、たぁーっと突いて出た。

がっ！

空中に火花が散って、ぱっと血が噴いた。

弥五郎、その剣先を撥(は)ねあげざま、ずばり一歩前へ出て、そのうしろ頸に一刀を浴びせたのだ。

弥五郎の剣は、そのまま天に上って、

「とう！」

前面の敵の上に降った。前面の敵は、真っ向う微塵に、頭蓋をたち割られて、地響をたてて、地上に転がった。

「きえーっ」

と吼(ほ)えて、第三の敵が、真直ぐに弥五郎の胸板めがけて跳びこんだ。

凄まじい迅業(はやわざ)であった。しかし、次の瞬間、その敵は弥五郎に身を躱(かわ)されて、つっ走っていた。

これを振りむきもせず、弥五郎は、第四の敵にむかって地を跳んでいた。人間わざとも思えぬ素早さだった。が、第四の敵は、ぱっと、一挙に二間も横に跳んで、これを躱した。と、次の刹那、弥五郎の五体は疾風のように、うしろへ駆け抜けた第三の敵にむかって跳躍していた。

第三の敵は、振返ったとたん、その頭蓋を襲われていた。

目の上一寸ばかりのところを、まるで瓜でも切るように切っ離した弥五郎の剣は、中天でまた、きらりと返って、

「とう！」

肩から袈裟に、肋骨(あばら)の下まで割りつけて、ぱっと、また奔転した。まさに魔神のような迅業であった。

その前に、第四の敵が恐怖で虚になった目を見開いて、突っ立っていた。

弥五郎は、ぴたり大剣を正眼につけて、するっと出た。第四の敵は、もう逃げる気力も失ってしまったのか、弥五郎に押されるままに、ずるずると、後ずさった。

弥五郎もまた、水の流れに乗ったように音もなく前へ出た。

突如、第四の敵は、恐怖のあまり発狂したかのような凄まじい光をその目に浮かべると、

「おりゃあ！」

つんのめるように突いて出た。さっと片足を引いてこれを躱すと、弥五郎は、その肩にいとも無雑作な一刀を浴びせた。

「うわ！」

大剣の切っ先を突っこむように斜になったその男の胴を、

「南無阿弥陀ッ」

弥五郎は、ずばっと輪切にした。

「馬鹿もんめ」

と、呟いて、弥五郎は刀を振って血糊をとばすと、ぱちりと鞘に納め、何事もなかったかのように月光の中を歩き出した。

その後ろ姿を暗がりに立って見送っている片目の男がいた。刺客は、やはり、十兵衛の放ったものであったのだ。

町屋通りまでは二丁あまり。材木小屋の脇の草地をすぎて、灯の見える街辻まで来て、弥五郎はふと立ち止った。

五、六間後方に小さな黒影があった。

弥五郎は、振りかえりもせずに言った。

「何故つけて参る」

一定の間隔をとって、その黒影は柳原から追いてきたのである。

と、黒影は、悪びれもせず、するすると、寄ってきた。

月光の下に浮きあがったその顔は、服部一夢斎のものだった。

「それがしは一夢斎と申す世捨人でござる」

そう言って、にやりと笑うと、一夢斎は弥五郎の腰に目をやり、

「おてまえの差料を拝見つかまつりたく存じ、あとを追けて参った」

と、言った。

「何のために」

「名刀と見申した。それがしの生甲斐は名刀の相を見ること。もとより見料はいただかぬ」

「ふむ……、剣相の鑑定は並の見識ではやれぬぞ。自信はあるか」

「あり申す」

一夢斎は鴉のような声で言った。

「それがしの忠告によって、不吉の差料を取りかえ、その生命の安泰を保ち得た御仁は二、三に止まり申さぬ。拝見できぬか」

しかし、弥五郎は答えず、うすら笑って、歩き出した。

行く手に、この頃の江戸にはまだ珍しい居酒屋の灯が見えた。白地に「めしかんざけ」と墨字を浮き出させた提灯が出ている。

「腹が減ったわ」

と、弥五郎は呟いた。暖簾を分けて入ると、年齢不詳の豆爺が莨を吸っていた。

客は一人もいない。
薄汚い座敷にあがって、
「酒はいらぬ。飯を三人前じゃ」
と、弥五郎は言った。
そこへ、のそりと入ってきた一夢斎が、
「邪魔してもよろしゅうござるか」
答えも待たずに、弥五郎の前に上って坐った。
「生甲斐とあらばやむを得まい」
そう言い捨てておいて、弥五郎は豆爺が運んできた白湯を飲み、菜は漬物だけの丼飯を喰い出した。
「御免」
一夢斎は、剣を手にとって、懐紙をくわえると、すっと鞘走らせた。
みごとな挙措である。
切っ先を天に立てて、鍔元から切っ先までじろりと見上げると、そのまま微動だもしなくなった。
弥五郎は、無心ともいえる面付きで、丼飯を食っている。三杯平らげて、音をたてて白湯を啜っても、一夢斎は、いまだ白刃を見詰めたままだった。
ふと、一夢斎の眼を見た弥五郎、その眼光の鋭さに改めて気づいて、一夢斎を見なおした。
長い沈黙の後、一夢斎はぼそりと言った。
「三条宗近でござるな」

「左様」
刀身は細く、中鍛え、柾目あくまでこまやかに、地金黒く紫光を放ったこの一刀は、弥五郎が、師高松半兵衛に贈られたものであった。
鎬はやや広く、焼は白い。
その白さは、白玉を絹で包んだように底に沈んで、上に、爽やかな青が薄っすらと浮いていた。刃は華やかに乱れて、鋩子はしまり、匂いは地獄の底までも届くかと思われるほどに深かった。見詰めれば見詰めるほど、刀身のなかに心まで吸いこまれるような見事さであった。
弥五郎は、この一刀に魅せられ、身動ぎもしない一夢斎の姿を見て、満足げに微笑して、言った。
「剣相はいかが」
一夢斎は答えた。
「吉……、でござる」
「ふん」
そうに決っておる、おれが、師から頂戴した一刀じゃ、と、弥五郎はまた音をたてて白湯を啜った。
そんな弥五郎の五体を目で斬り下げるように、じろりと見て、一夢斎は言った。
「但し」
「但し、何じゃ」
「ここに、一カ所、流星がふたつ交叉する疵があり申す。これが凶でござる。しかも、大凶じゃ」

「意味を言うてみよ。聞こう」
「短命相」
ずばり、一夢斎は言った。
弥五郎は、にやりと嗤って応じた。
「わかりきったことをいうな、虚仮め。おれは、いやしくも兵法者じゃ。いつ倒されるやも知れぬ」
「いかにも仰せの通りでござるが、この疵を有する三条宗近が、いずれ出会う敵は余りにも明らかな故、ご用心めされい」
「ふん、その敵とやらいう者の名を聞こう」
一夢斎は、宗近をぱちり鞘に納めて、弥五郎に返すと、
「村正の所有者でござる」
「村正？」
「左様。誓って、偽りは申さぬ」
「うむ」
弥五郎は首肯いて、言った。
「おぬしの知合いで、村正の一刀を所有しておる者の名をいうてみよ。ただし、おれに勝てる程の腕の男じゃ」
しばらくの沈黙ののち、一夢斎はぼそりと答えた。
「将軍家兵法指南役柳生但馬守宗矩が嫡男、柳生十兵衛三厳」
とたん、何故か、弥五郎の目に冷やかな微笑が浮いた。

伊豆守襲撃

一

幡随院長兵衛が天下祭と称して始めた踊りの渦は、今日も賑やかにつづいていた。見物人も櫓下から
踊りの渦の真ん中で、相変らず、お吉が身ぶり手ぶり鮮やかに踊っていた。
溜池の縁まであふれていた。
笠で面を隠した武士が、踊りながらお吉に近づいていく。
お吉と武士が並んで踊りはじめた。
武士が何げない調子で、お吉に言った。
「姫、新左でござりまする」
お吉は無言で踊っている。身ぶりも変らない。
「お話がございます。愛宕下真福寺境内でお待ち申しあげまする」
お吉は、呟くような含み声で言った。
「わかった。すぐ参る」
武士は、無骨に踊りながらお吉から離れていった。
やがて、お吉の踊り姿も踊りの渦のなかから出ていった。
その姿を、今日も櫓の上に立っていた長兵衛が、凝っと見ていた。
摩尼珠山真福寺——山城国宇治郡醍醐三宝院の末寺。新義真言宗である。寺地は千七百五十八坪。山門は松柏がおい茂り、東の愛宕山、北の青松寺の間に深閑とした寺域をひろげていた。

その境内の一角、薬師堂裏の雑木林の中に、お吉の姿が入っていった。
先ほどの新左と呼ばれた武士が、黄楊の植込の中から現れて、お吉の前に平伏した。
この武士は、元美濃高須藩五万三千石、徳永家の遺臣、末次新左衛門であった。新左衛門のうしろには、十数名の武士が従っていた。
雑草の中へ両手をついて、
「姫……」
というなり、新左衛門は絶句した。
既に、鬢に白髪のみえる老人である。
新左衛門のうしろに同様に両手をついて、お吉を見上げる十数名の武士の目も異様に緊張していた。
やがて、新左衛門は、悲痛な声で言った。
「姫、徳永家再興の望みは、もはや絶たれ申した」
「それはどういうことじゃ。公儀への嘆願書には、天海僧正様がお口添え下さるという話だったではありませんか」
お吉は、高須五万三千石徳永昌重のひとつぶ種、吉姫であったのだ。
「天海め、はじめからその気はなかったのかも知れませぬ。今朝、このような手紙を」
と、新左衛門は一通の手紙を懐中から取出すと、お吉に渡して言った。
「もはや望みはない、諦めろ、と」
手紙を読むお吉の手は、ぶるぶる震えていた。武士の一人が、無骨な手で涙をおし拭った。
新左衛門が、やがて眦をあげて言った。

「こうなったからには、姫、われら、もはや生き延びようとは思いませぬ。徳永家取潰しの元凶、松平伊豆守めを斬ってすてて、新左らも、亡き殿のお後を慕い仕る」
「爺、早まってはなりませぬ。死ぬるつもりなら、いつでも死ねるでしょう。わたしとて、こうなってはもはや生きている甲斐もない。しかし」
「しかし、何でござります」
旧臣の一人が、思い詰めたような顔をあげた。
新左衛門は無言で、薬師堂の縁の下へ小柄を打ちこんだ。そこから、新左衛門は人の気配をかいだのだ。
とたん、旧臣の一人が地を蹴って、薬師堂の前に跳んだ。
その武士に、
「追うな」
と、一声かけておいて、新左は言った。
「誰かにつけられたようでござる。姫、今日はひとまず幡随院が許へお戻り下され。明日また、爺がお迎えに上りまする」
お吉はそんな新左衛門をきっと見据えて、言った。
「早まってはなりませぬぞ。爺。よいな」
「わかり申してござります。では、姫、お健やかに」
と言って、顔をそむけた新左衛門の目には、何故か涙が滲んでいた。
新左に従って、十数名の旧臣が境内の奥の森に消えていくのを、お吉は青ざめた顔で見送っていた。

ふと、人の気配を感じて、振返った。
薬師堂の屋根の下に、一人の白面の浪人が立っていた。由比弥五郎であった。
弥五郎は、お吉を見るとにやっと笑って、言った。
「別に怪しい者ではない。暇つぶしに薬師堂で寝ておっただけの者じゃ」
「聞き申したな」
お吉は、きっと、弥五郎を見据え、武家言葉で言った。その手には、まだ天海からの手紙が、握られていた。
「そなたは誰じゃ」
「誰じゃといわれる程の者ではない。長兵衛に訊けばわかるじゃろうが、張孔堂の居候、由比弥五郎という半端(はんぱ)もんじゃ。しかし、いまのあんたは立派じゃったな、お吉さん」
「……」
「人はやたら死んではならぬものじゃ。生きてこその人生じゃ。差出がましいようじゃが、何かおれに出来ることがあったら、言うてくれ。おれは、決して敵ではない。死ぬ気になれば、人は大抵のことはできるもんじゃ……。その方法をおれは知っている。そう覚えておいてもらおう」
そのまま、くるりと背を見せて、弥五郎は、すたりすたりと境内を出ていった。
お吉は、二年前、末次新左衛門らの旧臣とともに、美濃高須から、徳永家五万三千石再興の運動をすべく、出府してきた。新左衛門もお吉も、あらゆる旧知を頼って必死の運動をした。
しかし、一旦、取潰された藩の再興は難しかった。運動費も馬鹿にならなかった。そして、この春には、末次新左衛門をはじめとする、旧徳永家の家臣十九人は、その日の食にもこと欠く程になり、見かねたお吉は、この春、浅草の船宿に女中奉公に出たのだが、質(たち)の悪い船頭につきまとわれ、あわや乱暴されかかったとき、たまたま隣の部屋に居合せた長兵衛に救われたのであった。

長兵衛は、お吉の健気さにうたれて、以後、花川戸の家へ引取り、世間には、幼いとき生別れになっていた妹と偽って、お吉らの働きを助けてきたのだ。
徳永家は、豊臣恩顧の古い家柄であった。しかし、大坂城修築工事を幕府から命ぜられ、その工事に手落ちがあったとして、取潰されたのである。
それから三年。
末次新左衛門らの徳永家の旧臣は、遂に、高須藩取潰しの張本人、松平伊豆守を斬って死のう、と決心したのであった。

二

江戸には、また凩(こがらし)の季節がきていた。
四谷、西念寺の庵(いおり)では、服部一夢斎が、うっそりと囲炉裏端に坐っていた。
その脇では、どこからみても初(うぶ)な町娘にしか見えない志乃が、せっせと縫物の手を動かしていた。
ふと、志乃のその手が止った。
同時に、一夢斎の目が、すうーっと細くなった。
「志乃」
と、一夢斎は、忍者だけにしか聞きとれない忍び声で、言った。
「今宵は、伊豆守様、微行とのことであったな」

「はい」
首肯いて、志乃は、
「爺、いるね」
と、言った。
一夢斎の耳は、猫の耳のように、立っていた。やがて、ぽつりと言った。
「十八人じゃ」
志乃は無言で首肯いた。
この二人の伊賀者は、境内に忍んだ敵の人数を正確にかぎわけていた。
「伊豆守様のお越しは、何時じゃと、いうておったかな」
「酉の下刻（午後七時）じゃ。爺」
「そうか、まだ間があるな」
そのとき、鴉が一声、屋根上で鳴いた。
「いけ、甚兵衛。伊豆様に今宵のお微行は止めて下され、というてまいれ」
「無駄でござろう」
屋根上から、甚兵衛の嗄れ声が返ってきた。
「あのお方は、わしの言うことなど聞くお方ではござらぬ。死ぬのも一興、まず、かように申されるでござろうな。あの殿はな、お師匠、あれで割と斬り合いはお好きな方じゃ」
「馬鹿もん。暢気なおだをあげておる場合ではない。十兵衛殿の許へ走れ。早うゆけ」
「柳生の若に助っ人を頼むのでござるか」
「……」

「お師、それでは伊賀者の名がすたるのではござらぬか。あんな奴らの百や二百、この甚兵衛一人で充分でござる。のう志乃殿」
志乃が袖で口を押さえて笑った。
「虚仮めが」
一夢斎が笛を吹くような声で叱咤した。
「闇で闘うのが伊賀者の掟じゃ。わしの庵の前で人を殺すことは許さぬ。おまけに、ここは服部家所縁の寺じゃ」
その通りであった。

専称山安養院・四谷西念寺――。浅草の西福寺の末寺で、寺地二千七百八十五坪。四谷鮫ヶ橋の東端に位置し、浄土宗だが、これを開いたのは、徳川家隠密団初代の頭領、服部半蔵である。半蔵は、家康の旗本として伊賀者を率い、三方ヶ原や長篠の合戦で、自ら槍を振って先陣へと飛び出し、槍の功名もしばしばであった。ために、槍の半蔵ともいわれた。晩年は仏門に入って西念と号し、当山を開いて入滅したのである。半蔵が振った槍は、現在でも遊就館に納められている。鉄ののべ棒のような凄まじい槍である。
そういう、服部家所縁の寺に、この伊賀の陰の頭領は、今、一見世捨人のように、潜んでいたのだ。
また、寺域で、人殺しが行われるのが許されるはずもない。
「わかり申した。では、この鴉の甚兵衛が、あやつどもを鮫ヶ橋までおびき出し申そう」
「いうことをきけ、甚兵衛。さもなくば殺すぞ。お前は、十兵衛殿を呼びに参るのじゃ」

「わしは、このさい柳生の若の助っ人は好まぬのでござるが」
しかし、もう一夢斎は応えなかった。
一夢斎が十兵衛を呼べといったのには、理由があったのである。
うっそりと囲炉裏端に立つと、またたく間に、一夢斎は黒装束に着かえていた。
同時に、志乃も黒装束に身を固め、黒竹の仕込を手にすると、すっと土間に降りた。
「お師、冗談はさておいて」
と、まだ屋根上では甚兵衛が巫山戯ていた。
「幻幽斎めが出てきており申すぞ」
「わかっておる」
「幻幽斎を柳生の若に殺られたのでは、この甚兵衛のたつ瀬がござらぬ」
「幻幽斎は、わしが殺る」
「ほう！　お師が殺るか、されば、わしもいうことをきき申す。柳生の屋敷へ走り申す」
「いけ！　馬鹿もん」
「うけたまわった」
いつの間にか、志乃の姿は庵から消えていた。

四谷鮫ヶ橋――紀伊国坂下の大溝に架かっている。この溝は、赤根山の麓を流れ、紀州家の中屋敷の裏を通って、牛込蔓供塚から桜川へ出る。あたりは、うっそうとした森であった。古くは入江で、自然と洲になった場所で、あたりには湿地が多い。元鮫ヶ橋から赤根山にかけては、茅茫々の野がひろがっていた。家康が入国の頃（一五九〇）は、このあたりで鷹狩が催されたほどの原野だった。その頃、このあたりは、山中村、大沢村、今井村と称し、伊賀者百三十六人の知行地であった。

今は、紀伊、尾張徳川家、井伊家などの広大な武家屋敷、倉地に囲まれた江戸の中心だが、この鮫ヶ橋一帯は、伊賀者にはわが家の庭のようなものだったのである。
安鎮坂と紀伊屋敷の真ん中にのびる帯のような細い町、四谷表町の町屋の屋根上を、鼠のように走っていく、ひとつの黒影があった。背に黒竹の杖を負っている。志乃であった。
これを追うように、数名の黒装束が屋根上を走っていく。
ぱっと、町屋の屋根から、空間五間を跳んで、籾倉の大屋根に飛びあがった志乃は、口笛を吹くような偽音で言った。
「根来衆……、このわしと術くらべをいたそうちゅう馬鹿者はどやつじゃ」
とたん、一度に十本の根来棒手裏剣が、志乃を狙って、八方から飛来した。
〈ふん、十人じゃな。これで、松平の殿様を襲う人数は半分に減ったわ〉
猫目頭巾のなかで、楽しげに目を細めると、
「来い……、根来の猿め」
また男のような声でわめいて、ぱっと、志乃は大屋根から跳んだ。
それを追って、根来者らが、風のように闇のなかを走った。
しかし、志乃は、依然として、籾倉の大屋根に張付いていた。志乃は一枚の黒布を、闇の中へ飛ばしたのであったのだ。この一粒の小岩を包みこんだ黒布は、折からの凩に吹きとばされて、まるで魔物のように、籾倉の上から暗闇の空を飛んだ。
同じ頃、松平伊豆守信綱は、番町から鮫ヶ橋にむかう暗闇の寺地の脇で、一団の武士に取囲まれていた。

これらの武士は、末次新左衛門を頭とする徳永家の遺臣らであった。新左衛門をはじめ、これらの武士は面をつつんでいない。
これは暗殺ではない。亡君の仇討じゃ、頭巾は無用——と、これら遺臣たちは、真向うから面を晒して、ときの老中に挑んだのだ。
松平伊豆守に、夜間微行の癖があること、この日も久しぶりに、一夢斎の庵を訪れる、ということを、新左衛門らに知らせたのは由比弥五郎であった。弥五郎が、直接これを吉姫に告げなかったのは、吉姫だけは死なせたくない、という心からであった。この若者は吉姫をはじめて見たとき、胴震いが出るほどの感動を味わっていたのである。
世の中に、こんな美しい女がいたのか——というのが、弥五郎の偽りのない実感であった。
幻幽斎らが、西念寺の一夢斎の庵を囲んだのも、同じく松平伊豆守を狙ってのことだが、こちらは、伊豆守を殺してしまうことまで、決心して出てきたわけではない。
「伊豆め、ちかごろ、ちと増長しておるな」
と、紀州頼宣がふと洩らしたのを聞きつけた幻幽斎が、
〈よし。ちと懲らしめてやる。一夢斎めも、ちかごろ五月蠅い……、まとめて痛めてやれ〉
と、この日、伊豆守の微行を確かめたうえで、西念寺を囲んだのであった。
しかし、庵の中の一夢斎の気配が、ふっと消えたとたん、伊豆守の尾行を命じておいた配下の一人が、
「伊豆め、番町で正体不明の武士の一団に襲われ申した」
と、注進してきたのであった。
とたん、消えた一夢斎の気配はもう追わず、幻幽斎は西念寺を見捨て、風のように番町へ向け

て走っていた。しかし、その行く手には、既に、一夢斎と志乃が砂塵をあげて走っていたのである。忍者が、月光の下を、砂塵をあげて走るなどということはない。幻幽斎は、それに気付くべきであった。
しかし、今、伊豆守が刺殺されれば、他の者はどう考えようと、殿だけは、根来者が殺ったとおもうはず——、こう考えたとたん、幻幽斎ほどの忍者が、志乃の巧妙な誘いにのってしまったのだ。
幻幽斎は、目の前を駆けてゆく二個の黒影を、一夢斎と伊賀のくノ一志乃とは、思いもしなかったのである。
志乃はみるみる追いつかれたとみせて、ぱっと、幻幽斎の頭上を跳越すや、
「幻幽斎、勝負。松平伊豆守の生命はわれらが守護」
と、叫びざま、蝙蝠のように南へ飛んだ。
幻幽斎が、慌てて配下を二手に分け、一方に志乃を追わせたのを見て、一夢斎は、鬼のように笑った。
今宵こそ、幻幽斎めを仕止めてくれるか……であった。

三章

一夢斎対幻幽斎

一

幻幽斎と一夢斎との間の血泥の戦が始まる頃、由比弥五郎は、寺の土塀の上に守宮のように張りついて、伊豆守を取囲んだ徳永家の遺臣達を、嬉しげに眺めていた。

不気味な静寂を破って、新左衛門が言った。

「それがし、徳永家の遺臣にて、元国家老末次新左衛門でござる。今宵、亡君の遺恨を晴らさんと推参仕った。松平伊豆守殿、お覚悟めされい。これなるは、すべて、徳永家の遺臣でござる。抜かれよ、伊豆守」

「待て」

珍しく、伊豆守は周章てて言った。

「わ、わしを斬ったとて、事態は、かえってよくならぬ。末次殿とやら、お待ちあれ」

「いうな！」

ぱっと、新左衛門の大剣が鞘ばしった。

「いや、いう。待たれい。末次殿、無駄に生命は捨てられるな！」

「うぬ！　この期になっても、いまだ、言い抜ける気か、伊豆守。あの大坂城大修築工事は、わずか五万三千石の徳永家だけでは、とうてい為し得ぬということは、おぬしらには、はじめから判っていたはずじゃ。それを承知で、わが家を選び、工事不行届とて、殿は切腹、お家は断絶。これでまた、豊臣恩顧の大名家がひとつ潰せる、と北叟笑んだのは、どやつじゃ。伊豆守、もは

や言い訳無用。闘うのがお嫌とあらば、そこに坐って腹を切られい！　不肖末次新左衛門、亡き殿にかわって介錯仕る」

「それはちがうぞ！」

と、伊豆守は叫んだ。

あれは、土井利勝殿の策謀じゃ。わしには、そのような無情なことは出来ぬ。わしはただ、上使として徳永家に赴いただけじゃ……と言おうとした。

しかし、それは矢張り言えなかった。ときの政治を司る者として、それは言えなかった。

言えない以上、抜かなければ殺される。

新左衛門も、もう何も言わなかった。

これは逃げるにしかず、咄嗟に、そう決めた伊豆守は、ぱっと背を翻そうとした。

その鼻先へ、

「きえーっ」

と、新左衛門の一刀が降った。

同時に、十八人の徳永家の遺臣が、白刃の壁をつくって殺到した。

「死ねい、伊豆守」

必殺の剣が、月光をはじいて、伊豆守の喉笛へとんだ。

そのとき、一本の手裏剣が唸りをあげて、その遺臣の顔面を襲った。

ずぶっ！

凄まじい音を発して、長さ一尺もの棒手裏剣が、その男の顔面に喰いこみ、男は一間も撥ね跳んで地に転がった。同時に、数人の遺臣らが、屍になって地にうつぶしていた。

遺臣を背後から襲ったのは、柳生十兵衛であった。
水月のような片目を光らせて、十兵衛は、伊豆守を背後に庇（かば）って、言った。
「引けい！　おのおの方、無駄死にじゃ」
「うぬ！」
と、新左衛門がわめいた。
「退（ひ）くな！　おのおの方、刺しちがえてでも討ってとれっ」
わあ！　と、数本の白刃が一度に十兵衛と伊豆守を襲った。
月光の下で、血飛沫があがった。
「斬るな、十兵衛、これらの者は斬るな！」
伊豆守が血を吐くような声で、言った。
しかし、十兵衛は、既に十人を超える人数に深傷（ふかで）を与えて、地に倒していた。
「おのれ、邪魔するな」
新左衛門の、捨て身の一撃が、伊豆守の面上にのびた。
がっ！
と、伊豆守は、これを撥ねあげたが、次の瞬間、十兵衛の片手なぐりの大剣が、新左衛門の肩を割っていた。
「う！」
と、肩を押さえて踏みとどまった新左衛門、悪鬼のような形相で振返りざま、
「おのれ！」
最後の力を振りしぼって、大剣を振りかぶった。

十兵衛の剣が、非情にもこの頭上に振下されようとした。その瞬間、風をきって一枚の笠が飛んできた。
反射的に、十兵衛は、これを二つに斬っとばしていた。
その前へ、新左衛門を庇って、ぬっと顔を出した男がいた。
由比弥五郎であった。
「おのれ、何奴じゃ……」
十兵衛は、低く叱咤した。しかし、十兵衛は、弥五郎が土塀の上に寝そべっていたのは、はじめから知っていたのだ。
「只の弥次馬と思っていただく」
弥五郎はにやっと嗤って一歩下ると、新左衛門に言った。
「行け！　死に急ぐな」
「いや、行かぬ。殺せ、無念じゃ」
よろっと、新左衛門は前に出ようとした。
「行かぬか！　お手前には、もはや闘う力はない。行け！」
雷のような声で、弥五郎は大喝した。
その気迫に押されたように、新左衛門はよろよろと闇の中へ消えた。
弥五郎、目の前の伊豆守に目礼すると、十兵衛には無言で背をむけた。
十兵衛が声をかけた。
「待てい！」
「名はいわずか」

「知っておって、とぼけるな。十兵衛、いずれまた会おう」

背をむけたままの弥五郎に、伊豆守は言った。

「その方には、また会いそうだの」

「おれもそう思う」

その頃、紀州屋敷の大屋根の上で――。

一夢斎は、五間の距離を置いて、幻幽斎と対峙していた。

この二人、かつては、戦国の野で幾度も相まみえた仲であった。

天正五年（一五七七）小谷城が織田信長の軍勢に包囲されて炎上したとき、この二人は、やはり、五間の距離を置いて対峙しながら、浅井久政、長政父子の最期を見届けている。

当時、雑賀衆の頭領、雑賀孫一の手にあった根来幻幽斎は、国に帰ると、何の変哲もない一人の若者にすぎなかったが、ひとたび戦場に出ると、猿のように野を駆け、どんな城砦でも易々と忍びこみ、蜚蠊のように闇から闇へと這いずりまわるという怪物であった。明智光秀が本能寺で信長を討ったときは、山崎の野で密かに光秀の首をあげ、天正十年（一五八二）紀伊、根来、雑賀に一揆を起し、天下を揺さぶったのも、この幻幽斎であった。

徳川の手にあった一夢斎は、たびたび、この幻幽斎に苦い思いをさせられてきたのである。

慶長五年（一六〇〇）十月、石田三成が徳川家康と関ヶ原で雌雄を決したとき、その本拠、佐和山城を攻めたのは、小早川秀秋の率いる一万九千の軍勢だったが、このとき、一夢斎は、〝城中にある人間はことごとく殺せ〟と家康から命じられていた。一夢斎は三十六人の伊賀者を率いて、鉄壁の闇の陣を張った。しかし、三成の子雅姫だけは、まんまと幻幽斎の手で携われてしまったのである。

いわば、幻幽斎は、一夢斎の生涯の最大の好敵手だった。

一夢斎は、鍛え抜いた秘術を傾けつくす闘志を、その枯木に似た痩軀に漲らせて、目の前五間のむこうに這った幻幽斎の影を、身動ぎもせずに凝視していた。

一夢斎は、平蜘蛛の術に出たのである。

五体を地に伏せて構える隠身遁形は、裏の五遁の術のうち蝦蟇の術に似ていたが、蝦蟇の術は、自らを一塊の土と化して隠忍する守勢であるのに対して、平蜘蛛の術は、逆に攻勢の形であった。

敵にむかって、音もなくするすると迫るのは蛇行の術という。そして、石の根に添い、樹の元に寄り、あるいは土の凹みに伏し、全くそれらのものと同化し、脈搏さえもたって、凝然とおし鎮まり、たとえ、棒で打たれ、刃物を降り下ろされても、びくとも動かず、耐えつづけるのを蝦蟇の術という。

しかし、平蜘蛛の術は、蛇行する際、既に、敵を襲う猛気を秘めており、静止するや、すでに、敵の弱点を看破して、これを捕捉する手段が成っているのである。

二

一夢斎は、己の姿を敵に晒して、少しも憚りなかった。ただ、一夢斎が次にとる、いかなる手段もない為、と敵に油断させる為の、時かせぎにすぎなかったのである。

この平蜘蛛の術を使う為に、一夢斎は、背鎧を身に着けていた。これは、背面を守るため革と鎖でつくった具足であった。

一夢斎が、平蜘蛛の術を使うべく甍そのものと化して、大屋根の上に伏しているのに対して、幻幽斎は浮身の姿勢にあった。

浮身の姿勢とは、ちょうど、水面に首だけのぞかせて、四肢を自由な形で遊ばせているのに似ている。これは、石火の攻撃を受けても、間髪いれず飛鳥の如く自在に身を躱すための姿勢であった。

〈幻幽斎め、わしを甘くみておるわい〉

一夢斎は、腹の底で嗤った。

〈幻幽斎め、果して、わしが耄碌しておるかどうか、今みせてやる〉

一夢斎は、突如身を起しざま、ぱっと、七本の黐縄を手元から一度に放った。

目的は、幻幽斎を動かすためであった。縄に手応えを期待してはいなかった。しかし、次の刹那、一夢斎は見た。

幻幽斎が、飛び躱すかわりに、凄まじい速度で右手を大きく旋回させるのを。

「しまった！」

思わず、一夢斎の口から声が洩れた。

幻幽斎の右手から、唸り出た一本の鎖綱が、大きく開いた七条の黐縄を、一瞬の間にすべて搦めとってしまったのだ。

束ねられた黐縄は、物凄い力で引き絞られ、一夢斎は、不覚にもよろめいた。

幻幽斎は、決して一夢斎を侮ってはいなかった。侮ったとみせて、一夢斎の平蜘蛛の術に応じる技を隠したのである。

よろめいた一夢斎の黒影に向って、幻幽斎は音もなく襲いかかった。

忍刀が、青白い光芒を放って、一夢斎の頭蓋に降った。

がっ！

凄まじい音とともに、幻幽斎の黒影は、大屋根の上の闇の中に舞いあがっていた。

足元の瓦を一枚、無意識に抜き取って、一夢斎は、幻幽斎の忍刀を撥ねあげていたのだ。

幻幽斎の姿は、そのまま闇にとけるように消えてしまった。

一夢斎は、思わず舌を鳴らした。

幻幽斎は、大屋根の上に張出した樟の大枝の中に飛びこんだのだ。

一夢斎は、一瞬、まばたきをした。

おれも老いたか——であった。

やんぬるかな！

しかし、次の一瞬、一夢斎は、樟の大樹に猿のように取付いた、幻幽斎の姿を発見していた。

一夢斎は、するりと、伊賀流棒手裏剣を腰から抜いた。

とたん、幻幽斎は、まるで羽のない鳥のように、音もなく隣の杉の木の梢へ飛んでいた。一夢斎が手裏剣をうつ隙はなかった。杉の梢で一回転した幻幽斎は、そのまま一本の黒い線を引いたように、十間の高みから地上に降り立っていた。

とみせた刹那、もう北方の能舞台の方角に、幻幽斎は矢のように走っていた。

一夢斎が投じた黐縄は、落下した幻幽斎の頭上に、正確に拡がって飛んだのに、どうこれを潜り抜けたのか、掠め去る黒影はむしろ悠々たるものだった。

しかも、

「一夢斎来い。ここは紀州屋敷じゃ。わが殿の館で闘う利をわしは持ちとうない。勝負の場は、湯島天神じゃ」

幻幽斎の不敵な声が、不気味な笑い声と一緒に、闇のなかを流れてきた。

「ふふふう、奢るでない、幻幽斎」

一夢斎の黒影は、蝙蝠のように両手を広げて、大屋根の上から舞い下りると、そのまま闇にとけた。

二個の黒影は、正確に五間の距離をとって、闇の中を走っていた。

幻幽斎が、杉の木から飛び下りたとき、一夢斎はすかさず、その背に礫を撃っていたのだ。

この礫は、蠟石を微塵にした粉末を虫紙でくるんだものだった。これが幻幽斎の背にあたり、そこに、夜目にもくっきりと方三寸大の白丸を描いてしまったのだ。石粉の中には、芥子も混ぜてあり、顔面にあたれば、目潰しともなる。

湯島の台地は、かつて大昔は海辺であったという。その頃、南から漂着した樟をはじめとする各種の巨樹が、天に冲して聳え立っていた。

その枝から枝へ、猿のように飛んでいく幻幽斎の黒影を、一夢斎は、まるで真昼の空を飛ぶ鴉を見るごとく、正確に見上げて追っていた。

杉の梢から樫の大枝へとび移った幻幽斎の黒影は、梢から桜の枝にとび移り、湯島天神の社殿の葛石から回廊の擬宝珠勾欄へ、そして、そこから宝鐸の下った軒へ、三段とびに躍りあがり、一呼吸で鴟尾の上へ撥ね上っていた。

だが、その面前へ、突如、一個の黒影がぽっと跳出したのである。

音もなく、剃刀のような両刃の直刀が、幻幽斎の面上を襲った。

志乃であった。

幻幽斎は、鴟尾の上で跳ねあがってこれを躱した。

とたん、志乃の姿は消えていた。

「幻幽斎、伊賀者をなめるでない。今宵、おのれの命は、この伊賀くノ一がもらった」

志乃の澄んだ忍び声が、頭上の樟の葉叢の中から聞こえてきた。

思わず、幻幽斎はぶるっと身慄いした。堂々と、自分の所在を示して、幻幽斎に挑戦してきた忍者は、かつていなかったからである。

〈あやつ、どれほどの術を具えているか〉

鴟尾に這って、幻幽斎はいまだ慄えていた。忍者というものは、己の本能に忠実であった。怖しいと感じたときは、正直に慄える。恐怖感は、反射神経に直に作動して、思いもかけぬ威力を発揮するからだ。このため、術のはるかに優れた忍者にぶつかった場合、まるで、蛇に睨まれた蛙のような恐怖で身動きできなくなる忍者もいる。ときどき、芋虫のように串刺しになった忍者が見られるのは、このためである。

しかし、幻幽斎は、さすがであった。

二人の強敵に挟撃されながら、不敵にも、ゆるゆると身体を揺すりはじめた。紀尾井坂から湯島まで、一気に駆け抜けてきた筋肉の痼瘤を解しているのだ。

やがて、幻幽斎は、

〈遊びがすぎたか……、今宵は退くか……〉

と、思った。

思ったとたんに、幻幽斎は、行動を起していた。突然、幻幽斎は、正面の敵一夢斎にむかって、五体を投じたのだ。

だが、その五体には一本の綱が結ばれていて、一夢斎の頭上まで飛んできた黒影は、一個の振子となって反対側へ、また、半円の弧を描いて飛び返った。のみならず綱が水平に張った瞬間、

錘と化した幻幽斎は、綱を切離して、更に六間もの空間を鳥のように飛び逃げてしまった。
幻幽斎は、安全地帯に立った、と思った。
ところが、その面前に、志乃が、まるで地から湧いたように音もなく立ち塞がったのである。
黒竹の杖をついて、じっと幻幽斎を見つめる志乃の静止相には、鶏の毛でついたほどの隙もなかった。
「伊賀のくノ一」
と、幻幽斎は、思わず呻いた。
幻幽斎は、無言で背負った忍刀を鞘走らせた。
根来の七郎太をはじめとする幻幽斎の配下が、いまだ一人も現れて来ぬということは、番町への道で、突如跳んだこのくの一が、すべて殺してしまったことを意味していたからだ。
抜きつけの一撃を、さっと志乃の頭上に降らしておいて、幻幽斎は斜に跳躍した。木立のなかを鼬のように走り、目前に聳えた樟の大木に猿のように駆け登った。
幻幽斎は、更に、その頂上から反対側の杉の木立へ飛んだ。
その杉の木立の下は町屋通りにつづいていた。そこまで遁れれば、身を隠す場所に不自由はしない。幻幽斎は、それを狙ったのである。
志乃がこれを追い、かけ出そうとした。
その背後に、一夢斎の穏やかな声がかかった。
「もうよい、志乃。それより、伊豆守様の方が心配じゃ」

将門塚切腹

一

「さあさあ大変だ！　大変！　こともあろうに、将門塚で腹を切ったお侍が現れたよ。それも将門様にあやかって、知恵伊豆様に祟ろうてんだから恐ろしいじゃないか。その将門塚を御拝領地に抱えた土井大炊頭様もどんな祟りがあるかも知れねえと、青くなっていらっしゃる事の顛末……。天下の御老中方も慄えあがっていらっしゃるという事の次第と成り行き。将門塚の祟りの話が、こいつを読めばすっかりわかる。さあ、買ったり、買ったり。勿論、字の読めねえやつは用がねえから、あっちへ行きな……」
瓦版屋が町辻に立って、身ぶり声色よろしくわめいていた。まわりには、既にいっぱいの人垣ができていた。
「へえ、おいらにも一枚くんな」
さっそく、好奇心に目を輝かした、物好きが手を出す。
「わしにも一枚」
腰の曲った老人が横から声をかける。
「はい、まいどありい。さあ、買った、買った」
そんな群衆のうしろに立った三人連れの武士の一人が言った。
「これは面白いことになったもんじゃあ」
丸橋忠弥であった。金井半兵衛は、傲然として顎を撫でている。由比弥五郎の目にだけは、何

かを思案してでもいるような青白い光があった。

将門塚は、たしかに神田橋御門内、土井利勝邸の塀のすぐ前にあった。

将門塚というのは、天慶三年（九四〇）朝敵の汚名をきせられて殺された、平将門の遺骸を葬った塚である。将門は怨み怒って死んだ。そのためにか、この塚のまわりには、昔から数多くの天変地異が起っていた。この塚の前で死人が出たり、行き倒れがあったりすると、必ず疫病が大流行するという迷信が生れてもいた。

そして、当時も尚、この塚に手を触れた者は、必ず災いを受けると怖れられていたのである。だから、ここに邸地を拝領した土井利勝も、塚には手を触れず、塀を引下げて屋敷を建てたほどだ。

そのまえで、末次新左衛門は、腹を切ったというのだ。

「さて、行くか」

と、まず、弥五郎が、瓦版屋を取り巻いた群衆のうしろから離れた。

「ふむ」

「よかろう」

忠弥と半兵衛が、どんより曇った空を見上げて歩き出した。既に、冬だというのに、この三人の服装は夏と変りない。半兵衛は、麻の帷子のうえに、それでも綿入りの袖無しを羽織っていたが、相変らずの素足に足半。臑毛（すねげ）が膝まででている。金は手に入れたはずなのに、半兵衛はこれなのである。この男、衣服というものに、どうやら、恨みを持っているようだ。それでいて、女に一等もてるのは、この男なのである。不伝塾にあっても、隣の湯屋の女どもは、この薄汚い居候にだけは優しかった。袖に酒徳利を隠して、こっそり半兵衛様に、などといって持ってきたり

する。

忠弥などは口惜しがって、淫売にもてたとて何ほどのことやある、などというが、半兵衛は、淫売とて同じ人間（ひと）でござる、とすましていた。

この男、自分ではもてているという意識もないらしい。しかし、忠弥は子供にはもてた。その為、忠弥がときたま御中間町からやってくると、近所の洟（はな）たれどもが、わいわい集ってくる。忠弥は、これに喧嘩の仕方を教えて得意であった。

はじめは、仇を討とうと、この三人をつけ狙っていた旗本奴たちも、こういう三人の、日常を見て呆れたのか、いつの間にか、張孔堂にも近づかなくなっていた。

「あの気狂どもは捨てておけ」

と、水野十郎左衛門は言ったというが、実は、十郎左衛門、ある夜、下手に騒ぐと、この次は必ず殺す、と弥五郎に密かに嚇かされていたのである。

こういう三人が、将門塚にやってきたとき、末次新左衛門の屍は、いまだ塚の前に血まみれになって、うつ伏していた。新左衛門の前には、血飛沫を浴びた奉書紙がひろげられていた。

それには——。

「徳永家遺臣、末次新左衛門、怨敵松平伊豆守を討つこと能わず。武運つたなきを恥て、ここに腹切るものなり。寛永十三年、仲冬（じゅういちがつ）、悪憎凶日（あくぞうきょうじつ）」

墨痕淋漓（りんり）たる、筆跡のうえには、「怨」と巨大な血書。

さすがの忠弥も、これには唸った。

半兵衛は、棒立ちになったまま微動もしなかった。その目は、滂沱（ぼうだ）たる涙であった。

まわりでは、弥次馬が、

「伊豆守様を恨むだとよ。どんな怨みがあるか知らねえが、何も将門塚でやることぁなかんべえ」
「こりゃあ、祟りが怖しいぞ。将門様の祟りが怖しいぞ」
「もっと怖しいことが起らなければいいが……」
「まったくけったくそ悪いことをしやがる。おれとこの嬶は、正月が臨月じゃ。首のねえ子でもできなきゃいいが」
勝手なことを言って騒いでいる。
そういう弥次馬に混じって、頭巾で顔を包んだ一人の女が立っていた。
お吉であった。
「爺……」
低く一声呟いて、目を瞑ったお吉の瞼から涙がしたたり落ちた。
そのとき、やっと、土井邸から数名の武士が戸板と白布を持って出てきた。
「退け、退け」
一人の武士がわめいた。
「ここは土井家の拝領地じゃ。妄りに立ち入ることは罷り成らぬ、立ち去れい」
忠弥が、鼻を鳴らして言った。
「立ち去ろう」
土井家の武士は、怖る怖る新左衛門の死体を戸板に移し、その顔に白布をかけて、
「南無阿弥陀仏」
弥五郎は、何事か決心したように、じろりあたりを見回すと、これも、忠弥のあとについて、

将門塚の前を離れた。
山賊の親戚のような姿の半兵衛が、ぽつりと言った。
「浪人とは哀れなものじゃ」

三人は、そのまま肩をならべて、張孔堂に帰ってきた。
不伝は、だらしなく炉端に肱枕をついて、軍書を読んでいた。
その前に、ずばりと弥五郎が膝を揃えて坐った。
「不伝殿、今宵は死んでいただく」
「ふーむ、左様か」
不伝は、軍書から目もあげずに、言った。
「おぬしらの役に立つなら、死んでもよかろう」
「忝うござる」
弥五郎は、深々と頭を下げた。
「されば半兵衛、葬儀屋を呼んできてくれぬか。柩は最上等がよい。不伝殿、死装束はお持ちでござるか」
「下らぬことを訊くでない。そのような物があるわけがない。どうせ、地獄も今どきは空っ風じゃろう。わしは綿入れを着てゆく」
忠弥が、にやりと嗤って言った。
「お師は、われらが魂胆を、既にお見通しじゃ。ウハハァ」
「当り前じゃ。まだわしには、やらねばならぬ仕事がある。今どき、まこと殺されてたまるか。

弥五郎」
「はい」
「敵は伊豆じゃな」
「いかにも」
「では、死のう。おぬしもなかなかの軍師じゃ。わしの死後は、この張孔堂はおぬしに譲る。半兵衛」
「はい」
「それでよいな。幸い、弥五郎はおぬしらのうちでは一番の年嵩じゃ。以後は、弥五郎を立てて、おぬしらは働け。忠弥」
「はい」
「よいな」
「由比は、わしらよりは、わずか一歳の年嵩でしかござらぬが」
「馬鹿もの。鼎にも足は三本ある。そのひとつが短くても、鼎は傾く。いや、そうなれば、最早どのような鼎じゃとて、がらくたじゃ。盃を載せることもかなわぬ。表に弥五郎を立てるのじゃ。幸い、この才子は、容貌もおぬしらのうちでは一等じゃ。堂上にも、これほどの面つきの男はおらぬほどの美貌じゃ。端麗、優雅ともいえる。これを看板に立てて、張孔堂を天下に押し出すのじゃ。しかし、弥五郎」
「はい」
「おぬしとて、鼎の一本の足じゃということはこの二人と同じじゃ。ただ、面が表に出ているにすぎぬ。忠弥」

「はい」
「そういうことじゃ」
「わかり申した」
「わかったか、では、わしは死ぬる。死ぬる前に、ちと小便でも出しておくか」
不伝は、むくりと炉端から身を起して、障子を開けた。薄曇の空から、ちらちらと粉雪が降りはじめていた。
　庭土に音をたてて放尿しながら、不伝は言った。
「雪とは瑞兆じゃ。弥五郎」
「はい」
「おぬしに名乗りを与えて遣わす。天から舞い落ちる清らかな雪、これにわしの名の一字を添えて正雪、この世の汚れを正しくすると読め」
「かしこまりました」
「よし、今宵から、おのれをわしの養子とする。名は由比民部介橘正之、号して正雪。よいか、楠家十八代の裔じゃ。励め」

二

その夜、張孔堂の表の間には不伝の柩が安置され、香華が手向けられていた。
枕元には、弥五郎、半兵衛、忠弥の三人が坐って、何やら相談していた。
「行列の人数が、ちと足らぬのではないかな」
と、半兵衛。

「いや、酒が足らぬ。半兵衛、けちけちせずに銭を出せ」
と、これは忠弥。
そのとき、柩のなかから声がかかった。
「忠弥のいう通りじゃ。けちるな半兵衛。わしも寒くてかなわぬ」
不伝であった。
不伝、死体が綿入れを着ていたのでは、いかにもまずいというので、白無垢(むく)を着せられていたのだが、やはり寒くてかなわなかった。仕方なく、蒲団まで入れてやったのだが、今度は酒の注文である。
得たりとばかり、忠弥は半兵衛に金を出せとせまった。いつの間にか、半兵衛、張孔堂の内所を預かるようになっていたとみえる。
仕様のない人間どもだ、という面つきで、半兵衛、衣裳箱の底から金袋をひき出すと、
「ひと樽買うてこい。忠弥、四斗樽じゃ」
と、言った。
実は、この男が一番飲みたかったのである。
そのとき、隣の畳屋の親仁(おやじ)が通夜にやってきた。
「おお、親仁。丁度よいところに参った。酒を買うてこい」
その足元に、忠弥が、ぱっと金袋をなげた。
「へい」
と、これを拾いあげた畳屋の親仁、その重さに仰天して、
「これを全部、酒に!」

と、目を剝いた。
「いや、四斗樽が二つもあれば充分じゃろう」
「はい。さいでござんすな。ではひとっ走り行って参りやす」
金袋から小判二、三枚摑み出すと、恵比須顔になって、畳屋は、裏口から飛出していった。
「忠弥、金を粗末にするな!」
柩のなかから、不伝がわめいた。
半兵衛が、周章(あわ)てて金袋を衣裳箱にしまった。
その頃から、ぽつぽつ、通夜の客がやってきはじめた。
皆、近所の貧乏人ばかりである。
畳屋の親仁が、荷車にのせて引いてきた四斗樽五つを見て、どっと通夜の席がわいた。
畳屋は、樽三つ余分に引いてきたばかりでなく、肴(さかな)まで仕込んできていた。
「さあ、食え、飲め」
と、忠弥がわめいた。
柩の中で、不伝が、馬鹿もんめ！　と、苦々しげに舌打ちした。
酉の刻をすぎると、五、六人の子分を連れて、幡随院長兵衛が、自ら角樽を下げてやってきた。
隣の湯屋の女たちも、真っ白に白粉を塗りたててやってきた。
お多福のような湯女が、ぴったりと半兵衛に寄り添い、うっとりとした顔で酌をしている。ときどき、弥五郎が祭壇のうしろにまわって、密かに、柩の中に一升徳利を入れてやっていた。
戌の刻を過ぎた頃は、もう、このわずか四間きりの不伝の学塾は、飲めや歌えで、火事場のような騒ぎになっていた。

忠弥は大剣を抜いて舞い出し、酒の飲めぬ弥五郎まで、向う鉢巻でひょっとこ踊りをはじめていた。蛤の三太は、祭文を語り出し、伊豆の豆吉は、逆立ちして皿まわしをしていた。湯女たちは尻を捲って、踊り出している。

こういう光景を、柩の蓋を、そっと開けて覗いて見て、不伝は唸った。

〈これはわしの死を悼んでおるばかりではない。大半はこやつら三人のせいじゃ。こやつら、いつのまに、これほど近所の人気者になっておったか！　やつら、これでは尋常な一生は送れぬな……、しかし、たった一度の人生じゃ……〉

柩のなかで、蒲団にくるまり、弥五郎の差入れた酒をぐびりぐびりやりながら、しきりに、不伝は感心していた。

翌日。

土井利勝邸前の将門塚では、徳永家遺臣、末次新左衛門の盛大な葬儀が行われていた。

塚の前にしつらえられた祭壇の前には、金襴の衣をつけた高僧を導師として、数百名の僧侶が居流れ、厳かに読経している。将門塚の祟りを払うための法会だった。まわりには真っ黒に見物の群衆がむれていた。

施主の席には、老中土井利勝、下って江頭玄蕃以下の重臣たちが、威儀を正して居流れている。周囲には竹矢来を巡らし、警備の武士たちが、袴のもも立ちをとって立並んでいた。

利勝以下の焼香がはじまった。

それから、いまの時間にしておよそ四、五分後、突然、見物の群衆がざわめき立ち、警備の武士が駆け出した。

見物人がどっと崩れて空いた路上に、丸橋忠弥が、朱い三間柄の大槍を片手に突っ立っていた。その後から、舟形の車にのせられた柩を引いた、一団の武士が、静々と現れた。その先頭に立っているのは、由比弥五郎と金井半兵衛であった。今日は、二人とも麻裃の礼服に威儀を正し、半兵衛も、きちんと大小を腰にしていた。それも、大剣は黒塗合口拵え、脇差は牡丹造蝦夷拵えという凝りようであった。あの乞食姿の浪人者だとは、顔を見ても、おそらく誰にもわからなかったろう。この金井半兵衛という男は、実は皮肉な洒落者だったのである。

吉姫まんだら

一

葬列の武士たちは、半兵衛が、昨夜のうちに、どこからともなく駆集めてきた、いずれも屈強な面がまえの男達だった。

しかし、見る者が見れば、これらの男達が武士ではなく、当時一般には、賤しい身分とみられていた山者だということがわかっただろう。

「何奴じゃ！　退れい！」

と、既に抜刀した警固の武士の一人がわめいた。

今一人の武士が、槍を構えて、

「狼藉者、ここをどこだと心得る！」

それには構わず、忠弥はすたりすたりと前へ出て、慌てて躍りかかってきた警固の武士を、大槍の石突きを振って、撥ねとばした。

僧侶達の、読経の声がぴたりと止り、土井家主席家老、江頭玄蕃が顔色をかえて、突っ立ちあがった。

楠不伝の葬列は、竹矢来のなかに入ってしまっていた。

「何奴じゃ。場所をわきまえろ」

玄蕃が眦を決して、わめいた。

由比弥五郎、今は名を変えて正雪——がすすっと前に進み出て、言った。

「われら、神田連雀町張孔堂の一門、それがしは、由比民部介正雪と申す。亡き師楠不伝の遺言により、師の遺骸を将門塚に埋葬すべく推参仕った」

「何い！」

玄蕃は目を剝いた。

土井家の家臣達も総立ちになった。

「ならん」

玄蕃はわめいた。

「その方らは乱心者か！」

「乱心……」

正雪は、ぴたりと玄蕃を見て、言った。

「われらに一人たりとも乱心者はおり申さぬ。ただ、師の遺言に従おうとするまでのことでござる」

「馬鹿なことを申すな」

「お黙りなさい。わが師、楠不伝は、怨みをのんで国に殉じた楠正成公の後裔でござるぞ。師を葬るのに、これ以上の場所はござらぬ！」

「おのれ！　人を人とも思わぬ、雑言！」

「いや、雑言ではござらぬ」

「いうな！　その分には捨ておかぬ！」

「よろしかろう」

正雪は、その秀麗ともいえる顔に、うっすらと微笑を浮かべて、言った。

「われら、師の遺言を果すことを得ざる場合は、死の覚悟で罷りこしてござる。半兵衛、忠弥、いよいよ、われらの死ぬる時が参ったわ」
「面白い」
と、忠弥、三間柄の大槍にりゅうりゅうとしごきを呉れた。
「丸橋忠弥、亡き師の墓前に、宝蔵院流の槍の一手なりともお供え仕る。一手ですまずば、突いて突いて突きまくり、師とともに地獄に参る」
「忠弥、よう言うた」
半兵衛、腰の大剣に反りをうたせて、そろり前へ出るや、
「この金井半兵衛も、刀の目釘の続く限り、斬って斬って斬りまくって呉れようぞ」
とたん、不伝の柩脇を守っていた、天魔の三郎以下の山者が、さっと大剣の柄に手をかけて、前へ出てきた。
「ええいっ！　こやつら、遠慮はいらぬ。斬って捨てていっ！」
玄蕃はわめいた。
そのとき、凄まじい轡の音とともに、一騎の武士が駆けこんできた。
松平伊豆守信綱であった。
信綱は、さっと、正雪一党と土井家の侍達の間に馬を棹立てると、雷のような声でわめいた。
「控えい！　ここをどこだと心得る。ここは、江戸城三十六門の内の一つ、神田橋御門内、大手の真ん前じゃ。ここで血飛沫をあげて、相争えば、ただでは済まぬぞ。喧嘩は両成敗じゃ！」
「おっ！」
と叫んで、利勝もわめいた。

「控えい、玄蕃！」
すかさず、信綱が言った。
「大炊頭殿、差し出た振舞いとは存じまするが、この場は、この松平伊豆守がお預かり申す。如何」
利勝は、苦々しげに吐き出した。
「わかった。一同、退けい」
信綱は、ひらりと下馬すると、正雪にむかって言った。
「ということじゃ。おぬしも退けい。何事も退き際が肝心じゃ。あとは、わしに任せよ」
「左様でござるか。では、お任せ申す」
正雪は、何故かあっさりと退いた。
「わかってくれたか、有難い」
と、信綱は、じろり、半兵衛と忠弥に一瞥を呉れると、
「仲裁は、ときの氏神とも申す。おぬしらも聞きわけてくれい」
「よかろう」
忠弥が、鼻で笛でも吹いているような声で言った。
「では、あとは伊豆守殿にお任せ申す」
暮れもおし迫った或日の午後――。
神田連雀町張孔堂の玄関に、一丁の駕籠が着いた。紋所は三本扇の丸である。
玄関わきで、植木の手入れをしていた半兵衛、来たな！　という目をして、そのまますっと裏

へ回ると、
　これは肱枕で縁側に寝ころがり、空を見ていた正雪に言った。
「きた」
「よし」
　のそりと立ちあがって、正雪は、あらためて空を見た。
　珍しく青々と晴れあがった空の彼方には、富士山が秀麗な姿を現していた。
「卦は吉と出たか」
　にやりと、正雪は嗤った。一介の浪人者の居宅に、伊豆守がわざわざ使者を立てるなどということは、異例のことだったからだ。
　客は、たしかに松平家の用人笠井孫兵衛であった。
　天下分け目の戦い、関ヶ原の合戦には十五歳で初陣し、両度の大坂の陣では、伊豆守の父大河内久綱の馬の轡をとって先陣を駆けたというのが自慢の老骨である。一徹者だが、人間はきわめてよい。
　これが、半兵衛に表の十畳に通されて、目を剝いて坐っていた。
　裏庭まで見通せるような陋屋なのに、主はなかなか現れない。孫兵衛は、それで、気を悪くしたのだ。
　正雪は、そういう孫兵衛の在りようを、簾のかげから覗いて笑った。
〈あの親仁、人はよい〉
　と、看てとったのである。
　それから、正雪は袴をはき、ゆっくりと茶を一杯飲んでから、孫兵衛の前へ現れた。

「手前が由比正雪でござる。お見知りおかれい」
「ふむ」
　孫兵衛は、じろりと正雪に鋭い一瞥をくれ、
「わしは、松平家の臣にて、笠井孫兵衛と申す」
「さようでござるか。十五歳にて、関ヶ原に出陣し、大将首を挙げられたとか……」
　とたん、孫兵衛は顔中、皺だらけにして笑って言った。
「よう知っておるな、張孔堂殿は」
「いや、それがしだけではござらぬ。この学塾で、笠井殿の名を知らぬ者はござらぬ」
「これはまた上手をいわれる。張孔堂殿は、なかなかの軍師でござるな」
　このやり取りを炉端で聞いていた金井半兵衛、
「あの馬鹿もんどもめが」
　と、舌打ちした。
「ところで、本日ご来駕のご用件は」
　と、正雪がきり出したのは、それからまた半刻（一時間）を過ぎてからである。
　似たような話を、正雪と孫兵衛は延々と続けていたのだ。しかし、これには目的があった。この会話で、正雪は、人のいい孫兵衛から、伊豆守の日常から土井利勝との関係まで、聞けるだけ聞き出してしまったのである。
　土井利勝の下達状を文箱から取り出した孫兵衛は、それを正雪が読む前に、その下達状を利勝に書かせるのに、伊豆守がどれほど努力したかまで話した。
　下達状には、

「張孔堂、由比民部介正雪、思召しにより、右の者へ楠不伝埋葬の地として、牛込榎町の地所二千坪をつかわすべきものなり。土井大炊頭利勝」

と、あった。

孫兵衛の話し振りから、正雪は、利勝と信綱の次のようなやりとりまで思い浮べることができた。

伊豆が言う。

「張孔堂には、不伝埋葬の地として、いずれかの土地を与えたがよろしかろう、と存ずる」

「それはどういうことじゃ」

「いま、庶民は将門塚の祟りを怖れて動揺しておりまする。このまま放置すれば、あるいは、騒ぎを起すやも知れませぬ」

「伊豆守殿、それでは天下の老中が浪人の強請に屈したことになりはせぬか」

「いや、古人も、〝取らんと欲すれば、先ず与うるにしかず〟と申しておりまする。ここはひと先ず、彼等に土地を与えるのが上策かと存じまする」

「だが、そうなれば、世間の浪人どもは争って正雪の周囲に集まり、一大勢力となる可能性もござるぞ」

「それもまたよろしゅうございましょう。江戸中に散らばっている浪人どもを取締るのは、容易なことではござらぬが、これが一ヶ所に固まることとなれば……」

「ふん……、固めておいて、一網打尽か。しかし、伊豆守殿、あの正雪という男の顔を見られたか。ああいう相を持った者は、ひとつ間違えば……」

「はい。それも承知で、いっとき、それがしはあやつに賭けてみとう存じます。今は、そのときかと……、後のことはこの伊豆めにお任せ下さらぬか」

利勝と信綱の話の内容は、たしかに、この通りであった。

正雪の勘は当っていた。

では、何故に伊豆守は、そう正雪に見抜かれるような孫兵衛ごとき人物を使者に立てたのか……。

伊豆守は、事実を正雪に知らせるために、わざわざ孫兵衛を使者に選んだのだ。

伊豆守信綱の由比正雪に対する挑戦であった。

二

あくる年の春、三月。

牛込榎町二千坪の拝領地に、堂々たる大軍学塾が完成した。

門柱には、

——軍学兵学六芸十能医陰両道指南　由比民部介正雪——

という大看板が掛けられ、玄関には「張孔堂」の扁額が上げられた。

学塾は平屋建、総建坪三百坪を超える堂々たる大道場であった。

この建築費は、正雪が、旗本奴水野十郎左衛門に融通させたという噂があったが、これは事実であった。

坂部三十郎以下、白柄組の奴たちは、いずれも病死として届け出られ、家は、子や養子たちによって継がれていた。

しかし、これらの歴とした直参が、こともあろうに三千石の旗本水野十郎左衛門の屋敷内で、

何者かに殺されたとなれば、坂部三十郎らの家が、取潰されるだけでなく、水野家の断絶も必至である。いやしくも、大公儀の直参が、その邸内で殺されるような恥を晒して、おめおめと生き延びられるわけがない。

正雪はそこに付込んで、この乱暴者から建築資金を強請り奪ったのである。

軍学兵学六芸十能医陰両道指南とは、また正雪も吹いたものだが、早朝から昼までは、正雪と半兵衛が剣を教え、昼からは、正雪が軍学を講義し、忠弥が槍を教授した。そのうち、それぞれの教授の器が、自然から集まってくるはずだ、というのが、正雪の見方であった。事実、六芸十能にわたる見識を持った浪人は、この時代いくらもいたのである。

将門塚で、死体の役目をつとめて消えた楠不伝からは、ときどき使いの者が来た。使いはすべて山者であった。

或夜、どこからともなく現れた数人の山者が、学塾内に絡繰を設け、たちまち、隣接地の清松寺の経堂下にまで至る地下道を掘抜いて、消えた。

食いつめ浪人達が、徐々にこの軍学塾に蝟集しはじめた。

由比正雪の人気は日毎に高まり、張孔堂は、いつのまにか江戸名所の一つになった観さえあった。

そうした或日。

「おい凄い美人が現れたぞ」

と、忠弥が、興奮した顔を、正雪の書斎にのぞかせた。

「何の用じゃ」

正雪は、書物から忠弥の顔に、視線を転じて、訊いた。

「何の用じゃ、じゃと。由比正雪様にお目にかかりたい、と、かように申しておる。どうやら、おぬしとは旧知のような面付きであった」

「何故、そう思う」

「馬鹿者。旧知でなくて、何で女がおぬしなぞを訪れてくるものか」

「馬鹿者はよせ。おれも今は、外見だけでも張孔堂の主じゃ。まことに人聞きが悪い」

「なるほど。しかしあの女はよい女じゃ」

「名は何というておった」

「それはいわぬ。会えばわかる、と申しておった」

「お！」

一瞬、正雪の顔が輝いた。吉姫にちがいない、と思ったのである。

「通してくれい」

「通すには通すが、この道場で濡れごとはいかぬぞ。張孔堂殿」

「わかった。わかった」

正雪は、忠弥が見ても情ないほど嬉しげな顔で、破顔した。

現れたのは、やはり、吉姫であった。

「由比様、御繁昌、おめでとう存じます」

吉姫は丁重に礼をして、言った。

「またその節は……」

「いや、過ぎたことはもうよろしゅうござる」

正雪は、忠弥と話していたときとは別人のような、厳めしい顔をして言った。

「それよりお吉殿、この正雪に何をお望みか」
「はい。それにつきまして……」
「ふむ。伊豆守を討とうというわけじゃな」
正雪、まことに勘がいい。
「はい」
正雪は憮然とした顔で、天井を見あげて、言った。
「どうしても、思いきれぬと申されるか」
「はい。由比様。伊豆守は父を死に追いやり、新左衛門はじめ、徳永家の遺臣たちまで殺した仇でございます」
「お吉殿、そなたの気持はよくわかる。だが、それは最早過ぎたことではござらぬか」
「過ぎたこと……」
吉姫は、伏せていた顔をあげ、鋭い目を正雪にむけて、言った。
「この吉にとっては、過ぎたことではございませぬ」
「しかし、あなたは女じゃ。しかも、美しい女じゃ。これから先、どんな倖が待っておるやも知れぬ。復讐に命を賭けるよりは、生きて倖を掴む方が、亡き父への孝行じゃとも思うが」
「さようでござりまするか。では、おたのみ申しませぬ。由比様にお力添えをお頼みすることが、そもそもの間違いでございました。あなた様は、我家には何の縁もないお人。新左に、伊豆守の微行の道筋を教えて下されたのは、ただの気紛れでございましたのでしょう。お邪魔をいたしました。この一件、一人でいたしまする」
さっと、吉姫は座を立った。

その顔は蒼ざめ、唇は慄えていた。
「お吉殿」
周章てて、正雪も膝をたてた。
しかし、もう吉姫は答えなかった。徳永家の姫、お吉にとって、答えることさえ、すでに屈辱であったのだ。

正雪恋慕

一

忠弥に玄関まで送られて、張孔堂を出た吉姫は、吐き捨てるように呟いた。

〈あんな男に大事を打ち明けるのではなかった〉

折返し、正雪の部屋にとって返した忠弥は、大声でわめいた。

「馬鹿者！」

「なにが馬鹿者じゃ」

と、答えた正雪の声には力がなかった。正雪の胸のうちには、いま伊豆を討てない、理由があった。しかし、実は、正雪、吉姫をもまた助けたかった。吉姫に対する激しい愛情が、いつの間にか自分の胸に芽生えていたのを、今、吉姫を目の前にして、正雪は、痛切に知ったのである。

忠弥は、ずばり、正雪の前に坐って、言った。

「なぜ、助けぬ。正雪、あれが徳永家の姫ならば、伊豆を討つ名目は立派にたつ。仇を討つは武士の作法じゃ。おまけに、伊豆守信綱は、徳永家の仇であるばかりではない。われら浪人すべての敵じゃ。あやつがおるからこそ、浪人達は仕官の道を絶たれ、妻子を抱えて彷徨っておるんじゃ。正雪、おのれ、この張孔堂の主となって、うつけたか！」

「待て、忠弥。たしかに伊豆めは、吉姫の仇じゃ。そして、われら浪人の敵じゃ。しかし、敵を討つには時機というものがある。いま、松平伊豆守を狙っているのは、われらばかりではない。紀州の狸めが虎視眈々と伊豆めを狙っておる」

「わかっておるわい。しかし、あやつは将軍の座が欲しい為に、まず目の上の瘤の伊豆を除こうとしておるのじゃ。伊豆が、頼宣めに倒され、紀州に天下の権が移ったとしても、われわれ浪人には何のかかわり合いもない。下手をすれば、紀州と幕府が嚙みあい、戦となる。戦となれば、浪人どもは自ら戦場へ赴くじゃろう。喰うためにな。しかし、そこにあるのは死だけじゃ。戦があったとて、紀州大納言が、天下を握ったとて、われら浪人には、何の利得もない……、日本は狭い」

話しながら、忠弥はぼろぼろ涙を零していた。

「泣くな、忠弥よ」

半兵衛が傍から言った。忠弥は、半兵衛が入って来たのも気付かぬぐらい興奮していたのだ。

「泣くなというか、半兵衛。この虚仮め！　わしは、おのれが泣きたくて泣いているのではない。天下の浪人にかわって泣いておるんじゃ。おのれら……」

と、半兵衛と正雪を、真っ赤に泣きはらした目で、じろりと睨んで、忠弥は言った。

「張孔堂を私物化し、一身の栄耀を計るためにのみ日々を暮しておるのならば、おれは、おぬしらとは今日かぎり別れる。男一匹、この世に生を受けて、己のことのみ考えるような世渡りをするつもりなら、おれも飢えはせぬ。泣きはせぬ。では、さらばじゃ」

ぱっと座を蹴って、忠弥は立った。

「待て、忠弥」

周章てて、半兵衛がその袖を摑んだ。

「ええい、見そこなったぞ、半兵衛。そこを離せ、最早問答無用じゃ」

びりりっと、忠弥の袖が裂けた。

その袖をぱっと足元に叩きつけて、半兵衛、するりと忠弥の前へ抜けると、襖の前に両手をひろげて立ちはだかった。
「いま少し聞けい、忠弥」
「何だと！」
「おのれは、紀伊頼宣が、家光に代って将軍の座を狙っておるというたが、そこを今少し考えてみろ。大坂の陣から、既に三十有余年、豊臣恩顧の大名家は悉く取潰され、天下の基礎は既に固まった。三百諸侯も己の家を持するだけで精一杯じゃ。たとえ紀州頼宣が天下を狙って叛旗を翻したとて、紀州家に馳せ参じる大名は最早おるまい。これは徳川一家の勢力争いとして見るのみじゃろう。それぐらいのことは、誰よりも頼宣自身が一番よう知っておるはずじゃ。今、頼宣が将軍の座を狙うていると見せかけているのは、佞臣関口隼人正の一身の栄達をはかる為の策謀じゃ。策謀でなかったら、頼宣の法螺を吹きたいためだけの悪戯にすぎぬ。忠弥よ」
「何じゃ」
「伊豆を殺るのは、おれも浪人じゃ、反対はせぬ。できるならば、今でもやりたい。しかし、どうやる。この点を正雪に訊こう」
「よし、わかった。正雪、時機が悪いという理由をいえい」
「よかろう。まあ、坐れ」
正雪は、二人を制しておいて、言った。
「頼宣の本心は、おそらく、半兵衛の言う通りじゃろう。あやつ、逆立ちしても幕府には叛旗は翻さぬ。この点、駿河大納言のごとき木偶とはちがう。浪人を多数かかえて、これに扶持しているのも戦国振りを誇示する、あやつの道楽のひとつにすぎぬじゃろう。しかし、あやつが、伊豆

めを毛嫌いしておるのも事実じゃ。伊豆めの勢力がこのまま伸びていけば、頼宣の道楽もたちまち武家諸法度を楯に、伊豆に抑えられるのは必定。伊豆めは、すべてを法制化し、ひとつの制度によって幕府を運営していこうと考えておる。あやつが強硬に推し進めている鎖国政策もその一環じゃ。いうなれば、伊豆は、国の為、民の為というよりは、将軍家光個人の為に働いておる。せいぜい目を広げても徳川一家の安泰があやつの生涯の目的であることは間違いない。貉のごとき小人じゃ。しかしじゃ。これも、ときによっては使い道がある。二人とも、もそっとこっちへこい」
「ふむ」
半兵衛は、黙って茶を点てて、正雪の前に置いた。
「おれが今、頭に描いているのは、この狭い島国日本ではない……海のむこうじゃ。かつては、何十万という強者どもが海の向うに押し渡っている」
これは事実であった。
正雪はつづけた。
「おぬしらも知っておろうが、東にはアメリカ大陸あり、西にはユオロッパ大陸と申すものがある。北にはオロシャ、南には、わが日本に数倍する島国が無数にある。されば……、日本に住むことが窮屈になれば、東西南北、いずれの地であれ、望みのままに海洋を渡るにいささかの不都合もあるまい」
「ふむ」
と、忠弥が言った。
「おぬしの考えも面白いが、仮に百艘の軍船を連ねて渡るとして、まず、この百艘をどうする。

それに、異邦に押し渡れば、当然、これは戦になる。むこうさんも、むざむざ己が領土を明渡しはすまい」

「戦うのよ」

と、正雪はことなげに言った。

「倭寇と呼ばれるわが海賊が、いまだなお数万人、万里の波濤を越えて、押し渡っておる。彼らと提携すれば、わが日本ほどの領土を獲得することは、さほど困難ではあるまい。関ヶ原役後にも、わが国を見棄てた浪人たちが数千人、海を押し渡っていったのは、おぬしも知っておるじゃろうが」

「おお、知っておる」

と、忠弥は負け惜しみを言った。

そもそも倭寇とは何か――。

明国の風土記には次のように記されている。

刀の長さ五尺余、双刀を用うれば、丈余の地におよぶ。双手につかんで舞うに鋒を開けば、およそ一丈八尺。舞動すれば、上下四方ことごとく白くして、その人を見ず。衆らみな刀を舞わして起ち、空に向って揮う。わが兵、倉皇、これを仰げば、すなわち下より斬る。

倭寇の歴史は古い。

弘安四年（一二八一）元の忽必烈が十万の大軍を送って、九州を襲ってきたのは、実は、倭寇の大軍にしばしば自国の沿岸を荒されたことへの報復攻撃だったのである。幕府の執権北条時宗は、これを退けたが、これで勢いに乗った倭寇、つまり日本海賊軍は、ますます猛威を逞しくした。

二

元は鉄木耳帝の頃――。

北京の町を十数名の日本人が悠々と徘徊していた。

たまたま、北京にやってきた日本僧がこれを見て、

「あれらは日本の海賊でござる。元の国情を探って、後日侵略してくるにちがいない。今のうちに引っ捕えておいた方が、お互いの為でござろう」

と、役人に阿った。

役人は、直ちにこれを引っ捕えて、斬ろうとした。

これを聞いて、鉄木耳帝は青くなったという。

「きゃつら、倭寇はどのような報復に出るやもしれぬ。殺すな。釈放せよ」

と。

既に、この時代、倭寇は数万の徒党を組んで、中国大陸に押し渡り、各地を侵略し、略奪の限りを尽していたのである。

楠正行が死んだ正平三年（一三四八）には、倭寇四千名が百三十艘の軍船を連ねて朝鮮を襲撃し、南岸から疾風枯葉を巻く勢いで北上し、二千戸を焼き払い、七千余の朝鮮兵を殺し、自らも、三百余人を失いながら、一転して、遼東半島を侵害し、その半島一帯を、およそ半年余りも完全占領してしまったという。

南朝文中元年（一三七二）には、二千を超える倭寇が東西江に集結し、陽川を侵し漢陽府をぬ

き、盧舎を焼き、数千の人民を殺戮して、数百里を駆けている。

南朝天授元年（一三七五）には、日本の藤原経光なる武将が、千騎を率いて朝鮮に上陸し、領土を要求している。

朝鮮政府は、経光に順天の土地を与えたが、どうにも不気味なので、全羅道の将軍金先致に命じて、密かに経光を殺させようとした。ところが、金先致は大軍をもって経光軍千騎を包囲し、これを殲滅する挙に出たので、勇猛起った経光は千騎を駆って、金先致の陣中を驀地に駆け抜け、海上へ去ったが、そのとき、各地に高札を立てて引き揚げていった。

高札にいわく――。

「われわれ日本海賊は、これまで、しばしば侵入し、金銀を掠め、糧秣を略奪すといえども、かつて、手向かわざるものを、殺せしことなし。しかれども、金先致、われらが兵馬の作法を侵せしいま、以後は、たとえ婦女子、乳呑児であろうとも、これを屠殺するもの也」

この高札を見て、全羅道の人民ことごとく震えたという。

翌天授二年には、朝鮮政府は、遂に倭寇の侵略を恐れて、都を鉄原に移した。

天授五年には、五百艘の兵船を連ね、倭寇の大軍が鎮浦江に攻入った。その数は、およそ一万二千。将は甲冑をつけ、八幡大菩薩と大書した、旗差し物を背負い、一丈余の槍を翳し、兵もまた、具足をつけ、槍、薙刀をひっ担いでいた。のみならず、騎馬まで船中に養っていて、百名をもって一隊とし、十騎を先陣として隊伍を組んだ。ただの海賊ではなかったのである。この一万二千は、百二十隊に分れて、朝鮮半島を北上し、凄まじい略奪をした。略奪した米穀を船に転載する際、浜辺に捨てられた米は、数丁の間、高さ一尺に達したという。

拉致したる女は二千余。倭寇らは群がってこれを犯した。逃亡することが出来た娘は、わずか

三百三十余人。あとは、奴隷として日本国に送られ、わが国に住みつき子孫と多くの技術を残したという。

かくて、朝鮮は、遂に倭寇の被害にたまりかねて、金逸という将軍を日本に派遣し、将軍足利義満に倭寇の禁絶を申し入れた。

義満は、国内紛乱のため、倭寇の鎮圧は不可能であると答えた。

朝鮮の恭愍王は激怒して、倭寇の策源地を絶とうと慶尚道の元帥に、兵船百艘を与えて、対馬を攻撃させた。

応永二十年（一四一三）の春のことである。

対馬の宗頼義は、ござんなれとばかり、その百艘を、一隻のこらず、海底にうち沈めてしまった。

朝鮮王は、ついに倭寇制圧は諦め、貿易の利を与えて、協定を結んだ。

以後、倭寇は、一転して、中国本土を襲った。

応永二十一年（一四一四）。

倭寇三千余が兵船百四十余艘を連ねて、渤海湾上に現れ、まさに沿岸を侵さんとした。しかし、明の中軍都督府左都督劉公江は、あらかじめ、これを察知して、島陰に数百艘の兵船を隠し、陸には兵を伏せ、三千余の倭寇が上陸してくるや、明軍は、まず、島陰に隠しておいた兵船を出撃させ、倭寇の背後を衝いて兵船を焼き払い、海上と陸から挟撃した。文字どおり、血みどろの決戦となり、倭寇は討死にする者は七百四十余人、生け捕られる者八百五十余、四方へ逃げ散った物千余、生きて帰ってきたものは十余艘、わずか三百余人にしかすぎなかった。

下って、天文二十三年（一五五四）三月。

倭寇は未曾有の大軍をもよおして明国を侵略した。
その総勢三万七千が、疾風のごとく江蘇、浙江から揚子江一円を襲ったのである。まず、昌国衛を破り、大倉、上海をぬき、江陰を掠め、乍捕を攻め、八月には金山衛を占領し、崇明から常塾を侵し、翌年正月には、大倉から下って、松江を攻め、四月には、嘉善城を陥れ、嘉興を掠め、また奔転して、その本拠を拓林に置き、兵備を新たにして、蕪湖を襲い、南京に撃ち入り、秣陵関まで侵入したという。

これら、真紅の陣羽織を翻し、赤革の頼政頭巾をかぶった倭寇は、ほとんど中国全土に侵入し、略奪をほしいままにしていたのである。

正雪は、これら、倭寇の凄まじい活動を説いて言った。
「どうせやるならこれじゃ。わが国には、最早、二十万を超える浪人達を養う国土はないからじゃ。そのためには船もいる。権力もいる。この点、紀州の頼宣は、戦国振りを誇るだけあって、海のむこうにも、目が開けておるであろう。おそらく、徳川一門だけの繁栄を考えておるわけでもあるまい。これを利用するんじゃ。頼宣を伊豆めと噛み合せながら、わが方の勢力を拡張してゆき、われわれは南海に雄飛して新しい日本領を開拓し、ここに、浪人達の楽土を築くんじゃ。その為にも、頼宣は必要じゃ。頼宣が必要なら伊豆も必要じゃ。ということは、そのときまで、伊豆は殺してはならぬということじゃ」
「ふむ……。ならば、どうやって頼宣に近づく」
と、忠弥が言った。
「それは、時というものが教えて呉れる。不伝老も、伊達に死んだ振りをしておるのではあるまい」

正雪、かっと目を剝いて、自身たっぷりににやりと嗤った。

その頃、吉姫は将門塚の前にひざまずいていた。
「爺」
と、かすかな声が、吉姫の唇から洩れた。
「無念であったろう……。そなたの仇は、きっとこのお吉が討ちます。一命を捨てても伊豆めを討ちとり、父上やそなた達の怨みをはらしてみせます。どうか草葉のかげから見ていておくれ」
生きている人にでも語りかけるように、吉姫は塚に呟きかけると、凝っと瞑目した。
城の松林を鳴らして、風が吹いていた。
やがて、吉姫の淋しげな姿が、神田橋御門を出て、大手の広場に出てきた。
あたりには、石垣工事用の資材や、武家屋敷の建築用の材木やらが、うずたかく積みあげられ、乾ききった路上では、砂塵が舞い荒れていた。
いつの間にか日が暮れて、東の空に鎌のような半月がかかっていた。吉姫の弧影は花川戸にむかって、上野の森の下に出た。
ふと、吉姫の足が止った。
その前に、一個の黒影が浮き出ていた。しかし、吉姫は逃げなかった。
黒影が言った。
「徳永家の吉姫様とお見うけいたす。さるお方の命により、お迎えに参った。同道願いたい」
根来の七郎太だった。

「何用じゃ」
と、吉姫は誰何した。同時に右手は懐剣の柄にかかっていた。
「お静かに。事を荒だてるは本意ではござらぬ。刃は無用と思召されい」
すっと、七郎太は前へ出た。手が吉姫の胸元へのびた。
とたん、
「無礼者」
ぎらりと、吉姫は懐剣を抜いた。
「やむを得ぬ。姫様、ご容赦」
ぱっと、七郎太の拳が、吉姫の脾腹に喰いこんだ。懐剣が手を離れて落ち、吉姫のからだはずるずると崩れた。
さっと、七郎太が抱きかかえたとたん、森の中から一丁の駕籠が出てきた。七郎太は、手早く吉姫に猿轡を噛ませ、後手に縛ると、駕籠に押しこめ、
「行けい」
ぱっと、駕籠とともに走り出した。

毒酒

一

吉姫が、七郎太に連れこまれたのは、紀州家の下屋敷だった。厨房脇の小座敷に、吉姫を担ぎこんだ七郎太は、猿轡をはずし、縄目を解き、ぱっと活を入れた。
微かに呻いて、吉姫は目をあけた。
目の前には、いつの間に現れたか、根来幻幽斎がうっそりと坐っていた。今宵は、羽織袴に威儀を正していたが、顔は、山岡頭巾で隠していた。
幻幽斎は、丁寧に吉姫に一礼して、言った。
「ご無礼を仕った。仔細あって、姓名並びに被り物の儀はご容赦下さいますよう。されど、それがしは害意ある者ではござらぬ」
「ならば、何故にこのような乱暴をいたす」
武家言葉に戻って、吉姫は、きっと、幻幽斎を睨んだ。
「申し訳ござらぬ。この事は一切極秘のうちに行わねばならぬこと故、手前の身分を明してお招き申しあげるわけにも参らず、やむなく、非常の手段をとり申した。されど」
「いうな」
吉姫は眦を決して、言った。
「すべては、そちらだけの都合で、このような理不尽な振舞いをいたしたと申すのか。勝手なものよ。いかにも思い上った伊豆守信綱らしいやり様じゃ」

「お言葉ではござりまするが、手前は伊豆守の手のものではござりませぬ」
「伊豆の手の者でなくば、何で、かようなことをいたす」
「お疑いはごもっともなれど、それは姫様のお考え違いでござりまする。実は、われら、姫様にお力添えなさんと思い、ここにお招き申しあげた次第でござる」
「この吉に力添えをとか」
「左様、一命を捨てても伊豆を討たんとの姫のお心、まことに健気だとは存じますが、失礼ながら、姫様お一人にては、とてもご本懐をお遂げ遊ばすまでには参りますまい」
「……」
幻幽斎は、その頭巾のなかの目をきらりと光らして言った。
「実は、われらも伊豆守に怨みを抱く者。されば、陰ながら姫をお助け申しあげ、必ずや、ご本懐をお遂げ参らせるようお力添えいたす」
脇から、七郎太が三方（さんぼう）にのせた薬包を、吉姫の膝元に押出して、
「これは、南蛮渡来の猛毒、滅多に手に入らぬ品でござる。何卒、お役に立てられますよう」
吉姫は無言で薬を手にとった。
その指先が、微かに震えた。
「いずれ、われらが手で、その薬を用いる機会を作って差しあげましょう。それまでは、くれぐれもご用心あって、今宵のことは他言無用と思召されたい」
と、言うと、幻幽斎は、
「これなる男は、七郎太という忍者（しのび）でござる。以後は姫様の身辺はこの男に守らせ申す。何なりとご用命下され。これ七郎太、茶なりと持参いたせ」

「かしこまった」
七郎太が手を叩くと、待ってましたとばかり襖があき、お小姓姿の根来者が一人、茶を捧げて現れた。
その夜……。目覚めたとき、吉姫は、花川戸の長兵衛方のいつもの屋敷で眠っていた。
長兵衛も、いつお吉が帰ったか、知らなかった。
茶には、眠り薬が混ぜられてあったのである。

吉姫が長兵衛とともに一夢斎の庵に招かれたのは、それからまもなくのことであった。
一夢斎は、
「今日は他でもない。ちと野暮用があっての」
と、二人を笑顔で炉端へ招じた。
台所から、炉端に坐った吉姫を見た志乃の目が、一瞬、鋭く光った。
しかし、それを吉姫は気づかなかった。
どこかで、鴉が一声鳴いた。
「実はな」
と、一夢斎は、吉姫のまえに茶碗をまわして、言った。
「伊豆守殿が、高崎へ元締と一緒にゆきたいといわれるんじゃ」
「ほう、あっしとね。いってえ、それはまたどういうわけでござんす」
茶碗を手にした吉姫の手が、伊豆守という言葉を聞いて、微かに震えた。しかし、一夢斎は、何も気づかぬふりをつづけた。

「伊豆守様は、高崎まで、忠長様に会いに出掛けようと、申されておる」
「ほう、先年改易になった、あの駿河大納言忠長様にでごんすかい」
「左様」
「何でまた、忠長様にお会いになるんでござんす。あの人はまだ、公儀の咎人(とがにん)でござんしょう」
「伊豆守様はな、今一度忠長様にお目にかかり、今後は一命をなげうっても、上様に忠節を尽すという、誓紙を頂戴して来ようと申される」
「なるほど。その誓紙を上様に差出し、駿河様をお願い申しあげるてえことでござんすか」
「左様。これは相手が元締じゃからいうんじゃが、伊豆守様は、上様の実弟忠長様と異母弟の保科中将正之様、この御二方がしっかりと手を組んで、上様をお守り申さば、いかな紀州様とて、横車を押し通すことはあるまいと、かよう考えておるわけじゃ」
「しかし、それとあっしとは、一体どういう関係がありますんで」
長兵衛とて、一種の政商である。ときの老中に取入っておけば、割元としても、商売がしやすいし、いつかは旗本奴とも、正面きってぶつかる時があるとも思えば、ときの老中に気に入られていて、損なわけはない。
思わず、長兵衛はひと膝前へ乗り出した。
「そこなんじゃ。実は、今度の伊豆守様の高崎行は微行なんじゃ。表向きは病気にて、蟄居(ちっきょ)ということにしてじゃ。そこで、道中は、伊香保遊山の、江戸花川戸の元締幡随院長兵衛の用心棒ということに相成る」
「ほう！　そいつは豪儀だ。この長兵衛の用心棒が、御老中。こいつぁいいねえ、西念寺のご隠居。人は付きあってみろ、天下は取ってみろ、てえますが、やっぱり、あっしもご隠居にお付合いただいて本当によかった」

「何も天下を取ってみろとはいわんがの、花川戸の元締。それじゃあ、高崎には行ってくれるな」
「行きますとも、へえ、行きますとも」
と、長兵衛が言った。とたん、
「わたしも行きたい」
お吉こと、吉姫がにこりと笑って長兵衛を見た。
「よし、連れてってやる。どうせ、表向きは伊香保へ湯治にいく旅だ。女がいた方がいい。それから、誰を連れてったらようござんすかね。どうせなら、人数は多い方がようござんしょう」
「それは、お前さんに任せよう。しかし、危険はないから、元締とお吉さんと、あとは三太ぐらいでいいんじゃあないかね」
「へい。でも、松平のお殿様には敵が多うござんすからね。三太みてえな三下一人じゃあ、いざってえときには、何の役にも立ちませんですぜ、ご隠居」
「いや、そのことなら心配はいらぬよ。隠居したとはいっても、わしも伊賀の一夢斎じゃ。伊豆守様の生命まで責任をもってもらおうというのではない。そっちの方の責任はわしの方でとる。では、ひとつ前途を祝してといこうかの。志乃」
と呼ぶと、台所から、
「はい」
志乃の可愛げな声が返ってきた。
「そろそろ、伊豆守様もお越しじゃろう。膳部の用意はでけたか」

「でけましてござる。松平の殿様も今お越しでござる。いま山門を入られ申した」

鴉の甚兵衛が、屋根の上から志乃に代って答えた。

「松平の殿様もお見えだったんでござんすか」

と、これは長兵衛。

「ふむ。元締は、頼まれたら嫌とはいえぬお仁(ひと)じゃでの、今宵はひとつ、一同門出の宴と、かようにこの隠居が一人で決めての、甚兵衛めを伊豆守様の所まで、ま、走らせておいたわけじゃ。お、いらしたようじゃの」

と、一夢斎が腰をあげるのと、松平伊豆守信綱が土間に立ったのが一緒だった。

二

「ほう、これはこれは、お吉さんも一緒か、これはよい。美人が加わると、酒も一段とうまくなる。では、ご隠居、邪魔するぞ」

伊豆守は、お吉こと吉姫が来ていることが、心底うれしいらしく、破顔一笑すると、気さくに炉端にあがって坐った。

「これ、志乃。酒じゃ、酒じゃ」

と、一夢斎が嬉しげに台所へ声をかけた。

吉姫は、無言で伊豆守に一礼すると、

「あの、わたしもお手伝いを……」

と、座を立った。

とたん、屋根上で、鴉が一声鳴いた。

「甚兵衛。今宵は、お前もお相伴(しょうばん)せい」

一夢斎は、嗤って、屋根上に声をかけた。

「かしこまった」

と、屋根上で声がした。しかし、そのときはもう、鴉の甚兵衛は炉端に坐っていた。屋根上から庭先の杉の梢に飛び、杉の梢から炉端まで一挙動で飛び込んだのだが、この甚兵衛の跳躍は、一夢斎以外の誰にも見えなかったのだ。

伊豆守と長兵衛には、まるで、甚兵衛が炉端から、滲(にじ)み出たかのように思えた。

志乃が運んできた徳利を甚兵衛、受け取るなり、

「では、先ずわが殿から」

と、信綱の盃に酒を充し、長兵衛に注ぎ、一夢斎に酌すると、

「では、それがしも」

これは、盃にではなく、ひょいと長兵衛の膝前から抹茶茶碗を取り、これに、とくとくとくと三分の一ほど注ぎ、一瞬、手をとめて、ちらりと茶碗の底の酒を見た。とたん、一夢斎の目も、ぴかりと光った。

「おっとっとっと……」

と、甚兵衛が戯(ふざ)けてみせたときには、茶碗には零(こぼ)れるほどの酒が充たされていた。

「では、この度の門出を祝して」

一夢斎が、にこっと笑って盃をあげた。

甚兵衛が一瞬の間に、酒の毒見をしていたのだ。茶と混じると、茶の成分のタンニンと化合して、大抵の毒薬は変化をみせる。その微かな変化も、忍者は見逃さない。大将が軍旅にあるとき、

毎日の毒見は忍者の務めであった。
　甚兵衛に、この忍者の習性が自然に出たのか……。
　志乃が膳部を運んできて、囲炉裏端に並べた。
　このとき、台所では、吉姫が、いつの間にか忍んできていた根来の七郎太から、
「姫様、今じゃ。早う薬包みを開きなされい。酒樽にお入れなされい」
と、囁かれていた。しかし、吉姫は、大恩ある長兵衛や、何の怨みもない一夢斎や甚兵衛までは殺したくなかった。
　蒼ざめ、慄えている吉姫に、七郎太はまた囁いた。
「おやりなされい。この機を逃せば、最早永劫に機会は参るまい。姫様、やるのじゃ」
　ふるえる手で、吉姫は帯の間から、薬包を取出し、
〈仕方がない。長兵衛殿、お許し下され〉
　目を瞑って、酒樽の中へあけた。あけたとたん、覚悟ができた。
　志乃は、そんなお吉に、陽気に無駄口をききながら料理を作り、徳利に燗をつけていた。
　囲炉裏端では、伊豆守を中心に、話がはずんでいた。
「ようがす。伊豆守様の仰せとあらば、この長兵衛、高崎はおろか、唐天竺までもお供いたしやしょう」
　膝を叩いて、威勢よく言った。
「相変らず賑やかな男じゃな。しかし、長兵衛、わしの旅は唐天竺どころか、行先が十万億土といつ変るかも知れんぞ」
「結構でごぜえやす。皆様と御一緒なら地獄見物も、また乙なもんでござんしょうよ」

「そりゃあそうじゃな。極楽へ行けるとは思えない」
と、これは一夢斎。
　一同が、どっと笑った。
　吉姫が酒を運んできて、
「さあ、熱いのがまいりましたよ。伊豆守様、おひとつ」
「おう。これはこれは、お吉さん、そなたも高崎へは一緒に行ってくれるそうじゃな」
「はい。お供させていただきます」
と、酌をして、吉姫は、凝っと脇から伊豆守の手元を見詰めた。それを見て、長兵衛、
「何をぼんやりしてるんだ。お吉、おれにも注いでくんな」
「駄目ですよ、兄さん。そんなに飲んじゃあ」
「なにを言いやがる。まだ、ほんの序の口じゃあねえか」
　長兵衛は、威勢よく盃をあけ、自ら徳利を手に取ると、
「さあ、ご隠居、お殿様、それに甚兵衛さん」
　と、皆に酌をし、
「お前も一杯やんな」
　吉姫に盃をさし、
「あら、わたしは」
　と、逃げる吉姫に、器用に盃を押しつけて、
「なあに、御隠居の前じゃあ遠慮は要らねえよ。いつも無礼講だ。きゅーっとやんな。きゅーっと」

しかし、吉姫、さすがに盃は干せなかった。覚悟はしたつもりでも、顔は蒼ざめていた。そんな吉姫の様子をひょいと見た一夢斎が、

「お吉さん、どうした。顔色が優れないようじゃが」

はっと、顔を伏せたお吉、

「いいえ、なんでもありません。ちょっと気分が……失礼いたします」

周章てて、座を立った。

吉姫は、厠の脇に蹲った。

台所では、志乃がいそがしげに、包丁の音をたてていた。

庭先の池に、薬師堂の裏でわく泉の水が、ちょろちょろ流れこんでいる。緋鯉が一匹、池の真ん中にすーっと泳いできた。しかし、吉姫の目は、鯉も池も見ていなかった。

胸が早鐘のように鳴っていた。

額には、じっとりと汗が浮いていた。

〈ごめんなさい。長兵衛さん〉

思わず、吉姫は胸の前で手を合せた。

その肩を、ぽんと叩いた者がいた。

はっ！　と、吉姫は顔をあげた。

鴉の甚兵衛だった。

さっと、吉姫の頬が硬ばった。

しかし、甚兵衛は微笑して、言った。

「お吉さん！　心配は無用でござるぞ」

と、甚兵衛は、懐から薬包を取り出すと、ひょいと庭石の上に跳んで、さらっと中味をあけた。

みるみる、鯉や鮒が腹をかえして浮きあがった。

吉姫は、反射的に懐剣の柄に手をかけた。

「おっと」

と、これを制して甚兵衛は、言った。

「あなたには悪いが、先刻、懐のなかのものと擦り替えさせていただいた」

吉姫は、棒のように縁先に突っ立っていた。怒りと安堵がない混ぜになって、動くことも、口を利くことも出来なかったのだ。

甚兵衛は、また人なつっこい微笑を浮かべて、言った。

「ということじゃ。しかし、このことは、この甚兵衛一人の胸から出たこと。長兵衛殿も伊豆守様もわが師さえも知らぬことじゃ。さあ、くよくよせずに、もうあっちへ行った方がいい」

「何故、わたしを庇うのです」

「理由は別にござらぬが、お吉様にはまだ死んでいただきたくない、とでも、申しておきましょうか。兎に角、もう何も気になさらぬことじゃ。すべてを、この甚兵衛の胸に納め申した故にの」

吉姫は、へたへたと縁先に膝をついてしまった。

とたん、甚兵衛、庭先の黄楊の葉叢へ、ぱっと手裏剣を撃ち込んだ。

そこに、微かな人の気配があった。

甚兵衛は、忍者だけに聞こえる忍び声で、言った。

「消えろ！　根来の七郎太、生命だけは助けてやる」

囲炉裏端からは、長兵衛や伊豆守の団欒の声が聞こえていた。

修羅街道

一

江戸から五里七丁、浦和から針ヶ谷にいたる中仙道を、賑やかな一行が歩いていた。
「おお、大宮宿へへえったら、団子を食らうべえ」
蛤の三太である。
縞の着物に角帯を締め、手甲脚絆で尻ばしょり、腰には長脇差を一本ぶちこんで、背中には、横三尺縦八寸ほどの柳行李を背負い、頭は吉原被りという奇天烈ないで立ちである。
「小便臭えことをいうない、この糞ったれめ。いい若い衆が団子が食えるか団子が。ええ、このうす馬鹿野郎」
これは、伊豆の豆吉であった。
豆吉、服装も三太と同じで、柳行李を背負わされていたが、こっちの頭は三度笠である。ぐいっと、その三度笠の廂を持ちあげて、
「ねえ、親分、こんな野郎を連れて来るんじゃあなかったね。大宮宿へ着いたら、まず宮町、こういきたいものでござんすねえ。武州の飯盛は威勢がよくって、こたえられねえ、ねえ、親分」
気取って六方を踏んでいるつもりか、豆吉は蟹股になっている。
長兵衛が応えないので、豆吉、
「みっともなくってしゃあねえ。本当に、親分は、何でこんな野郎を連れてきたんだろう」
と独り言を言った。

その尻を、いきなり、三太が、うしろから蹴とばした。

「あれ！」

「何が、あれ、だ。この馬鹿！」

「何だと、この野郎！　おい、三太。この豆吉様のお尻を蹴っとばしておいて、おめえ、ただで済むと思っているんじゃあなかろうな」

「へえっ、気取るない、馬鹿。いいか、豆吉、この蛤の三太様ぁなあ、おめえより齢は若いが、幡随院の身内じゃあ、てめえより三カ月古参なんだ。この薄ら馬鹿野郎め。兄い(あに)分に滅多な口を利くんじゃあねえ。犬っころみてえな面しやがって」

「おや！　犬っころだと、この野郎！」

いきなり、豆吉、中仙道の真ん中で、三太に摑みかかろうとした。とたん、浪人姿の伊豆守とうしろを歩いていた長兵衛が、

「この馬鹿野郎めらがッ」

通行人が、びくっと立ち止るほどの大声で怒鳴りつけた。

「静かに歩きゃあがれ！　団子でも飯盛でも、好きな方を食やぁいいだろう」

にやっと笑って、三太が言った。

「実は、あっしゃあ、どっちも喰いてぇんですがね、あのね、親分」

「何だ」

「飯盛も食うもんですかね。ありゃあ、抱くもんとちがいやすかね」

旅姿の吉姫が、口を押さえて笑った。

伊豆守信綱もにこにこ笑っている。

長兵衛はもう三太には構わず、

「どうです、伊豆守様。今日は、上尾まで伸(の)しましょうか」

「上尾までは、どれほどであったかな」

「大宮までは一里六丁、大宮から上尾までは二里でござんすね」

「ふむ。では上尾までは行けそうだの」

どこかで、鴉が一声鳴いた。

松平伊豆守、幡随院長兵衛、吉姫、三太、豆吉の一行は、馬鹿燥(はしゃぎ)の三太と豆吉を先頭に、ぶらりぶらりと中仙道を下っていった。

裁着袴(たつつけばかま)に朧(おぼろ)富士の編笠をいただいた柳生十兵衛三厳(みつよし)が、見え隠れに一行を護衛していく。

あくる日の早朝。

一行が上尾の宿を出て、桶川から鴻巣を経て、やわたの松山道に差しかかった頃、江戸は牛込榎町の張孔堂から、ふらりと由比正雪が現れた。これは着流しに雪踏(せった)ばきという気軽な姿だったが、やがて、滝の川の野原を突っ切って、昼過ぎた頃には、板橋の宿に出ていた。

正雪も、どうやら中仙道を下る気らしい。

三日後、まず柳生十兵衛が、上州高崎に入った。

上州高崎は、安藤右京之進重長五万六千五百石の城下町である。重長は、幕府の寺社奉行も勤めたことのある温厚篤実な人物で、幕府の受けもよく、また名君の誉(ほまれ)も高かった。伊豆守信綱が、駿河大納言忠長を高崎に預けたのも、重長の温厚な人柄を見込んでのことであった。

忠長は、高崎城から西に数丁いった安藤家の別邸で謹慎させられていた。しかし、安藤家に預

けられてからの忠長は、人が変ったような穏やかな日常を送っていた。早朝に床を脱けだし、庭に出て日課の弓を引くほか、終日、ひっそり読書して過した。

この夜も、忠長は、ひとり読書していた。

ときどき、庭先から小鳥の声が聞こえてくる。

書見台から顔をあげて、忠長は目を細めて、小鳥の囀に耳を傾けていた。

その顔には悟入した高僧のような穏やかな表情が浮いていた。

見慣れぬ小間使が、茶を捧げて入ってきた。静かに忠長の前に茶を置き、頭を下げた。

「そなた、はじめてじゃな」

忠長は、微笑して言った。

「はい。今日から、こちらにご奉公仰せつけられました。志乃と申します」

服部一夢斎の孫娘志乃であった。たった今、この屋敷に忍びこみ、女中を眠らせて、衣裳を剥ぎ、小間使に化けて忠長の前に現れたのである。

しかし、忠長は何も気にしたふうでもなく、

「そうか」

また、書見台に目を戻した。

志乃は、そのまま後退って消えた。

その頃、同じ高崎城下の旅籠上州屋の二階屋敷で、長兵衛が吉姫の酌で酒を飲んでいた。豆吉と三太は、既に、ひと風呂浴びて女郎買いにとび出していた。

この連中は、喧嘩と博打と女郎買い以外に趣味というものはない。

日本という国は、妙な国柄で、当時からすでに、街道筋の宿場には、どんな辺鄙な宿場にも必ず女郎はいた。旅籠は二、三軒程度の寂しい宿場にも、女中と淫売とを兼ねた飯盛と称する女郎が常備されていたのである。こういう国は、わが国以外には見当らない。この点、日本は世界に冠たる助平国といえる。しかし、そういう伝統のあるわが国が、ポルノ解禁度では、いまや、世界の文明国中、一等遅れているというのは面白い。

上州はまた、博打の本場でもあった。三太と豆吉が宿に落着いておれるわけがない。飯も食わずに、この二人は、夜の町に飛出してしまったのである。

上州屋の別の座敷では、松平伊豆守信綱が、柳生十兵衛と何事か密談していた。

「幻幽斎の手が入りこんでいるのじゃな」

と、伊豆守。

「たしかでござる。根来の七郎太をはじめとして、八郎太、九郎太の三名が、どうやら十数名もの下忍どもを束ねて、乗り込んで参ったもようでござる」

「ふむ。目的はわしの生命か」

と、伊豆守は嗤った。

「いや、それだけではござるまい。さきの駿府騒動の折には、伊豆守殿、おぬしに辛うじて生命を救われた忠長様が、またおぬしの力で、返り咲くことになれば……」

「ふむ」

「と……」

「忠長様は一本気なお方でござる。恩義を感じて、伊豆の無二の味方になるのではないか」

「いかにも、紀州様はお考えになるはず……」

「ふーむ」
と、伊豆守は腕を組んだ。
そのとき、どこかで鴉が一声鳴いた。
「甚兵衛か」
「いえ、志乃でございます」
「入りなさい」
同時に、窓から、音もなく、一個の黒影が舞いこんだ。黒装束で、黒竹の仕込を背負っていた。
志乃は屋根の上にいたのだ。
「ほう！」
と、伊豆守は目を見張って驚いた。
「さすが一夢斎殿の一族じゃの」
「首尾は」
と、十兵衛が訊いた。
「万端、整いましてございます。今宵、この志乃が手引きいたします故、鴉の鳴き声を合図に、裏木戸より……」
「わかった」
と、答えた十兵衛、さっと大剣を摑み寄せて天井を睨んだ。志乃も、頭巾のなかの瞳を、ぎらりと天井にあげた。
天井をさらさらと走る鼠の音。
「鼠か……」

ふっと、十兵衛は息をぬいた。
「十兵衛殿、余り気を張るな」
笑って、伊豆守は言った。
「張詰めすぎると、早死にをするわ」
「しかし……」
「分っておる。しかし、他人を信じさせるには先ず、自分の心を解くことじゃ。この命を、相手の手のなかに預けたつもりになれば、何も周章てることはあるまい」
「周章てているわけではないがの」
十兵衛は、不快げに脇をむいた。
「志乃、もうよい」
「では」
すっと頭を下げて、また、志乃は屋根上に舞いあがった。
天井に潜んでいたのは、根来の七郎太であった。
十兵衛が、大剣を引き寄せたとたん、さっと隠形のかたちを取るや、その懐から本物の鼠がちょろっと這い出して、さらさらと天井裏を走ったのだ。
隠形のまま、呼吸さえ止めた七郎太、その額には、薄っすらと脂汗が浮きだしていた。

二

夜更け——。
松平伊豆守と柳生十兵衛は、そっと、旅籠を忍び出た。

町の灯も既に消え、あたりは漆黒の闇であった。

闇に目の利く十兵衛が、するすると伊豆守を先導してゆく。

右手の闇の中に、高崎城の天守閣が茫っと白く浮いていた。町家が断れて、武家屋敷の並ぶ一角に出た。

十兵衛は、土塀に沿って、正確に道を選んでゆく。この二人の微行は、誰にも見咎められてはならないからだ。

しばらく後、二人は海鼠塀を巡らした広大な屋敷の前に立った。安藤家の別邸、今は、駿河忠長の蟄居する配所であった。

大剣を腰から抜いて塀に立てかけた十兵衛、刀の鍔に足をかけると、ひらり、塀の上に立った。十兵衛の大剣は伊賀拵えであった。いつでも忍具に使えるように、大きな鍔がつけてあった。

伊豆守も、十兵衛の大剣の鍔を足掛りに、塀の上へ這い上った。すっと、下げ緒を引いて、剣を手にしたとたん、五間ほど離れた植込のなかで、鴉が一声鳴いた。

十兵衛、音もなく邸内に舞い下りた。これに、伊豆守がつづく。

植込の中で、また鴉が一声鳴いた。

二人、植込の中に走り込んだ。

甚兵衛が、泉水脇の四阿屋を指さして、言った。

「お着替えは、あれに。わしは、いまだここを見張り申す。いま一度、鴉が鳴いたら、あれなる柴戸を押して入られよ。突き当たりに裏戸がござる。そこで、軽く咳払いをして下され。志乃殿がそこにおり申す。では」

甚兵衛の姿は音もなく闇にとけた。甚兵衛は屋敷中の人間を全部眠らせてしまう必要があった

のだ。そして、甚兵衛には、それができる。

しかし、さすがの甚兵衛も、このとき、すぐそばの闇の底に、もう一組の黒影が、うずくまっているのまでは気づかなかった。

これら、二つの黒影は、吉姫と根来の七郎太であった。

七郎太は、吉姫が酌をした酒の中に眠り薬を混入して、密かに長兵衛を眠らせ、伊豆守と十兵衛が宿を出た頃は、すでに、忠長の配所の庭に潜んでいたのである。

やがて、四阿屋で衣服を改めた伊豆守は、柴戸を押し、裏戸に近づいて、軽く咳払いした。

小間使に化けた志乃が、裏戸を開け迎えた。

手燭を翳した志乃と伊豆守の姿が、忠長の寝所の前に音もなく現れた。

寝間には、まだ灯が点いていた。

敷居際に膝を突いて、志乃は言った。

「松平伊豆守信綱様、お忍びにございます」

答えも待たず、志乃は障子を開けた。忠長は、燭台の傍に書見台を置いて、端然と座していた。

伊豆守は、するすると敷居際から膝行していって、平伏した。

「お久しゅうござりまする。松平伊豆守、折入って申し上げたき儀あって、参上仕りました」

しばらく、忠長は答えなかった。

燭台の灯が、忠長の青白い顔に映って、ゆらゆらと揺れていた。

やがて、忠長は、ぽつりと言った。

「聞こう」

その言葉を聞いて、志乃は一礼して障子を閉めた。膝元に置いた燭台をとって、そっと立ちあ

がり、小腰を屈めて廊下の曲り角まで来た。
　とたん、足元にチョロチョロっと鼠が走りぬけた。はっと、志乃は立ち止った。その一瞬の隙をついて、暗闇から躍り出た一人の黒装束が、音もなく志乃の脾腹に拳を叩きこんだ。ずるずると崩れ落ちる志乃の身体を、さっと両手を伸ばして受け止めると、黒装束は廊下の隅の空部屋に志乃を担ぎこんだ。
　この黒装束、根来の七郎太だった。
　闇の中に、吉姫が身を竦めるように蹲っていた。
　七郎太は、くるくると志乃の衣裳を剝ぎとった。あっという間に、志乃は長襦袢一枚の姿にされて、畳の上に転がった。
「これにお着替えなされい」
　手探りで、吉姫が着替えているうちに、七郎太は、志乃に猿轡を嚙ませ、うしろ手に縛りあげ、眠り薬までかがした。
　忠長の居間では――。
　忠長が言っていた。
「……と、そちは、この忠長に再び世に出よというのか」
「いかにも。このことは、大納言様が駿府城をお出になられたとき、この伊豆守が、お約束申しあげたことでございます。されど、表立って、上様にお願いいたせば、土井大炊頭殿をはじめ、老中の諸侯まで、武家諸法度を楯にとって反対なされるは必定。それ故、まず大納言様の誓紙を頂戴いたしまして、上様から直々に……」
「その為にお咎めを覚悟で忍んで参ったというのか。伊豆、そちの気持は嬉しいと思う。だが、

この忠長は最早世に出る望みは捨てた」
　思わず、伊豆守はひと膝のり出して、言った。
「何と仰せられます」
「かつては、余も若かった」
　感慨深げに、言った。
「将軍の弟という身分に奢って、天下を望んだこともあった。だが、ここで静かに昔を振返ってみると、恥じ入るばかりじゃ。余も愚であった」
「…………」
「伊豆、ここの暮しは気楽じゃ。権力への夢を追って修羅を燃やしていた昔は夢のようじゃ。花は咲き、鳥は囀り、四季は移ろう。人の世には、いろいろと楽しみもあるものじゃ。余は、ここへ来て、人の倖とは他ならぬ、己自身の内にあることが分った」
　伊豆守は、膝に目を落して、静かに聞いていた。今の忠長の心境は、伊豆守にも分る……。
　忠長は、淡々とつづけた。
「余はこのままでよい。世に出れば、紀州の叔父御も余の立場を利用しようと計るじゃろう。そうなれば、また醜い政争の渦に巻きこまれて苦しまねばならぬ。伊豆、そうは思わぬか」
「仰せの通りでございます。しかし、大納言様には、ひとつだけ、大事なことをお忘れになってございまする」
「……何じゃ。言うてみい」
「大納言様が、このまま天下の政治に背を向けられ悠々自適のお暮しをお楽しみなされるのは、それはそれで結構でござりまする。しかし、それでは、天下の民百姓はどうなりましょうや」

「……」
「民百姓は、風月を友とし、暮しをたのしむ余裕もなく、額に汗して働きつつ、只管（ひたすら）、泰平をこいねがっておりまする。動乱を未然に防ぎ、民百姓の暮しを守ることこそ、人の上に立つ者の務めと存じまする。その為には、大納言様が、兄君たる上様の楯となり、共に手を携えて、幕府の基礎を揺ぎなきものとなさることこそ、肝要と存じまする」
忠長は、凝っと瞑目して動かなかった。

犠　牲

一

「大納言様」
伊豆守は、懐中から誓紙の用紙を取出して、忠長の膝前に置き、熱誠を面に顕（あら）わして言った。
「何卒、ご熟慮のほどを。手前はお心を乱さぬよう、別室にてお待ち申しあげまするゆえ、何卒……」
平伏して、伊豆守はそのまま静かに後退って、廊下に出た。
廊下の奥に、明りの洩れている部屋があった。闇の中から、ふわり、甚兵衛の黒装束が浮いて出た。
「あれにて、お休みあれ」
甚兵衛が、明りの点（つ）いている部屋を指差して、言った。伊豆守は首肯（うなず）いて、
「お前は、忠長様から目を離すな」
「かしこまった」
とたん、甚兵衛の姿は、また闇にとけていた。
その部屋には、燭台が一基灯され、ゆらゆらと揺れていた。燭台脇の円座に坐って、伊豆守は目を瞑った。
隣室との襖が開いて、志乃の着物を著けた吉姫が茶を運んできた。
異様な緊張感を感じて、はっと、伊豆守は目を開いた。

目の前に、きらりと懐剣を翳した吉姫がいた。
「お動き召されるな。わらわは、そなたの手によって改易の憂目におうた、美濃高須五万三千石徳永昌重の忘れ形見じゃ」
「わかっておる」
と、伊豆守は、自ら脇差を鞘ごと腰からぬいて、膝の前に置いた。
伊豆守は、長兵衛の妹と称していたお吉が、徳永家の吉姫だということは、既に知っていた。これを、根来幻幽斎が裏から操っているということも。
「わしの命を奪るというのか、吉姫」
「とる。亡き父、および新左らの仇……」
「待て」
と、伊豆守は言った。
「わが命が欲しくば差しあげよう。それで、そなたの気持が納まるのならな。しかし、お吉さん、わしはいま、死ぬわけにはいかんのじゃよ。それに、そなたも殺しとうはない」
「卑怯者！」
吉姫は、低く叫んだ。
しかし、伊豆守は、優しく、穏やかな声で言った。
「何と言われてもよい。今のわしには、まだやらねばならぬことがあるのじゃ。それをやり終えるまで待ってもらえぬか。聞きわけてくれ」
「いうな！」
吉姫は、さっと片膝をたてて、伊豆守の胸板めがけて、突っかけようとした。

そのとき、甚兵衛が風のように躍りこんできて、ぱっと、吉姫の手から懐剣を奪うと、
「馬鹿なことはお止めなされい」
と、舌打ちして、叱咤した。
同時に、伊豆守は、さっと立ちあがって、言った。
「甚兵衛、おのれ！　忠長様から目を離すなというたはずだぞ」
「あ！」
と、甚兵衛が奔転したのと、伊豆守が廊下に走り出たのは一緒だった。
忠長は、肌おしひろげ、真一文字に腹かき切って、誓紙のうえにうつ伏していた。腹一文字にかき切っていても、その切腹姿は余りにも異常だった。忠長は、いやしくも将軍の弟であり、かつては、駿河五十五万石の太守であった。そういう人物が、気でも狂わない限り、死装束もつけず、下着も替えずに、いきなり腹を切るはずがなかったのだ。
「しまった」
と、伊豆守はあたりを見回した。
ひろげられた誓紙には、様を見ろといわんばかりに「七」の血の一字。
それは、根来七郎太の不敵な挑戦であった。
「おのれ！」
と、甚兵衛が唸った。
「殿、これは根来者の仕業じゃ。おのれ、七郎太め！」
周章てて後を追ってきた吉姫も、血潮のなかに突伏している忠長を見て、へたへたとその場に坐りこんでしまった。

「忠長様っ」

吉姫は、血を吐くような声で言った。

「わたしの責任でござります」

「これは、あなたは、知らなかったことじゃ。お吉さん、大納言様をこのような羽目に追いこんでしまったのは、むしろ、わしの責任かも知れぬ」

「伊豆守様、お許し下さりませ。この吉のために、また血が流れたのでございます」

吉姫は啜りあげた。

伊豆守は静かに合掌して、

「わしがここへ来さえしなかったら、大納言様は安らかな生涯を終えられたかも知れぬ」

悲痛な声で言った。

「わたしは、とんでもない誤りを犯してしまったようじゃ」

吉姫は、顔をおおって呻いた。

「忠長様、お許し下さりませ」

庭前で、人骨が断たれる凄まじい音がした。

その頃――。

長兵衛は、長脇差を片手に、闇の中を突っ走っていた。

はっと、目覚めてみたら、吉姫の姿が見えないばかりか、その夜は、まだ別座敷に寝ているはずの、伊豆守の姿も見えなかったからだ。

咄嗟に、長兵衛は伊豆守が、忠長の蟄居所へ忍んだにちがいない、と思った。それはいい。しかし、吉姫が伊豆守を追って、これも蟄居所へ走ったとすれば一大事であった。長兵衛は、伊豆守も殺したくなかったし、吉姫も死なせたくなかった。第一、自分の妹として伊豆守に紹介してある〝お吉〟が、実は、伊豆守を仇とつけ狙う徳永家の吉姫だと知れれば、長兵衛の立つ瀬がなかった。そうなれば、長兵衛も伊豆守の命を狙って、高崎まで従いて来た、と思われても言い訳はできない。

〈お吉が、これほどの執念を熱やしつづけているとは知らなかった。おれも甘かった〉

と、思ったとたん、長兵衛は長脇差を摑んで、宿を飛出していたのだ。

不思議なことに、この大男は、何の鍛錬もせずに闇に目が利いた。子供のときから、闇夜でも、明りというものを必要としたことがない。

突然、町屋の角を曲って、長兵衛は突んのめるように立止った。

闇の中から、正体不明の一人の黒装束が飛びかかってきたのだ。しかし、この黒装束は、町人姿の長兵衛を甘くみすぎた。

頭上に降ってきた刃を、長兵衛、右手に持った長脇差の鞘で撥ねあげるや、身を沈めて、その男のむこう脛をかっ払った。不覚にも、この黒装束は、地響きをたてて路上に転倒した。

とたん、数人の黒装束が闇のなかから浮きあがり、八方から長兵衛を取り囲んだ。根来八郎太の手の者だった。七郎太が、切腹とみせかけて、みごと忠長の腹かっさばいてきたのを、すでに知っていた八郎太は、幡随院長兵衛のような向う見ずな男に、今、忠長の蟄居所に暴れこまれては目立ちすぎる、検視の現場に、この男が立合ったら何を喚くかわからない、と思ったとたん、長兵衛抹殺の挙に出たのだ。

長兵衛、路上に仁王立ちになって喚いた。

「退けい、うす馬鹿野郎。おのれら、おれに何の恨みがある！」
しかし、根来者たちは答えなかった。
いきなり右手の一人が無言で地を蹴った。
同時に、長兵衛もはね上っていた。
空中で血が噴いた。
あとはもう、さすがの長兵衛も何が何だか分らなくなった。
暗闇から牙を剝きだして飛びかかる狼のような根来者らを、反射神経だけを頼りに暴れまわっているうちに、目が暗んでしまったのだ。いくら逃げたと思っても、目の前に敵がいた。これが、声も洩らさず飛びかかってくる。しかも、その手には、鋭い刃物が握られているのだ。
〈おれも死んだか〉
と、長兵衛は思った。
その時である。
目の前の黒装束が、音もなく地に這い、横手で、骨の断ち切られる鈍い音がした。
つづいて、旋風のように、一人の編笠の武士が長兵衛の脇を駆けぬけ、跳躍し、また奔転し、みるみる地上に屍を重ねていった。
「うぬ！」
根来の八郎太が、思わず、声を出して呻き、物かげから猛然と跳出してきた。そのとたん、八郎太の首は血飛沫をあげて、宙に飛んでいた。
長兵衛は、余りの迅業に茫然として路上に突っ立っていた。その編笠の武士が、とても人間とは思えなかった。しかし、それも、やはり人間だったのである。

この武士は、八郎太の頭巾を剝いで、大剣の血糊を拭うと、音をたてて鞘に納めて、言った。
「長兵衛殿、吉姫はどこじゃ」
「お！」
と、長兵衛は唸った。
「張孔堂の先生！」
その武士は、張孔堂、由比正雪に紛れもなかった。

二

正雪は、編笠の庇をあげて、その白皙の顔を見せると、
「吉姫殿はどこじゃ」
と言った。
正雪は、長兵衛と吉姫が伊豆守の供をして、江戸を立ったと知るや、真直ぐに中仙道を下ってきていたのだ。そして、偶然に、根来者に襲われ、荒れ狂っている長兵衛を見た。長兵衛、ついていたと言わねばならない。
しかし、正雪にとっては、実は、長兵衛などはどうでもよかったのだ。ただ吉姫の安否だけを気づかっていた。それは勘のいい長兵衛にもすぐ伝わった。
「多分、忠長様の……」
「蟄居所だな。よし、長兵衛、駆けろ！」
「ようがす」
ぱっと、二人は駆け出した。長兵衛、よほど周章てたとみえ、まだ抜身をぶら下げて走ってい

た。
「長兵衛、刀は腰に納めよ」
「尤もでござんす」
とは答えたものの、長兵衛、今度は抜身を肩に担いだ。
呆れて、正雪は言った。
「おい。八九三の喧嘩ではない。白刃は担ぐな」
「尤もでござんす」
そのとき、前方の闇の中で、白刃の噛み合う音がして、蝙蝠のように闇の宙を飛ぶ黒装束が見えた。
「見えるか」
と、正雪が言った。
「へい」
息急切って走りながら、長兵衛が答えた。
「あやつらは根来者じゃ」
「さいでござんすか」
「もう刀はそのままでよいぞ」
「尤もでござんす」
「しかし、おぬしは闘わんでよい」
「それはどういうわけで……」
「吉姫を探せ」

「なるほど」
「間違いなくさがし出せ。もしや死なせたら、長兵衛よ」
「へい」
「おぬしの命はないぞ」
長兵衛、にやりと嗤って言った。
「先生……お吉に惚れましたな」
「馬鹿もん、早うゆけ。吉姫は、いまだ忠長の屋敷かもしれん、まっすぐゆけ」
「あっしも、喧嘩がやりてえ」
ぱっと、横を走っていた長兵衛の帯をつかむと、ぐいっと引き寄せて、正雪は、噛みつくような声で言った。
「おのれ、忠長邸への道を知らぬな！」
「知っておりやす。あっしは商売柄、安藤様の別邸には何度も伺っておりやすんで」
「ならばよい。早ういけい」
「しかし、由比様」
「何だ」
「お吉には、鴉の甚兵衛さんが、ついておられやすから、命までは心配ねえと思うんでござんすがね」
「馬鹿者！　甚兵衛はあそこにおる」
たしかに、目の前の闇のなかにいたのは、鴉の甚兵衛であった。
甚兵衛は、根来の七郎太を頭とする、六人の忍者を追って、忠長の蟄居所から飛出してきたの

である。それと知ったとたん、長兵衛は、ぱっと身を翻して右手の闇に走り込んだ。
正雪は、前方の闇を透し見て、
〈ほほう、十兵衛もおるな〉
編笠の紐を締め直すと、まるで、一人の通行人のような気軽さで、血闘の場へ近づいていった。
雲間を割って、月が出た。
十兵衛の大剣が月光を弾いて煌くたびに、ひとつずつ黒装束が地に這った。根来の手練者たちを、十兵衛は、まるで苧殻のように斬り捨てていく。
正雪は、土塀の陰に入って、立ち止った。
七郎太と甚兵衛が、忍刀を構えて対峙していた。じりじりと、甚兵衛が押して出た。それを横目で見て、十兵衛が声をかけた。
「殺すな、そやつは、大事な生き証人じゃ」
とたん、七郎太は身を翻して走った。
「逃がすな！」
と、十兵衛が叫んだ。
「おお！」
と、応えたのは正雪であった。
正雪、目の前を斜になって走り抜けようとした七郎太の肩に、ぱっと、抜き撃の一刀を浴びせた。
「ご安心あれ。曲者は仕止め申した」
と、正雪は、ふらり土塀の陰から出た。

ぎょろりと、隻眼を剝いてこれを見た十兵衛、それが正雪だと知って、押殺したような声で言った。
「おぬし、何故斬った」
「逃がすな、といったのではなかったのかな」
と、刀を鞘に納めて、正雪は言った。
「柳生十兵衛三厳殿」
「おのれ、とぼけたことをいいおる。こいつは生き証人じゃ。逃がすなとはいったが、殺せとはいわぬ」
「ふむ……、左様であったか」
「おのれは、生き証人を斬って、紀州に恩を売るつもりかい」
だらりと大剣をぶら下げたまま、十兵衛はじりじり間合を詰めて、前へ出た。やる気であった。その全身から殺意が噴き出していた。しかし、その殺意を、正雪は、
「はて、何のことやら」
と、とぼけて躱した。
「何だと……」
「わからぬといっておるんじゃ。ふふふふふう。どうやら、おれは邪魔だったようじゃ」
〈おれが根来七郎太を斬ったのは、吉姫にこれ以上付き纏われてはかなわぬからじゃ。馬鹿もんめ……〉
腹の中でそう呟いて、正雪は、隙だらけの背を十兵衛に見せて歩き出した。

あくる日の昼下り。
江戸城一ツ橋御門内、松平伊豆守屋敷の玄関先で、土井大炊頭利勝が喚いていた。
「この土井利勝がわざわざ見舞うたに、病間にも通すことはならぬ、と申すのじゃな」
玄関先に蟹のように這いつくばっているのは、用人笠井孫兵衛だが、
「いかにも」
と、孫兵衛、その顔だけはむくっと上げて、利勝を睨めつけた。
「土井様はおろか、上様直々にお越し遊ばされようとも、お通し申すわけには参らぬ」
「何と申すかっ！　孫兵衛、伊豆守殿は、最早十日も登城しておらぬ。病気じゃと聞いたので、この利勝がわざわざ見舞いに参ったのじゃ。通せっ、この頑固者め」
「いや通しませぬ。伊豆守は、この笠井孫兵衛にとっては、天地の間にたった一人の主人でござる。その主人が、〝孫兵衛、わしは病気じゃ、客には会わぬ〟と仰せられた。たって、お通り遊ばさるとあらば、それがしの屍を超えてお通り召されよ」
これには、利勝だけでなく、供の武士らもかっときた。なかには、刀の栗形に手をかけた者まででいた。
そのまま踏込むつもりだったのか、利勝、手にした白扇でぱっと膝を打って言った。
「申しおったな、孫兵衛！」
そのとき、奥から一人の娘がとび出してきて、式台に手を突き、孫兵衛を庇って、言った。
「大炊頭様、御無礼をいたしました。この者は何分にも昔気質の者、御無礼のほど、ひらにお許し下さいませ」
伊豆守の妹の楓であった。

「ふむ」
やや表情を和らげて、利勝は言った。
「兄上の御病状は、よほどお悪いのか」
「はい。何分にも熱が高うございまして、医師の看たてでは、性質の悪い疫病ではないかと……」
「ふーむ！　疫病でござるか」
「それ故、もし大炊頭様にうつりますようなことがござりますれば一大事、と、兄は、かように申しておるのでございます。何卒、本日のところは……」
楓にみなまで言わせず、利勝は、
「うむ」
と、首肯くと、
「随分ご養生を、と伊豆守殿にお伝え下されい」
一礼して、利勝は引きあげていった。
伊豆守の微行姿が、ふらりと裏門から入って来たのは、それから、およそ一刻ほどあとであった。

四章

明国からの使者

一

寛永年間、江戸では、神社仏閣の造営が相ついだ。芝神明宮、王子権現、西久保八幡宮、目黒の不動尊、と、次々に建立されていく神社仏閣の周囲には、やがて、参詣人目あての店々が現れ、人々の住居が建てられ、これらの寺社は、新しい町造りの要となっていった。

ここ、芝神明から増上寺に至る道筋の殷賑もそうして造られたものである。

露店には、飴売り、泥鰌屋から、芋の煮っころがし屋まで出ていたし、辻では、瓦版屋が黄色い声をあげて読売りを売り、金魚の荷売り屋の脇では、風車が涼しそうにまわっていた。いつの間にか、江戸にも、また夏が来ていたのである。

人混みを縫うように、松平伊豆守の妹楓が、笠井孫兵衛の一子弥一郎を供につれて歩いていた。からからと鳴っている風車のまえで、楓が足をとめて、

「まあ、綺麗だこと」

と、二間ばかり後を歩いていた弥一郎を振りかえった。その時、

「あれー！」

人混みのなかから、絹を裂くような悲鳴がわいた。

つづいて、

「お殿様、ご勘弁下さいまし」

という町人風な哀願の声。

弥一郎は、楓なぞそっち除けで、声のした方へ飛んでいった。

大店の娘風な十七、八の娘が、糸鬢奴に結いあげた一目で旗本奴とわかる、数人の武士に取り囲まれ、一人が、乱暴にも、娘の袖を摑んで引き寄せている。

その前に、土下座して泣かんばかりに哀願しているのは、おそらく、その娘の手代だろう。

がっ！

その手代風の男の額を足蹴にして、その旗本奴は嘯いた。

「おのれは、われら白柄組を知らぬか。おれは白柄組の加賀爪じゃ。この娘には、われらが酒の相手を申しつくる。おのれは帰って、主にそう伝えればいいんじゃ」

「それではあんまりでございます。お離しくださいませ。お願いでございます」

とうとう手代は、脇に立った男の袴にとり縋った。

「おのれ、町人の分際で、われらに手向うか」

その男は、手に持った大鉄扇で、力まかせに手代の頬げたを張りとばした。

これら奴たちは、当時の戯歌に、

「夜更けて通るは何者ぞ
加賀爪甲斐か泥棒か、
さては坂部の三十か」

と、唄われた乱暴者たちであった。

坂部三十郎は、既に、金井半兵衛に斬り捨てられていたが、今、娘の袖を摑んでいるのは、加賀爪甲斐、その脇の大鉄扇を握ったのは阿部四郎五郎、以下、井上伴左衛門、鬼車正則、鴨嶋藤十郎ら、白柄組の面々であった。

通行人達は、とばっちりを恐れて、みな遠巻きにして騒いでいた。
「来い！」
と、加賀爪甲斐が、娘を横抱きにした。
「あーあっ！　お許しを！」
と、叫ぶ娘の尻を、ぱちっと張って、甲斐が怒鳴った。
「えい！　見せ物ではない。目ざわりだ、どけっどけい」
鴨嶋藤十郎が、
「おりゃーあ」
と、大喝一声、脇のうどん屋台を引繰り返した。阿部四郎五郎が、何の係わりもない、見物の町人達の頭を、その大鉄扇で続けざまに五つばかり張倒した。
「それい、皆、手車で運んでいけい」
と、甲斐。
「おおっ」
と応えて、井上伴左衛門、鬼車正則などが、
「やっ」
と、悲鳴をあげて踠く娘を担ぎあげた。
「いいぞ、いいぞ、これぞ、まことの芝神明の花御輿じゃあ」
加賀爪甲斐が、犬のように吼えて歩き出した。
そのとき、弥次馬の中から、一人の娘が走り出てきて、旗本奴の前に立ちはだかった。楓であった。

「女、どけい！　白柄組に楯つく気か！」
阿部四郎五郎が、凄い目で楓を睨んで喚いた。
「お待ちなさい」
興奮して蒼ざめた顔をあげて、楓は言った。
「その白柄組ともあろうお歴々が、か弱い女子を捕えていたぶるとは、何事でございますか。恥を知りなさい、恥を」
「何をお！　女の分際で、その分では捨ておかんぞ」
いきなり、鬼車正則が猿臂を伸ばして、楓を突き飛ばそうとした。
危ういところで、楓はこれを躱した。大人しく楓の後に従いてきていた弥一郎も、ついに堪りかねて叫んだ。
「無礼者！」
「何だと！　おのれ、一人前の口を利きおって今一度言うてみい、手はぬかぬぞ」
正則がせせら笑って、大剣の柄に手をかけた。
しかし、弥一郎は怯まなかった。楓を庇って旗本奴の前に突っ立つと、
「この方をどなたと心得る。いやしくも、松平伊豆守様の御妹御であるぞ」
「松平伊豆の……」
加賀爪甲斐が鼻を鳴らして言った。
「そいつは面白い。それを聞いては、いよいよ退けぬな。そこな、童」
「童だと！」
弥一郎は、童といわれて、あわや逆上しかけた。無理もない。弥一郎は既に十九歳になってい

たが、色白小柄で、面も細く、そういう外見が自分でも、いつも気になっていたからだ。
「うぬ」
思わず、弥一郎は刀の柄に手をかけた。
その前に、ずいっと一歩踏み出して、甲斐がせせら嗤った。
「松平伊豆が何じゃ。たかが、小姓風情の成上り者ではないか。何の武勲もないくせに、わずかばかりの才を鼻にかけ、知恵伊豆などとは笑止千万」
「おのれ！　いうたな」
われ知らず、弥一郎は抜刀していた。
「ようし、よう抜いた」
阿部四郎五郎が、さっと甲斐の前に出てきて、喚いた。
「陪臣の分際で公儀直参に刃をむけるとは、よい根性じゃ、叩き斬ってやる。おのおの方、この若僧を叩き斬ったうえで、伊豆の妹にも酒の酌をさしてくれようぞ」
「面白い」
打てば響くように、鬼車正則が応えた。
とたん、四郎五郎が、物も言わず抜き打った。
がっ！
と、これを払いのけて、弥一郎、
「くらえぇーい」
悲鳴のような雄詰をあげて、旗本奴に斬りこんだ。楓も懐剣を抜いて、躍りこんだ。
しかし、女の楓が旗本奴に敵すべくもなかった。またたく間に、四郎五郎に剣を叩き落され、

抱き竦められてしまった。
「楓様！」
弥一郎は四郎五郎にむかって走った。
甲斐の一刀が、その首に振り下された。
「ああー！」
弥一郎は、凄まじい音をたてて地に転がった。
「死ねい！　小童！」
甲斐は鬼のような形相になって、大剣を振りかぶった。
とたん、風をきって、一本の錫杖が飛んできた。
「う！」
と、半身になって、甲斐は危うくこれを躱した。
その面前に、老若二名の雲水が風のように跳びこんできた。
「おのれ、邪魔するか！」
と、四郎五郎が雷のような声で喚いた。しかし、雲水は二人とも微塵も動じた色もなく、
「殺生は御仏の禁じたもうところ故、われら坊主は事は好まぬ。大人しく引き退られよ」
若い方が、すいすいと前へ出てきた。
「うぬ。構わぬ、斬れい」
四郎五郎の大剣が、唸りをあげてその雲水の頭蓋に振り下された。
見物人は、思わず息をのんだ。しかし、次の瞬間、苦悶して倒れたのは四郎五郎の方であった。
雲水の拳が、電光のような迅さで、四郎五郎の脾腹に撃ちこまれていたのだ。

「おのれ、猪口才！」
甲斐が片手殴りに大剣を振った。これを、老雲水は無雑作に手で払った。
ぱし！
妙な音をたてて、甲斐の大剣は宙で二つに折れた。
とたん、老若の雲水は、旋風のように旗本奴の間を駆けぬけた。
あっという間に、五人の奴は地に這っていた。

二

「御両所、妹が危ないところを忝ない。礼を申す」
伊豆守信綱は、二人の雲水に丁重に頭を下げた。雲水らは、無言で頭を垂れて、これに応えた。
その顔はいずれも陽に灼けて、只の旅の僧とは思えぬ面魂である。しかも、この二人には、自ら人をうつ威のようなものが備わっていた。傷ついた弥一郎を、この二人はわざわざ伊豆の屋敷まで運んできてくれたのだ。
茶を捧げてきた楓を見て、
「ご坊ら、般若湯などは如何でござる」
と、伊豆守はきさくに笑った。
「頂戴いたします」
若い方の雲水が微笑して答えた。
「それは頼もしい。楓、酒じゃ。いや、般若湯の支度をせい」
そのとき、庭前で、鴉が一声鳴いた。

「甚兵衛か」
雲水二人に目礼して、伊豆守は座を立って、障子を開けた。
「何じゃ」
甚兵衛は答えるかわりに、真剣な目で座敷にいる雲水の方を見た。
「あの人達なら構わぬ。何事じゃ、言ってみい」
「はっ、実は今、御門前を町方の役人がうろついており申す」
「ふむ」
「狙っているのは、そこなご両人と見受け申した」
「そうか……」
首肯いて、伊豆守は座敷に戻ると、
「おぬしらは、どうやら役人に付け狙われておるようじゃ」
と、老若の雲水に告げた。
しかし、二人とも、うっそりと座したまま眉毛一本動かさなかった。
「腕といい、面貌といい、わしも、ただ者とは思わなかったが、おぬしら、もしかしたらわしに会いたかったのではなかったかな」
若い方の雲水が、わずかに頭を下げて言った。
「さすが、松平伊豆守様でござる。いかにもわれら、あなた様にお目にかかるべく、はるばる明国より参上いたした者でござる」
「ほう、明国から」
「いかにも手前は明国福建省の生れにて、姓は鄭、名は芝龍、字を飛黄と申す者。またこれなる

は」
　と、鄭芝龍と名乗った若い雲水は、隣に、最初から一言も発せず座したままの、吊し柿のような顔の老僧を見て、言った。
「手前の拳法の師にて、河南少林寺の陳元贇老師でございます」
「なるほど」
　と、首肯いた伊豆守、鄭芝龍の名は知っていた。
　この男は、十八歳のとき平戸に漂着した明国人だが、松浦藩の足軽田川七左衛門の娘と結婚、福松、七左衛門の二児をもうけ、のち倭寇に投じ、この頃は、台湾海賊の頭領として、その名はわが国まで鳴り響いていたのだ。この後、芝龍は清に捕われ、禁固の末に殺されるが、子の福松は長ずるや、鄭成功と名乗り、既に滅亡した明朝復興のために清と戦い、台湾よりオランダ勢力を駆逐し、フィリッピン征服まで企てた大海賊となる。
　陳元贇は、琉球に唐手を最初に伝えた人物である。
　伊豆守は、この半分は日本人ともいえる明国の海賊をつくづくと見て、言った。
「それにしても胆の太いことじゃな。厳しい網の目を潜って、この江戸まで潜入してくるとは」
　この頃、既に、将軍家光は鎖国令を敷いて、外国人の日本上陸は厳しく取締っていたのである。
　この二人は、つまりは鎖国の御定法を破って、日本に潜入した犯罪者だったのだ。しかし、鄭芝龍は少しも悪びれず、
「いや、日本のまわりはすべて海。大川の水も、そのまま明国の岸に続いており申す。いくら将軍様でも海に戸は立てられますまい」
　と、言って笑った。

「海には戸は立てられぬか、なるほど」
　と、伊豆守も豁達に笑った。
「しかし、ここには何の目的で来られた。まさか、この伊豆守の首を取りに来たのでもあるまい」
「首は要り申さぬ。しかし、伊豆守様、あなたの心が欲しい」
「心が欲しいとか……、それはまた、どういうことじゃ」
　芝龍は、鋭く光る目をあげて言った。
「ご存じではございましょうが、今、わが明国は、北方から清国に攻めこまれて苦戦しております。明国の運命は、いまや風前の灯。国を救う為に、是非とも日本の力がお借りしたい……、それを申しあげる為に、われら命を賭けて忍んで参ったのでございます」
「ふーむ。日本の援兵を借りたいと申すか。しかし、一介の海賊にすぎぬそなたが、それはまた、やりおるの」
「いや、この鄭芝龍、今は一介の海賊ではございませぬ。明国の皇帝より、水軍の提督に任じられ申した」
「水軍の提督に……」
「左様でございます。明国皇帝は、わたくしめの罪を許してくれたばかりか、国の為に働いてくれよと水軍を預けられたのでございます。一命をなげうっても、期待にこたえるのが、男子たるものの本懐かと……」
「なるほど。それは分る。しかしじゃ」
　と、伊豆守は顔をあげて、言った。

「鎖国はわが国の定法。やはり、これを破るわけには参らぬ」
「なるほど、伊豆守様の立場としては、ご尤もでござる。されど、伊豆守様」
と、芝龍は、ひと膝ぐいっと乗り出してきて、囁くような声で言った。
「あなた様は、将軍家が最も信任されておる方と聞き及び申した。できるならば、あなた様の手でわれわれを将軍家にお引合せ下さらぬか。わたしめは無学な海賊上りでございますが、こちらの陳老師は、拳法の上手であるばかりでなく、学者としても当代屈指のお仁でござります。老師のお言葉をお聞き下されば、あるいは将軍家も」
この言葉は、僅かではあるが伊豆守の癇に障った。
たしかに、鎖国令は、将軍家光の名で発令されていた。しかし、日本国完全鎖国という考え方は、伊豆守の頭から出たものだった。それを捏ねまわし、練りあげ、草案として幕閣に提出し、家光の裁可を得て、伊豆守は、これを発布している。
しかし、伊豆守は、鎖国はわしの考えでやっておるのじゃ、とは言わなかった。
「芝龍殿、そなたにとっては、明国が命にも替え難い国であるように、この伊豆守にとっても、日本は何ものにも替え難い国なのじゃ。折角、泰平を楽しんでいるわが国人を、戦の場に送ることはできぬ」
「なるほど。伊豆守様、日本の武士は何よりも義を尊ぶと聞いておりましたが、やはり、あなた様は座して隣国をお見棄てなさるつもりか」
芝龍は言いたいことを言う性分らしい。きらりと目を光らせて、伊豆守を見据え、
「あなた様は、やはり頑固者らしゅうござるの。今、日本には二十万を超える浪人者が、その日の暮しにも窮して、陋巷にあると聞き申した故、わたくしめはこうしてやって来たのでござる。

差出たことを申すようでござるが、これらの浪人者をこのまま野に放っておいては、如何なことになり申すか、あなた様ほどのお方なら推察はでき申そう。これを、われらに義軍としてお貸し願えまいか。伊豆守殿、世界は広うござる。日本国とて、このままいつまでも国を閉じておられるわけでもござりますまい」
「芝龍殿」
と、伊豆守は目を宙に据え、嗄れた声で言った。怒った証拠である。
「妹を助けていただいたことを忘れはせぬが、それは私事。政治はまた別でござる。最早、お引きとり願わねばならぬ」
自分が発案し、法制化した鎖国政策を、真正面から批判されて、知恵伊豆とまでいわれた伊豆守信綱も、逆上しかけていた。いたく、自尊心が傷ついたのである。しかし、伊豆守は、小なりといえ、政治家であった。取り乱したりはしなかった。
「甚兵衛」
と、呼ぶと、
「このお仁たちを、町方の手の届かぬところまでお送り申せ」
甚兵衛が、縁先で頭を下げると、
「では、道中ご無事で」
微笑を浮かべて、二人を送った。

少林寺拳法

一

湯島天満宮の北方に巨大な寺がひとつあった。天沢山麟祥院という。臨済宗江戸四個寺の一つであった。もとは、報恩山天沢寺と称して、荒れたさびれた古寺であったが、寛永年間に、二代将軍秀忠の命で、家光の乳母春日局の菩提所に指定され、殿閣が築かれ、俄に盛んになった。寛永三年（一六二六）家光が重病を患ったとき、春日局はこの本堂に閉じ籠って、二十一日間の祈禱をした。

　このとき、春日局は次のような誓紙を添えて、仏を恫喝している。

「わらわが身は不浄なりといえども、いやしくも乳味を奉りて、乳母の称を汚し、歳月かしずき奉れり。旦、将軍は万民の父母なり。もし今大故あるときは、国家の安危にかかわれり。よって願わくは、わらわが身をもって、これに替り奉らん。もし恢復あらしめば、忽ちに、身に病苦を受け、誓って、医薬を用いずして死せん。しかれども、わが願いを聞き入れたまわざらば、堂塔伽藍ことごとく打ちこぼち、果てぬ」

と。

　このような局の激情に、たちまち感応があって、家光はまもなく、病気全快した、という。以来、局は、鍼灸薬餌を用いなかった。将軍縁の寺である。

　本堂の左側に、座禅堂があった。

　その縁の下に、菰を敷いて一人の老僧が結跏趺坐していた。吊し柿のような顔をしていた。陳

元贇老師であった。

　まるで、石仏のように動かない。

　やがて、座禅堂裏の竹垣を躍り越えて、一人の雲水が縁の下に這いこんだ。

鄭芝龍であった。竹の皮包みと瓢を元贇の前に置くと、

「老師、食い物を求めて参った」

　芝龍は握り飯を一つ摑みだして、元贇にすすめた。芝龍は方丈に入って、麟祥院の住職高庵禅師から、直接食を乞うてきたのだ。

「済まんな。役人の方の動きはどうじゃ」

「びっしりでござる。蟻の這い出る隙もござらぬ」

「ふむ、では、しばらくの間は動けまい」

　元贇老師は、麟祥院の住職高庵禅師とは旧知の間柄であった。しかし、万一の場合、高庵禅師に迷惑が及ぶのを怖れた元贇は、方丈より座禅堂の縁の下を選んだのである。

　元贇が握り飯を取りあげるのを見て、

「では」

　と、芝龍は縁の下から這い出しかけた。

「どこへ参る」

「今一度伊豆守に会って、何とか説得してみようかと存ずる」

「止めなさい」

　あっさりと、元贇は言った。

「あの男は動かぬ」

「しかし、明国を救うには、どうしても、日本からの援軍が必要でござる」

「芝龍よ」

と、元贇は言った。

「他人に頼ろうとする愚を、わしは、あの松平伊豆守信綱という日本の閣僚に会って知った。いや、他人に頼ろうとする愚を、わしははじめから知っていたからこそ、拳法を編んだのかも知れぬ。わが師、達磨もそうであった。しかし、苦しさのあまり、わしは、それを忘れておった。芝龍よ、日本にも義人はおろう。それを探すんじゃ。あの伊豆守という男はあてにはならぬ」

ぱくりと、一口握り飯を頬ばって、もぐもぐ噛みながら、元贇はつづけた。

「しかし、あの伊豆が、知恵伊豆どころか、馬鹿伊豆じゃといっておるのではない。あやつには、あやつなりにこの国を思う仕事がある。しかも、その仕事が、あの男にとってはいまだ半じゃ。われらに力を貸すなぞという余裕はあるまい。それにな、あの伊豆という男には、明国は救えぬ。器量がちと狭い。あの男は、よくいって徳川という荷車を引く馬じゃ。家康公のごとく、国は一応閉じても、貿易の利だけは、徳川一家で独占しようというような見識もない」

「それでは矢張、知恵伊豆ではなくて馬鹿伊豆ではござらぬか」

と、言って、芝龍は嗤った。

「いやちがうぞ、芝龍、時代というものは、人と世の自然な流れの中で生れ固まる。国を閉じた伊豆の見識が正しかったかどうかは、いまちと時代が過ぎてみなければ決められぬじゃろう。伊豆めが、世界のことを知らなかったために、かえって、この日本の文明が底深くなるということもあり得る」

「しかし、それは、われわれの、今、知ったことではござらぬな」

「左様、今のわれわれには、明国を滅亡から救わなければならぬという仕事がある。おや？」

と、元贇は首をのばした。

読経の声とともに、一群の僧侶が寺を出ようとしていた。しかも、その行列の僧たちのほとんどが元贇、芝龍の師弟と同じ墨染の衣一枚の雲水姿であった。

「やはり、高庵殿の術策じゃ。見よ、芝龍」

「何でござる」

「あの行列の中に混じって、寺を出でよ、というわけじゃ」

なるほど」

二人が一緒に縁の下から飛出した。

芝龍は素早く、酒の入った瓢を掴み、元贇は竹皮の包を懐に入れていた。

饅頭笠をかぶった僧の一団が、経を誦しながら、湯島から悠々と小石川御門前をすぎ、あたらし橋に差しかかってきた。町方の目を暗まし、芝龍と元贇もその中にいた。高庵禅師の策どおり、この一団に紛れこんで見事、麟祥院から抜け出してきたのだ。

そろそろ日も暮れかけていた。

あたらし橋の北詰の番所の前も、僧たちの行列は、寂びた読経の声をあげながら通りすぎた。あとは、神田川に沿って大川に出て、舟が大川を下りさえすればよかった。舟も柳橋の橋下に用意されているはずだった。

しかし、行列があたらし橋の番所前を通りすぎたとたん、前方から小者を連れて、ぶらりぶらりと歩いて来た、着流しに雪踏ばき、黒絽の巻羽織、といういでたちの、一見馬鹿のような顔を

した武士の目が、すっと細くなった。
この男、北町奉行所同心恩田十九郎であった。一見馬鹿のような顔付きをしているが、馬鹿どころか凄まじいほどの切者である。供の小者は、岡っ引のども弥太であった。この男、ちょっとした男前である。これが、恩田十九郎の脇に、すっと出てきて言った。
「ちょいとくせぇね、旦那」
「うむ」
「あの野郎だ」
ども弥太は、正確に芝龍の方に顎をしゃくってみせた。
「うむ、ちげえねえ」
「捕りますかい、旦那」
「二人だけじゃあ、ちょっと無理かな」
「弱気なことを仰っちゃあいけませんや。やりましょう、やりましょう」
「ほ、ほ、ほいきた」
「やりましょうなんていってねぇで、動け。馬鹿」
ぱっと、ども弥太は行列のなかへ飛びこんだ。とたん、芝龍と元贇は行列から躍り出し、饅頭屋の横丁へ走りこんでいった。
「ち、ち、畜生!」
舌打ちをして、ども弥太もまた、向い横丁の饅頭屋の脇に飛びこんだ。
饅頭屋の裏手はもう草っ原である。草っ原といっても、この頃の原は、芝草の禿げちょろけたような薄っぺらな野っ原ではない。五、六尺ほども伸びた青芒がいっぱいに茂っていて、所々に雑木林まであるという茫々たる芒っ原である。こういう草っ原が柳原の籾倉あたりまでつづいていた。
あっという間に、元贇と芝龍は、この草っ原に消えてしまった。追っても無駄だ、と、この辺の主のようなども弥太には分っている。原っぱの端に立って、
「いっ、鼬みてえな奴らだ」
「だから、無理だといったろう」
十九郎がぺっと足元に唾を吐いて言った。同時に、腰から呼子をぬくと、一声鋭く吹いた。
原っぱの四方から、これに応える呼子の音がきこえた。
「ふーむ、旦那は、やっぱし手早え」
ども弥太が唸るのと、十九郎が神田川に沿って駆け出すのが一緒だった。
周章てて一緒に駆け出したども弥太に、十九郎は大声で喚いた。
「てめえは、柳橋から大川淵を洗えい。馬鹿もん。あやつらは、舟で品川へ出ようって魂胆なんだ」
「へい!」
「おれは、外神田へ出るかんだ」
「だ、旦那、しゃ、洒落てる場合じゃあねえ」
「お前も吃ってる場合じゃあねえ」

二

しばらく後、元贇と芝龍は、神田めった町の裏通りへ飛びこんでいた。

この辺りから雉子町にかけては、湯屋が軒を並べて猥雑極まる街である。

湯屋といっても、現代の銭湯とは異う。湯女という淫売が春を売る一種の色町である。

はじめて、湯女が、江戸に出現したのは、天正九年（一五八一）の夏ごろというが、以後、淫売湯女は増加するばかりで、一時は、吉原も、麹町から銭瓶橋、めった町あたりの湯女に押されて、荒れるほどであった。特に、神田めった町は、湯女の方のスター、丹前勝山を出した丹前風呂で有名である。寛永年間は、特に湯屋が一等殷賑を極めた時代だった。

『そぞろ物語』にこうある。

今は、町毎に風呂あり。びた十五銭、二十銭ずつにて入るなり。湯女といいて、なまめける女共、二十人、三十人ならび居て、あかを掻き、髪をすすぐ。さて、又、其外にようしょくたぐいなく、心ざまゆうにやさしき女房ども、湯よ、茶よといいて持来り、たわぶれうき世がたりをなす。こうべめぐらし、一たびえめば、もののこびをなして、男の心をまよわす。

されぱこれを湯女ぶらと名づく。

そういう湯風呂の二階で、加賀爪、阿部、鬼車ら、白柄組の面々が湯女を相手に騒いでいた。

加賀爪甲斐は、素っ裸のままで、熊のような毛だらけの身体を揉ましている。

阿部四郎五郎は、これとは逆に、素っ裸にした女を膝の上に抱きかかえて酌をさせ、ときどき陰部をまさぐっては大笑いしていた。鬼車正則などは、一党の見ている前で堂々と交接していた。

井上伴左衛門といえば、大剣を引き抜いて踊っている。

「そこも揉めい」

と、甲斐が股ぐらを開いて、湯女に命じたときである。

突然、呼子の音が聞こえ、人々の走り騒ぐ音が起った。

「居たぞ」

「そやつじゃ！」

「野郎！」

「おのれ！　引っ捕えい！」

「いてぇ！」

「逃がすな！」

役人の叱咤する声に、弥次馬の叫び声が一緒になって、人々が往来に雪崩れてきた。

元贇と芝龍が追い詰められたにちがいなかった。

甲斐は、女に股間を揉ませながら、耳をそば立てていたが、不意に、

「おい、見てこい！」

と、言った。

「あいよーっ」

と、女は出ていった。

阿部は、裸の女の尻を撫でながら、

「下らん。木っ葉役人の捕物なんぞ、放っておけ」

「なに、退屈しのぎじゃ。木っ端役人どもの手にあまれば、この加賀爪甲斐がぶった斬ってくれるわ」

「ふむ。それも面白い」

鬼車正則が、燭台の火に、抜身の大剣を翳して言った。

「たまには人を斬らぬと、この包平が泣く」

鬼車正則の大剣は、たしかに備前国包平であった。

それも、刃渡り八十九糎、反り三・四糎、元幅三・七糎、先幅二・五糎という鎬造り、庵棟、腰反り高く、踏張りの強い、堂々たる大業物であった。旗本奴はみな差料だけは一流であった。

そういう刀の棟で、鬼車はどういうつもりか、裸の女の尻を撫でては、にたにた笑っていた。

先ほどの湯女が、けろりとした顔で階段をあがってきた。

「どうした。どういう奴が追われておる。盗人か、人殺しか」

と、甲斐。

「坊様だがね」

と答えて、女は、またぺたりと甲斐の脇に坐った。

「坊主だと！」

四郎五郎が膝の上にのせていた裸女を突き放して、立ちあがった。

「はいよーっ。雲水さんが二人。でも物凄く強い坊様たち」

「あやつらじゃ。この間の、糞坊主どもじゃ」

「よし、この間は坊主だと思って、嘗めてかかって、してやられた。今度こそは、叩き斬ってくれる」

四郎五郎、素早く衣服を着け大剣を摑みあげるや、だだっと、真っ先に階段を駆け下りていった。つづいて、白柄組の面々、おっとり刀で表へとび出した。

元贇と芝龍は、既に捕方にとり囲まれ、背中合せに立って、それぞれ両の拳を構えていた。

「ほほう、やっちょるな、やっちょるな、坊主！」

傍若無人に、まず、四郎五郎が弥次馬を掻きわけ、御用提灯をかざした捕方達の前へ出た。

「だ、だれだ！　てっ、てめえは……」

怒鳴ったのは、ども弥太であった。

「白柄組じゃあ！　どけい！　この木っ端役人」

芝神明前で懲りている阿部四郎五郎、今度は物もいわず、芝龍の前へ跳んで出るや、

「くらえぃ！」

必殺の一撃を、芝龍の肩に打ち下した。

とたん、声ならぬざわめきが、群衆の間に起った。芝龍は、両手のひらで、合掌するようにこの一剣をぴたっと挟み止めていたのである。

「うぬ！」

と、四郎五郎は唸った。

同時に、四郎五郎の大剣は柄元から折れ、四郎五郎は勢いあまって地に膝をついていた。その首根へ芝龍の手刀が降った。

ぱらぱらと、抜きつれた加賀爪甲斐、鬼車、井上らの面々が飛びこんできた。

しかし、その時はもう、元贇と芝龍の二人は、群衆の中へ飛びこんでいた。

「おのれ！」

と、追う甲斐ら四人。

群衆は、わあーっと雪崩れて四方に走った。

「ちっ、畜生。邪魔しやがって！」

ぺっと、ども弥太、足元に唾を吐き、傍(そば)で、まるで本物の馬鹿のような顔をして顎(あご)を撫でていた恩田十九郎に言った。

「ど、どうしやす、旦那」

「放っとけ」

十九郎は、何を思ったか、捕物はもう沢山だ、というふうに、血相変えて元贇、芝龍と旗本奴のあとを追っていった、同僚たちのあとは追わず、ぼそりと言った。

「ああいう馬鹿者どもは、そろそろ片付けた方がいいかな、弥太」

「へえ、あっしもそう思うんでござんすがね」

「おまえは、いつも思っただけで動かねえ」

「う、動きやすよ。あ、相手が奴なら……」

「そいつぁ結構。よし」

湯女でも抱いていけといわんばかりに、小粒を一つ懐から摑(つか)み出し、さっと手を出した弥太の掌に落すと、あとはもう、捕物なんぞはどこにあったか、というような顔で、十九郎、雪踏を鳴らして行ってしまった。

ども弥太は、ぽいと小粒を宙に放りあげると、これをまた、ぱっと尻を突き出して逆手で摑み、

「うちの旦那は顔はちょいと悪いが、話のわかる旦那だ。へえ、有難え」

独り言をいいながら、目の前の湯屋へ首を振り振り入っていった。

そのとき、横丁から飛び出してきた黒影が、音もなく二階の屋根へ跳びあがった。鄭芝龍であった。つづいて、陳元贇の顔が、掛け行灯(あんどん)の灯の中に浮いて、二階へ撥ねあがった。

「おお！　いたぞ」

五、六間離れた路上で、この姿を見た鴨嶋藤十郎が喚いた。

「あそこの二階へ上りおったぁ」

「よおしっ」

藤十郎を先頭に、駆け戻ってきた旗本奴が店にとび込んだ。土足のまま階段を鳴らして、二階へかけ上った。

しかし、あっという間に、藤十郎は階段を転げ落ちてきた。辛うじて、上(あが)り框(かまち)の縁で身を撥ね起した藤十郎、

「お、おのれ！」

と、喚いた。

「何が、おのれじゃっ！　この薄ら馬鹿め」

二階から、破鐘(われがね)のような声が降ってきた。と、同時に、階段を踏み鳴らして六尺豊かな大男が降りてきた。

丸橋忠弥であった。

運命の絆

一

忠弥は、激怒のあまり顔面蒼白になり、目を剝いてわなわな震えている藤十郎の前に、ぬうっと突っ立って、言った。
「他人が楽しんでおる場所に、断りもなく乱入し、突き落されたが不服か、小僧」
「こ、小僧だと！」
「小僧が気にくわぬか。気にくわぬならば、張倒してくれようか」
「うぬ！　おのれ、わしらを、白柄組と知っての狼藉かっ！」
忠弥は、せせら嗤って、言った。
「白柄組か、これは面白い。おれは張孔堂の丸橋忠弥じゃ。おのれら、公儀直参を笠に着ての横車。この丸橋を相手に押せるものなら押してみよ。事と次第によっては、手はみせぬぞ」
「手はみせぬと、この素浪人め。鴨嶋、ちと退っておれ。おれが代って相手になってやる」
鬼車正則が、自慢の包平の柄に手をかけて、ぬっと前へ出てきた。
その顔を、忠弥は物もいわず張りとばした。
カッと逆上した、鬼車正則、
「おのれ！」
抜きつけの一刀を忠弥の胴に送った。
しかし、これは空を切った。

忠弥は大男だが、身は軽い。ぱっと撥ねあがって、鬼車に空を切らしておいて、思いっきり、その額を蹴とばした。
そのとき、
「忠弥、止めろ」
二階から声がかかった。
階段に姿を現したのは、由比正雪だった。
「白柄組の方々、ここは浮き世の憂さを流すお楽しみの場所じゃ。白刃は納められいっ」
「おのれ猪口才な口を利きおる。名を名乗れ。わしが白柄組の加賀爪甲斐じゃ」
甲斐が、いよいよおれの出番とばかり、腰の大剣にそりを打たせて、前へ出てきた。
正雪は、その秀麗ともいえる顔に、微かな笑いを浮かべて、言った。
「わしが、張孔堂の主、由比民部介じゃ」
「ふむ。おのれが、土井大炊から土地を強請りとった山師じゃな」
「いかにも、山師中の大山師、由比正雪こそ、張孔堂の主と考えられたい。おぬしらのような無駄飯食いとは、ちと性根の据り方が異っておる」
「おのれ、ほざいたな！　表へ出ろ、正雪」
「馬鹿なことをいうではない。ここで騒ぎを起せば、傷つくのはおぬしらの方じゃ。われら素浪人は失うべき家も身分もござらぬ。しかし、甲斐とやら、おぬしらは、ちとちがう」
「ううーうっ」
と、甲斐は唸った。
「悪いことはいわぬ。ここは大人しゅう引き下った方がよい。ぼつぼつ、お目付衆も来るころじ

や」

「何い！」

「さきほど、小者が一人、ここから真直ぐ奉行所へ走っておる。おぬしら旗本奴も、役人を怒らせるようでは先行きが思いやられる」

正雪は、ども弥太が旗本奴を目の仇にしているのまで知っていたのだ。しかし、外見はあくまで、傲然と反りかえって、言った。

「いずれまた会おう。加賀爪氏」

「勝負は、しばし預けよう。おのおの方、引きあげじゃ」

「いうには及ばぬ」

肩いからせて、加賀爪ら旗本奴は、引きあげていった。

その後ろ姿を見送って、正雪はにやっと嗤った。正雪の真の目的は他にあった。鄭芝龍らを役人たちの手に渡したくなかったのである。

「老師、あの正雪という人物、如何ごらんになりましたか」

鄭芝龍が陳元贇に話しかけていた。

張孔堂の奥座敷であった。

元贇は答えず、腕を組んで瞑目していた。

「人品骨柄といい、胆力といい、只者とは思えませぬな。しかも、この道場には、多くの浪人たちが、彼を頭領と仰いで寄宿しておるもよう」

「ふむ」

と、元贇は目を閉じたまま言った。

「しかし、あの男、凶相じゃ。黒目に一点の星が浮いておる。あのようなのを竜殺眼というてな、ひとつ間違えば、天下を覆しかねぬ奸雄の相じゃ」

「なるほど」

今度は、芝龍の方が黙った。しばらくして、芝龍は言った。

「それだけにまた、力と頼める人物、ともいえませぬか、老師。幕府が動かぬとなれば、あの男の力を」

「借りるというのか」

「いかにも」

元贇は、また瞑目してしまった。

やがて、正雪が忠弥と半兵衛とともに入ってきた。

「いかがでござる」

正雪は、座につくと気軽に言った。

「この張孔堂に入られたからには、最早、旗本奴も役人衆も手は出せませぬ。しかし、しばらくの間は、まず他出せぬ方がよろしかろう」

「お世話になり申した」

芝龍が改めて正雪の前に手をついた。

「それがしは、実は鄭芝龍という明国人でござる。こらちは、わが師、陳元贇老師でござる」

「なるほど、陳元贇といえば、少林寺の老師でござるな。なれば、わが道場で拳法の一手たりともお教えいただければ有難い」

拳法というのは、達磨大師が面壁坐禅九年余、禅の奥儀を極める余暇に編んだ印度風体操術から起ったものだが、もとはといえば、達磨大師が山奥で坐禅したため、野獣の攻撃から身を護るために工夫した術であった。それが嵩山少林寺に伝えられ、いつの間にか武術として完成していったのである。ために、少林寺拳法の盛名は、この頃、すでにわが国でも知られていた。

正雪は、それを張孔堂の門弟達に教えながら、しばらく韜晦しておっては如何、と、二人に勧めたのである。

しかし、芝龍は、自分らが明国からの密使であることを告げて、逆に、正雪らに、明国の滅亡を喰い止めるために、一臂の力を貸してくれぬかと頼んだ。

正雪も、さすがに、これには驚いた。即答ができるような問題ではなかった。

芝龍は、正雪の前にがばっと両手を突いて、

「正雪殿、貴殿が浪人衆を集めてくれ申せば、この鄭芝龍、手前の水軍を大坂表まで、いや、江戸湾までも回航させて明国までお越しいただき申す」

と、まで言った。

こうなると、正雪は堂々と国禁を犯すことになる。失敗すれば磔は必至である。しかも、張孔堂、傍目には門前市をなすがごとくに見えても、門弟の数はいまだ二千に充たなかった。

国禁を犯してまで明国を助けるとならば、もはや日本に帰ることは出来ぬ。ならば、彼の地で、一国を形成できる程の一大勢力を持つことが出来ねば、わざわざ海を渡って行く意味はない。

二千では足りぬ……、と正雪は思った。しかし、今の張孔堂の力では、数万の軍勢を集めることは出来ない。

忠弥は、

「浪人義勇軍か、面白い。日本には見切をつけて、ひとつ広い世界に出て、暴れてみるか」

と、膝を叩いて勇みたったが、浪人義勇軍が集結する以前に、張孔堂は潰され、正雪も追われる身になることは明らかだった。

〈いまだときではない。張孔堂はいまだ弱い。これが本音じゃ〉

と、正雪は腹のなかで呟いて、鄭芝龍を見た。

そのとき、玄関の方から、何やら喚く声が聞こえてきた。

二

数名の小者を従えた、北町奉行所与力片岡万蔵が、門弟たちと押し問答していた。

「御用の筋である。お上に逆らえば只では済まぬ、と張孔堂殿に伝えてもらおう」

万蔵の前に突っ立っているのは、正雪の弟子熊谷三郎兵衛であった。

この三郎兵衛という若者、無学だが、腕はたつ。せせら嗤って言った。

「この張孔堂を軍学道場と心得て推参仕ったか、お役人殿」

「つまらぬことを言っておらんで、早く取次いでくれぬか」

「つまらぬことだと！　おぬし名は何と申したかな」

「北町奉行所与力片岡万蔵と申したはずじゃ」

「なるほど、片岡殿とやら。改めていうが、張孔堂ちゅう所はの、不浄役人には縁のないところと心得えられい」

「不浄役人とは何じゃ」

万蔵、とうとう我慢しきれなくなって、喚いた。

「浪人の取締りは、われら町方の務めなのを、知らぬか。四の五の抜かしておると、片っ端から引っ括ってくれるぞ」
「よくぞ申した。片岡氏、この熊谷三郎兵衛藤原利之自慢ではないが、爺の代からの浪人じゃ。並の浪人とは出来がちがう。引っ括れるものなら、引っ括ってみよ」
「無茶をいうでない。三郎兵衛」
衝立の後ろから、正雪が、その端麗な顔を現して、言った。
「わしが張孔堂の主、由比民部介でござる。ご用の筋を承ろう」
「おお、貴殿が由比殿か。それがし、北町奉行所与力片岡万蔵でござる。ご用の筋で罷り越した」
「して、いかなる御用でござるか」
「当道場に国禁を犯して、密かに明国より入国した二人の雲水がおるはず。引渡していただきたい」
「はて」
と、正雪は首を傾げて、言った。
「そのような者には、一向に心あたりはござらぬが」
「隠されるな、由比殿。二人の雲水がこの道場に入ったのはたしかじゃ。見届けた者がおる。庇いだてするとお為になり申さぬぞ」
「左様か。ならば、ご遠慮は要り申さぬ。踏み込んで家探ししたがよかろう。しかし、もし、お目あての者がおらなんだ場合は、如何なされるおつもりじゃ」
「うむ……」

と片岡万蔵は唸った。
おっ被せるように、正雪は言った。
「この張孔堂は、われらにとっては城も同然。理不尽にも土足で汚されたとあっては、只では済まされぬ。ことと次第によっては、当張孔堂と奉行所との合戦に相成るやも知れぬが如何」
「合戦じゃと」
「いかにも、合戦ならば望むところじゃ」
脇から、三郎兵衛が喚いた。
「目にものを見せてくれるぞ」
その時、
「ははは、いや参った、参った」
雪踏を鳴らして、玄関に入ってきた馬鹿のような顔の同心が言った。
「さし出るようでござるが、片岡様、これは由比氏にも一理屈ござる。窮鳥ふところに入らば、猟師もこれを撃たずとか申す。いや、由比先生、おぬし、あっぱれな武士じゃの。しかし、当道場の塀外は、既に張孔堂のものではござらぬな」
「いかにも」
「ならば、当道場から明国人が脱出するところを引っ捕え申したあかつき、また推参仕ると申し聞かせておく」
恩田十九郎であった。
正雪は笑って応えた。
「よかろう」

恩田十九郎のことであった。
「あやつ、面白い男じゃ」
ぞろぞろと引き揚げていく役人らの背中を見送りながら、正雪は呟いた。
不承不承という顔で、万蔵も首肯いた。
「ふむ」
「後刻あらためて、ということにいたしては如何でござろうか、片岡様」
と、振返って、十九郎は片岡万蔵に言った。
「されば」

夜更け、張孔堂の門扉が八文字に開いて、二丁の駕籠を中心とした行列が粛々と現れた。
肩肱いからして、先頭に立っているのは、熊谷三郎兵衛であった。駕籠脇には金井半兵衛と丸橋忠弥が付添っていた。
忠弥、久しぶりに三間柄の大槍を担いでいる。顔を編笠で隠して、行列の最後に従いているのは由比正雪であった。
闇の中に潜んで、張孔堂を見張っていた捕方の一人が、すわ！　と十手を握り直したとたん、うっ！　と目を剝いた。
その駕籠は、腰黒総網代黄漆塗りという大変な代物で、これは将軍家の駕籠、溜塗り総網代に次ぐ格式のあるものだったからだ。ご三家か、外様でも加賀前田、長門毛利など、国持十八家の乗り物である。しかも、その二丁の駕籠には、こともあろうに三つ葉葵の紋所がうってあり、これを、わざと見せびらかすように、提灯を持った小者が駕籠脇に従っていた。

それが、張孔堂のまわりをびっしりと埋めた捕方の目の前を、悠々と通りすぎていく。
捕方の大将片岡万蔵は目を剝いて、歯ぎしりしていた。
正雪の策だと分っていても、紀州家の紋所をうった駕籠には、手は出せないからだ。提灯にまで三つ葉葵の紋所がついていた。
行列は、しずしずと弁天町から市谷見付へ出て、やがて、四谷御門前で東へ折れ、紀尾井町に差しかかった。
暗闇を透かして見て、駕籠脇の半兵衛がにやりと嗤って、言った。
「犬め、執こく追けてきおる」
「ふむ」
と、首肯いた忠弥、
「あの馬鹿者どもめが、この紋が切り貼りだとは、まさか気がついてはおるまい。この暗さではの」
ぺたぺたと駕籠の紋所を叩いて、哄笑した。
「夜目遠目、笠のうちとはよく言うたものよ」
と、半兵衛。
駕籠のなかから、すかさず、
「それは、金井氏、女の美醜をいう場合に用いる文句ではござらぬか」
と、鄭芝龍の声が返ってきた。
半兵衛、舌を鳴らして黙った。
やがて、行列は紀尾井坂を上り、赤坂御門から諏訪坂を下りて、紀伊大納言の中屋敷の門前に

着いた。
　先頭の熊谷三郎兵衛が、門前に立った、番士に言った。
「国家老由比民部介、ただ今到着仕った。ご開門願いたい」
「由比民部介殿、はて」
と、番士は首を捻った。そのような名前は聞いたことがなかったからだ。とたん、するっと前へ出てきた半兵衛が、低いが、鋭い声で一喝した。
「早う開け。大事な客人をお連れいたしたんじゃっ」
「かしこまった」
　番士、半兵衛の勢いに呑まれたのか、周章てて門を開いてしまった。
　行列は門に入って消えた。
　もの陰から一部始終を見ていた恩田十九郎、顎を撫でて言った。
「張孔堂め、やりおるのう」
「さ、さいでござんすね。しかし、な、何でまた紀州様とこなんぞへ」
「それが分れば苦労はしねえ。おい、弥太」
「へい」
「もしかしたら、あの行列、追い出されてくるやも知れんぞ」
「そしたら、片岡の旦那が困るてえことになりゃあしませんかね」
「おいらは知らねえ」
「とは、ま、また、無責任なことを仰る」
　ぱしりと脛を手で打って、十九郎、

「痒いな、弥太」
「へい、あ、あと二、三十日は蚊も太る」
　下らないことをぶつぶついいながら、それでも弥太と十九郎、紀伊家御門前の脇の闇の中に屈みこんでいたが、十九郎の予想に反して、正雪は紀伊頼宣に引見されていた。

お庭番

一

「わかった」
と、頼宣は言った。
「万里の波濤を越えて、よくぞ参られた。わしは、そちらに頼られたことを嬉しく思うぞ。御使者の趣き、しかとこの頼宣が承った、と、明国王に伝えてもらいたい」
「はは、有難きしあわせ」
陳元贇と鄭芝龍は平伏した。芝龍の目には涙さえ浮かんでいた。
その目で、後に控えた正雪、忠弥、半兵衛の三人を見て、
「よくぞ、かかる御大将にお引き合せ下された。鄭芝龍、明国皇帝に代ってお礼申しあげる」
「何の何の」
と、正雪は笑って言った。
「われらの功ではござらぬ。すべては、われらの如き一介の素浪人の乱入を、お怒り遊ばされもせず、引見下された大納言様の深い度量の賜でござるよ。いまだ張孔堂一門には、義軍を催すほどの力はござらぬのでな」
忠弥と半兵衛は、深夜、紀州家に乗りこむ、それ以外に手はない、と、正雪が言いだした時、面白いと即座に賛同したものの、このようにすらすらと事が運ぶとは思ってもみなかったので、いまだ半ば茫然としていた。正雪は、頼宣と面識を得るための手段として、思いきってこの二人

の明国人を利用しただけだったのだ。
頼宣は、その屈託のない顔に微笑みを浮かべて、正雪に言った。
「それにしても張孔堂、そちも胆の太い男じゃな。このような客人を案内して参るとは」
「畏れ入りましてござる」
正雪は、神妙に頭を下げて言った。
「この方々の志をお分り下さるは、天下ひろしといえども、紀州様をおいて、他にはおられぬ、と存じまして」
「ふむ」
武張ったことの好きな頼宣は、明国から援兵を求められたことがよほど嬉しかったらしい。満足げに首肯くと、
「正雪、これよりは、当家への出入りを許してつかわす。必要とあらば、当家の家紋を用いても苦しゅうないぞ」
「殿、それは！」
周章てて、横から関口隼人正が、口を入れた。しかし頼宣はかまわず、
「民部介。これで、今宵その方が当家の定紋を用いたことを咎める筋はのうなったわけじゃ」
「はは、有難きしあわせに存じまする」
正雪も、改まって、平伏した。
「しかし、殿」
隼人正は、尚、頼宣に喰い下った。
「将軍家には、明国に軍勢を送ることをお許しにはならぬと存じますが」

「馬鹿者っ」
と、頼宣は大喝して言った。
「ならば、上様を取り代えればよかろうが」
「何と仰せられました」
「上様を代えればよかろう、と申したんじゃ」
「そのようなことを！」
と、言って、隼人正は絶句した。
「張孔堂のような浪人の前で言うてはならぬ、というのか、隼人。江戸城、乗っ取りの儀は、年来のその方の策ではなかったのかな」
関口隼人正は、顔面蒼白になって、面を伏せた。
隼人正は、頼宣の気まぐれを慰めるために、これまで、いろいろと骨を折ってきた。駿河大納言忠長の寵臣牧野備後を操って、これを、駿河から追ったばかりか、死なせてしまったのも、実は、隼人正が主人頼宣を喜ばせるために打った、芝居だったのだが、頼宣が本気で謀叛に立上がれば、どういう結果に至るかということは、この策謀家が、一番よく知っていたのである。
将軍家光の側近には、伊豆守ばかりではなく、秀忠以来の忠臣土井利勝もいた。現に土井利勝は、この二人の明国からの密使を闇から闇に葬り去るべく、公儀お庭番の伊賀者を駆使して、密かに策謀を巡らしていたのだ。
頼宣は、いい過ぎたと思ったのか、突然、照れかくしの哄笑を噴かせて、言った。
「民部介、いまの一言は他言無用ぞ」
「はは、何で他言などいたしましょう。それがしも、いずれは時機をみて、明国に向うやも知れませぬ」
「ふむ……、そのときはまた、改めて、余に相談に参れ。二人も」
と、鄭芝龍と陳元贇の二人を見て、
「余にいましばしの時を貸せや。機熟せば、この頼宣が自ら兵を率いて、おぬしらを援けに参る」
「はは、その言葉を戴き、日本まで参った甲斐がございました。これより、われら国許へたち帰り、御来援いただけるまで、力を尽して明国を持ちこたえてごらんに入れまする」
芝龍は、感動に震える声で言った。
「何卒、よしなに」
「うむ、武運を祈っておるぞ」
と、頼宣は首肯くと、正雪らを見て、言った。
「おぬしら、この二人を無事見送って仕わせ」
「かしこまった」
その時、天井裏に張付いていた一個の黒装束が、にやりと嗤った。隼人正の心配は杞憂ではなかった。この黒装束は、老中筆頭土井大炊頭利勝が密かに放った伊賀者だったのだ。
しかし、この黒装束とわずか二間の距離をおいて、今ひとつの黒装束が蹲っていた。
鴉の甚兵衛であった。

この頃――。
服部一夢斎の草庵では。

松平伊豆守信綱、柳生十兵衛らが、囲炉裏をかこんで何か密談していた。
「あの二人、このまま無事に明国へ帰ってくれればいいが」
と、伊豆守が呟いたときである。
庭先で、一声、鴉が鳴いて、甚兵衛の忍び声が炉端まで伝わってきた。
「お師、利勝様は、やはり公儀お庭番を動かして、あの明国人二人を謀殺せんと計っており申す」
「大将は誰じゃ」
「半蔵殿がどうやら動くもよう」
「ふーむ」
と、一夢斎は唸った。この半蔵は、一夢斎の弟で、服部家を継いだ三代目服部半蔵であった。かつては、伊賀の地で、甚兵衛とともに一夢斎から術を学んだ伊賀流忍者の錚々(そうそう)である。今は、お庭番の頭領として、大公儀の伊賀者を束(つか)ねて、密かに暗躍していた。
「それは困ったのう」
「いかにも」
いつの間にか、甚兵衛は土間の端に姿を現して蹲っていた。
「しかし、お師のゆるしがあれば、わしが半蔵殿と……」
「馬鹿者」
と、十兵衛が言った。
「もはや戦国の世ではない。伊賀者同士が争うことはなかろう。一夢斎殿、何かよい策はござらぬか」

「ござらぬ」
一夢斎も腕を束(つか)ねて考えこんでしまった。
忍者というものは、雇い主のためにだけ、おのれの死力を尽して働くものであった。同じ伊賀者同士とはいえ、一旦、敵味方に分れて争うことになれば、凄まじい殺し合いが展開することになる。
しばらくして、一夢斎が言った。
「十兵衛殿、いかがかの。この度のお庭番の動きは、但馬守殿に抑えてはもらえまいか」
十兵衛は答えなかった。
公儀お庭番は、大目付柳生但馬守宗矩の支配下にある。すでに、お庭番が動いているとすれば、これを但馬守が知らぬわけがない。十兵衛三厳(みつよし)は、但馬守の嫡男だとはいえ、廃嫡になった身であった。公儀お庭番の動きについて、意見をいえる立場ではない。
志乃は、炉端に坐って、静かに茶をたてていた。
一夢斎の目が、志乃を見、土間に蹲った甚兵衛を見た。
——やるか、お師、であった。
甚兵衛は、実は、一生に一度は公儀お庭番の頭領、服部半蔵と術くらべをしてみたかったのである。
〈あやつ、この十年のうちに、どれほどの男になったか、甚兵衛の手で確かめてくれようか〉
と、一夢斎を見た甚兵衛の目は、青白い焔(ほのお)をあげて燃えていた。
一夢斎は苦りきって、目をそらした。とたん、一夢斎は唸った。

志乃の姿が、炉端から煙のように消えていたのである。

二

すでに丑三つ（午前三時）を過ぎていた。
紀州屋敷の表門が開いて、再び張孔堂の行列が出てきた。
向い側の、滝村小太郎邸の門塀の陰に蹲った、ども弥太が、悔しそうに呟いた。
「こ、こりゃあ、ど、どうしようもねえ」
張孔堂の行列は、駕籠から提灯まで、相変らず三つ葉葵の紋所を浮かしていたのだ。
「弥太よ」
と、これは、塀の下に長々と寝そべった恩田十九郎が言った。
「今度の三つ葉葵は本物だな」
「な、なんですって」
「先刻のは張り紋、今度のやつぁ、本物じゃというておるんじゃ」
「ふーむ。だ、旦那は人が悪いや。何で、さっきそういわなかったんですかい」
「馬鹿もんめ。張り紋だとて、紋は紋だ」
「な、なるほど。てえことになると、こりゃあもう完全に逃げられやしたね」
「そうかな」
「そうでごさんすよ。あっしの方は、別に悪気があって黙ってたわけじゃあ、ありゃせんがね。さっき、ちょっと柳橋から品川あたりまで突っ走ってみたときに……」
「ふん」

「見ちゃったんですよ。お、お察しの通り、二、三日前から大森沖に、それらしい船がへえっておりやすんで」
「おいらもそうだと思ったよ」
「じゃ、じゃあ、旦那ぁ、に、逃げられてもいいんですかね」
のそりと起きあがって、十九郎は言った。
「どんな船だったい」
「表向きは、伊豆からお城普請の石を運んで来た船ということになっているそうでやすが、あれぁ、むこうの船でやんすね」
「なるほど、じゃあ行くか」
と、言った途端、十九郎の影はすでにそこになかった。
「だ、旦那」
ども弥太も、ぱっと駆け出した。
しかし、二人の駆け出した方角は、行列が消えた方向とは逆だった。
十九郎は、四谷御門の方に向って、駆け出したのだ。
それから一刻ほど後。
張孔堂の行列は、品川を過ぎてやはたで東に折れ、羽田弁天下の森を抜けて、静々と大森海岸に向っていた。
行列の先頭では、熊谷三郎兵衛が、相変らずあたりを睥睨しながら歩いていた。しかし、半兵衛は行列から一丁も先行していたし、忠弥の姿は駕籠脇にはなかった。
提灯の火はすべて消えていた。

正雪だけが駕籠脇にいる。

松並木が断れて、漁師小屋が建ち並ぶ、網引場に出た。生臭いような汐風が、砂塵を巻きあげて吹いていた。

先行する半兵衛の影が、一軒の漁師小屋のかげに、吸込まれるように消えた。

とたん、散在する漁師小屋の屋根の上に、無数の黒装束が出現した。

「駆けろ！」

駕籠脇から、正雪が喚いた。

どっと、張孔堂の行列は駆け出した。

しかし、行列は一丁も走ることが出来なかった。

前方の浜に、忽然と、二十名はらくに超える黒装束が出現し、これが疾風のように、行列に襲いかかったのだ。

三郎兵衛が、白刃を風車のように旋回させながら、その一団に飛びこんだ。忠弥が、凄まじい雄誥をあげて、暗がりからとび出してきた。

「う！」

音もなく、正雪の頭上に、一個の、黒影が降ってきた。

腰を沈めて、正雪、抜き撃ちにこれを切っ払った。同時に、漁師小屋の屋根から、白刃を逆手に握った黒影が、駕籠の屋根に舞下り、気合もかけずに、白刃を駕籠に突き通した。

一瞬の差で、駕籠から転げ出た、陳元贇の胸を狙って、闇の中から手裏剣がとんだ。

がっ！

間一髪、正雪はこれを撥ねあげた。

「かたじけない」

一回転してはね起きた元贇は、起きあがりざま、左手の黒影の胴に拳をぶちこんでいた。芝龍も、いつの間にか白刃を手にして暴れまわっていた。

しかし、行列を襲った黒装束群は、あまりにも多かった。正雪が教えただけでも、二十名は超えた。しかもそれら一人一人が、凄まじい猛気を秘めていた。服部半蔵指揮下の公儀隠密団に紛れもなかった。

行列に従ってきた張孔堂の門弟は、わずか十五名にすぎない。それも、戦いの初端に、半分以上が傷ついていた。

〈やられたか〉

と、正雪は思った。

その時、三個の黒影が街道から疾風のように駆け下りてきた。一人は、山岡頭巾に頭をつつんだ着流しの武士、もう一人はこれも頭巾で顔をつつんでいたが、縞の着物の尻をはしょげた町人で、いま一人は、黒装束に黒竹の杖を手にしていた。

恩田十九郎、ども弥太、志乃の三人であった。ども弥太も、今は長脇差を一本ぶちこんでいた。十九郎は、目の前に飛び出た黒装束の一人を無言で斬っ払うと、真直ぐ正雪の脇に駆け寄ってきて、

「敵ではござらぬ。お味方いたす」

ぱっと、また一人の黒装束を斬り倒した。その馬鹿面からは想像もできない腕の冴えであった。

志乃の仕込も、凄まじい唸りをあげて荒れ狂っていた。ども弥太はといえば、これは、白刃を片手なぐりに鼬のように砂浜を駆けまわっていた。

忠弥と半兵衛は、いずれも四、五名の黒装束に囲まれて押され気味だったが、ども弥太が音もなく駆け寄って、
「ど、どなたか、ぞ、ぞんぜぬが助勢いたす」
武家言葉で喚いて、その一人の腰を斬っ払ったとたんに、立直った。
「うおーっ！」
と、忠弥は血振いした。その脇を、陳元贇が脱兎のように駆けて宙に跳んだ。激しい蹴りで、一挙に二人の黒装束がのけ反（ぞ）った。
乱戦になった。
ばたばたと黒装束は砂浜に這っていった。しかし、一向にその数は減らなかった。
明国の密使二人を、絶対に船に乗せてはならぬ、と土井利勝から厳命された服部半蔵は、手持ちの伊賀者すべてを引き連れて、大森海岸に、闇の奇襲陣を張っていたのだ。
ども弥太が、四人の黒装束に追っ取り込まれて、ほとんど立往生している、芝龍の脇に駆け寄って、言った。
「て、鄭さん、ふ、船、来てござる」
同時に、摑んでいた砂を、目の前の黒装束の顔面にはたきつけた。
その時、十九郎は、元贇のうしろから声をかけていた。
「陳殿、こっちじゃ。舟がきてござる」
「う！」
と、元贇は振返った。
「わしを信じられい。こっちじゃ」

喚きざま、十九郎は、元贇の脇を駆けた。元贇は、十九郎のあとを追って走った。
網引場の渚（なぎさ）で、小舟が揺れていた。その中に一人の黒装束が蹲っていた。鴉の甚兵衛であった。
「乗られい。あれは鴉の甚兵衛殿じゃ」
芝龍も、ども弥太とともに走ってきた。
追って来た伊賀者を、気合もかけずに十九郎が斬り倒した。
二人を乗せた舟が出ていった。
漁師小屋の屋根上で、伊賀者を指揮していた服部半蔵がこれを見て、
〈甚兵衛め〉
低く呻（うめ）いた。一吹き、〝退き〟の指笛を鳴らした。
舟上では、艪（ろ）を漕ぎながら、甚兵衛が二人に言っていた。
「これは、楓様をお助け下されたお礼でござる。ついでに、伊豆守様のお言葉もお伝え申しておこう。二度と、わが国には来られぬよう、かように申しておられた」
その頃、凄まじい血闘が繰りひろげられたのが嘘（うそ）のように、砂浜には人影ひとつ見えなくなっていた。

五章

春日局

一

「さ、ちっと笑うてみなされ、竹千代君。え、この春日のいうことが聞こえませぬか……。竹千代君も、あと三日でお誕生日じゃ。ほらほら、よい子じゃ。上様はこの春日にとっては、おそれ多くも、わが子同然。すれば、竹千代君はお孫様……、このばばに、お愛想笑いのひとつくらいは、して下され、ほほう、よい子じゃ……」

江戸城大奥で今日も、春日局は家光の子竹千代を、目を細めてあやしていた。周囲の者が、はらはらするような可愛がりようである。

家光には、正室、京関白左大臣鷹司信房の娘孝子の他に、お楽の方、お万の方と二人の側室があった。しかし、正室には子がなく、竹千代はお楽の方の腹から生れている。

将軍家光から母のように慕われている春日局は、今は大奥の主のようになっていた。春日局のいうことで通らぬことはない。竹千代を、若君はばばが預かりましょう、と、生れて間もなく自分の局に強引に引き取ってしまったのも春日局である。女房達ばかりでなく、大名達さえも、この大奥の主には頭があがらなかった。竹千代君が病弱なのは、春日局様が大事にし過ぎるからだ、と陰口を利く者はあったが、それを当人にいう者はいない。

「ほほう、よい子じゃ、よい子じゃ」

春日局は、女房たちには一度も見せたことのない恵比須顔で、竹千代をあやしていた。この子が四代様の座につけば、春日局の大奥での権力は生涯揺ぎないものとなる。

局が、竹千代を抱きあげてあやしながら、機嫌のいいのも道理であった。

やがて、局の廊下に摺足の音がして、

「お局様」

襖のむこうから老女初瀬が声をかけた。

とたん、春日局の顔は、いつもの他所行きの厳しいものになった。

「入りやれ」

「はい」

襖を開けた老女初瀬のうしろには、三方に巻物を載せた茶坊主が控えていた。

「何じゃ」

「あのう、紀州様から竹千代君様の、お誕生日のお祝いが届きましたのでござりまする」

「見よう」

初瀬は、茶坊主から三方を受取って捧げてきた。

「狩野探幽筆の巻物とか」

「ふむ」

初瀬は、巻物を春日局の膝前にひろげた。

堂々たる虎の絵であった。

春日局は、目を細めて、しばらくこれを眺めていたが、突然、厳しい目で初瀬を見て言った。

「初瀬、この巻物はお返し申せ」

「え！」

仰天して、初瀬は言った。

「お局様、お相手は、上様の叔父紀州頼宣様でございます。そのようなことをなさいましては……」
「どうなると申すのじゃ」
「はっ」
と、面をあげた初瀬に、嚙みつくような勢いで、春日局は言った。
「相手がたとえどなたであろうと、この大奥にも上様にも、指一本ささせぬわっ。初瀬、考えてもみい。竹千代様は兎年、虎は兎を食う獣であろうが」
「はっ、はい」
それは言掛りではござりませぬか……、しかし、初瀬は一言ものをいわず、目を伏せた。春日局という女の酷薄無残ともいえる本性を、初瀬は知りすぎるほど知っていたからだ。
家光が生れた慶長九年の秋から、春日局は家光の乳母として、この江戸城の大奥に入っていた。
それから三十余年……。
しかし、不思議なことに、今や、当代比すべくもない権勢の座にあるこの女性の、前半生は不明なのであった。
自らも、その前半生については、誰にも、一度も語ったことがない。
姓は斎藤、名は福。明智光秀の麾下にその人ありといわれた斎藤内蔵之介利之の女、母は稲葉通明の家より出ているといわれていたが、これを証明する者は一人もいなかった。
斎藤内蔵之介という人物は、あまりに有名である。その豪傑ぶりについても逸話が多い。
内蔵之介は、一時、稲葉一鉄に仕えていたが、光秀が士を遇するに厚い武将だと知って、一鉄の許を去り光秀に仕えた。

一鉄は、内蔵之介を返してくれと光秀に申しこんだが、光秀がきかなかったので、信長に訴えた。
そこで、信長は、
「斎藤は一鉄の家来の由、返して仕わせ」
と、命じた。
しかし、光秀は、
「斎藤は、得がたき知勇の士でござる。かかる豪傑を拙者が召しかかえましたのも、他に理由があるわけではござらぬ。ひとえに君のおんため、よき働きをしてご奉公せんがためでござる」
と、抗弁した。
信長は怒って、光秀の髻を摑み、
「おのれ、おれのいうことが聞けぬか」
と、これを捩りあげた。
しかし、光秀は屈せず、
「こればかりは殿の仰せでも、きくわけには参らぬ」
と、白眼を剝いて、また抗弁した。
信長は、かっと逆上して、
「おのれ！」
とばかり、二、三間も突き飛ばしたばかりか、斬ろうとして脇差に手をかけた。光秀は素早く隣座敷に逃げて、これを躱した。しかし、この信長のやり様が、光秀にはよほど口惜しかったとみえ、

「面目を失った」

と、ぽろぽろと涙を流しながら退出していった。

これを見た城中の人々は、明智日向守はただごとではない、と囁きあったという。つまり、内蔵之介の争奪に絡まる怨情が、光秀謀叛の原因のひとつに数えられているほどなのである。

内蔵之介は、光秀叛乱のときも大いに活躍した。山崎の合戦でも、凄まじい働きをし、戦い敗れると知るや、巧みに戦場を離脱して、生国美濃に潜伏するつもりだったのか、東にむかい、大津まで行ってとらえられ、粟田口で磔にされた。秀吉も、内心では内蔵之介の命だけは助けたかったのだが、それでは世間が納得しない、筋だけは通すべきだ、と石田三成にいわれ、仕方なく、これを殺したといわれる。

このとき、お福はまだ四歳という幼さだったので、母の従兄弟の稲葉重通に引きとられ、のち、重通の養子の稲葉正成の妻になったという。

正成は秀吉に仕え、秀吉の命で小早川秀秋の家老となり、五万石を食む大身となったが、関ヶ原の役の翌年、主人と意見が合わず、小早川家を退散した。一族全員が甲冑を身につけ、鉄砲切火縄を携えて岡山城をたち退いたというのだから、追手がかかったら、あえて一戦も辞さない覚悟だったと知れる。

岡山をたち退いてのち、正成は生国美濃に閑居していたが、その間に下女に手をつけた。お福は激怒し、その女を斬り、ひとり京に出た。一説によると、下女ではなく、妾で、正成が他に囲っているのを知って、正成の不在中にこの家を襲い、刺殺したのだという。まことに激しい。

しかし、お福が京にいたのは一年足らずだったらしい。

慶長九年、家光が生れると、幕府は民部卿局という女中を上京させ、乳母になる者を探させた

が、当時の京の女は、関東はいまだ恐ろしい僻地だと信じていたため、関東に下るという者はなかった。

仕方なく、当時の京都所司代板倉勝重が、乳母募集の高札を粟田口に立てた。お福は、その高札を見て、所司代屋敷に応募して出た。

板倉がお福に会ってみると、斎藤内蔵之介の女で、稲葉正成の妻であるという。

「生家といい、養家といい、夫といい、すべて武勇すぐれた立派なものじゃ。あっぱれ天下を治め給う将軍となり給う若君を育て申すには、かっこうの者じゃ」

と、板倉はこれを関東に送ったというのだが……。

こういうお福の申しようを証明する者は一人もいなかった。

斎藤家の系図には、男女十人ありとあるが、長男虎松は父に先立って死に、次男甚平は山崎の合戦で討死し、三男利宗を長として末女のお福にいたる数人の子女は、逆賊の遺児として、落葉の音にもあわれをもよおすごとき、流寓の地に送られたといわれている。けだし、その悲惨な生立ちについては、これを見届けている者はなかったのである。

世人が疑う余地のない事実は、成長して稲葉重通の養女となり、美濃の豪族、稲葉正成に嫁し、正勝、正定、正利の三男を生み、のち、離別して、慶長九年徳川家に、家光が生れるにおよんで、召し出されて乳母となったということだけであり、稲葉重通の養女になるまでのいきさつは、茫々として不明なのである。

自らを逆臣の遺児ということにしておけば、生立ちの不明を、そのまま秘しておくことができる、と賢明にも思いついたのであろう——、と、穿ったことを囁く者もあった。

いずれにしても、落魄の苦をつぶさに舐めた幼少時代に、この賢女の、凄まじいまでの陰険な

人生観は培われたに相異ない。

二

初瀬が竹千代を抱いて去ったのと入れちがいに、小坊主が忍びやかに入ってきて、両手をつかえた。

「土井大炊頭様、お見えでござりまする」

春日局は、首肯いて立ちあがった。

木の香も新しい完成したばかりの宏壮な白書院で、土井利勝は、扇子を音たてて閉じたり開いたりしながら、広縁のかなたにひらけた庭苑を眺めていた。

乱世武略の時代が、既に遠い昔となった今、幕閣の政治の枢密は、ほとんどこの利勝と松平伊豆守の手中に帰した観があった。

利勝は、面貌は魁偉ともいえたが、その態度には、いうにいわれぬ飄々たる雰囲気がある。

春日局が、面前に坐ると、利勝は早速、

「伊豆守殿にも困ったものじゃ」

と、言った。

別に周囲を憚るでもない高声である。伊豆守と春日局の昵懇な間柄は知っての上での発言であった。

「伊豆守殿がいかがいたしたのじゃ、大炊殿」

「なに、別に大したことではござらぬがの。近頃、ちと遊びが過ぎはせぬかと思うての」

「相変らずの微行のことでおじゃるか」

「左様」

と、利勝は笑って言った。

「この間も、伊豆めにしてやられ申した」

「それはそれは、大炊頭様ともあられるお方が……」

「ふむ、海には戸はたてられぬと申してな……」

利勝は、すでに、服部半蔵から報告を受けていた。明国より潜入した二人の咎人を、こともあろうに、松平伊豆守の手の者が、海の彼方へ逃がしてしまったのだ。正面からこれを激しく誹謗するよりも、この政治家は遠まわしに匂わすにとどめておいて、

「竹千代君のご容体はいかがでござる」

と、話題を転じた。

「近頃、ことのほか、お丈夫になられ申した」

「左様か」

と、利勝は、じろりと上目使いに春日局の顔を見て、

「それは重畳、では」

と、立ちかけるふりをして、ふと、声を落すと、

「上様は相変らず、これの方には余りお親しみにならぬのか」

人差指と中指の間から、拇指を出してみせた。

局は、唇を押さえて笑って言った。

「あの上様のお病気にも困ったもの。でも、このわらわでは、それは務めらぬことゆえ」

「当然じゃ」

憮然として、利勝は顎を撫でて、言った。

「お万にだけは、心ゆるしてお通いなされておられるが、何さま、お万は病弱ゆえ、とてもややこが生めるほどの身体ではおりゃりませなんだ」

「ふむ。春日殿」

突然、真剣な目になって、利勝は言った。

「お万の方殿に匹敵するほどの女は、大奥三千の女たちの中にはおられぬのかの。将軍家にお子が一人というのは、いかにも心細い。上様も、まこと悪い癖をお持ちじゃ」

利勝のいっていることは、家光の稚児趣味のことであった。

家光は若い頃から、女には全然関心を示さず、美少年ばかりを寵愛してきた。そういう家光の寵臣の数は多いが、最も有名なのは、堀田正盛と酒井重澄の二人である。

堀田は、春日局の継孫で、その養子分になった人物で、あとで老中にまでなっている。また酒井重澄は、本来は酒井姓ではなく、飛騨の国守であった金森可重の七男であったが、非常な美男であったので、家光に寵愛された。家光は愛するあまり、酒井忠勝の養子分として、酒井の名を名乗らせた。酒井という姓は、徳川家にとっては、容易ならぬ名である。家光が、重澄をどれほど寵愛していたかが知れる。しかし、家光は、この重澄が、病気で引き籠っているあいだに、妻や側室に子を生ませたというので、嫉妬し、重澄は、備後福山の水野日向守勝成に預け、家は取潰してしまった。

寛永元年（一六二四）、鷹司信房の女孝子を正室として迎えたが、このころの家光は、美少年にしか興味を感じない上に、相手は家光より二つ年上の二十三歳、しかも凄まじいほどの嫉妬心

の持主だったので、二、三カ月後にはもう家光は本丸から中の丸に移して、そちらにはまるで足ぶみもしなかった。

春日局をはじめとして、幕府の重役はこういう家光の性癖に頭を痛めた。男相手では、世継ぎがとれないからだ。

春日局は家光を説きつけて、自分の孫にあたる、おふりを宛がったが、これに千代姫（のち尾張光友に嫁す）を生ませると、もう用は済んだとばかり、また男色専門になった。

次に、春日局が勧めたのが、お楽の方である。しかし、これも、一子竹千代が生れると、もうお役済みとなった。

ところが、家光自身が、ついに自分の方から女に目をつけるときが来た。

おふりが千代姫を生んだ翌々年、伊勢の慶光院の女住職が、新たに跡目を継いだお礼言上のために、江戸へ来て家光に拝謁したのだが、家光は、これに目をつけたのである。

お目見えが済んだ後、この尼公が退出するや、家光は春日局を呼んで、

「慶光院のあの住職、気に入ったぞ。何とかせい」

いとも気軽に言った。

これには、春日局も驚いた。

しかし、家光が、三十六歳にして、はじめて自分から女に心を動かしたのだから、何とかしなければ、と思った。

ともあれ、春日局は、

「かしこまりました。必ず、仰せの通りにはからいます」

と答えておいて、大老酒井忠勝に相談した。忠勝も、相手が尼ときいて驚いたが、これから、

家光の心が女に向いて、後継ぎが生れてくれれば、これに越したことはない、と思い、
「何とか、御上意にそうよう取りはからいましょう」
と引き受けた。
忠勝は、尼公を呼んで口説いた。相談という形式ではあったが、権力者の相談は命令である。
結局、尼公は承諾せざるを得なかった。これがお万の方である。
家光は、このお万の方が気に入り、この頃は、美少年らも退けて、お万の局へ通い詰めであったのだ。
しかし、お万の方は、六条宰相有純の姫君で、七歳の時から慶光院に入室して得度（とくど）し、六代目の住職の座に就いたという、京都の名門の出であった。
ために、京都朝廷の勢力が関東に伸びてくるのを怖れた春日局は、お万に子ができたと知るや、堕胎薬を服用させては、これを流してしまったのである。その事実を隠蔽（いんぺい）するために、春日局は、お万病弱、と柳営（りゅうえい）に言触（いいふら）していたのであった。怖しい女である。
土井利勝だけは、この事実を知っていた。
春日局の前に坐った利勝の目に、一種皮肉な微笑が浮かぶのをやむを得ない。
「お福殿」
と、利勝は言った。
「今ひとり、丈夫な婦人を見つけてさしあげねばいかぬな」

姿不見橋

一

あくる日の暮れ方、紀州邸では——。
関口隼人正が、頼宣の面前で、拳を震わせて怒っていた。
「あのお多福め、このままですておきますまするか」
しかし、頼宣は皮肉に笑って、言った。
「ふふう。虎は兎を食うか。お福はそのように申しておったか、ふふふ」
「殿、笑いごとではござりませぬ。このままでは、殿の面目まる潰れでござる。表使いからその口上を聞きまして、邸へ帰るまで腹が立って、腹が立って……」
「もうよい、隼人正」
と、頼宣も、今度は不快げに吐きすてた。
「わしも、腹は立っておる」
「さようでござろう」
「お福はわしが嫌いなんじゃ。上様を手塩にかけて天下人にまでした女（おなご）。たしかに、あやつ、並の器量ではない。しかし、わしにだけは変に悪意をちらつかせおる。おそらく、わしが上様に取って代って、ご本家を乗っ取る、とでも思っておるのじゃろう」
「殿。大奥の権力を一手に握り、上様に一番気に入られているお福めが、かような有様では、何をするにも面倒でござるな。いっそ……」

「いっそ、何じゃ」
「……いや」
「いやではない。いうてみよ」
「なれば……」
「ふむ」
「竹千代君は、あの通りご病弱でござる」
「……」
「お世継ぎがあの様では、上様も、さぞやご心配のことでござろう」
「左様さな」
「上様ご寵愛のお万の方様にもお子はごさらぬ。しかし、でござる」
「ふむ」
「でござれば、殿の手で、上様へ側女を差出されたら如何でござろう。それが和子様でもお生みなされば、殿は表向きはおろか、大奥までも」
「馬鹿なことを申すな。わしの息のかかった女と知って、春日局が、上様にすすめるわけがなかろう。それに、わしはまだ若い」
と、言ったとき、頼宣の目は異様に光った。
「はっ！」
わが殿は、本気で、将軍の座を狙っておられる——関口隼人正は、周章(あわ)てて目を伏せた。
「のう、隼人正。あの明国の二人は無事に帰ったのであろうか」
しばらくして、頼宣が言った。

「殿、それは一時(いっとき)の戯言(ざれごと)として、お忘れ願いとう存じます」
「何故じゃ。あの二人はわしを頼ってきたたし、わしは約束したのじゃ。約束を違えるわけにはいかぬ」
それは、すでに、土井利勝の知るところであります——、そう言いかけて、関口隼人正は黙った。事を表沙汰にすれば、いやしくも御三家の屋敷に隠密を潜ませ、三つ葉葵の駕籠(のりもの)に白刃をかざして襲いかかった、と認めることになる。土井利勝とて、それは望むところではあるまい。だから、殿も……、と、関口隼人正は思うのだった。しかしまた、公儀より何らかの沙汰があったときは、一切の責任を負うて自刃する覚悟も——この策謀家の胸にはできていた。

その頃、小石川久保町から、鷹匠町に至る善仁寺門前を、一人の酔漢を両側から支えて、丸橋忠弥と金井半兵衛が歩いていた。
二人に支えられた酔漢は、御鷹匠支配同心、山辺三十郎であった。
近頃、張孔堂には、正雪の名声を慕って、浪人衆ばかりでなく、微禄の御家人まで入門してくるようになっていた。
山辺は、腰どころか、首が据らないほどに酔っていた。
半兵衛が忌々(いまいま)しげに舌打ちした。とたん、山辺は、むくっと首をあげて、喚いた。
「いやあ、先生方。もう結構でござる。あれに見えるが、わが鷹匠戸田玄蕃殿支配の、戸田組組屋敷でござる。では、さらば。ああっ、さらばじゃ」
「何をいっておるか」
今度は、忠弥が舌打ちした。

「あそこまでは、まだ三町はござるぞ、山辺氏。折角ここまで送って参ったのじゃ。屋敷まで送って進ぜよう。ここでわしらが戻ってしまったら、おぬしは路端で夜を明すということになるやも知れぬ」

「いや、そこまでは酔うてはおり申さぬ。ういっ！」

と、吃逆(しゃっくり)をひとつして、

「それはともかく、先生方はよく呑まっしゃる」

と、山辺三十郎は白眼を出した。

張孔堂では、この日、かつて、死んだとされた楠不伝の三回忌の法会を大々的に催し、昼すぎから酒宴を張ったのだが、この山辺三十郎、忠弥と半兵衛の脇に坐ったのが運のつきだった。

大盃を無言でぐいぐいと干していく忠弥と半兵衛につられて、つい飲みすごし、気が付いたときは、白刃を抜いて荒れ狂っていたのである。仕方なく、半兵衛が白刃を叩き落して、取押えたものの、そのまま一人で帰したのでは、帰途またどんな間違いを犯すやも知れぬ、と、忠弥と半兵衛が送って出たのだ。

「おぬしが弱すぎるのじゃ。決して、われわれがよく呑むというのではない」

忠弥は、何故か、浮き浮きした声で、言った。

「いやあっ、うい！　強い。丸橋殿は、五升は楽に呑まれたはずじゃ。かくいうそれがしが見ておっただけでも、たてつづけに、あの大盃に七、八杯。あの大盃は、五合入りでござるぞ。五升は、たしかに、呑んでおる！」

「いや。それほどでもない。一斗は呑んだじゃろう。のう金井氏」

「いや、二斗は呑んだのではないかな。おぬしの傍の四斗樽が、一等早く空になっておったわ」

「うわははぁ！　一斗でござるか、これは愉快、愉快でござる。かくいうそれがしも、酒には目のない方でござるが、一斗呑んだという話は聞いたこともござらぬ」

と山辺三十郎。

「なに、この金井氏はな、二斗は呑む」

忠弥は戯(ふざ)けているのではない。大真面目なのだ。

たしかに、金井半兵衛、枯木のように痩(や)せているくせに、酒だけは八岐大蛇(やまたのおろち)と五分に張りあえるぐらい呑む。忠弥も、酒量では半兵衛に一歩ゆずる。しかし、忠弥には、しばらく寝て、また呑むという、特技がある。何昼夜かぶっつづけの呑みくらべをしたら、あるいは、忠弥に軍配があがるかも知れない。

やがて、半兵衛、忠弥、三十郎の三人は、山辺を彼の屋敷に連れこんできた。

「おそで、只今戻った！」

と三十郎が喚いた。

おそでというのは、三十郎のたった一人の娘であるということは、張孔堂では戸籍係も兼ねている半兵衛は知っていたが、現実に玄関に迎えに出た、娘の姿を見て、忠弥も半兵衛も、一瞬、息をのんだ。それほど、おそでは美しかった。

おそでは、玄関に三つ指をついて、

「わざわざ、お送りくださいまして、有難うございます」

と、丁寧に挨拶したが、忠弥も半兵衛も、その美しさに半ば茫然となって、答えはしどろもどろ。忠弥は、それでも、

「いやぁ……、その、山辺氏は、明日は、その、上様の大事なお勤めがあるよし。万一のことが

あってはと存じて、お送り申した。では、ごめん」
と、大声で事情を告げて、おそでに尻をむけたが、半兵衛は、
「ご丁寧に恐れ入ります」
と、再び頭を下げたおそでの襟足を、しばし、呆然として眺めていた。
しかし、将軍家が、あくる日、鷹狩をするということは事実であった。

二

あくる日、辰の下刻（午前九時）――。
将軍家光のお鷹狩の行列は、静々と江戸城大手門を出た。
朝靄のただようなかを、御先払い、鼻馬、沓箱、御徒士、挟箱、台傘、曲彔、床几、組頭、徒目付、小十人、薙刀、御側衆、御茶弁当、槍、鉄砲組、簑箱、雨覆、御召馬、そしてお駕籠とつづく。
御供の諸奉行や、御目付や、書院番や小姓組は、ずっと、数町も後方にあった。
鉄砲組の前に、こぶしに鷹を止らせた鷹匠が三名、目立っていた。
その三名のなかでも、真ん中の一人、山辺三十郎はひときわ目立っていた。かっと見開かれた目は、充血して真赤に血の筋が浮き出し、鷹をのせた拳は、ぶるぶるふるえていた。そのために、他の二羽の鷹は悠々と静まっているのに、三十郎の鷹だけは落着かず、たえず、きょろきょろ目を動かし、首を振っている。
三十郎、完全な二日酔だったのである。
忠弥や半兵衛のような強者を相手に、この四十はとっくに過ぎた老鷹匠が、五升ちかい酒を呑

んでしまったのだから、どう仕様もなかった。
昨夜は、忠弥と半兵衛が帰ったとたん、式台に転倒した。おそでが寝室に連れていこうとしても、無駄だった。
「父上、父上」
大事な御用を翌朝に控えた三十郎のこの様が、おそでは不安だった。身体を揺さぶって起すたびに、三十郎は虚な目をあけ、餓鬼のように、
「水、水をくれ！」
と、呻いた。
丼五杯の水をごくごく呑み干し、そのまま朝方まで凄まじい鼾をかいて眠り通した挙句、目を覚ましたとたん、激しい嘔吐感に襲われ、三十郎は頭をかかえて七転八倒して、また昏倒した。夜通し、付添っていたおそでに、水を浴びせられて正気づいたものの、破鐘のように頭が鳴っていた。
しかも、出掛けに不吉なことがひとつ起った。
三十郎が草鞋の紐を結んで締めようとしたとき、真新しい草鞋の鼻緒が音をたてて切れたのである。
脇から、これを見ていたおそでは、思わず、
「父上、今日のお鷹狩はお止しあそばせ」
と叫んだ。
しかし、三十郎は、
「鷹匠が何条、お鷹野が休まれようか。紐一本切れたぐらいが何じゃ」

と、喚いて、取るものも取りあえず、登城してお鷹狩の行列に加わったのだ。

庶民たちは、沿道に集まり、久しぶりの将軍家のお鷹狩の行列を、土下座して眺めていたが、これらの人々にも、山辺三十郎の姿は異常に見えた。

長年月にわたって、三十郎に飼育され、鍛練されてきた鷹さえ、ひっきりなしに吐きつけられる三十郎の酒くさい息に閉口して、ときどき、陰にこもった声で啼いていた。

見物の弥次馬の後方、道から一町ばかり離れた丘の上で、忠弥と半兵衛がこれを見ていた。

「忠弥よ」

と、半兵衛が言った。

「あのうつけものが、まだ酒の気がきれておらぬ」

「ふん」

忠弥は鼻を鳴らして、言った。

「酒気がぬけておらぬどころではないわ。あれでは、三十郎め、酒袋のようなもんじゃ。そのうち、ぶっ倒れるぞ」

「迎え酒でも届けてやるか」

「馬鹿を申すな。傍へ近よっただけで、追っ取り込まれて、鱠じゃ」

「なるほど。なりかねぬな。あの恰好を見ろ」

と、山辺三十郎ら三人の鷹匠の、あと数間のところに、馬をたてて昂然と胸を張っていく将軍家光に顎をしゃくって、半兵衛は言った。

「まるで、天下を取った人間のようじゃ」

「馬鹿者、あやつは、あれで天下人じゃ。天下は、既に、取っておるではないか」

忠弥は、呆れたように半兵衛を見て言った。

「忠弥よ」

と、半兵衛は、逆に、苦々しげに白眼を剝いて、

「おぬしは間違っておる」

「何で、間違っておる」

「天下を取ったのは、あやつの爺の家康じゃ。あやつは、その孫にすぎぬ。それが天下人か、馬鹿者め。あやつは、いいところ、徳川家の金庫番、種つけ馬のごとき痴れ者にすぎぬ」

「なるほど、半兵衛よ」

「何じゃ」

「おぬしもよいことをいう。まんざらの馬鹿でもないな」

「当然じゃ。爺の代から浪人暮しをしておるんじゃ。薄ら馬鹿ならば、今ごろは、野垂れ死んでおる。おれの幼少のころはの」

「ふん」

「まず、剣術、それに、学問、暇をみつけては、掻払い、野荒しの日常であったわ。そして、この腕じゃ」

と、半兵衛は、おのれの痩腕をぱちぱち叩いて、言った。

「なまなかの修行ではなかったぞ」

「それで太るひまもなかったのか、半兵衛」

「馬鹿者。これは血筋じゃ。爺も父も枯木のごとくであった。おれだけが太れるわけがない」

「ふーむ。あれだけ食ろうて、いまだその痩身。やっぱり、これは血筋かの。ところで、半兵衛

よ、この鷹野、見に来た甲斐があったの」
と、既に、三丁も彼方をゆく家光の背を見て、半兵衛は言った。
「討つなら、鷹野で討つ。三百も手勢があれば足りるじゃろう」
「さようさな。今、張孔堂に何人、信ずるに足る人物がおる」
「今のところは、三郎兵衛だけじゃろう」
「おれも、そうみる。ということは、正雪を入れて、わずか四人ということか。張孔堂も案外、内容は貧弱じゃの」
「いや」
と、半兵衛は、薄ら笑って言った。
「いざとなったらの、忠弥」
「ふん」
「おれが、山者に号令をかける」
「ほう、あの天魔の三郎らか」
「左様」
「よかろう。あやつなら信頼でける。おぬし、この次の鷹野を襲うか」
「いや、待て。正雪にも相談して決めるべきじゃろう。忠弥、腹は減らぬか」
「減ったわえ」
「ふむ」
と、半兵衛は、首を捻って言った。
「山辺氏には、やはり、迎え酒くらいは届けてやった方がよくはないか」

その頃――。
お鷹野の行列は姿不見橋を越えて、中野庄に入ろうとしていた。
中野。一説には、武蔵野の中の村という意味でつけられたとされている。上野、下町という名の起りと同断であろう。
姿不見橋は、神田川にかけられている。
家光は近侍から、
「この姿不見橋を渡りますれば、中野でございます」
と、告げられて、
「姿不見橋か、奇妙な名じゃ」
と、言った。
うしろに従っていた、土井利勝が、その謂（いわれ）を説明した。
昔、応永年間に、紀州熊野権現の神官の子孫に、鈴木九郎という者がいた。
馬の売買のためにはるばる関東に出て来て、この中野に住んだ。あるとき、馬を売った銭を数えてみたところ、その銭がすべて、大観という文字のある古銭ばかりだった。不思議に思い、九郎は、日ごろ信仰していた浅草観音に、その銭は全部寄進してしまった。
それ以来、不思議な幸運がつづき、鈴木九郎は、わずかの間に、大変な大金持になってしまった。
ところが、金がたまるに連れて、九郎は不安になった。人に盗まれはせぬかと、心配で夜も眠れなくなってしまったのである。
そこである夜、金を詰めた箱を下男に背負わせて、中野まで忍んできて、野原に隠し、しかも、

下男が他人に口外することを怖れて、この橋の上で斬り殺してしまった。
以来、世人は、この橋を姿不見橋という——と。
家光は、利勝にこの話を聞くと、不快げに吐きすてた。
「下らぬ伝説じゃ。この家光が通ったからには、もはや、そのような不吉な名は取り去れい」
この橋が、淀橋と改められたのは、そのためであった。

お鷹狩

一

姿不見橋を渡れば、茫々たる武蔵野である。
ゆるやかに、大きく波うっている丘陵は、茫々たる萱芒(かやすすき)に被われ、林は深く、樫(かし)、樟(くすのき)、欅(けやき)などの大樹が、蒼穹(そうきゅう)に聳(そび)え立っていた。
やがて、中野狩場に到着した将軍家光は、鳥見場の脇に建つ鷹匠屋敷に入ると、整然たる隊伍を保って、御段場切れの陣を敷いた。
御段場切れとは——。
広大な狩猟場の周囲に、随従してきた、老中、若年寄、目付、書院番、御小納戸などの旗本八万騎が、八方へ段々に陣を占めるのをいう。
すなわち御座所を中心として、初段、二段、三段、四段に分れ、遠く陣を敷き、それぞれ、建物や林の陰に一隊ずつ固まる。戦場に於る陣形を、そのまま、鷹野に敷くのである。
この中野狩場は、家康が入府まもなく、鷹野として指定し、家康から秀忠、家光と三代にわたって狩り競べをしてきた場所だったので、御段場切れも慣れたものだった。
狩場には、普段でも庶民の入ることは禁じられていた。
この鷹野で、鉄砲など撃とうものなら、それこそ磔(はりつけ)であった。
天正十八年（一五九〇）頃の武州忍(おし)城主松平家忠の日記にも、
——鉄砲で雁を撃った者、江戸へおくり、磔——とある。

また、御小人頭(こびとがしら)が、誤って、将軍家の鷹を損じたゆえ、打首にした、ともある。
遊興である狩猟も、これに従う、武士たちにとっては、必死の行事であったのだ。
そういうお鷹野に、山辺三十郎は、凄まじい二日酔で従ったのである。
鷹もまた、将軍家が用いるほどの鷹は、えりすぐった名鳥であるから、勘も鋭く、神経質である。山辺三十郎の拳に据えられた鷹も同様であった。
鷹野に到着したとき、この鷹、既に、主人の毒気にあてられて、主人の三十郎そっくりになっていた。すなわち、三十郎同様、目が暗むような状態になっていたのだ。
やがて、鷹匠屋敷で小休止した家光は、鷹野の北東の丘陵に馬を立てた。
家光の左右には松平伊豆守信綱、柳生但馬守宗矩、それに、服部半蔵支配の伊賀者が、数人控えているばかりだった。
近侍の御小姓は、いずれも各隊との連絡に走りまわっていた。
突如、丘陵の裾野の芒っ原の中から、一人の武士が走り出してきた。
その武士は、走りながら喚いた。
「御鷹匠組組頭、戸田玄蕃、おそれながら、お傍に寄り申す!」
玄蕃の目は血走り、顔面蒼白であった。その凄まじいほどの逆上ぶりは、家光にも見えた。
柳生但馬守が、大剣の柄に手をかけ、斬りすてんばかりの勢いで叫んだ。
「何事じゃ!」
その面前へ、突っこむように平伏した玄蕃は、
「おそれながら、おそれ多いことながら、お上(かみ)のお鷹が一羽、死にましてござりまする」
「なに!」

家光をはじめとして、一同の顔がさっと蒼ざめた。
「すべて、この玄蕃の落度でござる。但馬守殿、ご介錯(かいしゃく)を!」
叫びざま、玄蕃は脇差をひきぬき、己の腹に突きたてようとした。
「無礼者! お上の面前を血で汚すか!」
一喝して、伊豆守は、玄蕃の手から脇差を捥(も)ぎ取ると、
「事情を申せ」
と、喚いた。
「しっ、死んだのは吹雪でござるうーっ」
と、玄蕃は唸った。
とたん、家光の顔面がみるみる赤くなった。
「まことかっ!」
と、家光も喚いた。
「案内せい。この目で、余がたしかめる!」
同時に、ぱっと馬腹を蹴ると、顔面蒼白な玄蕃を先頭に、家光の旗本は、鷹野の中心めがけて、駆け出した。
樹陰(こかげ)や、堤の下や、小川のほとり、辻堂脇などに陣取った面々は、何事か! と、血相かえて駆けていく家光の一団を見送って、首をかしげた。
小川のほとりの草地に、山辺三十郎が、前のめりにうつ伏していた。
「うっ!」
と、伊豆守は声をあげた。

山辺は、既に、責任をとって割腹していた。
しかし、その前にぐったりのびていたのは、たしかに吹雪であった。脚には紅の緒房がつけられていた。昨年、宮廷へ献上する鶴を捕えた印であった。鷹野好きの家光が、命にも代え難いと思っていたほどの名鳥だったのだ。
戸田玄蕃が悲痛な声で言った。
「お鷹が、いきなり、この山辺の眼を抉ったため……、カァッとなった山辺が、お鷹を強く握りましたところ……、あやまって……」
たしかに、山辺三十郎の左眼はつぶされ、血を噴いていた。
吹雪は、三十郎の二日酔の猛気に浴びせられて、神経が不安定になったばかりでなく、ついに酔っぱらってしまったのだ。
山辺の腸から噴き出した血は、いまだぷんぷんたる酒の匂いを放っていた。
「おのれ、吹雪を！」
と、叫んで、家光は、馬からとび下りざま、抜刀した。
「こやつ、酒気を帯びて鷹野に参ったか！　手討にいたしてくれる！」
「お待ち下され！」
脇から、うつぶした山辺三十郎の前へ、伊豆守がとび出して、言った。
「上様、お手討には及びませぬ。すでに、腹をっ、上様、こやつは腹をかっさばいておりまする」
「邪魔じゃ、伊豆、下れ」
ぱっと、家光は陣大刀を振りかぶった。

そのとき、うつ伏した三十郎が、かすれた声で言った。
「ううーっ、うえさまぁー、それがしの不覚でござった。お許しをっ……、ご介錯をっ！」
ぱっ！　と、家光は大剣を振下した。
三十郎の首は、ごろりと落ちて、草地に転がった。
父の屍が納められた柩の前に坐って、おそでは、凝っと瞑目していた。
傍には、同じ組屋敷の、三人の鷹匠同心がいるだけの、寂しい通夜であった。
しばらくして、おそでは言った。
「本当に、お手討でございましたのでしょうか、父上は」
「さよう」
と、同心の一人が言った。
「吹雪の死で、御神君以来の鷹の血も絶えてしもうた……。上様のお怒りもご尤もじゃ。組頭殿も謹慎しておられる。われらも、今宵は屋敷に戻って、お沙汰を待たねばならぬ」
涙にぬれた目をあげたおそでに、今一人の同心が言った。
「そなたも心を決めておくがよい」
やがて、三人は三十郎の霊前に香をあげて引きあげていった。
夜は更けていった。
おそでは、父の柩の前に坐ったまま、動かなかった。その頬は滂沱たる涙であった。
「父上！……、父上！……」
と、おそではしゃくりあげた。

「たった一羽の鷹の命とひきかえに……、上様も、お手討とはあんまりでございます……。それにしても、父上、なぜ大事を控えて、あのように大酔したのでござります……、おそでは……、もはや、ひとりぼっちでございます……。上様、お怨み申しあげまするぞ」

おそでは突伏し、泣きながら、柩の前で眠ってしまった。

気がついた時は、夜が明けていた。

傍に、丸橋忠弥と金井半兵衛が坐っていた。

居住（いずまい）をただしたおそでに、半兵衛が一礼して、言った。

「御無礼いたした。おそで殿、それがし達も申し訳なく思っておるのでござる。お許し下され」

「いえ、それは、こちらから申しあげねばならぬことでございます。父は……、父は、酒（さき）にはまるで目のない人でございました。このようなことになる前に、思いっきり好きなものが戴けたことは、父にとっては、このうえのない喜びだったと存じます。わたくしからも、改めて、お礼申しあげます」

「ふーむ」

と、忠弥は唸った。

「山辺氏は、それほどの酒好きでござったか」

「はい。しかし、ご覧のような微禄ゆえ好きな酒（さき）も、ときどき二、三合というような生活でございました。死ぬほど戴けるようなことがあろうとは、父にも、思いも及ばなかったことでございましょう」

「死ぬほどとな……」

と、言って、半兵衛は苦い顔をした。

半兵衛にしてみれば、おれが無理じいしたわけではないと言いたいところだ。しかし、既に、この世にいない人間にむかって、それは言えない。おそでが皮肉を言っているのではないということも、半兵衛にはわかっている。

「それにしても……」

と、おそでは、袂（たもと）で顔を被って言った。

「先祖代々の臣の命を、たった一羽の鷹の命と引きかえとは、上様も無慈悲なお方でございます」

泣きじゃくるおそでの姿を見て、忠弥も半兵衛も、何という美しい娘か――、と思った。

「おそで殿」

と、忠弥が言った。

「いずれ沙汰はあろうと思われるが、山辺殿手討とあっては、これはよい沙汰が下るとも思われぬ」

「はい」

「どうであろう」

と、今度は、半兵衛が言った。

「わが張孔堂に来られたら、お沙汰を待っておったのでは、どのようになるやも知れぬ。命あってのもの種じゃ。のう、丸橋殿」

「左様。金井氏のいう通りじゃ。張孔堂に、しばらく隠れておられるがよかろう。あとのことは、われらがお引受け申そう」

しばらくの沈黙の後、おそでは言った。

「有難う存じます。わたくしのような者まで、張孔堂様がお庇い下さると知ったら、亡き父も、どんなに喜ぶことでござりましょう」

二

江戸城中――。

老中の御用部屋、太鼓張りの屏風を背にして、老中筆頭土井大炊頭利勝が苦りきっていた。その前に坐っているのは、松平伊豆守信綱である。

「伊豆！」

と、利勝は、押し殺したような声で、威圧するように言った。

「それでは、情にすぎよう。いやしくも、上様がお手討になったものじゃ。残された遺族の身が立つようにしてやるなどとは、もっての外じゃっ！」

伊豆守も敗けてはいなかった。しかし、こちらは、落着いて一語一語を嚙みしめる調子である。

「されど、どのようなことにも、落零のないよう、ひとつひとつ拾いあげ、始末してゆくのが政治を司る者の務めではござらぬか。しかも、このたびの件は、まことは、上様のお手討ではございますまい。上様は、既に腹を切った山辺の、ご介錯をなさっただけでござる」

「伊豆！」

「何でござりましょう」

「おことは、腹かき切った山辺のうつぶしていたあたり、酒の香で噎せるようであったのは、知らぬというのかな。あやつ、酒を喰ろうて、お鷹野に出おった。それだけでも、手討に値する。しかも、きゃつは、おそれおおくも、上様、ご寵愛ひとかたならぬ吹雪を締殺しおったのじゃ。

これを、ただの過失とみて許すというのか……。このあたりの事情は、すでに、われらだけでなく大目付柳生但馬守殿も、近侍の旗本らにも伝わっておる。公然の事実じゃ」

「それゆえ、なお更のこと――と、それがしは申しておるのでござる。お鷹一羽と人間の命を比べて、人命の方が軽いなどと噂されては、上様とて心外でござろう。心の通った政治とは、申されぬのではござるまいか」

「伊豆、ならぬ。それはならぬ。いまだ幕府の基礎は固まったばかり、法を守るわれわれが、いちいち特例を認めてどうなるのじゃ。伊豆、わしは、それは聞かぬぞっ！」

利勝は、手にした白扇で、膝を叩いて喚いた。

そのとき、

「おそれながら」

襖のむこうから、茶坊主が声をかけた。

「何じゃ！」

と、利勝が声高に言った。

「春日局様より、伊豆守様への、お言伝でござります」

「ふーむ、いうてみよ」

「山吹の間にて、お待ちいたしますとのことでござります」

「春日局じゃと。伊豆、おこともまた、忙しい男じゃの。いんでやれい。どうせ愚痴を聞かされるのがおちじゃ」

「では」

伊豆守は一礼して立ちあがると、

「大炊頭様、ただ今のこと、お心にお留めおき下さるよう。この伊豆守、今一度、お願い申す」

「わかった」

大炊頭は、くどいといわんばかりに、そっぽを向いた。しかし、伊豆守が、小坊主に導かれて立っていくと、利勝は、何故かにやりと笑った。

伊豆守が、西御縁から、溜の間の畳廊下を踏んで、山吹の間に入ると、既に、春日局は、岩佐又兵衛筆の彦根屛風を背にして坐っていた。

伊豆守は、この春日局という老女が余り好きではない。しかし、春日局の方は、そうでもないらしく、ときどき呼出されて、愚痴を聞かされる。

この日も、春日局は——。

伊豆守が坐るなり、挨拶も何もぬきで、いきなり言った。

「安心して、愚痴を言えるのは、伊豆守殿、そなただけじゃ」

「左様でござりまするか」

と、言って、伊豆守は思わず笑ってしまった。

「何か、可笑しいことでもあるのかや」

「いや、つい今しがた、大炊頭様と話をしていたのでござるが、大炊頭様も同じことを申された」

「ほう、わらわが愚痴を聞きに参れとかや」

「いかにも」

「ほっほっほ」

春日局は、小娘のように唇を押えて笑って、

「ま、そういわずに、わらわの愚痴も聞いてたもれ。実は、竹千代君のことなのじゃが」

「はい」

「何故、あのようにお弱いのであろうのう」

「大事にされすぎではござりませぬか」

「そうであろうかのう……、伊豆殿。竹千代様に万一のことが起きたら、四代様は、どのようになられるのであろう……」

伊豆守は、目を宙に浮かせて、答えた。

「そのようなことには、お答えいたしかね申す」

春日局も、あらぬ方角をむいて言った。

「紀州様だけは嫌じゃ」

「………」

「上様のお血筋が、四代様と決るまでは……、この春日、死ぬにも死ねませぬ」

「……紀州様が、何事か企まれておると申されるのでござるか」

「そのようなことまで、わらわにも分りませぬがの……、伊豆殿。どこぞに、よい女はおらぬか……」

「はて」

と、伊豆守は、首を傾げて言った。

「大奥には、三千を超える婦人がおられるのでありましょう。そのなかに一人ぐらいは、上様のお心に叶うお方がおられるのではござらぬか」

「おりませぬ。大奥では、お万の方様以外の女には、上様は見むきもなさらぬのじゃ」

「ならば、そのような話は、最初から無理でございましょう。竹千代様をご丈夫な若君にお育て申しあげるより他、手はござりますまい。それに、竹千代様、ご夭折とはいまだ決った話でもござりませせぬでしょう」

「そうじゃ。縁起でもないことを、申さるるな、伊豆殿」

伊豆守は、話の取りとめなさに、うんざりして言った。

「局様、今日のお話は、一体、何のお話なのでございます」

「わらわにも分らぬ」

「なるほど。とすると、やはり、愚痴でござるか」

「愚痴じゃ。愚痴じゃ」

と、春日局も、うんざりしたように言った。

そのとき、天井に張付いた、一個の黒装束が、何が愚痴なものか、この狸婆め——と、声に出さずに独言た。

根来幻幽斎に命じられ、江戸城中に忍びこんだ、根来の三郎太であった。

秘伝・夢想剣

一

伊豆守信綱は憂鬱な顔で下城してきた。

山辺家の取潰しはいたし方ない、しかし、一人娘のおそでというのだけは、身の立つようにしてやらねばならぬ、何かよい方法はないか……、と考えつづけていたのだ。

屋敷に帰っても、書見どころではなかった。

伊豆守は、ふと利勝の皮肉な顔を思い浮かべた。その顔に、春日局の顔が重なった。

利勝は、言った。

「春日局じゃと……、いんでやれい……、どうせ愚痴を聞かされるのがおちじゃ……」

春日局は、言った。

「伊豆殿、どこぞによい女はおらぬか」

春日局ほどの老獪な女が、土井大炊頭利勝ほどの策謀家と用談中の伊豆守に、呼び出しをかけるわけがない。しかも、話は愚痴の形をとってはいても、将軍家世継ぎという重大な話である。

大炊頭殿と春日局殿は、既に何事か話し合っておったのではないか……、あの二人は、ともに反紀州派じゃ……、と、伊豆守の頭が巡ったとき、廊下で、鴉が一声鳴いた。

「入れ」

闇から滲み出すように、甚兵衛が現れて、部屋の隅に坐った。

「何事じゃ」

「山辺三十郎殿の娘御が消え申した」
「なに、消えた」
「いかにも」
　山辺三十郎の娘が消えてしまえば、もはや、伊豆守も手の打ちようはない。
　攫ったのは、大炊頭殿の手の者か、それとも、また紀州様の嫌がらせか……、と思ったとき、甚兵衛は意外なことを言った。
「山辺殿の娘御を連れ去ったのは、丸橋忠弥と、金井半兵衛という張孔堂の一党でござる」
「ふーむ、金井半兵衛とな」
と、伊豆守は唸った。
　過日、箱根路で、伊豆守は、乞食のような風体の異様な剣客に、金を強請り取られている、その男が、今は、張孔堂由比正雪の片腕となっている金井半兵衛と同一人物だとは、伊豆守も知っていた。
　しかも、張孔堂一門は、今、紀州大納言頼宣に匹敵するほどの勢力に脹れあがっていた。加えて、禄を食まぬ浪人の自由闊達さは、一度火がつくと、どのような変化を引起すかも知れなかった。金井半兵衛とて、既に、かつてのような乞食兵法者ではない。
〈張孔堂め、いよいよ、わしに正面きって楯をつくつもりか。放ってはおけぬな〉
「甚兵衛」
と、伊豆守は言った。
「十兵衛殿に、御足労願え」
「張孔堂へでござるか」

「ふむ」
「奪うのでござるな」
　伊豆守は、不機嫌に言った。
「奪うだけならば、甚兵衛、お前だけでもできよう。これを機会に、堂々と張孔堂に乗りこんで、あの一党の在り様を、見届けてくるのじゃ。山辺の娘は何という」
「おそでという別嬪でござる」
「それ以外に、山辺三十郎には子はないのじゃな」
「ござらぬ……。あやつは、男手ひとつでおそでを育て、婿でもとる算段でおったのでござろう」
「余計なことは申すな」
「………」
「ゆけい」
「かしこまった」
　甚兵衛の姿は、また、闇にとけるように消えた。
　あくる日の午後、深編笠をかぶった一人の浪人ていの武士が、張孔堂の玄関に立った。
　取次に出た門弟に、笠も取らずに、この武士は言った。
「張孔堂殿は、ご在宅か」
　門弟は、ぎょろりと目を剝いて、言った。
「ご姓名を伺おう」

熊谷三郎兵衛であった。
「柳生十兵衛とお取次ぎ願いたい」
とたん、三郎兵衛の目から光が消え、すうっと細くなった。
十兵衛は腹の底で唸った。
〈うーむ！　こやつできる〉
およそ、今の時間にして五分ほど、三郎兵衛は、瞬きひとつせずに、十兵衛を見つめていた。
やがて、三郎兵衛は、ぼそりと言った。
「ご用件をうけたまわりたい」
「張孔堂殿に会うてから申そう」
「左様か、では、お引取りいただく」
「どういうことじゃ」
十兵衛は、はじめて笠の廂をあげた。隻眼に、刃物のような光が浮いていた。
「取次は」
と、三郎兵衛は、言った。
「人間でござる。人間が用向きも聞かずに取次ぐことができ申すならば、玄関には、犬でも一匹、つないでおけばよろしゅうござろう」
「なるほど……、犬をな」
と、言って、編笠を取ると、十兵衛は、
「山辺三十郎なる鷹匠同心の娘が、こちらに厄介になっておるとうけたまわった。できるならば、会って、申し聞かせたいことがある」

「おらぬと申したら、如何いたす」
「由比殿に代って、左様申すのならば、引取り申す」
「ふむ、柳生殿」
「何で、ござる」
「主は、あいにく不在でござる」
「……、ふむ。おぬし、名を名乗られい」
「熊谷三郎兵衛利信」
「熊谷殿、斬って通ると申したら、如何いたす」
「逃げ申す」
と、言って、三郎兵衛、にやりと嗤った。
張孔堂に来て、すでに二年余、三郎兵衛、まるで人が変ったような落着きようであった。その猛気も、今は冷えびえと底に沈んでいる。
「逃げるか」
と、言って、宙に顔をあげた十兵衛、
「ならば、今日は引取りもうそう。由比殿にはよしなに」
一礼して、三郎兵衛に背をむけた。
とたん、
「待たれい。柳生殿」
と、三郎兵衛は、立ちあがって言った。
「主は不在でござるが、この三郎兵衛が、ご案内申そう。山辺三十郎殿は、われらと同じく、こ

の張孔堂の弟子でござった。山辺殿がなき今、娘御をわれらがお世話するに、何の不思議もござらぬが、張孔堂は、山辺殿の娘御を預かって匿っておきながら、主の不在をいい訳に、おるものをおらぬとたばかったと申されては、張孔堂の名がすたり申す。いざ通られい」

「左様か、では、邪魔をいたす」

式台に上った十兵衛、笠はかたわらに置いたが、脱いだ雪踏は、底を叩いて懐に入れた。

張孔堂二千坪といっても、当時の大名屋敷と比べれば、屁のようなものだ。

当時の大名屋敷というのは、今では想像もつかぬほど広大なもので、総坪一万坪を超える建物も珍しくなかった。しかし、大小にかかわらず、構造は、幕府の定めた一定の方式に則って構築されていて、例外というのはなかった。

そのため、石高何万石の屋敷といえば、表の櫓門から壺庭のありよう、長屋の配置までわかってしまう。

この規則に背くことは許されない。

例えば、肥後四十九万八千石加藤家の江戸屋敷は、加藤宗十郎という人物が設計し、構築したものだったが、表面上は、規則に従っているように見えて、その実、造りはまことに巧妙で、玄関と落縁のところは、普通は板敷でなければならぬが、平石で敷き詰めてあった。

これは、すわっという際、踏段の上から、直に馬を引き寄せて、ぱっと跳び乗れる工夫である。

また、玄関のうえ、使者の間とおぼしい部屋の四方は、古風な腰高障子で、しかも、骨木の外に鉄の筋金が入れてあり、外側へ、一本一本、鉄の枢が仕込んであった。これなら、使者をこの部屋に坐らせ、

「しばらく、お控え下されい」

と、退いて、障子を閉めたとたん、枢がかちりと下りて、中からは出られない。欄間には、使者を射殺するための狭間まで空いていた。

幕府が、何の落度もない加藤家を取潰すことができたのは、加藤家が、このような規制外の江戸屋敷を構築したため——、ともいわれる。

しかし、張孔堂のような浪人の居宅は、こういう幕府の規制からは自由であった。邸内には、どのような絡繰が設けられてあるかもわからない。

伊豆守が、張孔堂の在り様を見届けてこいと言ったのは、内部の人間のありようも含めて、このような構造上のことまで指していたのである。

二

三郎兵衛は、玄関から講堂、兵法道場、奥書院、さらに壺庭を隔てて、女中たちの居住区である長局まで悠々と、十兵衛を案内してまわった。

長屋には、数十人の浪人どもが屯していたが、おそでの姿はむろん、正雪の姿も見えなかった。

やがて、三郎兵衛は、主殿造りの広縁に立って、

「柳生殿、如何」

と、言った。

「拝見仕った」

「左様でござるか……」

と、また、悠々と背を見せて、玄関まで十兵衛を導いた三郎兵衛は、懐から雪踏を取り出してはいた十兵衛を、皮肉な目で見て、

「山辺三十郎の娘御は、たしかに、当張孔堂にはおり申さなんだな」
念を押すように、言った。
そのとき、供待ちの部屋の陰から、丸橋忠弥が、ぬっと首を出した。
「柳生殿、待たれい」
十兵衛は、うっそりと立ったまま応えない。
「はじめて、お目もじいたす。それがしが、当張孔堂にて、槍を預かる丸橋じゃ」
十兵衛は、ぼそりと言った。
「存じておる」
「左様か。ならば、もはや、挨拶はいるまい。ちと、槍を相手に遊んでいかれぬか」
しかし、十兵衛はとりあわず、編笠を取りあげて、言った。
「いずれ、また会おう」
「ほう、また会おうとな」
忠弥は、にたりと嗤って言った。
「柳生十兵衛三厳ともあろう兵法者が、犬のごとく、張孔堂をかぐためにだけ参られたか」
十兵衛の隻眼が光った。
おっかぶせるように、忠弥が言った。
「御流儀も、張孔堂には尾を垂れた、と見てもよろしゅうござるな」
十兵衛は、笠を置いた。

忠弥が、十兵衛と立合うと知って、いつの間にか、百余名もの門弟たちが道場に押しよせ、武者窓の下に居並んでいた。しかし、しわ咳ひとつ、する者はなかった。異様な静けさが、道場に充ちていた。

忠弥と十兵衛は、間合い五間をとって、すでに四半刻も対峙していた。
十兵衛は、忠弥の帯のあたりに目をあてたまま、切先を双眼の間へ入れた正眼である。
これに対する忠弥の槍は、七尺柄、十文字鎌であった。いずれも、真剣、真槍であった。
槍の柄というものは、持つ人の、一丈半をよしとする。身長六尺の忠弥には、九尺の柄がころあいであった。しかし、忠弥は、宝蔵院流の印可を得てのち、自分なりに工夫して、戸外では、三間柄の大槍をうち振い、道場での立合には、寸づまりの七尺柄を用いた。のみならず、十文字鎌槍は、始祖である南都興福寺宝蔵院住職・覚禅坊法印胤栄は、剣九寸横手七寸のものを用いており、普通の槍術者は、これに従っているのだが、忠弥は、剣三寸横手六寸と、長さが逆のものを得物としていた。
また、忠弥が、七尺柄を使ったのは、この変形の十文字鎌が、〝飛乱〟を使うのに、最も便利だったからである。
飛乱とは、始祖胤栄が、目録の最初に説く極意であった。水鳥が飛びたっていく瞬間を「位」とした秘伝である。
忠弥は、飛乱を学ぶうちに、水鳥の飛ぶかたちを、十文字槍に写す直感を得たのであった。頭から尾までの長さよりも、大きく広げた双翼の長さの方が、倍ならば、飛乱を使うのに、剣よりも横手の長い方がいいということになる。
十兵衛は、横手六寸の間が、生死の分れ目だ、と、既に悟っていた。
忠弥も、目を半眼に細めて、おのれの帯に目をあてながら動かない、十兵衛の構えから、

〈これは、〝帯の矩〟だな〉
と、みてとっていた。
忠弥は、かつて、師の胤栄から、この秘法は聞かされていた。
余談になるが——。
柳生宗矩と並んで、将軍家の兵法指南役をつとめた小野忠明が、いまだ、神子上典膳といった若き日。
恩師伊藤一刀斎の命によって、兄弟子小野善鬼と立合って、これを討ったとき、一刀斎は立合の前夜、密かに典膳を呼んで、次のように教えた。
「善鬼の邪心は、その双眼より火焔のごとく迸る。これを正視してはならぬ。お前は、これまでこれを受け止めていたために、善鬼には勝てなかった。明日の立合には、ただ対手の帯を見詰めて、間合をとれ。帯は、人間のまとうたもののうちで、最も動かぬところである。他の動くところを見て、おのれの動きをつくることなく、敵の最も動かざるところに基準をおいて、無念裡にうつ。これを帯の矩という」
大刀には、おのずから順逆がある。道に従って、術を守るときには、その心がいさまずとも勝を得る。
勝った瞬間にも、勝ったことに気づかぬほどの、これは不思議な勝である。
まさしく、典膳は、善鬼を幹竹割りに斬倒した刹那は、茫然たる自失の只中にいたのだ。
後に、小野次郎左衛門忠明となってから、この秘法に、「夢想剣」と名づけた。
十兵衛は、忠弥の前に、夢想剣の秘法をひめて立ったのだ。
四半刻を過ぎても、二人とも、微動だにしないゆえんである。

日頃は、駄洒落をとばして喚き散している忠弥も、猛然たる闘志をうちにひめて、氷のように冷やかに動かない。
十兵衛も、忠弥の動きを恐れて、動かなかったわけではない。十兵衛とて、槍は、同じく宝蔵院流を学んで奥儀に達していた。敵の十文字鎌が、百一本の法形完璧と見えるだけに、それが崩れる一瞬の隙をねらって、全身の筋肉をふくらませていたのである。
忠弥の槍の先がまわって、蕪巻の金物が異様に光った。
わずかに、右手をあげて、忠弥が誘った。右手をあげて胴に隙をみせて誘うのは、宝蔵院流極意のうち、「悦眼」の位であった。
やがて、忠弥の胴は、これみよがしの丸あきになった。
忠弥の自信のほどがしれた。
はじめて、十兵衛の心に苛立ちがわいた。
とたん、隙ともいえぬ、その苛立ちを、見事について、
「南無！」
ひゅーっ！　と、忠弥の槍がきらめき、走った。
「八幡！」
十兵衛、槍の螻蛄首をたたいて、跳ねあがった。
——頭上から、必殺の一撃を振下ろした。
がっ！
と、これを右づきを返して、撥ねあげた忠弥は、してやったり、床上におりた瞬間の、十兵衛の胴に槍の穂先を叩きつけた。

勝負あった！
百余名の門弟は、一瞬、息をのんだ。
しかし、十兵衛は、風のように斜横に跳んで、ぴたりとまた、三間の間合をとっていたのである。
忠弥の片頬に、かすかな痙攣（けいれん）が走った。
〈小悴（こせがれ）め！〉
であった。
とたん、
「それまで」
と、声がかかり、対峙した二人の中間に、するすると入ってきた男がいた。
正雪であった。
「退けい！」
と、忠弥が喚いた。
「どかれよ！」
と、十兵衛も語気荒く唸った。
正雪の、秀麗ともいえる顔に、冷やかな笑いが浮いた。
正雪は、熨斗目（のしめ）正しい裃姿で、腰には脇差が一本、右手には、白扇を握っていた。
「只今……」
と、十兵衛と忠弥を見て、正雪は言った。
「紀州大納言様が、お越しになる」

「う！」
と、目を剝いた十兵衛に、
「されば、柳生殿。今日ただ今の立合は、これまでじゃ。忠弥、聞けぬか」
「よかろう」
と、槍を引いて、忠弥は言った。

幽霊騒動

一

紀州大納言頼宣は、忍びでなく堂々と、張孔堂へ馬を乗入れてきた。
関口隼人正以下、気に入りの近習が数騎、いずれも馬上に従っていた。
門前で、これと擦れちがった十兵衛は、思わず、編笠の廂を下げて、顔を隠した。が、その顔は、いくぶん蒼ざめていた。
十兵衛には、伊豆守から頼まれて、自分が張孔堂を探りに来ているのを知ってのうえで、頼宣は張孔堂へ馬を乗入れた、としか思えなかったからだ。と、すれば、これは、頼宣の伊豆守に対する、公然たる挑戦ともいえる。頼宣ほどの身分なら、正雪に会いたければ自邸に呼ぶだけで足りる。
玄関まで迎え出て、式台に平伏した正雪の前を、頼宣は、
「微行じゃ、微行じゃ」
と、殊更の大声で喚いて、通り過ぎた。これに、関口隼人正が従う。
供の近習たちは、三郎兵衛が、供待ち部屋にとおした。
しばらくのち、頼宣は、奥書院の上座に坐って、機嫌よく笑っていた。
「伊豆守めはの、どうやら、竹千代君が病弱なのに苛立って、新しい側妾を上様に世話しようと企んでおるらしいわ」
と、頼宣。

「左様でございますか、それは、伊豆守様も考えたものでございますな」
「ふむ。これにどうやら、大炊も同腹らしいがの。あやつらも、またこまめに働きよる。しかし、民部介、次々に世継ぎが生れたとて、泰平が保証されるとは限るまい」
「左様でございまするな。いまだ、数万の浪人が、飢え、路頭に迷っておりまする」
「その通りじゃ。竹千代君が病弱だとて、あれは、お福めの責任じゃ。ふふふう」
と笑って、頼宣は、
「この間の明国人の一件は、面白かったの」
正雪の目を悪戯っぽく覗きこんで、目を細めた。
「いや、あのときは、この正雪も、さすがに胆を冷し申した。思わぬ偶然から、鄭芝龍らは逃し申したが、大公儀の伊賀者というのは、さすがでござりました」
「そうであろう。服部半蔵というのは怖しい男じゃ。あれが生きておるうちは、民部介、おこととて枕を高うしては眠れまい」
「さようでござりまするな」
と、正雪は笑って、
「手前のごとき、一介の素浪人が申すのも何でござりまするが……」
ふと思いついたように、言った。
「紀州様からも、大奥へ、見目麗しい婦人を入れられたら如何でござりましょう」
頼宣は、とたん、苦々しげに吐き出した。
「わが紀州家の息のかかった女なぞ、大奥へ入れるわけがない。お鈴口の向うには、お福めが頑張っておるわ」

「いや、それがあるのでござります」
「何と申した！」
頼宣と一緒に、脇に控えた関口隼人正までが、首をのばした。
「手前、諸国を放浪いたしました折、伊勢の国に滞在したことがござります」
「ふむ」
「その折、尼寺慶光院にて、世にもやんごとなき尼様を見申した……。伝え聞きますところ、その尼様が、只今、将軍家の寵愛を一身に受けられているお万の方様とか……」
「その通りじゃ。しかし、それがどうしたというのじゃ」
「いや、手前も、ちと信じられぬのでござりますが、実は、この張孔堂に、お万の方様生写しの娘がいるのでござります」
「ほう！　見せよ。生写しとあれば、これはまた話は別じゃ」
「で、ござりましょう」
と、正雪は微笑して、脇でつまらなさそうに鼻毛を抜いていた忠弥に、言った。
「連れて参れ」
とたん、忠弥はむっとした顔をあげて、
「御前で、失礼仕る」
それでも、頼宣には一礼して、ぐいっと正雪の袖を摑むと、
「ちょいと来い」
引き摺るように廊下に出、
「半兵衛！」

と、喚いておいて、
「こっちじゃ」
また、ずるずると講堂脇まで、正雪を引き摺っていき、
「おのれ！　おそで殿を、徳川の種付け馬ごときに売るつもりか！」
と、今にも、嚙みつきそうな勢いで、言った。
「何だ、忠弥」
廊下の角から、ぬっと顔を出した半兵衛、にやっと笑って、
「あまり喚くでない。おそで殿が怯える」
「気取っておる場合ではないぞ、半兵衛」
「だから、何じゃというておるんじゃ」
「こ、こやつは、おそで殿を大奥へ上げようと、企んでおるんじゃ」
「何じゃと！　それはいかぬぞ、正雪。われらが、おそで殿を連れて参ったのは、そのような悍ましい目的に使うためではない」
「待て。喚くな、半兵衛」
「喚くなというのか、正雪。おのれ、いつから、人買のごとき人間になり下った！」
半兵衛は、かっと目を剝いて、言った。
「忠弥、斬るか、こやつを」
「よかろう」
忠弥は、ぱっと正雪を突き放すや、
「正雪、もはや、さらばじゃ。いっとき、時を呉れてやる。あやつらを」

と、奥書院の方を顎でしゃくって、
「帰してこい。われらは、道場にて待つ」
そのとき、突然、武者隠しの襖が開いて、
「馬鹿者めらが！」
押し殺した声で、一喝した者がいた。
楠不伝であった。
三人が、一度に言った。
「お、お師。いつ帰られた！」
「いつ帰られたではない。おのれら、わしのいうたことを忘れたか。わしは伊達に死んだふりをしてみせたのではないぞ。ま、こっちへ入れ」
「かしこまった」
忠弥と半兵衛の腕が、同時に両側からのびて、正雪の腰を抱くようにかかえると、すいっと武者隠しに入って、半兵衛が、うしろ手で襖を閉めた。
「坐らずともよい」
と、不伝は言った。
「よいか。わしは、おのれら三人で一面の鼎のごときものじゃ、というたはずじゃ。よもや、忘れてはいまい」
「忘れてはおらぬが……」
と、半兵衛が何かいおうとするのを押さえて、不伝は、
「半兵衛、この張孔堂に、いつまで、おそでを匿っておくことが出来ると思う。それにじゃ、人

間には、生れながらの運命というものもある。わしは、何も正雪ひとりの肩をもつわけではないが、おそでにとって、ここに留まるのが幸せか、江戸城に入るが幸せか、今の時点では、誰にもわかるまい。どうじゃ。それがひとつ。今ひとつ、おそでが江戸城に入る運命ならば、入れてよい理由がある。それは、おそでに、仇を討たせる機会を、与えてやることが出来る、ということじゃ」
「うーむ！」
と、忠弥がまず唸った。
「そうじゃあ。家光は、おそでの父を手討にした男じゃ。仇と狙っても不思議はあるまい。大奥で、まず、あの種付け馬を刺す。以後は」
「以後は」
と、不伝のあとを受けて、半兵衛が言った。
「天魔の三郎じゃ」
「左様。おそでが、お万の方とそっくりじゃと、天魔の三郎からの報を聞いて、取る物も取りあえず、わしが出てきたのはそのためじゃ。天魔の三郎にその夜のうちに、おそで殿を千代田城中から攫わせるのじゃ。それは、この老人が、三郎とともに受けもつ。おのれら、早う戻って、あの紀州の馬鹿の鼻毛をぬけ」
「かしこまった」

二

桜の咲く頃であった。

江戸城大奥、御茶間廊下に、白装束の男が坐っていた。
御膳を下げてきた茶坊主が、はて？……と思って、近寄ってみると、この白装束には首がなかった。
「う！」
と、茶坊主は目を剝いた。
とたん、首なしの白装束の姿は消えていた。
あくる夜更け、千鳥の間と御三の間の畳廊下に、また白装束の武士が坐っていた。
これを見たのは、奥御膳所御台所頭春屋上総介であった。
上総介は、昨夕、御茶間廊下に、首なしの白装束が坐っていたということは知らなかった。
「はて？」
と、上総介も首を捻り、一体どなたの酔狂であろう……、と、近づいていった。
ところがこの白装束は、上総介が一歩前へ出ると、すっと前へ出る。三歩進んだときは、三歩前に出ていた。坐ったままである。まるで、上総介を嘲弄するかのごとくであった。
春屋上総介は気が短い。
おのれ！
と、脇を駆け抜けようとした。とたん、この白装束は、まるで、畳廊下に吸いこまれたように、音もなく消えてしまった。
そればかりではない。
白装束が移動した部分の畳は、べっとりと血でぬれていた。
また一日おいた次の夜。

今度は、老女初瀬が――見た。
長局の鴨居から、白装束の武士がぶら下っていたのである。
ぎょっ！　として、立ち竦んだ初瀬に、その首なしの武士は言った。
「初瀬よ」
その一言で、初瀬は気絶してしまった。
あくる日は二の丸に、そのあくる日は西の丸に、ついでまた大奥に出た。
西の丸、お楽の部屋に現れたお化は、
「世は、駿河大納言忠長じゃ」
と、一言いい捨てて、煙のように消えたというが、その途端、竹千代君は、凄まじい勢いで泣き喚き、一晩中泣き止まなかった。
春日局が、芝の増上寺に参る、といい出したのは、このあくる日であった。
江戸城大奥に、幽霊騒ぎが起ってから、十一日目の三月二十七日。
紅網代の女駕籠を中心にした春日局の行列は、静々と江戸城を出た。
駕籠の前後には、華やかな彩りの侍女たちが従き添い、女たちの前後左右は、お屋敷の供侍のいでたちの、伊賀者たちが護衛していた。
増上寺は――三縁山広度院増上寺、芝檀林、寺領一万五百四十石。
開山は大蓮社酉誉上人聖聡大和尚で、人皇百一代後小松天皇の頃。もともとは光明寺といい、麴町の貝塚にあった真言古義の寺であったが、元中二年（一三八五）浄土宗に改めて、三縁山増上寺と称し、のち日比谷に移り、慶長三年（一五九八）現在地芝へ移った。
徳川家の菩提寺となるには謂がある。

徳川家康が天正十八年（一五九〇）、はじめて江戸に入ったとき、というのは、増上寺がまだ日比谷に在った頃だが、庶民は家康の行列を見ようと、沿道に雲集して、土下座していた。その中に、相貌雄毅、尋常ならざる面貌の僧が一人、佇んでいるのを見て、家康が名を問うと、これが増上寺の住職、観知国師であった。

このとき、国師は、家康に天下人の相を見て、これを告げたという。

家康は、国師の言葉に感動して、寺に入って休み、以来、国師を尊んで、師檀の約を結んだのだが、この縁で、増上寺は徳川家の菩提寺として栄えることになった。

春日局は、増上寺に詣で、駿河大納言忠長の霊の、調伏を祈願しようと思い立ったのである。

行列は、出雲町から新橋に出て、芝口から飯倉神明宮前に差しかかった。

そのとき、突然、行列が乱れた。

一人の町娘が、いきなり行列に転がりこんだのである。

風呂敷をかかえたその娘は、

「何事ぞ！」

と、取りまいた伊賀者に、

「お許し下さい。石につまずき、お許し下さい」

と、叫んだ。

たしかに、娘の下駄の鼻緒は、小石にでも蹴躓いたように、ぷっつりと切れていた。

伊賀者達は、一瞬、どうしていいか迷った。その娘が、あまりに美しかったからだ。

屈強な供侍たちに追っ取り込まれて、その娘は殺されるとでも思ったのか、

「お許し下さいませ」

悲鳴にちかい声をあげて、いきなり、供侍の一人の足に獅噛みついた。

「こりゃ、放せ！」

思わず、供侍は、娘を蹴はなした。

「うわーあっ！」

凄まじい声をあげて、娘は、路上に転がった。

「何事じゃ」

と、春日局は、駕籠の扉を開けて見て、う！　と、目を見張った。

駕籠脇に転がったその娘が、お万の方にそっくりだったからである。

「初瀬！」

と、駕籠脇に従っていた、初瀬を呼んで、局は言った。

「あの女の名と住まいを訊いておきやれ」

娘は、おそでだった。

張孔堂で、おそでを見て、春日局同様、目を剝いた紀伊頼宣は、さっそく正雪の策を入れ、おそでを大奥へ入れようと計ったのである。

江戸城大奥に、幽霊騒ぎを起し、それによって、春日局を増上寺参詣にむかわせたのは、根来幻幽斎だった。

幻幽斎は、自ら江戸城大奥に忍び、駿河大納言忠長の亡霊を見て、驚愕している春日局に、密かに背文字の法を用いたのである。

睡眠中の者の背中に、指頭で密かに文字を書くと、これが暗示となって、夢裡に現れるのである。

しかし、本人は、全く、これに気づくことはないのだ。

幻幽斎は、深夜ひそかに、三度も春日局の肌をめくり、これに、駿河大納言忠長、上様をお怨み奉り、幼君竹千代君のお生命を縮め奉る、と書いた。その背文字の上に、さらに、三縁山広度院増上寺と書いたのである。

のみならず、幻幽斎は、春日局をその湯殿でも襲っていたのだ。

竹千代君が、忠長の亡霊に襲われて、一晩中泣きつづけたあくる日の朝。

春日局は、自室に戻って寝具の中に横たわっても、なおしばらく、虚脱したように、宙に目を泳がせていた。やがて、局が考えたことは、

〈湯を使って、神経を鎮めよう〉

と、いうことだった。

亡霊に怯かされたばかりでなく、睡眠中に、たてつづけに三度も、その肌を幻幽斎に犯された春日局は、身体中から生気が抜けて、老婆のように衰えてしまったような気がしていた。

緋緞子（ひどんす）の掛具をはいで、のろのろと起きあがった局は、白羽二重の寝衣のまま、よろよろと寝所を出た。

湯殿は、新しく設けられたばかりの立派なものであった。寛永のはじめころまでは、女中たちばかりでなく、将軍家も、御台所も、湯で身体を拭（ふ）くだけであったのだ。

新設の湯殿は、八畳敷につづいて、杉戸で仕切られた、五坪ほどの板敷の流し場があり、壁際に、竹箍（たが）の白木の湯槽（ゆぶね）が据えてあった。浴槽は下から焚（た）くのではなく、女中たちが、大きな玄蕃（げんば）桶（おけ）で、湯と水を運んできて、湯加減をととのえるのであった。しかも、いつでも入浴できるように、午前中は絶えず、湯は浴槽に満たされていたのである。

春日局は、身体を揉ませるため、女中の誰かを呼ぼうと思った。杉戸の脇には、朱房の紐が垂れていて、これを引くと、鈴が鳴って、湯殿の係の女中が、御用を伺いにくることになっていた。

しかし、春日局は、朱房は引かず、寝衣を桐の装束箱に脱ぎ落して、浴槽につかった。

浴室の中は、ほんのり明るい。

明り取りの天窓が小さいため、昼間でも灯が入れてある。浴室の四隅に据えられた燭台が、こもった湯気に滲（にじ）んで、微（かす）かにまたたいていた。

おそで失踪

一

春日局は、しばらく、浴槽の中に身をちぢめて蹲っていた。
湯の温かみは、疲れた身体に心地よかった。
浴槽からあがって、木枕に頭をのせ、局は、長々と流し場に横たわった。
暖められてふくらみ、ほんのりと色づいた局のからだは、とても、五十を過ぎた老女のものとは思われなかった。
薄明りのなかに浮かんだ自分のからだを、局は、われながら美しいと思った。
そのとき、杉戸のむこうから声があった。
「お局様、お流しいたしましょう」
その声は、湯殿係の女中絢のものであった。
「絢か」
と、局は訊いた。
「はい」
恥らいを含んだ、絢の声が返ってきた。
「入りやれ」
糠袋を持って、裾を高くとり、手襷をかけた若い女中が入ってきた。
物憂げにうつ伏せになった局の背に、絢と呼ばれた女中は、手桶で浴槽から汲みだした湯を、

しずかにかけた。
糠袋で、肩から腰へ、腰から脚へと、女中は丁寧に洗っては流していった。
春日局は、心地よさそうに目を瞑った。神経と身体の疲れが、心地よくほぐれていくようだった。
女中の柔かい手が、首筋を揉み、背中から腰の方へ降りていった。
太股から臑へ、両脚のうしろ側を揉み終ると、女中の手は、そっと臀部にかかり、わずかに力を入れた。
局は、ゆるりと仰向けになった。
ふっくらと盛りあがった乳房を、女中は、丹念に揉みはじめた。
かすかに、局は呻いた。
「絢」
「はい」
と、答えた女中は、そのふっくらと脹らんだ胸の桃顆を含んだ。
局は、恍惚たる官能の呻きを洩らすと、なだらかな丸みをみせてのびた腹から胸への曲線を、悩ましげにうねらせはじめた。
いつの間にか、太股は、大きく左右に広げられていた——その中点に、女中の二指が入って蠢いていた。
やがて、春日局は、凄まじい声をあげた。しかし、女中の指は、局を離さなかった。
再び、流し場にうつぶせにされた春日局の臀部に、裾をひろげて跨るように寄りそった女中は、激しく律動していた。

局の呻きが絶叫に変り、しばし、のたうった後、激しく痙攣して果てた。
その背に、女中は、指頭で、竹千代君のお命ちぢめ奉る——駿河大納言忠長霊と書いた。その上、さらに、三縁山増上寺と書いた。
女中絢に化けていたのは、根来幻幽斎であった。
夢裡にも、忠長の霊に、怯かされつづけた春日局が、増上寺参詣に出たのも道理であった。

芝片門前町の古着屋、元棚倉藩士と称する八沢作左衛門の娘そでが、大奥に召出されたのは、春日局の増上寺参詣後、わずか三日であった。
娘の仮親には、春日局がなった。
春日局は、まんまと、根来幻幽斎の罠に嵌ってしまったわけである。娘は、鷹匠同心山辺三十郎の娘、おそで、元棚倉藩士八沢作左衛門とは、根来の三郎太の化け姿であった。
しかし、増上寺参詣以来、大奥の幽霊騒動もぴたりと止み、お万の方そっくりの娘おそでを発見した春日局は、これぞ、御神君家康公のお加護であると、大満悦であった。
あくる日、伊豆守が登城してくると、局は、早速山吹の間に呼んで、言った。
「伊豆殿、わざわざお呼びしたのは、他でもない。実は、これだけは、伊豆殿に知らせておかねば、と思うての。上様は、近々、側妾をお持ちになりますぞ」
「ほう……」
伊豆守は驚いて、訊いた。
「それはまた急なことでございますな。一体、それはどのような婦人でござる」
「すべては、御神君様のお引合せじゃ。このわらわが久しぶりに増上寺に参詣したのは、知って

おるであろう。その途次で、見つけたのじゃ。見目麗しい女での。行儀作法はもとより、歌も一応は詠める。今朝、お湯殿で……」
「……」
「上様に声をかけられたわ」
「また上様もお早いことでござる。しかし、一体、その婦人というのは、どういう素性の女でござりまするか」
「古着屋の娘じゃ」
「古着屋……でござるか……、なるほど……」
正体不明の不安に捉われて、伊豆守は黙った。
大奥で幽霊騒動があったということは、伊豆守も知っていた。その結果、春日局が、亡霊調伏のために、増上寺に参詣したというのはわかる。
しかし、その途次、上様の側妾に差し出せるほどの娘を発見した、となると、これは、くさい——であった。
しかし、何の証拠もなく、それを口にすることは出来ない。
何か起らねばいいが……、と伊豆守は膝元に目を落した。
しかし、そんな伊豆守の心中は気づかぬのか、春日局は、なお上機嫌で喋りつづけた。
「古着屋というてもの、元は棚倉藩士、人をやって身元は調べさせたが、浪人せしいきさつも左程のことがなくての、今宵お褥入りと決りましたわ。これで、見事、丈夫な和子がお生れ遊ばせば、万々歳。われら、大奥はもとより、表方に於ても、ご安心でございましょうぞ」
「しかし、あれほど、お万の方様にご執心であった上様が、ようまた、そのようなお気持に、な

られましたな」

「それがじゃ」

と、春日局は、ひと膝すすめて、得意そうに、言った。

「その娘、おそでと申すのは、お万の方様に生写しなのじゃ。やはり、これは御神君様のお引合せとしかいいようがあるまいの」

「お万の方様に！　生写し！」

呻くようにそう呟いて、伊豆守は、訊いた。

「で、その古着屋という元棚倉藩士は、何という名でござる」

「八沢作左衛門と申すご仁じゃ……、何か不審な点でもあるのかや、伊豆殿」

「住いは」

「芝の片門前町じゃ。増上寺裏の古着屋じゃが」

「左様でござりますか」

すうっと膝を立てて、伊豆守は言った。

「では、局様、これにて御免」

面を伏せたまま、山吹の間を出た伊豆守は、真直ぐ御納戸口まで走り、

「馬ひけい、弥一郎！」

と、喚いた。

「かしこまった」

打てば響くように応えて、供待ち部屋から飛び出してきた笠井弥一郎、さっと、伊豆守の佩刀(はいとう)を差し出すや、

「松平伊豆守殿、ご下城、馬ひけい」

と、納戸口が喚いた。

この納戸口から中雀御門を経て、中の御門、大手三の御門までは、普通、騎乗は許されない。老中筆頭土井大炊頭利勝でさえ、大手三の御門で下馬して、登城してくる。しかし、伊豆守だけは、将軍直々(じきじき)に乗り入れを許されていた。

今の時間にして、およそ五分後には、もう、伊豆守は、馬上大手御門を飛び出していた。うしろから、笠井弥一郎は、

「松平伊豆守様、お通り！」

雷のような大音声(だいおんじょう)で喚きながら、埃(ほこり)を跳ねあげて、駆けてきた。この男、細面の華奢(きゃしゃ)な外見にもかかわらず、声だけは、父孫兵衛に似た大声の持主であった。

往来の通行人は、道脇によけて、この主従の疾駆ぶりを見送った。

伏見町から田村小路、七軒町を抜けて、伊豆守が、片門前町へ駆けこんだのは、今の時間にして、それから十分も経っていなかった。

街辻に馬をとめた伊豆守は、汗達磨になって、後から駆けてきた弥一郎に命じた。

「古着屋を探せい！　八沢作左衛門という名じゃ」

「かしこまった」

弥一郎は、ぱっと、横丁へ走りこんだ。

そのとき、角の唐木細工屋の脇から、ふらりと一人の武士が出てきて、言った。

「松平の殿様」

この武士、着流しの腰に朱房の十手を差していた。北町奉行所同心恩田十九郎であった。

「お！　十九郎か、如何いたした」
「とんだ喰わせ者でござった。今、甚兵衛殿が追うてござる」
「正体は！」
「おそらく、根来幻幽斎の手の者でござろう」
「他には……」
「後ほど、甚兵衛殿より、報告があると存じます。では、それがしは、これにて御免」
ふらりとまた、唐木細工屋の脇に消えた。
恩田十九郎は、伊豆守の御用を勤める隠密同心だったのである。
〈さすがに、十九郎は手早い〉
馬上で、伊豆守は唸った。

二

その夜酉(とり)の下刻（午後七時）、おそでは、洗い髪姿で鏡の前に坐っていた。江戸城大奥の長局の一部屋であった。
将軍に声をかけられた女中、または局は、酉の上刻（午後六時）になると、湯殿係に付添われて、先ず、入浴する。そして、からだを清めると同時に、ここで髪を全部崩して、洗い髪姿になるのである。
それから、更に、おつき女中の手で身体検査が行われ、裸のままで次の間に案内され、大きな布で裸をおおわれ、髪は、櫛巻(くしまき)程度にまとめられる。
ということは、将軍に声をかけられ、褥(しとね)をともにすることになった婦人は、まる裸にされて、

何も持つことが出来ないということである。閨房(けいぼう)中に、将軍が危害を加えられることをおそれ、未然に防ぐためであった。
髪をまとめられると、次は、裸に大風呂敷をかぶせられたような姿で、係の女中に背負われて、次の間に至り、御寝所係の別の老女に、引渡される。ここでもまた、身体検査が行われる。髪を梳(す)き、中に凶器や秘密の文書などを持っているか否かを、更に確かめるのである。
これが終ると、次の三の間に入り、女中達が、あらかじめ用意しておく化粧道具で、一応服装を整え、やがて、亥(い)の上刻（午後十時）になると、廊下の鈴が鳴り、将軍のこの三の間入りとなる。
ここで、茶を喫し、雑談して、まもなく、寝所入りとなるのだが、この寝所の警戒が、また、厳重を極めている。
将軍の寝具は、部屋の中央に東枕にのべられ、布団は下に三枚、掛け布団は五枚。いずれも美麗豪華で、枕は、くくり枕で、左右両側に朱房のたれたもの。
将軍の寝召衣は白羽二重、二枚重ねの小袖だが、これを、御用の女と、御添寝の女中が、二人して着がえさせるのである。
しかも、寝所の同じ部屋に、もう一人「お清」の女中というのが、床を並べて、一緒に寝るのだ。
これは、一種の見張番であって、将軍と御用の女に背をむけて寝るのだが、目覚めていて、寝物語があった場合などは、細大もらさず、翌朝、老女方へ報告する役目を持っている。
また、この寝所の次の間には、係の御老女が控えていて、寝ずの番の老女たちが、そのまわりの部屋に詰めている。並大抵の厳しさではない。

寝所の建物にしても、大奥の御寝所は、たとえ忍者が忍びこんでも、槍や刀が使えないように、床下は特に低く造られていた。

おそでは、櫛巻に巻きあげられている鏡の中の自分の顔を見詰めて、小刻みに震えていた。

大奥に入れば、父の仇を討つ機会を摑むことが必ず出来る、その手助けは必ずする、と正雪にいわれ、八沢作左衛門に化けた根来三郎太と組んで、みごと大奥にまで入りこみ、たちまち、将軍家光と二人だけになれる機会を摑んだおそでだったが、素手で、家光を討てる自信は、なかった。

とにかく大奥に入れ、それから後は、わしがなんとかする、と言った根来の三郎太も、片門前町で別れて以来、一度も姿を見せていなかった。寝所に入るまでの順序、寝所での厳しい警戒の模様なども、おそでは三郎太から聞かされていた。

どうしよう……、とても、一人で、しかも、素手で討てるわけがない……、考えれば考えるほど、おそでは自信を失していった。

そのとき、鏡のなかを、ふっとひとつの影がよぎった。

三郎太の声が、どこからか聞こえてきた。

「将軍家光こそ、おまえの親爺殿の仇じゃ……、将軍御寝所、二の間へ入ったときが勝負じゃ……、わしが必ずそこに現れる……よいな、おそで……、おそで……」

おそでは、思わず目をつぶって、首肯いた。

目を開くと、鏡の中に、亡き父山辺三十郎の顔が映っていた。無惨に潰れた片目からは、血が噴き出していた。

〈父上、おそではやりますぞ〉

また目を瞑って、おそでは胸のうちで呟いた。

そのとき、春日局が現れて、厳しい声でおそでに告げた。

「心得を申しあげる。ひとつには、いかに、ご寵愛をこうむろうとも、馴れまじきこと。今ひとつは、お閨では、一切おねだりごとは申すまじきこと……」

しかし、おそでは、もう春日局の言うことは聞いていなかった。

そのころ、松平伊豆守信綱は、江戸城大手門に向って、驀地に馬を飛ばしていた。

日が暮れてようやく、一ツ橋御門内の松平邸に帰ってきた甚兵衛は、古着屋は根来衆、娘おそでは、山辺三十郎の娘おそででござる――と報告した。

根来衆が動いたとなれば、うしろには、紀州頼宣が控えているに決っている。張孔堂から、紀州大納言家へ、策謀の手段として、おそでは渡されたにちがいない。

しかし、一介の鷹匠の娘が、大奥に入るとなれば、これは異例の出世といえる。どのような手蔓で入ろうと、伊豆守は、喜びこそすれ、反対する理由はなかった。しかし、何故もって回って、古着屋の娘に仕立てたか――、鷹野で落度があって、腹を切った同心の娘では、大奥に入れぬと考えたか……、紀州大納言頼宣公ならば、

「お万の方様そっくりな娘を見付けて参ったぞ」

と、堂々とおそでを連れて、入城してきたとて、誰も、この振舞いを怪しみはしないはずだ。

現に、世継竹千代君が病弱というのは、公然の事実なのである。

「その根来者は如何いたした」

と、伊豆守は訊いた。

甚兵衛の答えは、
「残念ながら、舌を嚙まれてしまい申した」
というものであった。
とすれば……、頼宣は、たとえ大奥でどんなことが起ても、おそでとは何の関係もないと、白(しら)をきり通すことが出来る——と思った、とたん、伊豆守は、う！　と立ち上っていた。
「張孔堂め！」
と、唸った。
張孔堂が、紀伊大納言と計って上様暗殺のために、お万の方そっくりの、おそでを大奥へ入れた——、と考えれば、話はぴったりとくる。根来者を使えば、おそでに、父の仇は家光じゃ、将軍じゃ、という暗示をかけ、これを木偶(でく)のように動かすくらいは雑作もなかろう……。
「それじゃ」
と、唸ったとたん、
「今宵か！」
と想(おもい)が巡って、激しい悪寒が背筋を貫いた。
一瞬の猶予もなく、伊豆守は玄関にとび出して、喚いた。
「弥一郎、馬をひけい」
そのまま、驀地(まっしぐら)に、伊豆守は、馬上、疾駆してきたのだ。
伊豆守が、御納戸口から、中奥へ飛びこんだとき、おそでは、既に、将軍御寝所二の間に入っていた。
そこには、「お清」の女中一人と、付添いの老女初瀬が待っていた。

おそでに寝化粧をさせ、寝衣を着せて、裾を形よく割ってうしろに長くのばした。
初瀬は、惚々(ほれぼれ)と、おそでの寝衣姿を見あげて、言った。
「ほんに、お万の方様に生写しじゃ」
そのとき、突然、燭台の灯が揺らめき、あたりが薄暗くなった。
鼠が一匹、ちょろちょろと、初瀬の膝前を走った。
思わず、初瀬は、鼠の走り去った方角を見た。その一瞬の間に、音もなく、どこからか飛来した一枚の刃物が、おそでの寝衣の襟裏に刺さった。はっ！　と、おそでは胸を押さえた。
襟裏に刺さった刃物は、掌(て)のうちに匿(かく)せるほどの薄刃の剃刀(かみそり)だった。
〈それで、交接中、将軍の首根の血脈を切れ。四肢を絡め、しっかりと抱き締めて切れ〉
どこからか、おそでだけに聞こえる忍び声が流れてきた。
「では……」
と、老女初瀬は、目でおそでを促し、三の間に入る襖をあけた。
同時に、廊下で異常な物音が起り、いきなり、三の間の襖が押し開かれて、松平伊豆守信綱が、つんのめるように飛び込んできた。
「御法度でございます！　御老中様！」
と、喚いて、飛びついてきた茶坊主や女中たちを、
「ええい、うるさいっ！」
蹴はなして、伊豆守は大音声で喚いた。
「初瀬殿、そのお女中は、わしが預かる」
「なりませぬ」

きっと柳眉（りゅうび）を逆だてて、初瀬が喚きかえした。
「ここは、男子禁制の大奥でござりまするぞ！　伊豆守殿……、乱心召されたか！」
「乱心はしておらぬ！　お咎（とが）めは覚悟の上じゃ。お咎めを受けるのは、わし一人でよい。初瀬殿、そのお女中を渡されよ！」
「ならぬ！　なりませぬ！」
わっと、女中や茶坊主が、また、伊豆守に纏（まと）い付いた。
あっという間に、大奥は、蜂の巣をつついたような騒ぎになってしまった。
その隙に、おそでは三の間に駆けこんだ。
いつの間に来ていたのか、三の間の真ん中に、白綾の寝召衣をきた将軍家光が突っ立っていた。
「上様！　父の仇！」
おそでは、襟裏から剃刀をぬいて、飛びかかった。
家光は、ぱっと足をあげて、これを蹴倒した。茶器がとび、おそでは、襖を突き破って、次の間に転げこんだ。
「おのれ！　伊豆守！」
と、春日局の罵（ののし）る声がした。
そのとき、三の間の灯が吹き消えた。つづいて二の間、お廊下と大奥すべての灯が、音もなく消えていった。
わぁ！　と、一団の女中たちが、三の間に雪崩れこみ、人垣をつくって、将軍家光を取り巻いた。
「曲者（くせもの）じゃ。出あえ！　出あえ！」

老女初瀬が、金切声をあげて喚いた。
再び灯が点（とも）されたとき、おそでの姿は、もう大奥のどこにもなかった。
一刻後、気を失ってぐったりとなったおそでを背負って、一人の黒装束が牛込矢来下の森の中を歩いていた。山者、天魔の三郎であった。
鏡の前で震えていたおそでに、既に鴉の甚兵衛に殺されていた根来の三郎太の声で囁きかけたのも、この三郎だった。
この夜以来、おそでの姿は、江戸から消えた。

六章

賞金相撲

一

将軍家光は、ちかごろ憂鬱であった。

鷹野で、酔った山辺三十郎が吹雪に片目をつかれ、割腹してから、既に二年の歳月が流れていた。

父秀忠の死で、ようやく手に入れたと思っていた権力も、いつの間にか、土井利勝、松平伊豆守らの閣老たちの手に渡り、大奥は大奥で、春日局が勝手に取り仕切っていた。家光はこれら江戸城の実力者たちに、体よく棚上げされてしまった形である。

今日も家光は定刻には御座の間に出て来ていたが、何もすることはない。脇息に凭れて、半刻ほども天井を見詰めていた。

江戸城の朝は早い。

寅の刻（午前五時）には、勘定奉行が下勘定所へ出仕してくる。卯の上刻（午前六時）には、大奥の御錠口もひらく。江戸城三十六門の開門も、この時刻である。武家の昼食は、およそ辰の上刻（午前八時）である。

昼食が済むと、まもなく、若年寄の登城、勘定奉行登城。巳の上刻（午前十時）には、町奉行と老中が登城してくる。巳の下刻になると、大目付柳生但馬守が登城してきて、城中も一段と緊張し、お廊下を行きききする茶坊主たちの足音も、一段と忙し気になる。

しかし、家光だけはこれといった仕事がないのだ。腐るわけである。うしろに控えた、太刀持の御小姓たちも、退屈して天井を見ていた。

家光も、やがて、

〈もはや、よかろう。どうせ、余のする仕事はない〉

舌うちして、座を立とうとした。

そのとき、前面の襖が開いて、松平伊豆守信綱が平伏し、そのまま面もあげず、するすると、膝行してきた。

〈こやつも一人前になりおったわ〉

皮肉な目で、蟹のように、眼前に平伏している伊豆守を見て、家光は薄ら笑った。

「上様、御茶水水道に関する書類でござります。お目通しを」

「ふむ」

と、天井を見て、家光は言った。

「よきに計らえ」

「上様」

「何じゃ」

家光は、まだ天井を見ていた。天井に一個所染が出ていた。

〈あの染は、お福の臀部のようじゃな〉

と、家光は思った。

とたん、伊豆守は、厳しい声で言った。

「お茶水水道開鑿工事は、伊達陸奥守殿がお任せあれと申し出ておるのでござるが、伊達殿一家でよろしゅうございましょうか」

「よきに計らえ」

「よきに計らえと、仰せられましても」

「くどいぞ、伊豆。その方のやることじゃ、そつはなかろう」

「とは申しましても、お茶水水道は、お家の茶の湯にも使われ申す、大事な水道でござります。是非、書類だけにでもお目通しを」

「伊豆」

「何でござりましょう」

とたん、家光は激しい声で一喝した。

「おのれは、この家光に無理強(じ)いするか！」

「ははっ！　おそれ入りましてござります」

周章(あわ)てて頭を下げた伊豆守に、今度は、家光、けろりとした声で言った。

「何か、伊豆、面白いことはないか」

「はて……」

「その方は、微行(しのび)と称して、夜な夜な出歩いているそうじゃの。どうじゃ、近頃の江戸の町は面白いか」

「夜な夜なは、おそれ入ります」

「伊豆、おそれ入らなくてもよい。傾城(けいせい)街にも、しばしば出入しておるそうではないか。わしも、花魁(おいらん)とか称する女体を、たまには弄(もてあそ)んでみたいものじゃ」

「上様！」

「何じゃ」

「ご冗談もすぎましょう」

「わかっておる。しかし、今の余は、この身を持て余しておる。武道の相手は、追従負けばかり。政治は、その方らの存念どおりじゃ。これでは、退屈せぬ方がおかしくはないか、伊豆」

「……」

「だから、というて、余はその方らの仕事に苦情を申しておるのではないぞ。ただ……」

「ただ、何でござりましょうか」

「たまには、余も連れていけといっておるのじゃ。昔よく、連れ立って出掛けたものではないか、うむ」

「はい。しかし、上様」

と、松平伊豆守は顔をあげ、苦しげに言った。

「天下は既に治まり申したとはいえ、一般の世情は、いまだ不安でござります。張孔堂一門をはじめとする浪人どもも、天下の顚覆(てんぷく)を狙って蠢動(しゅんどう)しており申す……」

「ならぬと申すのじゃな。よい、松平伊豆守。下って執務せい。お茶水水道開鑿工事は陸奥守に任せよ」

「かしこまりました」

いたし方ない——、と、伊豆守は書類を取りあげると、

「では……」

一礼して、退(さが)っていった。

伊豆守の姿が襖のむこうに消えると、家光は、ぼんやりと呟いた。

「才子という者は、退屈なものじゃ」

そのとき、

「上様」

と、背後で呼ぶ者がいた。

家光が振りむくと、敷居際に、近習の松本良之亮が平伏していた。

「何じゃ！」

と、家光は喚いた。

「手前、今宵、宿直でござれば」

と、良之亮は言った。

「お忍びのお供など、相つとめたく存じまする」

「ふーむ。良之亮、よい心掛けじゃ。近う」

するすると寄ってきた良之亮に、家光は、何事か囁き、満足そうに笑った。

その夜――。

南馬道新道を、頭巾で顔をつつんだ武士が二人、ふらりふらりと暢気そうに歩いていた。

将軍家光と松本良之亮である。

家光が三代将軍職を襲いだ、元和の年間から寛永のはじめ頃までは、このあたりは、いまだ松、桜、榎などの大木が鬱蒼と繁茂した、昼なお暗いほどの森であり、浅草観音に通じる細道が一本通っているだけの淋しい場所であったが、寛永の中頃から俄かに開けはじめ、今は、道幅も広がり、両側にはびっしりと町屋が押し並んだ殷賑の場所と化していた。

南馬道から並木町にいたる裏通りは、茶屋町がひらけ、絃歌の音が沸いていたし、道行く人々

も、かつて家光が、竹千代と称していたころとは、うって変った派手やかさで、紫縮緬の鉢巻に鮫鞘の大小、一つ印籠をぶら下げて、すでに日は落ちたというのに、日傘をさしてゆく若侍がいるかと思えば、縞の単衣に吉原かむり、尻っぱしょりで、どういうつもりか、横笛を吹き吹き、踊りながら行く者もいる。

雷門の前には、黄粉餅、うどん、蕎麦切などの屋台も出ていたし、仁王門に至る参道の両側には、家光などは聞いたこともないような、種々雑多な品物を売る小店がびっしりと建ち並んでいた。

泥鰌髭の辻占屋が出ている。

その脇には、十二、三の子供が立って、

「えー！　辻占、辻占」

と、喚いていた。

「あれは何じゃ」

と、家光。

「辻占と申すものにござります」

松本良之亮の返事は、答えになっていない。

しかし、家光は、

「たわけめ、辻占と呼んでおるものは、辻占に決っておる。その内容は、どういうものかと訊いておるのじゃ。ふふふう」

と、御機嫌であった。

二

やがて、二人は、浅草寺の境内に入った。
とたん、わあーとあがった歓声。
観音堂脇の空地に、人々が密集していて、その中から、
「はっけよい、はっけよい。のこった、のこった……」
威勢のいい行司の声が聞こえた。
「あれは何じゃ」
と、また家光。
「相撲大会でござりましょう」
「そのくらいは、わかっておるがの。夜相撲とは面白い」
家光は、群衆を掻きわけて、前に出ていった。
土俵の上では、二人の若い衆が、むんずと四つに組んで揉み合っていた。
ずるずると、その一方が、押し出されかけた、とたん、
「しっかりしろ、伊豆守！」
と、土俵脇から声が掛った。
う！　と、家光は目を見張った。
しかし、それは、松平伊豆守信綱ではなく、幡随院の三下奴、伊豆の豆吉であった。下から喚いたのは、蛤の三太である。
いま一方の裸は、魚屋太助であった。

この太助、魚屋といっても、二、三年前までは、花川戸の裏店に住み、担ぎ売りのしがない棒手振りであったが、ふとしたきっかけで、直参随一の頑固爺として有名な、将軍家の御意見番大久保彦左衛門忠教の知遇を得て番町に小店を構え、一心太助といえば、今や江戸では知らぬ者もないほどの名物男になっていた。
軍配を斜に構えて、
「のこった！　のこった！」
と、喚いているのは、幡随院長兵衛の一の子分、唐犬権兵衛である。
「おっ！」
と、家光は声をあげた。
太助が見事に豆吉を打擲ったのである。
「勝ちいーっ。魚屋太助ェ！」
すかさず、権兵衛が太助の頭上に軍配をあげた。
とたん、
「この、野郎！」
と、土俵上に、飛びあがったのは、蛤の三太であった。
太助は余裕たっぷりに言った。
「よおっ、蛤の親方、来い」
いきなり、三太は摑みかかろうとした。
その頭を、がっ！　と、権兵衛が軍配で張った。
「あれっ！」

と、頭を押えて、三太、
「な、なにするんでい、兄貴！」
「ばっ、ばっか野郎め！　す、相撲つうもんは、し、仕切りからやるもんだい、う、薄ら馬鹿野郎！」
土俵下から怒鳴ったのは、ども弥太であった。そのうしろに、羽織の裾を巻きあげて帯にはさみ、ぬーっと、恩田十九郎が突っ立っていた。
「よおし！　こい！　一両はおいらが戴きだい」
「へっ、てめえなんかに取られてたまるかい！」
「見合って、見合って」
権兵衛が軍配を構えて、また斜になった。
これは、十人抜き賞金相撲であった。
土俵の脇に、黒々と、
十人抜賞金一両也
と書かれた白木の札が立ててある。
当時の一両というのは大金である。一両あれば、夫婦に子供二人くらいならば、楽に一年は暮せた金額である。太助も三太も夢中になるわけであった。
太助は六人目の豆吉を打擲って意気軒昂、権兵衛が軍配を引くのも待ちきれず、
「えいっ！」
と、ばかり、突っかけた。
その鼻面をさっと掌で押えた三太、横面を思い切り右手で張った。

うわ！　と、太助はもんどりうって転倒した。
「張り倒しぃー、蛤川の勝ちぃーっ」
権兵衛、やはり、身内が勝つのは嬉しいらしい。やけに長々と、蛤の三太の勝名乗りをあげた。
しかし、納まらないのは太助である。
砂をかんで、すっととび起きると、
「野郎！　この野郎！　ふざけやがって！」
喚きざま、三太に摑みかかった。
「お兄ちゃん、やっちぇえ！」
と、声をかけたのは、太助の義妹のおそのだ。
「負けんな、うちのひとッ！」
これは、女房のお仲である。
一心太助は、一家総出で、賞金相撲に出かけてきたのだ。これでは、意地でも負けられない。
「ぶっ、ぶん殴るてえ手があるかよっ、相撲に！　この野郎！　そっちがその気なら！」
ぱっと、太助は、三太の股間を蹴上げた。
「いてぇ！」
股間を押さえて、とび下がった三太、
「こん畜生！　喧嘩なら、こっちは商売（しょうべえ）だい！　てめえは、魚でも売ってやがれ！」
と、拳を固めて、とびかかった。
とたん、
「待て、町人」

家光が土俵下から声をかけた。ばかりでなく、自ら土俵へ上って、三太と太助の髻（もとどり）を摑んで引き離すと、

「相撲には、古来、張り手というものがある。蛤川とやらの勝じゃ」

と、言ったものだ。

このとき、土俵のまわりで、目を剝いたものが四人いた。恩田十九郎と、黒の着流しの二人づれ、それは張孔堂の丸橋忠弥と金井半兵衛である。いま一人は、土俵下に筵（むしろ）を敷き、これに大胡座（あぐら）をかいて、酒を呑んでいた幡随院長兵衛であった。

この四人は、一目で、山岡頭巾で顔をかくした武士が、ときの将軍徳川家光と見ぬいてしまったのだ。半兵衛は、絽の羽織の下に隠された葵の御紋まで見た。

しかし、三太と太助には、わかるわけがない。

「何だ、てめえ。二本差していると思って、勝手なことをぬかすない！」

と、まず、太助が喚いた。

「勝手なことではない。張り手というのは、あるのじゃ」

と答えた家光の前に、ぬっと顔をつき出して、

「あるかねえか知らねえが、てめえ偉そうな口を利くない。あるんなら、この蛤川に一発かましてみろ。この三太様がでんぐり返ったら、てめえの言うことをきこうじゃねえか。おい！　ひとの髻なんか摑みやがって、この三太様を甘くみると為にならねえぞ！」

「よかろう」

と、家光は言った。

大小を腰から抜いて、周章（あわ）てて土俵際に寄ってきた松本良之亮に渡すと、

「いざ、参れ」

両手をひろげて、三太の前に立った。山岡頭巾の中の目が笑っていた。

家光は、相撲が飯より好きという将軍である。紅葉山の脇に土俵を築造し、気がむけば、いつでも近習を集めて相撲をとる。近習たちには、遠慮敗けする者も多かったが、家光自身、相撲は弱い方ではなかった。

そんなことは、三太、知らぬから、

「うぬ！」

と、組みついたが、家光の下手投げで、軽く土俵に這わされた。

つづいて飛び出した太助は、

「これが、張り手じゃ」

声とともに、痛烈な張り手を喰らって、土俵の外へとび出した。

「仕切りはよいぞ。われと思わん者は、誰でもとびこんで参れ」

家光は、仁王立ちになって、楽しげに言い放った。

とたん、

「この二本差しめ」

鮮やかな倶梨伽羅紋紋（くりからもんもん）を背負った放駒（はなれごま）四郎兵衛が飛び出したが、これも、一瞬のうちに地に這わされた。

このとき、

「やるか」

と、人垣の中で、忠弥が言った。

「よせ」
今にも飛び出しそうな忠弥の袖を、半兵衛は強く握って、言った。
「こんなところで、あやつを地に這わしたところで、何の足しにもならぬわ。しばらく、いい気持にさせておけい。帰りじゃ」
「何だと」
「帰途を待ち伏せて、斬る」
「ふーむ。殺してしまうか」
「左様」
と、半兵衛は、四方から篝火（かがりび）に照し出された家光の姿をみて、言った。
「その方が手早い」

流水月

一

五人目の相手は、一見兵法者とわかる三十年配の浪人だったが、これも、家光は、見事に寄り切った。
「黒覆面の勝いー！」
行司の権兵衛が、さっと家光に軍配をあげた。
勧進元の幡随院長兵衛が、賞金一両を三方に載せて立上るのを見て、忠弥と半兵衛は、密かに人垣から抜け出した。
とたん、カァと一声、どこかで鴉が鳴いた。
「ふむ。いるな」
と、忠弥。
「面白くなるやも知れぬ……。あの鳴き方、あれは、鴉の甚兵衛の恫喝じゃ」
半兵衛は、淡い月光の中に浮いた観音堂の屋根を見あげて、
「甚兵衛がおるとすれば、あのくノ一もおるか」
「ふむ、くノ一ばかりではない。恩田の馬鹿面もおるわ」
十九郎が、伊豆守の隠密同心であることは、既に、天魔の三郎配下の山者たちの手で、探り出されていたのだ。
「と、するとじゃ」

と、半兵衛、珍しく神妙な顔で、忠弥を見て言った。
「十兵衛もおるやも知れぬな」
「左様」
「とすればじゃ。これは、ひょっとすると、戦になるぞ。しかも、敵はすべて一騎当千じゃ。あの恩田という馬鹿面も十兵衛ほどには使う」
「ふむ、正雪とやらせて、まず、あの十九郎なら、五分というところじゃろう。四分六分で、正雪の方が分が悪いかな」
と、忠弥が呟いたとき、
「馬鹿もん！」
闇の中で声がした。
う！　と、二人が同時に振返ると、朧富士の編笠をいただいた小柄な武士が一人、うしろに立っていた。張孔堂由比正雪であった。
「おのれら、腕は立つかも知れぬが、兵法というものを知らぬな」
二人の間に入って歩きながら、正雪は言った。
「いたずらに血を流すではない」
「気取るな。正雪。あやつさえこの世から消えれば、天下の浪人どももいま少し生きよくなる。一殺多生、これじゃ。一人の血を流すことによって、万人が助かる。それにしても、おぬし、今宵は学塾におったのではなかったのか」
「いたわさ」
と、正雪は言った。

「しかしじゃ、天魔の三郎が伝えて参った。将軍が忍びで城を出た、との」
「ふーむ、三郎め、余計な働きをしよる」
「余計ではないぞ。半兵衛、三郎は、家光が城を出るや、服部半蔵めが伊賀者を十数名率いて、これを追って出たと知らしてきておる。大事な玉を、あの松本良之亮などという馬鹿者と、二人きりで街へ出すほど、伊豆めは無能ではない。おそらく、伊豆からの知らせは、柳生屋敷にも飛んでおるであろう。わしと恩田などを並べて品定めをしておるような場合ではない。この虚仮めらが」
「ふむ。怯えるな、正雪」
と、忠弥が言った。
「それでも、鷹野で襲うよりはまだましじゃ。このような機会は二度とないかも知れぬぞ」
「いや、ちがう」
と、正雪は言った。
「今の将軍の嬉しげな顔を、今一度思い出してみろ。家光め、久しぶりの微行に味をしめて、また出てくるに決っておる」
「ふむ」
「しかしじゃ、二度三度とつづくうちに、必ずや伊豆めは、何らかの方法で諫めるであろう。あるいは、春日局を通し、泣いて微行は止めさせるやも知れぬ」
「あり得ることじゃの」
と、半兵衛は顎を撫でて、言った。
「しかし、あやつはほとぼりが覚めた頃、また出る。こうか、正雪」

「その通りじゃ。しかも、その時は、家光めも、用心に用心を重ねたうえで出るじゃろう。伊豆めも裏をかかれるおそれなしとしない」
「なるほどな。そのときを襲うのか、この卑怯者！」
忠弥の言葉には、常に毒がある。しかし、正雪は怒らず、
「今ひとつ理由がある」
と、言った。
「それを聞こう」
と、半兵衛。
「家光の微行襲撃に、紀伊の馬鹿者にも一枚嚙ませるのじゃ」
「頼宣にか」
「左様。で、すべての責任は紀伊にとらせる。これでどうじゃ」
「よかろう」
と、忠弥が言った。
「では、今宵は久しぶりに、吉原にでも上るか、ふふう」
半兵衛が、月を仰いで、薄ら笑った。

あくる日の夜更け――。
正雪の意を受けた天魔の三郎が、密かに紀州屋敷へ忍んでいった。
大森の浜辺で、公儀隠密団の奇襲をうけ、伊賀者の恐しさを思い知らされた正雪は、半兵衛の意見を入れて、今は、天魔の三郎率いる山者十数名を、ひそかに張孔堂に潜ませていた。

楠不伝を頭領にいただき、闇から闇へ跳梁するこの山者たちは、今は、張孔堂に欠くべからざる戦力になっていた。
根来幻幽斎の率いる紀州忍者と組み、おそでを千代田城中に入れるという荒事をやってのけられたのも、天魔の三郎以下の山者がいたからこそだった。
三郎は、おそでを千代田城から、予定通り攫い出して、おそでという生き証人を通して、張孔堂と紀伊家の名が、事件の黒幕として明るみに出る道を、見事に絶ってみせた。
その点、三郎太を鴉の甚兵衛に仕留められた根来幻幽斎は、天魔の三郎には借りがある。
――張孔堂は、将軍家光の微行時を狙って、これを脅かす。ことの成り行きによっては、お命をも縮め奉る――。
という、正雪からの言伝を、天魔の三郎に齎されては、幻幽斎も、動かないわけにはいかない道理であった。
それに、幻幽斎には、山者などに出し抜かれ、主頼宣が正雪ごとき素浪人の後手、後手と回っていくことは我慢できなかった。
天魔の三郎が紀州屋敷を出るや、幻幽斎は、早速国許へ下忍を走らせ、根来一郎太をはじめとする子飼いの俊秀を江戸屋敷へ呼び寄せた。
正雪の狙いは、見事に当った。
実は、家光の微行を餌にして、幻幽斎の一党と、公儀隠密団を嚙み合せようと計ったのである。
それから二カ月ほどが過ぎ、江戸にも、秋風が吹きはじめた、或夜のことであった。
内桜田御門が密かに開き、一丁の駕籠が城中から送り出された。

厚い雲が、空一面にひろがった暗い晩であった。
濠端の往還の人通りもまったく絶えていて、あたりには、既に深夜の趣きがあった。
駕籠脇に掲げられた提灯が、ぼうっと赤く闇に滲んで、狐火のように明滅した。
駕籠は、総蒔絵の堂々たるもので、窓には葵の紋がついていた。陸尺が四人、伊賀者とおぼしき侍が駕籠脇に一人ずつ、そして、駕籠の前後一間ばかり離れたところに、武士が二人ずつ従っていた。
弁慶濠に沿って、東に進んだこの一行は、大名小路に入ったが、どの屋敷にも入らず、広い往還の真ん中を、密かに進んでいった。
やがて、一行は外濠のほとりに出た。
「止めい」
駕籠の中から声がかかり、陸尺たちは、静かに駕籠を下した。伊賀者の一人が、雪踏を揃えて、扉を開けた。黒絹で顔をつつんだ武士が、駕籠から現れた。
うしろに従っていた一人の武士が、無言で前へ出てきた。
その武士に、黒覆面の武士は、言った。
「伊豆、今宵はわしを一人で歩かせい」
家光であった。
「それはなりませぬ」
家光は、張りのある声で言った。
「心配は無用じゃ」
「上様」

伊豆守は、押し殺した低音で言った。
「市中の噂、すでに消しがたい折から、何者が狙いおるやも知れ申さぬ。今宵は、この伊豆守、おそばを離れるわけには参りませぬ」
「わしの腕は、それほど未熟ではないぞ、伊豆」
「存じております。されど、徒党をもって襲われるやも知れませぬ。いくたびも申しあげたことにござりまするが、近頃の浪人どもの勢力、侮るわけには参りませぬ」
「面白い。わしの獅子乱刀を教えてくれよう」
家光は、柳生但馬守から、印可を得ている。〝獅子乱刀〟というのは、多勢を相手に戦う場合の、柳生新陰流の極意の一つであった。
「伊豆、もうよい。そちは帰城せよ」
そう言い捨てると、家光は、伊豆守に背をみせて、闇の中に歩き去った。
二名の伊賀者と供の武士、松本良之亮と植松左近、薬源十郎だけが後に従った。闇の中に消えていく一行を見送った伊豆守の目には、異様な光が浮いていた。

二

家光は、今宵は久し振りに、人を斬ってみるか——と、将軍家にあるまじきことを考えていた。
外濠の水が、闇の底で鈍く光っていた。
二名の伊賀者は、まるで闇そのものと化してしまったように、家光の前後五間のところを音もなく歩いていた。
家光も、植松左近も、薬源十郎も、足音をたてず猫のように濠端の道をひろってゆく。植松と

薬は、ともに柳生新陰流の高足である。松本良之亮の草履の音だけが、異様に高く感じられた。
「源十郎」
と、家光は、低く押えた声で言った。
「あやつは、邪魔じゃったな」
そのとき、伊賀者の前方二間のところを歩いていた松本が、音をたてて濠の中に落ちた。
「う！」
と、家光は振りむいた。
松本は、濠の中で凄まじい水飛沫（しぶき）をあげていた。松本良之亮は水練不調法だったのである。伊賀者が分銅縄を投げて、良之亮を救いあげた。
家光は、足音荒く引き返してきて、
「去（い）ね！　虚仮（うつけ）め！」
と一喝した。
松本を濠に突き落したのは、天魔の三郎であった。しかし、濠端に影のように這っている三郎に気付いた者はいなかった。
松本が、己の不覚を恥じて、びしょ濡れのまま闇に消えていくのを、三郎は薄ら嗤って眺めていた。
やがて、家光一行は、片側は広大な大名屋敷の海鼠塀、反対側は林になっている道に出てきた。先頭を歩いていた伊賀者の足が止った。
海鼠塀の下に人が立っていた。
その口元とおぼしきあたりに、一点の火があった。伊賀者が足を止めたとたん、その火がぼあ

ーっと体積を増して、消えた。とたん、またぼあーっと光った。
何者！
伊賀者の手が、腰から棒手裏剣をぬいた。
火は、また体積を増した。
?!
伊賀者は、音もなく寄っていった。
浪人がひとり、塀に寄りかかって、莨（たばこ）を吸っていた。枯木のように痩せている。腰には、朱鞘の大剣が一本。
金井半兵衛であった。
「立ち去れい！」
押し殺した声で、伊賀者は言った。
「立ち去れとか。ふむ、立ち去る。されど、いっとき待たれよ。いま一服吸う」
不敵にも半兵衛、右手で莨をまるめ、器用に火種を左手のひらに落すと、また雁首に莨をつめて、火を吸いつけた。
とたん、半兵衛は、伊賀者の脇を擦りぬけていた。林を背にして立った家光のまえに、影のように出てきて、言った。
「おぬし、莨は嗜（たしな）まぬのか」
「うぬ！」
と、家光の大剣が鞘走った。
かっ！　と、これを煙管（きせる）で払って、半兵衛は言った。

「これは、ご無体な」
とたん、半兵衛の五体は奔転していた。
家光のまわりで血が噴いた。薬源十郎と植松左近が一瞬の間に屍となって地上に転がっていた。
二人の伊賀者が、地を蹴った。しかし、これも、次の一瞬には、もんどりうって地に這っていた。闇の中から、同時に飛来した二本の手裏剣が、この二人の心の臓に、みごと、突き刺さっていた。天魔の三郎の仕業であった。
家光は、白刃をぶら下げて棒立ちになっていた。恐怖で、全身が硬直していた。目の前に、薄ら嗤いを浮かべて立った半兵衛の痩身が、巌のように見えていた。
「将軍家とお見受け仕る」
と、半兵衛は嘯いた。
「手前、名もなき素浪人でござるが、浪人は、路上で莨を吸ってもいかぬか」
「お、おのれ」
と、家光は呻いた。
半兵衛は、そろりと剣先をあげた。
とたん、家光は、仰向けに、背後の林の中に顚倒した。うしろから家光の襟首を摑んで、引倒した者がいたのだ。
う！
思わず、半兵衛は一歩とび退いた。
その者は既に抜き放ち、家光の立っていた位置にいた。家光がその者に、一瞬に化身したような迅業だったのだ。白刃は、正眼に上っていた。

剣先には、柳生流独特のゆるやかな浮沈があった。その五体からは、猛気が溢れていた。密かに将軍家を護衛してきた、柳生但馬守宗矩に紛れもなかった。
なるほど噂だけのことはある——。
半兵衛、腹の底で唸って、一歩下った。但馬守の剣先の浮沈を見ながら、陰の構えに入った。
その構えを見て、今度は、但馬守が唸った。
半兵衛の構えは東軍流極意の受け太刀「流水月法」に紛れもなかった。陰の構えは、元来が守勢である。襲撃に採るべき構えではなかった。
但馬守は、半兵衛の陰の構えから、今宵は、容易ならぬ人数が、闇の中に潜んでいる——と見てとったのだ。
但馬守が、咄嗟に、林の中に引倒した家光は、すでに、配下の伊賀者の手で安全な場所に匿われているはずだった。しかし、江戸城までは距離があった。
但馬守は、必殺の一撃を予告するごとく、ひらりと剣先を八双にあげた。
半兵衛は、にやっと嗤って、ずばり、間合を詰めてきた。間合は二間、しかも、半兵衛の陰の構えは、不思議な攻勢の形をとっていた。
陰の構えは、右肘を小脇に引付けるのが、普通である。しかし、半兵衛は、左肩を引いて、右腕を大きく胸前にまわし、左肘を小脇に引付けているのだ。
すなわち、完全に右半身は隙にして、そこへ敵の一撃を誘うとみせているのであった。
敵が振り下してくる一颯の刃風と、これに合せて、右へ薙ぎ払う一条の白光と——その電光石火の間の遅速が勝負の分れ目となるのである。
しかし、半兵衛が、これを狙うには、己が五体を但馬守の刃圏内へ入れなければならない。こ

こに、命を捨てる、無謀ともいえる東軍流の凄みがあった。そして、それは、金井半兵衛という、三代を浪人暮ししてきたこの兵法者の性格をも現していた。陰の構えを取りながら、それは、あくまで策であって、この男は、攻撃一点ばりの性格であったのだ。

一歩、一歩と、半兵衛は、無雑作に間合をつめてきた。同時に、半兵衛は、その剣先を徐々に真横にあげてきた。身を進めるのと、剣先をあげていく、この二つの動きが、闇の中で見事にひとつに溶けていた。

しかし、但馬守は、大地に根が生えたように動かなかった。

いつの間にか、雲は流れて、星がまたたきはじめていた。

もし、この自然にして神妙な動きが、このままつづき、半兵衛が、みごと間合を縮めきっていたら、あるいは、半兵衛の剣は、但馬守の胴を一撃のもとに薙ぎ斬っていたかも知れぬ。

半兵衛の顔からは、既に、薄ら嗤いは消えていた。五官はもとより、毛髪から爪の先まで、いっさいのものを闘いのために動員して、半兵衛は無想のうちに、但馬守によく迫っていた。

しかし、半兵衛の鋭い五官は、今ひとつの正体不明な一団の動きを、その神経の一端でかぎとってしまった。並の人間のものとは全く異った異常なものの気配が、闇の中に流れてきたのだ。

公儀隠密団か——と、感じとった瞬間、半兵衛は、猛然と攻撃に出た。

無言の気合を迸らせて、半兵衛は、いま一歩不足の距離から地を蹴って、大剣を一閃させた。

並の剣客なら、この凄まじい横薙ぎの一閃を躱すことは、不可能だったろう。

しかし、但馬守は、咄嗟に、半間ほど跳びすさり、半兵衛の捨て身の一刀は空を切った。

半兵衛は——、しかし、その一太刀で、但馬守をすてた。根来忍者団と公儀隠密団が、闇の中で対峙した気配を、正確にかぎとったからだ。

目にも止らぬ迅業で、横薙の一刀を宙でかえして、再び、但馬守の眼前に剣先をつけた半兵衛、

「将軍家は、今宵われらが確かに頂戴仕った」

嘯くように吐きすてると、するすると下った。

そのとき、闇の底から、天魔の三郎が言った。

「柳生の御大将よ、将軍家光は、確かにこの天魔の三郎が預かった。では、ずらかろう、半の字殿」

この一言には、さすがの但馬守も顔面に痙攣を走らせた。

一子十兵衛を廃嫡して、ことさらに伊豆守に近づけさせてはいたが、将軍家隠密団を一手に握る但馬守には、それも、幕閣の密かな動きを押える為の手段のひとつにしかすぎなかった。

但馬守は、伊豆を押えよ、と、一子十兵衛をわざわざ伊豆守に附けたのである。

この点は、伊豆守とて同様であった。

柳生の動きを知らなければ、家光の側近は勤まらない。その為、この小姓あがりの才子は、密かに十兵衛に近づき、親しんできたのである。

そして、この夜、伊豆守信綱の巡らした策は——。

微行の将軍家を囮にして、但馬守配下の公儀隠密団と紀州徳川家の根来衆を嚙み合せ、この一派の勢力を一挙に殺ぎ削ろうということだった。

将軍家光こそいい面の皮だが、そういう伊豆守信綱のどす黒い腹の中は、但馬守も知っていて、今宵は配下の伊賀者を動員したのだ。根来衆の襲撃を知りながら、将軍を微行に出したという理由で、伊豆守に責任をとらせ、但馬守は、一挙に伊豆守を隠居に追い込もうと企んだのだ。

それでなければ、いかな但馬守も、将軍家のうしろ襟を取って地べたに引倒し、昏倒させるよ

うなことはしない。根来衆を殲滅するだけの自信は、但馬守にもあった。しかし、根来衆ならぬ、もう一派の忍者群が現れ出ようとは、予測もしていなかったのである。

但馬守は、天魔の三郎なる者の率いる正体不明の、山者という怖しい集団がいることは知っていた。

それが、今、将軍家は頂戴仕ったと宣言するのを聞いたのだ。

この一言を聞いたなら、但馬守ばかりではなく、伊豆守信綱も戦慄しただろう。

しかし、この天魔の三郎の一言は、単なる恫喝にしかすぎなかった。

家光が但馬守に引倒されるや、林の中の草地から忍び出た、一個の黒装束が、さっと、倒れた家光を抱きかかえて、音もなく、林の中の闇にとけてしまった。

あっ！　という間の出来事だった。

天魔の三郎は、その有様をはっきり見ていた。しかし、三郎は追わなかった。

今、将軍の命までは奪るな。いま奪れば、張孔堂は必ずや潰される。将軍を恫喝し、伊豆めの失脚だけを狙え――と、影の大将楠不伝からきつく念を押されていたからだ。

その黒影が、服部一夢斎だということも、三郎は知っていた。

林の中に集結した忍者の一団から、金井半兵衛を守るために、三郎は但馬守を恫喝したのだった。

忍法胡蝶陣

一

林といっても、このあたりは、武蔵野の原始林を思わせる鬱蒼たる薮の連なりである。

反対側に高塀を連ねた武家屋敷も、塀のなかに原始の野を抱えこんだごとき巨大なもので、塀際の大樹の枝は、往還まで張出して、あたりは星明りさえ遮られるほどの不気味さだ。

一瞬、但馬守は瞑目した。

天魔の三郎の後を、おのれ一人で追いきれるものではないと知ったからだ。

林の中では、不気味な沈黙の陣が、東西に、およそ二十間の距離をおいて対峙していた。その丁度、中央に位置した樫の大樹の上に、鴉の甚兵衛がとまっていた。

対峙した根来衆と、公儀隠密団は、それぞれ三十名を超えた。

甚兵衛も、かつて、これほど大量の忍者団を見たことがなかった。

西側の黒装束が、右翼から密かに動きはじめた。

すると、東側の黒装束も、右翼が動きだした。

甚兵衛の止っている、樫の大樹を中心にして、まるで、ゆるやかに糸車でも回すように、対峙した二つの陣形は動いてゆく。樫の木の上で、甚兵衛は唸った。

忍法胡蝶陣！

黒装束の各々は、それぞれ思い思いの攻撃態勢をとりつつも、ことごとくが、一本の糸で繋っているような、緊密な連繋を保った陣形と動きであった。

これは、そもそもが、伊賀忍者独特の陣形であったが、鍛え抜かれた根来一郎太の率いる、根来忍者たちは、敵の動きに従って、反射的に、しかも集団で、これに対する防禦の動きを示したのだ。咄嗟にこの動きが取れたのは、忍者たちがすべて夜目が利くというのが、大きな理由であった。

この陣形は、大蛇（おろち）のように、その端から敵を倒していくのが特徴だが、敵も同じに動くとなると、互に凄まじい損害を覚悟しなければならない。

公儀隠密団の中央にいた服部半蔵も、この事に気付いて苛立っていた。

しかし、すでに引くことは出来なかった。

お互が、敵の尾に喰らいつくように激突したのだ。

そのとき、目の下の檜林の中から、一個の黒影が、音もなく樫の下枝へ舞い上った。猿（ましら）のように枝から枝へ飛びあがっていく。背に黒竹の杖を背負っていた。

志乃であった。

「甚兵衛」

「う！」

と、甚兵衛は、下を見た。

「そのようなとこで見物しておれ、と誰に言われた」

「いや、誰にも言われぬがの。これはちと面白い見ものじゃ」

「そうかえ」

ぱっと、志乃は跳ね上って、甚兵衛の脇に並んで言った。

「上様が攫（さら）われましたぞ」

「な、なぜ、それを早ういわっしゃらぬ」

甚兵衛、思わず吃（ども）った。

「だ、誰に攫われたのでござる」

「爺にじゃ」

「志乃殿、冗談もいい加減にしてもらいたい。お師になら、攫われたのではござらぬ。救われた、のでござる」

「と、いうことじゃ」

と、言って、志乃は悪戯っぽく笑った。

「では、ゆるゆると」

「見物するというのかえ、甚兵衛殿」

「いかにも」

「ふん」

鼻を鳴らして、志乃が言った。

「あたしも」

二人は、二羽の鴉のように、樫の枝に止って下を見おろした。

下では——。

黒影と黒影が躍り、懸り、跳びはね、組みうち、無言で転げまわっていた。が、双方とも胡蝶の陣形は崩していない。これが白昼なら、林の中が血潮で、真っ赤に染った様が見えたかも知れぬ。しかし、いくら忍者は闇に目が利くとはいえ、色までは見えない。凄まじい血臭があたりにたちこめ、ときどき肉の截（た）たれる鈍い音がした。

ふと、志乃が言った。

「甚兵衛殿」

「何でござる」

「古い諺に、両虎あい争って、駄犬その餌を拾う、というのがおじゃります」

「ふむ」

「駄犬とは誰ぞと思う、甚兵衛殿」

「さしずめ、天魔の三郎かと」

「その通りじゃ。爺が出れば、幻幽斎も出てくるに決っている」

「左様さな、お師が出れば、根来の狸も坐ってはおれまいの」

「ついで、張孔堂も動くは必定」

「その通りじゃ。すでに、金井半兵衛が但馬守を襲った。天魔め、今は張孔堂に飼われておる」

「しかしじゃ」

と、志乃が言った。

「天魔めは、証拠を残すような虚仮ではないぞ、甚兵衛殿。たとえ、天魔の三郎めが、如何に暴れまわっても、三郎と張孔堂の繋がりを明す証拠が握れねば、張孔堂には指一本触れられぬ。そうであろうが、甚兵衛殿」

「いかにも、今の張孔堂は天下の名物になっておる。それを理由もなく潰したとなれば……、わが殿が庶民にまで疎まれる」

「甚兵衛」

「何でござる」

「そこまで知っておって、見物か！」

いきなり志乃は、甚兵衛を突きとばした。

「う！」

宙に舞い出た甚兵衛の右足に、音をたてて分銅綱が巻きついた。

一瞬宙吊りになった甚兵衛の胴に、首に、腕に、鳥黐が蛇のように絡みついてきた。

あたかも、蓑虫のごとくなって、甚兵衛は樫の木からぶら下った。

志乃が言った。

「虚仮め！　おれが天魔の三郎じゃ」

三郎は、みごと志乃に化けていたのである。

地上では、根来者と伊賀者が、つぎつぎに屍になって地に這っていた。

二

赤坂の台地に天を摩するほどの公孫樹の大樹が聳えていた。

この公孫樹から山王神社下にかけて、広大な湿地がひろがっていた。

この湿地は、葵坂の下で、長さ九町（九八〇米）ほどの細長い池になる。溜池である。

公孫樹の天辺に上ると、東は千代田城、南は芝増上寺、北は中野お鷹場あたりまで見晴せる。

この公孫樹の頂に、天魔の三郎が跨っていた。

枯葉色の頭巾で顔を包み、同じ枯葉色の小袖に裁着袴で、公孫樹の一部と化してしまったようないでたちである。

繁華な町中に置くと、この、天魔の三郎という人物は、まことに冴えない男だが、こういう原

始の巨樹の上に登らせると、いかにも、生き生きとして見えるのは、やはり、その生れと育ちのせいだろう。

頭巾のなかの目は、楽しげに笑っていた。

その笑いのわけは――。

公孫樹の下の湿地の中の小島にあった。

小島の真ん中に、松の木が一本生えている。その根方に、一個の首が置いてあった。しかも、その首は目をひらいて、生きていたのである。鴉の甚兵衛であった。

天魔の三郎は、志乃に化けて黐縄で捕った甚兵衛をここまで運んで、五体は土中に埋めておいたのだ。

甚兵衛は、服部一夢斎を誘き出す囮であった。

囮の処置として、これほど憎々しげなものはない。首から下を土中に埋めたばかりか、左右と後頭部のあたりには、ひとかかえもある大石が置かれていた。如何なる神技があっても、石と土を一挙に撥ね除けて、地上へ躍り立つことは不可能であった。

石の上には、天魔の三郎の配下、浅間の馬吉が腰掛けていた。もう一人、この小島から山王境内に架けられた木橋の上に、猿のごとき山者が立っていた。これは、鞍馬の安という。居合の上手であった。

この万全の備えに対して、服部一夢斎どう出てくるか――と、考えるだけで、天魔の三郎は唇が弛んでくるのだ。

「伊賀の人よ」

浅間の馬吉が、鼻毛を抜きながら言った。

「おぬし、敗れたことを恥じる必要はないぞ。おぬしを捕ったは余人にあらず、天魔の三郎殿じゃ」

甚兵衛は、せせら笑って言った。

「何をぬかすか。術でおくれをとって捕われたのではない」

「ほう。では、何でまた捕われたのでござるか、伊賀の人よ」

「おれには甚兵衛という名がある。名を呼べ、猿め」

「うふふう。猿とはまた口が悪いの。されど、それをいうなら、あちらにいる安にいいなされ。こう見えても、この馬吉は、猿には似ておらぬのでのう。ところで、伊賀の人よ」

「何じゃ。おのれ、忍者のくせして、よう喋るやつじゃ」

「おれたちは忍者ではない」

と、馬吉は言った。

「では、何者じゃ」

「山者という。山間に生きる民じゃよ。伊賀の人よ」

「ふーむ。ならば、やはり、猿ではないか」

「無学な童じゃのう」

「童とかや」

と、甚兵衛は目を剝いた。しかし、馬吉は穏やかに言った。

「童じゃ。童とはの、まだ育ちきらぬ者をもいうが、おれらの仲間では、物を知らぬ男をさしてもいうのじゃよ。甚兵衛とかいうたな、伊賀の人」

甚兵衛は蒼い顔をして、黙った。怒り心頭に発したのだ。

甚兵衛、実は、志乃に恋着していた。ために、志乃に化けた天魔の三郎にしてやられたわけだが、それは言えない。

〈女に惚れて捕えられたか……、やっぱり、おぬしは童じゃのう〉

くらいのことは、この馬のごとく長い顔をした山者はいうに決っていたからである。

「しかしじゃ」

と、馬吉はつづけた。

「おぬしの師という人物、現れぬの。弟子といえば、わが子同然なものではないかの。それがこうして天日に晒されているというのに、助けにも来ぬとはの。伊賀の人ちゅうのは、情のこわいもんじゃのう」

「馬鹿者！」

と、ついに甚兵衛は喚いた。

「わが師は、必ずや助けにくる！　そして、必ずや、わしを助けてくれる。最後に敗れるのは、おのれらの方じゃ」

「ほう。すでに死んでおる者が、よく言うわ」

「何じゃと！」

と、甚兵衛は目を剝いた。

その頭を、がっ！　と、踵で蹴って馬吉は言った。

「今のひと蹴りがじゃな、いま少しまともであれば、おぬしは既に死んでおるのじゃ」

そのとき、公孫樹の天辺で微笑していた天魔の三郎の目が、異様な光を浮かべて光った。自分の止っている公孫樹の木に、常人には、風のそよぎと判別できぬほどの微動が伝わってきたからだ。

三郎は、瞳を足下に落した。

はらはらと、枯葉が四、五枚散った。

〈一夢斎め、わしから仕掛ける気か！〉

三郎は、一夢斎はすでに途中まで昇ってきていると思ったのだ。

微動は、しばらくして止んだ。

三郎の眉が寄った。

一夢斎に、樹上に止っている自分が、見分けられるわけがないと思った。

甚兵衛が一夢斎を呼ぶ囮であると同様、鞍馬の安と浅間の馬吉は、三郎自身がその在り場を隠すための囮であった。

〈この樹上から小島にむかって、一夢斎め、飛ぶつもりか〉

と、三郎は思った。

しかし、人の昇ってくるような気配は、それで絶えた。

はて？　と、三郎は足下を目で探った。

やはり、人の気配はなかった。

服部半蔵配下の公儀隠密団は、既に夜のうちに、その半数以上が根来衆の手で倒されていた。

一夢斎が、半蔵の応援を求めて襲ってくるとは、まず考えられない。しかし、一夢斎が、どれほどの手練者の忍者であるかは、三郎も知っていた。

〈来る、きっと来る〉

と、三郎は思った。

さきほどの公孫樹の微動は、何かの予告ともとれなくはなかった。
ふっと、三郎は不安に襲われた。
そのとき、山王の森の下を、派手な紅絹裏をちらつかせて、一人の娘が走りすぎた。手に黒竹の杖を持っていた。
志乃であった。
〈来たな……、先ずは、小娘の方……〉
と、天魔の三郎は、志乃が駆け込んだ森の方へ首をのばした。
とたん、大音響とともに、大公孫樹の根本から、閃光が噴きあがった。
天に冲するほどの大木が、凄まじい勢いでおどり上り、樹冠を羽撃(はばた)かせて、湿地のなかの小島へむかって、めりめり、めりめり！　と、傾き、たおれかかった。
天魔の三郎は、毬(まり)のように空中に放り出された。宙で、とんぼを切って、六間ばかり離れた杉の梢に、危ういところで、三郎は飛び移った。
この巨木の根方に爆薬を仕掛けるとは、一夢斎め！——と、三郎は唸った。
大公孫樹は、湿地の表面を激しく叩いて、橋のように小島に倒れこんだ。
とたん、その頂で、小島の中の一本松を薙ぎ払った。一本松は、斜になって、ぐわっと、その根で土を盛りあげるとともに、松の根元に埋められていた甚兵衛も、一緒に掘出してしまった。
大石の上に跨っていた浅間の馬吉は、危ういところで斜に飛んだが、足場を踏みちがえて、湿地の中に落ちこんでしまった。
首まで泥に漬(つか)って、それでも馬吉は、
「見事！　伊賀の人！」

と、喚いた。
しかし、甚兵衛は、もう振りかえりもしなかった。橋のように横倒しになった大公孫樹のうえを、猿(ましら)のように駆けて、ぱっと、山王下の台地に躍りあがった。
とたん、馬蹄の響きも高らかに、一人の騎馬武者が疾駆してきた。
「う！」
と、杉の梢で、天魔の三郎は唸った。
風に翻った騎馬武者の羽織には、三本扇丸の紋所、松平伊豆守信綱であった。
「甚兵衛、乗れい！」
と、伊豆守は一声。
「殿、かたじけない」
甚兵衛、ぱっと伊豆守の背後に跳び乗ると、
「どうじゃ、猿めら！　これが松平派伊賀流じゃ」
と、喚いた。
「天晴れ　お見事！」
泥土の中で、馬吉は、まだ気取っていた。
鞍馬の安も、公孫樹の梢にぶっ飛ばされて、湿地のなかで踠(もが)いていた。
「負けたわい」
杉の梢で、天魔の三郎が舌うちをした。

伊賀三十六人衆

一

四谷西念寺の庵で――。

服部一夢斎は、いつもと変らずに、囲炉裏端に胡座していた。

松柏の梢に風が鳴っていた。

「そろそろ秋も終りか」

と、一夢斎はひとりごちた。

志乃と甚兵衛は、山者の襲撃に備えて、松平屋敷に詰めていた。

根来衆と、公儀隠密団を嚙み合せたのは、張孔堂の策だとは、一夢斎も伊豆守信綱も既に見抜いていた。正雪一派を抹殺するぐらいのことは、一夢斎にとっては、自分の脛を掻く程度の易しさであった。しかし、今、張孔堂を潰すことの愚も、一夢斎は知っていた。張孔堂がなければ、水野十郎左衛門一派の旗本奴と、幡随院長兵衛を頭領にいただく町奴とは、すでに衝突し、血で血を洗う闘争を開始していたかもしれなかった。

また、張孔堂の在ることによって、幕府の浪人に対する態度も、ゆとりあるものに見せることが出来ていた。今の幕府にとって、浪人の蠢動ほど怖しいものはなかった。しかし、強圧しすぎれば、必ず反動が起るということも、一夢斎は知っていた。

「あの虚仮めが、殺しておけばよかった」

一夢斎は、またひとりごちた。根来幻幽斎のことである。

紀伊頼宣が、いくら戦国ぶりを誇示し、浪人らがこれを慕っても、幻幽斎さえいなければ、もはや血は流れぬ――、幻幽斎め己一人の欲のために動いている――と、一夢斎は見ていた。

紀州大納言頼宣に、天下の実権を握らせれば、幻幽斎は、根来忍者群を率いて、大威張で千代田城に入ることが出来るのだ。

〈あやつ、生かしてはおけぬな……〉

と、一夢斎は、炉の火を掻いた。

一瞬、青白い炎が燃えあがった。

火箸をにぎったまま、一夢斎の眉が、わずかに寄った。

庵のまわりに、人の気配があった。

一夢斎の耳朶が、ぴんと立った。三十六人……、と正確に嗅いだ。

「伊賀三十六人衆か」

声に出して、一夢斎は、呟いた。

そのとき、戸口に声があった。

「兄上……」

「半蔵か……、入れ」

と、一夢斎は言った。

板戸を開けて、土間に立った服部半蔵は、忍者装束ではなかった。紋服に大小を横たえ、手には白扇を握っていた。

庵を取り巻いた人の気配は、音もなく包囲を縮めて寄ってきていた。かつては、一夢斎に教えを受けた伊賀者たちだった。

「このわしを捕えに来たか」

と、一夢斎は言った。

「おそれながら、兄上、上意でござる」

半蔵は、嗄れた声で言った。

「上意か……」

一夢斎は、嗤った。

三日前、金井半兵衛に襲われた将軍家光を、一夢斎は救っていた。しかし、一夢斎は、あの夜、将軍家の護衛を仰せつかったわけではなかった。

伊豆守から、将軍家の身辺をお守り申しあげろ——と、命じられたのは、鴉の甚兵衛である。甚兵衛から将軍家微行の話を聞いたとき、一夢斎には、不吉な予感があった。

幻幽斎め、出るな！　というそれであった。

家光が闇の中で抹殺されれば、世継ぎ竹千代君は未だ幼少、しかも病弱である。将軍家四代の座が、紀伊徳川家にまわっても不思議はないのだ。頼宣は、家康の第九子だが、まだ若い。しかも、頼宣には、すでに光貞、頼紀の二子があった。

また、今は、張孔堂の手足となって働いている、天魔の三郎以下の山者も、きっと出る。あるいは、由比正雪らが出るやも知れぬ。将軍家光の不慮の死は、土井利勝、伊豆守信綱をはじめとする幕府重職の失脚に繋り、その結果、浪人強圧も弛むやも知れぬ、と、正雪らが考えぬという保証は、どこにもないからだ。現に正雪ら張孔堂一派は、浪人強圧政策の親玉として、おそでを使って密かに、家光の命を狙ったこともあったのだ。

これら、根来衆に山者、それに、公儀隠密団が将軍の護衛に出るとすれば……、三つ巴の乱戦

になりかねない……、放っておいては、将軍のお命ものうなるやも知れぬ……、それで、一夢斎は出たのだった。

そして、一夢斎は、家光が襲撃されるのを見た。柳生但馬守が、背後から護衛していなければ、間違いなく、家光は殺されていた。しかし、咄嗟のこととはいえ、但馬守は、家光を引倒して昏倒させている。これは、配下の伊賀者が救うとみての行為であった。

しかし、一夢斎の目前で倒れた将軍のそばには、天魔の三郎らがいたのだ。手裏剣でも飛ばされていたなら、将軍家は芋刺しになっていたはずである。

だから、一夢斎は家光を抱えて、走った。

そして——。

一刻後、一夢斎は、千代田城中に、家光を担ぎこんで、その寝所の褥に密かに眠らせてきたのである。

目覚めたとき、昏倒していた家光は、これを知らない。家光は、おのれが昨晩微行に出たのは夢であったのか、と思ったにちがいなかった。

しかし、但馬守は知っていた。それが、一夢斎の仕業であることを。こともあろうに、将軍家のうしろ襟を摑んで引倒した……ところまで見られた……と。

しかし、但馬守は、上様を危機から救ったのは、飽くまで、公儀隠密団だとしなければ、自分の立場がなくなる。

「昨夜、上様を引倒したのは、服部一夢斎なる老忍でござる。如何いたしましょう」

と、但馬守がいえば、何も知らぬ家光は、

「よきに計らえ」

と、いうに決っていた。
その時の有様が、眼に見えるようで、一夢斎は微かに笑って、言った。
「半蔵、わしを捕えよというたは、柳生但馬守殿であろう」
「……」
「そうであろう」
「兄上、申し訳ない」
と、半蔵は頭を下げた。
しかし、一夢斎がこれを拒めば、半蔵は一命を賭けて、立ち向ってくるにちがいなかった。
半蔵一人が相手なら、一夢斎にも逃れられる自信はあった。しかし、老軀をふるって、かつての弟子どもと争い、この囲みを破って逃れ得る自信はなかった。
「やむを得ぬの。縛られよう」
一夢斎は、淋しく言った。

二

松平伊豆守信綱が、将軍家光の代参として、駿府をまわり、久能山東照宮に参詣と発表されたのは、それから十日ほど過ぎた九月の下旬であった。
予定は、十月朔日(ついたち)、江戸を発し、十月九日、駿府入り。
駿府城で一泊。
あくる日、駿府城代北条安房守の先導で久能山に至り、その夜は、久能山東照宮神職榊原大内記照久の屋敷に宿泊。

十一日、祭祀(さいし)を済まし、同日も、榊原邸に宿泊。
翌十二日は、帰路駿府には寄らず、有渡浜をまわって、三保の松原で昼食。興津に出て、興津の本陣市川新左衛門方に止泊。
あくる十三日、早朝、興津を立って、一路江戸へ。
という行程であった。
これを早速、嗅ぎつけてきた天魔の三郎が、金井半兵衛に言った。
「半兵衛殿、如何」
半兵衛は、珍しく慎重に言った。
「お師はいかが申されておった」
「まだ大将には告げており申さぬ。正雪殿にも内証じゃ」
「ふむ」
と、半兵衛は腕を組んだ。
やるか……、絶好の機会じゃ……、であった。しかし、正雪も、半兵衛も、忠弥も、今や顔が売れすぎていた。
正雪の軍学、忠弥の槍、半兵衛の剣といえば、すでに、暴力派の親分、水野十郎左衛門、幡随院長兵衛とならんで、江戸では、三歳の幼児でも知っていた。伊豆守の行列を襲うとなれば、闇討ちしか方法はない。
とすれば、これは、天魔の三郎の仕事となる。
正雪に話しても、不伝老に相談しても、同じ判断を下すに決っていた。忠弥は、やろう、われわれは闇に目が利く、闇討ちにすればよかろう——と、いうにちがいなかった。

しかし、大名、それも将軍家名代としての、ときの老中の行列が、夜間、進むはずがなかった。
東海道の本陣は、すべて戦がまえである。伊豆守の行列は、おそらく、千は超える人数が連なるに相異なかった。
「おれにやらせぬか、半兵衛殿」
と、三郎は膝を進めてきた。
「不伝老にも内証でか」
「いや、大将には話す。大将が反対するはずがない」
「その通りじゃ」
と、隣室で声がした。
丸橋忠弥だった。
がらりと襖を開けて、入ってくると、
「おのれら、近頃こそこそと動きよる。半兵衛」
「何じゃ」
「おれを除者にする気か」
「そうではない」
「では、なぜこそこそと話す」
「こそこそ話してはおらぬ」
「何じゃと。これが、こそこそでのうてなんじゃ」
「馬鹿者。おぬし、隣室でごろ寝しておったではないか。ちゃんと聞こえるように、話しておったじゃろうが」

「ごろ寝ではない。眠っておった」
「隣室に人がおるというのに、武士が熟睡するということがあるか、うつけもの」
「ふむ。理屈をいいおる」
「理屈ではないぞ。忠弥よ……、これは、大事な話じゃ」
「だから、それがしにも相談いたせというておる」
「相談いたしておったではないか、既に」
「左様か、では、おれが一策を授けよう」
「ふむ」
「箱根よ」
と言って、忠弥はにやりと嗤った。
「それじゃ」
と、半兵衛も膝を叩いて、言った。
「わが朋友は、やはり軍師じゃ。どうじゃ、三郎」
「よろしゅうござる。山間ならば、わが一党にとっては、故郷のようなものでござるわ。ところで、丸橋先生」
「先生は、よせ、先生は。忠弥と呼べい、三郎」
「左様でござるか。では、丸橋殿」
「ふむ」
「襲撃場所は、この三郎が選定いたす。これでよろしゅうござるか」
「よい。任す」

「それから、今ひとつ」
と、三郎は、ひと膝すすめて、言った。
「この一件、ご両人は知らぬことにして戴きたい」
「何じゃと！」
と、半兵衛と忠弥は同時に言った。
「丸橋先生」
と、三郎。
「何じゃ！」
と、忠弥は喚いた。
「おのおの方が出られると、目立ち過ぎ申す。今、ここで、お約束願いたい。この戦、天魔の三郎にお任せあると。それを約束くだされたら、早速、不伝様にもお話し申し、正雪殿にも、内証にしなくとも済み申す。もしかしたら、また、忍者同士相闘うことになるやも知れぬのでござる」
忠弥と半兵衛は、苦虫を嚙みつぶしたような顔をして、黙った。
「いかがでござる」
と、三郎は畳みかけてきた。
「勝手にしろ！」
忠弥と半兵衛が、同時に言った。
「かしこまった。では、罷る。正雪殿にはよしなに」

その頃、一夢斎は、江戸城西の丸北辺、紅葉山東端の地下に造られた石牢に、閉じこめられていた。
服部半蔵の手で、江戸城に引立てられた一夢斎は、何の糾問もされず、この石牢に入れられてしまったのだ。但馬守宗矩は顔を見せなかった。
この間、一夢斎は、筵一枚敷かれただけの石牢の床に、うっそりと胡座していた。その座像には、運命に従う者の潔さが見えた。というのも、一夢斎には、この石牢が、どれほど堅固なものであるか、分っていたからだ。
そもそも、この石牢は、一夢斎が、初代服部半蔵に頼まれて、自ら設計し、構築したものだった。その石壁は、大小の石を組合せただけの、簡単なものだったが、脱出を企てて一つの石を取り除くと、上の石が崩れ落ち、たちまち、そこは塞がれてしまうのだった。石の一つ一つは、強く力を入れて押すと、ぐらぐらと揺れ、取り外すことはさほど困難ではなかった。しかし、それは、掘っても掘っても、そのあとから砂が崩れ落ちてくる砂地獄に似ていた。
一夢斎は、己が構築した石地獄に、今や己が入れられている運命を嗤った。嗤ったあとは、待つだけであった。忍者には、絶望というものはない。
頭上の大石には、腕が一本通せるほどの大きさの穴が穿たれており、そこから、日に一度、握り飯と一碗の水が紐で吊下げられてくる。それがつづいているうちは、まだ望みがあるのだ。
しかし、一夢斎は、いまだ、それらの握り飯にも水にも、手をつけなかった。毒殺を恐れたからである。二日や三日絶食しても平然としておれる。これが忍者というものであった。
日に二、三度、夜更けをえらんで、一夢斎は、奥歯にはめた義歯を抜くと、唇にあてて吹いた。義歯の忍笛は、鼠の鳴き声に似ていた。誰か、頼まれてくれるものはないか——という願いを

こめて、一夢斎は吹いた。
しかし、これは、無駄な遊びに似ていた。石牢の番士は、公儀お庭番をつとめる伊賀者ではなく、柳生の番士に代えられていたからだ。伊賀者ならともかく、柳生の番士に、この鼠笛の音が聞き分けられるはずもなかった。
たとえ、聞き分けられたとしても、彼らが、自ら張番をしている人間を逃すわけがない。
しかし、一夢斎は、吹きつづけた。
誰かが聞きつけて、救出してくれる——という不動の信念をもって、一夢斎は吹きつづけた。
また二日が過ぎた。
忍笛に応えてくれる者は、さらになかった。
「甚兵衛よ、志乃よ」
と、一夢斎は声に出して言った。
「この笛の音が聞こえるか」
その日、一夢斎は、自分ではわけの分からぬ不安感に捉われ、日暮れるとすぐ、忍笛を吹きはじめた。
亥の刻（午後十一時）はとうに過ぎ、三更（午前零時）もまもない刻限になっていた。
どこからか、微かな物音が伝わってきた。
一夢斎は、目をあげた。
闇を透かして見て、微笑した。
忍笛は、ひとつの反応を得たのだ。
食物を手繰り下す穴から、ちょろっと一匹の鼠が顔をだし、ぱっと石を積みあげた壁面に跳ぶと、ちょろちょろと一夢斎の膝もとへ寄ってきた。鼠は、握り飯を狙ってやってきたのだ。しかも一夢斎が、鼠の鳴き声のごとき忍笛を吹きつづけているため、鼠は安心して、一夢斎の膝元に寄ってきて、握り飯を齧りはじめた。
窮すれば、通ずだ——。
一夢斎は、嗤った。
素早く鼠を手にとって、その股間を見た。
「牡」
と、呟いて、にやっと、また嗤うと、これを懐に入れた。襟に縫い込んでおいた薄い紙片をとり出し、小指の先を嚙み切ると、髪の毛を四、五本抜いて束ね、この先に血を染みこませた。それを筆のごとく使い、一夢斎は、数個の梵字を紙片に書いた。これを紙縒にして、懐から鼠を取出し、その足に結びつけた。それから、鼠の胴を両手に包みこみ、そのつぶらな瞳を覗きこんで、何ごとか、呟きはじめた。
やがて、鼠の目は、薄い膜でもかかったように、霞んできた。静かに、鼠を床に下した。鼠は、床の上でまるで置物のように動かない。
一夢斎は、鼠に催眠術をかけたのだ。
なお、一夢斎は、しばらく呪文を唱えていた。やがて、一夢斎は、また襟元を探ると、米粒ほどの褐色の丸薬のようなものを取り出して、嚙み砕くと、これを指の先につけて、鼠の鼻先へかざした。
「よし！」
鼠は鼻を蠢かしはじめた。

一夢斎は、ぱっと床を叩いた。
鼠は奔転して、石壁を駆けあがり、天井の穴から消えた。
「甚兵衛」
と、低く呟くと、一夢斎は、またうっそりと目を瞑った。

久能山代参

一

鴉の甚兵衛は、夢中になって、一夢斎の行方を探していた。
一夢斎が半蔵の手によって、密かに江戸城に引かれていった夜、甚兵衛は、伊豆守の屋敷にいて、不吉な夢をみた。
師の一夢斎が、何者かに毒を盛られ、悶死（もんし）している夢だった。
お師ほどの忍者が、毒殺されるようなへまをやるわけがない——と、甚兵衛は思った。しかし、不安は消えなかった。
一夜、密かに、甚兵衛は、四谷西念寺に走った。
炉端には、志乃が血走った目を宙に据えて、坐っていた。
「お師は！」
思わず、甚兵衛は叫んでいた。
「わからぬ」
と、志乃も、血を吐くような声で答えた。
志乃も、甚兵衛と同じ夜、うたた寝して、同じ夢を見ていたのだ。
二人とも、まさか、服部一門の頭領、半蔵が、兄にあたる一夢斎を城中に引きたてて行った、とは思いもしなかった。半蔵配下の三十六人衆はじめ、ほとんどの伊賀者たちが、一夢斎の教えを受けている。

「志乃殿、いつからここにおられる」
と、甚兵衛は言った。
「昨晩からじゃ」
「左様か」
がっくりと、甚兵衛は土間に膝を落した。とたん、あるいは、お師は殺られたやも知れぬ！
——という思いがきた。
しかし、甚兵衛は首を振って、立ちあがっていた。お師が殺られるわけがない……。
そのまま、甚兵衛は、紀伊屋敷に飛んだ。
紀伊屋敷を、ぶっつづけに二夜、嗅ぎまわった。一夢斎が殺られたという形跡は、どこにもなかった。
松平伊豆守の久能山東照宮代参に出発する日は、迫っていた。伊豆守が出発すれば、甚兵衛だけ江戸に残るわけにはいかない。
甚兵衛は、焦った。
張孔堂に巣喰う山者たちも、不気味な動きを見せていた。
もし、一夢斎がそれまでに現れなかったら、あるいは、わが殿は東海道で命をおとすやも知れぬ——、お師よ、現れてくれ……、甚兵衛は、蜚蠊のように江戸中を這いまわった。
天魔の三郎らの山者が、密かに東海道を下っていくのを、甚兵衛は虚しく見送った。
その夜、甚兵衛は、松平屋敷でうた寝して、また夢を見た。
師の一夢斎が、石牢の中で、一匹の鼠を前にして坐っていた。
〈あの鼠は、牡か牝か〉

と思ったとたん、甚兵衛は、真っ直ぐ四谷西念寺に走っていた。
師の庵に駆けこむと、囲炉裏脇の長押を探った。赤玉がひとつ、長押の窪みに転がっていた。
それは、鶉の卵に朱を塗ったものだった。それを大事そうに手を取ると、甚兵衛は、囲炉裏端に坐って、炉端の木枠に打ちつけて割った。
なかから、とろりとした液体が流れ出た。
それは、米の脂に、発情した牝鼠の尿を混ぜて、卵殻に貯蔵したものだった。それを、炉端の木枠に、そろりと流した。
そのまま、甚兵衛は目を瞑った。
一刻（二時間）が過ぎた。
ふっと、甚兵衛の目があいた。
戸口から、ちょろちょろと一匹の鼠が這い込んできた。その足を見て、甚兵衛、にやりと嗤った。鼠の足には、紙縒が結び付けられていたのだ。
鼠は、さっと、炉端に跳びあがり、鶉卵に仕込んであった米の脂を、嬉しそうに舐めはじめた。
甚兵衛の手が、素早く伸びて、鼠を掴んだ。足から紙縒をはずして、ひろげた。
紙縒に書かれた血文字は、
——江戸城西の丸北辺、紅葉山東端の地下牢——と読めた。
「有難い」
炉端を齧っている鼠を片手拝みにするや、甚兵衛はぱっと庵から飛び出した。
一夢斎の鼠通しの術は、見事に功を奏したのであった。
それから、一刻後、紅葉山東端の地下牢の番士二人は、音もなく闇から飛来した棒手裏剣で、

心の臓を撃ち抜かれて、即死していた。
　甚兵衛の黒影が地下牢の石蓋(いしぶた)の上に出た。とたん、中央の小穴から、一夢斎の忍び声が、吹きあがってきた。
「甚兵衛か」
「左様でござる」
「石蓋は梏(ころ)仕掛けじゃ。南端の築山の中を見よ」
「かしこまった」
「待て、築山の中の洞(ほこら)に鎖滑車がある。鎖を静かに巻け。されば、石蓋は南端にずれる。心して巻け。しくじって音を出したら、死ぬるぞ」
「相わかった」
　四間南に、築山があった。
　甚兵衛は、また地に這った。築山の斜面に、横穴が開いていた。その中央に、滑車があった。
　甚兵衛、鎖に手をかけて、にやりと嗤った。

　あくる日、浅草花川戸幡随院長兵衛の店先から、賑やかな一行が発った。
　真ん中には駕籠が一丁、両脇には、長兵衛と放駒(はなれごま)四郎兵衛がついていた。先頭には伊豆の豆吉が蟹股(がにまた)で歩いている。その後には、蛤の三太と志乃が並んでいた。すべて旅姿である。
　通りかかったお店者(たなもの)らしいのが、
「おや、幡随院の親分、どちらへ」
と、声をかけた。

「いや、女房がちょいと具合が悪いもんでね。湯治にでも連れてってやるべぇ、と思いやしてね」
　長兵衛、照れくさそうに笑った。
　お店者が腰を折って行き過ぎると、三太はもう三度笠を振りまわして、大燥(おおはしゃ)ぎ。
「へへへぇ、箱根に湯治たぁ、豪儀だね、豆吉」
「何を言ってやがる。湯治に行くなぁ、お内儀(かみ)さんだい。この薄馬鹿野郎め」
「あれ、この野郎。親分、あっしも連れてってやっておくんなさい、どうぞ、連れてってやっておくんなさい、と、泣いて頼んだぁ、どこのどいつだ。さっさと前(めえ)に歩け」
「おっ……、この野郎。歩き方まで、てめえに指図されるいわれはねえぜ。てめえこそ何だぁ、草鞋のはき方も知りゃあがらねえで」
「てめえみてえな田舎っぺとは違うんだよ。この三太様ぁな、履物といやぁ、雪踏(せった)きり履(へぇ)たことのねえ、粋(いき)な男よ。おお、豆吉」
「何だ！」
「おめえ、伊豆の生れだってねえ」
「馬鹿野郎！」
　うしろから、放駒四郎兵衛が、雷のような声で怒鳴った。
「先(せき)ゃあまだ長(なげ)えんだ。黙って歩けぇ！」
「へえっ」
　二人は、同時に黙った。
　しかし、これは、二丁とつづかなかった。

いきなり、三太が、ぱっ！　と豆吉の尻を蹴っとばすと、
「てめえが悪いんだい、この田舎っぺえめ」
「おや、この野郎！」
と、豆吉、振りかえって、うっと首を縮めた。長兵衛に、鬼のような顔で睨みつけられたのだ。
しかし、この一行の足は早かった。
その日のうちに、品川から川崎を過ぎて、日本橋から、十二里十二丁を歩き通し、日暮れ方、藤沢宿の旅籠屋柏屋に着いてしまった。駕籠は、さっさと、土間から座敷まで担ぎこまれた。手替りしたのは、三太と豆吉である。
この店の主人平右衛門は、長兵衛とは盃を汲交した兄弟分だったが、これには驚いて、言った。
「幡随院の、これは一体どうしたんじゃ。お内儀さんはそんなに悪いのか」
「ああ、悪い悪い。しかし、これは内証だぜ、柏屋」
「そりゃあ分ってるがな」
と言って、柏屋、はっとしたように、顔を強張らせた。
「聞いちゃあいけねえことか、これは」
「まあ、聞かねえでくれ。聞いたら、おめえにも迷惑がかかる」
「わかった。それじゃあ、座敷の世話は女房にさせよう」
「そうしてもらえば、有難え。恩にきるぜ、柏屋」
「水くせえことは言わねえでくれ。出来ることはさせてもらう。死ねといわれりゃあ、おれも死ぬぜ、幡随院の」
「そんな大袈裟なことじゃあねえんだ」

と、長兵衛は言って、笑った。
しかし、この旅は、暢気に笑っておれるような旅ではなかったのだ。
駕籠の中にいたのは、今や、柳生但馬守配下の伊賀者に命を狙われる身となった、服部一夢斎だったのだから。
いかに手練の忍者とはいえ、一夢斎は、すでに老齢であった。それが、十四日もの絶食を敢てしたのである。石牢からは無事救い出されたものの、げっそりと衰えていて、もはや闘う力は失せていた。
そういう身体で、四谷西念寺の庵に帰れば、また、但馬守の手の者に捕えられるは必定。それを案じた鴉の甚兵衛は、江戸城から真直ぐ、長兵衛の店に一夢斎を背負いこんだのである。
それから数日して、天魔の三郎らの山者ばかりでなく、金井半兵衛も丸橋忠弥も由比正雪までが、それぞれ深編笠で顔を隠し、深夜、密かに江戸を立った、と志乃が知らせてきた。
伊豆守の西下は、すでに十日後に迫っていた。
一夢斎は、箱根へ行くと、腰をあげようとした。しかし、一夢斎のからだは、まだ回復しきっていなかった。
見兼ねた長兵衛は、
「では、ご隠居、あっしに送らせて下せえ。女房の湯治だと偽って出かければ、いくら公儀の忍者でも、御隠居が江戸を立った、とは思わねえでしょう。松平のお殿様の行列が駿河に向うには、まだ十日はごぜえます。あっしの女房に化けて、駕籠でいって下せえ。なに、十日も箱根の湯につかってりゃあ、鍛え抜かれたご隠居の身体だ、間違いなく、ぴんしゃんしてきますぜ。どうか、この仕事は、あっしにも手伝わせて下せえ」

と、誠意を面上にあらわして、一夢斎に言った。

一夢斎は、この長兵衛の言葉に甘えようと思った。

これが、わしの最後の仕事になるやも知れぬ……と、思ったからである。一夢斎は、箱根で、幻幽斎を殺(や)ると決心していたのだ。

あくる朝、幡随院の身内と志乃に、駕籠脇を守られた一夢斎は藤沢を立った。

一行が、箱根明星ヶ岳の山麓にある、宮城野に着いたのは、伊豆守の行列が江戸を立つ七日前のことであった。

二

宮城野の湯は、早川を挟んで強羅に対している。箱根七湯の他(ほか)なので本陣もない。湯治小屋が二、三棟、樹間に建っているだけの侘(わび)しい湯であった。

涌湯(わきゆ)もわずかだが、箱根最古の桟道が、強羅から小涌谷に通じ、芦の湖を北方に見下す山道が、箱根お関所の裏を抜け、三島に通っていた。

仙石原から乙女峠を抜けて、富士の裾野をぬける道も、早川沿いに北上している。

鬱蒼(うっそう)たる樹林に囲まれた谷地の涌湯につかって、一夢斎は、静かに瞑目していた。一夢斎の身体は、いまだ完全に回復していなかった。

既に、伊豆守の行列は、箱根の峠を越えて、駿河にむかっていた。

なぜか、山者たちは、往路の行列は襲わなかった。それが、一夢斎には不気味であった。

伊豆の豆吉は、山間に入ったとたん、有能な男になった。この、伊豆は天城の山中で育った樵(きこり)の倅は、一夢斎の欲する、薬用の木の実や薬草を、志乃よりも素早く探し出してきたし、一日のうちに三島まで駆け下り、芦の湖の西岸をまわって、仙石原の芒(すすき)っ原を駆け抜け、宮城野まで駆け下ってくるという、超人的な働きをみせて一夢斎を喜ばせた。

伊賀の地で育てた忍者たちは、すべて、公儀に差出してしまった一夢斎は、今は甚兵衛と志乃の二人しか手許に置いていなかったのである。しかも、甚兵衛は伊豆守に従って、駿河に下っていた。豆吉は、志乃と二人で、一夢斎のために、長兵衛が呆れるほどの活躍をしてみせたのである。

この二人の活躍で、正雪、忠弥、半兵衛の張孔堂の三将が、小涌谷から箱根お関所を窺(うかが)っていることも、一夢斎は知った。

しかし、天魔の三郎らの山者の行方は、杳(よう)として知れなかった。

十月十三日になって、伊豆守の行列は、無事興津の本陣を立ち、江戸に向ったという報告が、甚兵衛の手の者から届いた。

それから間もなく、一夢斎と志乃の姿は、宮城野の湯から消えた。

箱根の関所を見晴す、大檜(おおひのき)の梢に、鞍馬の安(やす)が腰かけていた。

関所破りは磔というのが定法だが、山者にとって、関所などというものは、有って無きが如きものであった。

安は、関所を見下して、にたり、にたりと嗤っている。

目の下は、箱根権現に至る、権現坂であった。かつて、曾我の五郎が、猪に跨って走りまわったという坂だ。

その坂脇の笹藪(ささやぶ)から、浅間の馬吉の長い顔が出た。

馬吉、びっ！ と指を鳴らした。

鞍馬の安が下を見た。

馬吉、鼻の前に、親指を立てて見せた。

玉が来たという合図であった。

安がにたりと嗤って首肯くと、馬吉の長い顔は、笹藪に消えた。

やがて、安は、松平伊豆守の行列の先頭が、水飲峠に現れるのを見た。

天魔の三郎は、いずくからか山者を率いて現れて、伊豆守の帰途を衝いたのだ。

向い番所の前で、行列を止めて、仕来り通りに、伊豆守が、駕籠の戸を開けて、役人に形式的に顔を見せる。

その顔を確認するのが、安の役目だった。

馬吉は、大平、白水坂、ちょうし口を駆け抜けて、樫の木坂の崖の上にはねあがった。

樫の木坂の上には、上湯の岳造、俵石の温次などという地元の山者が潜んでいた。熊谷三郎兵衛もいた。三郎兵衛は、矢倉沢の鷹七という山者だったのだ。

この一党、いずれも、葛布小袖に半袴をはき、腰には大小をぶちこんでいる。山者と知れては、あとがうるさい。どこぞの浪人者の襲撃という形をとるという策だ。

山道を見下す崖淵の芒の間から、黒光りした銃口がのぞいていた。

鉄砲を握って、草叢に寝そべっているのは、冠ヶ岳の山者の頭領、猪追いの照である。猪狩の名手だ。そのした、五間ばかりのところには、御前崎の花吉がいた。これも、鉄砲をかまえて、寝撃ちの姿勢をとっていた。

この山者という不思議な集団は、全国いたる所に仲間がいた。常日頃は、箕造などの姿で、山

間から里へ、里から山間へと流浪していた。しかし、一旦、動員令がかかると、鼬のように、馳せ集まってくる。団結し、厳しい戒律をもつ民であった。

この樫の木坂は、箱根八里の道中、第一の難所であった。両側から、杉、樫、樒、榎などの大樹の枝が、鬱蒼と道のうえまで張出し、昼なお暗いほどの山道である。しかも、急坂であった。普通の旅人を乗せた馬子も、ここでは客を馬から下す。牛歩して、落馬し、頭を打つ旅人が多かったからだ。

ここで行列を邀撃する——、伊豆を血祭りにあげ、冠ヶ岳の麓を走って、仙石原から乙女峠に出る——天魔の三郎はそう決めて、熊谷三郎兵衛こと、矢倉沢の鷹七を頭領に据えた、山者の一群を、ここに配置したのだ。

坂上の笹藪に生えた一本の古木の根元に、一人の老婆が蹲っていた。この老婆、握り太の桑の杖を一本手にしていた。目は、うっそりと閉じている。しかし、襤褸布子をまとった手足は、古木の枝のようだ。

これが、関東山者の頭領、天魔の三郎の化け姿であった。

伊豆守の行列は、千人を超した。これを邀撃する山者は、天魔の三郎以下の九人であった。この九人にとって、急坂のうえに、道幅のせまいさいかち坂から、樫の木坂にかかる道筋ほど、恰好の場所はなかったといえる。しかし、三郎は、いま一つ最後の手段を隠して、この崖上に上っていた。

崖下をしゃらんしゃらん鈴を鳴らして、馬子に化けた山者が下っていった。

そのとき、浅間の馬吉が藪の中から走り出てきて、三郎に告げた。

「行列は関所を出で申した」

「よし、鷹七、ゆけ」
三郎は、目もひらかずに言った。
「おう」
と答えた鷹七は、岳造と温次に顎をしゃくると、一挙に丈余の崖上から、跳ね降りた。樫の木坂の登り口の笹藪に、三人が走りこんで消えた。馬吉の長顔が、藪の中に消えた。
入れかわりに、鞍馬の安が、崖上にはね上ってきた。
「伊豆守は駕籠の中、確かに見届け申した」
「よし、鷹七につなげ」
と、老婆に化けた三郎。
「うけたまわった」
ぱっと、安の姿は藪の中に消えた。
やがて、大人数が、坂を踏んでくる足音が聞こえてきた。
猪追いの照が、人差し指に唾をつけて、銃口に塗った。獲物を狙うときの、この男の癖である。
御前崎の花吉の火縄が、青白くまたたいた。花吉は、くちゃくちゃと藜の葉を噛んでいる。
「照、一発で仕止めろ」
凪のような声で、花吉は言った。
「念を押すな、馬鹿もん。この照様の鉛弾が、的をはずれたことは一度もねえ」
「そうか、そうか」
にやりと嗤って、花吉は、ぺっと、口中の藜の葉を吐き出した。
そのとき、三郎以下の人数は、いつのまにか、松の根方から消えていた。

先走りの小者が、坂を駆けて下っていった。
しばらくして、最初の陣笠が現れた。
二列縦隊になった行列が、静々と坂道に出てきた。整然と崖下を通りすぎていく。
やがて、三本扇丸の定紋をうった駕籠が現れた。前後左右は、屈強な近習に固められている。
猪追いの照の銃口が、ぴたりと駕籠の扉に照準された。
「みておれよ、花吉」
声と同時に、轟然と、照の銃口が火を噴いた。鉛弾は、確実に、網代戸の中に撃ちこまれた。
「あれ?!」
と、照は首を傾げた。
行列の前後の武士たちは、うっ！　と色めきたったが、肝心の駕籠脇の武士たちは、姿勢も崩さず、顔色もかえず、粛々と歩きつづけていたからだ。駕籠の中を見ようともしない。
花吉も首を捻った。
とたん、わっと、行列が崩れた。
鷹七、岳造、温次らの一党が、駕籠をめがけて躍りこんできた。
あっという間に、五、六個の首が、血飛沫をあげて宙にとんだ。

獅子奮迅刀

一

駕籠脇をびっしりと人垣で固めて、行列はじりじりと坂を下ってきた。
花吉は舌を鳴らした。
鉄砲をかまえたまま、芒（すすき）の根をわけて、崖から降りはじめた。
あの駕籠の中は空か、影武者にちがいない——と気付いた花吉は、念のため、近寄って、たとえ替玉であろうが、止めの一弾をぶちこんでくれる、と、崖を降りはじめたのだ。
この行為は、無謀といえた。
既に、駕籠脇は武士たちに囲まれて、真っ黒に脹れあがり、鉄砲は崖上から撃たれた、と見た数名の武士が、抜きつれて、崖に駆け上ってきていたからだ。
しかし、この命知らずは、まるで、あたりに人なきが如く、崖の中腹に仁王立ちになると、網代戸にむかって引き金をひいた。
とたん、天地を揺がすような轟音とともに、駕籠は弾（は）ね飛び、みるみるあたりは黒煙に包まれた。
浅間の馬吉が、路上に張出した樫の大樹の上から、爆裂弾を投じたのだ。
黒煙のなかから、
「引けーいっ！　おらぬ。駕籠は替玉じゃ」
鷹七こと、熊谷三郎兵衛の喚く、凄まじい声が聞こえた。

「馬鹿もん！」
目の前に躍りあがってきた、一人の武士の顔を、花吉は、鉄砲の台尻で一撃した。
既に、行列の半分以上が、崖下を通り過ぎていた。
「殺すな。その者は捕えよ。生き証人じゃ」
下から、一人の武士が喚いた。
同時に、ぐゎ！　と、今一人の武士の脳天を一撃するや、地を蹴って、花吉は跳躍した。鳥のように崖上に飛び上った花吉は、ブゥ！　屁をひとつ残して、消えてしまった。
行列の最先端は、つくも沢にかかっていた。
川端の茶屋に、一人の老婆が腰をかけていた。
天魔の三郎であった。
鞍馬の安が、走り寄ってきた。
三郎は、手に持っていた杖で、いきなり安の頭をぶちのめした。
「虚仮（うつけ）め！」
と、喚いた。
「痛ぇ！　申し訳ござらぬ！　影武者とは、さすがにこの遠目の安も」
みなまでいわせず、三郎は叱咤した。
「足柄山と熱海へまわる道じゃ。おまえは、温次と一緒に足柄道へ走れ。鷹七と照は、熱海への間道じゃ。鷹七には、さよう伝えろ！」
「かしこまった」
横とびに、安はつくも沢に駆け込んだ。

樫の木坂で失敗した場合、この茶屋前で、一挙に伊豆めを討つ！　という二段構えの陣を、天魔の三郎は敷いていた。つくも川橋の両端には、地雷まで仕掛けられていた。興津の本陣からずっと伊豆の駕籠を見張ってきて、影武者と見破れなかった鞍馬の安は、殴られても仕方がない。

天魔の三郎は、岳造を従えて、小田原にむかって疾駆した。

箱根越えの道は、間道を含めて三筋。すべてこれは小田原で合する。三郎は、小田原にて伊豆守を迎え討つ、と、咄嗟の間に決めたのだ。

しかし、この頃――。

松平伊豆守信綱は、十人の近習を連れただけで、長尾峠から仙石原にかかっていた。

興津の本陣を出てから、ときどき、行列を押し包んでくる、不気味な動きのあるのを感じ取っていた鴉の甚兵衛は、三島の宿で、正体不明の異様な男が、裏庭から凝っと宿の様子を窺っているのを見ていた。これを、天魔の一派と見た甚兵衛は伊豆守を説き伏せて、行列の駕籠には影武者を乗せ、通常どおり、寅の刻に立たせたあと、ひそかに、黄瀬川沿いに、岩波まで走り、長尾峠から、仙石原に抜ける道を選んだのであった。

甚兵衛は、仙石原の芒っ原を突っきり、更に、早川沿いの杣道を下って、宮城野の湯におりて、時を稼ぐつもりだった。

足柄道も熱海への間道も選ばなかった甚兵衛は、たしかに、天魔の三郎の裏をかいて、山者の襲撃を躱すことには成功した。

しかし、もう一派の怖しい集団が、長尾峠の頂上から、芒っ原に降りていく、伊豆守の一行を見ていたのだった。

根来幻幽斎率いる、根来衆であった。

また、天魔の三郎らの一隊が、樫の木坂の襲撃に失敗したと知った正雪らは、早川沿いに、足柄道にむかって疾駆していた。

この、駿河は由比宿の紺屋に生れた軍学者は、箱根から富士の裾野にかけての地理は、熟知していたのである。正雪の勘は、箱根三道よりは、仙石原から諏訪神社の下にぬけ、仙石原関所跡で、早川の激流を見下す台地に至る杣道を、無意識に照準していた。

茫々たる芒の原を、伊豆守信綱は、甚兵衛に先導されて歩いた。従う近習の武士は、十名にすぎなかった。

しかし、これらの武士は、揃って、三本扇の丸の紋所のついた塗笠を被り、裁着袴に打裂羽織、すべて伊豆守と同じ服装だった。

陽差しはいたずらに明るかった。

足元を、名も知れぬ小動物が駆けぬけ、兎や栗鼠が走り抜けた。

駕籠に影武者を乗せて、箱根に向わせた行列の安否を思うと、伊豆守は、走り出し、石に己の頭を叩きつけたいような衝動を感じた。

芒っ原にも、落葉は積っていた。

音もなく流れる、小川もあった。

水底には、朽葉が沈んでいて、死人の肌のように光っていた。

前方に、樒の林が見えてきた。甚兵衛は黙々と歩いた。

やがて、林に入った。

林は深く、光と影に彩られて、不気味に静まりかえっていた。

甚兵衛の足が、ふと止まった。
どこかで、梟（ふくろう）が一声鳴いた。
音もなく、甚兵衛は落葉の中に蹲（うずくま）ると、
「殿」
と、言った。
「いてござる。根来の衆（もの）でござる」
さすがに、甚兵衛の顔は蒼ざめていた。
根来衆には、幻幽斎の他に、一郎太という凄まじい上忍がいることを、甚兵衛は知っていた。
そやつが、今、幻幽斎に従って出てきていることも。
いかに武勇に優れているとはいえ、近習の士、十騎と、根来衆が闘っては、勝算はない。
「殿、隠れて下さらぬか」
甚兵衛は、血を吐くような声で言った。
「隠れろとか」
「いかにも」
「この林の中で、いかにして隠れろというんじゃ」
と、伊豆守は、目を剝いた。
三島から、駕籠に影武者を乗せて、迂回（うかい）してきただけで、伊豆守の自尊心は、すでにずたずたになっていた。
「もはや、死んでもよい。わしは闘う」
伊豆守は唸るように言って、十名の近習たちを見まわした。

「甚兵衛、わしは闘うぞ」
しかし、甚兵衛はもう応えず、傍の窪地に枯葉を掻いていた。
枯葉の下から、赤土が出た。
「おのおの方、ここより十間ずつ八方に散って、殿をお守り下され。そこより一歩も退（の）いては下さるな」
近習らは、この伊賀者に命令される謂（いわれ）はないというふうに、伊豆守の顔を見た。
「ゆかれよ！」
と、甚兵衛は、叱咤した。
伊豆守は、甚兵衛の力は、知りすぎるほど知っていた。
伊豆守は、言った。
「忍び相手の闘いじゃ、甚兵衛のいう通りにせよ。わしはここで、甚兵衛とともに闘う」
おし殺した声で、甚兵衛はまた言った。
「早うゆかれい！」
「よし、甚兵衛、もしものことがあったら、おまえ、生かしてはおかぬぞ」
「わかっており申す」
甚兵衛は、また赤土を掻きはじめた。
八方に分れて、近習たちは散っていった。
とみるや、甚兵衛はいきなり立って、伊豆守の脾腹を叩いた。声もたてず、伊豆守は、前のめりにくずおれた。
これを、赤土の上に横たえた甚兵衛、

「殿、お許しあれ」
と、片手拝みして、首から下に土をかけ、その上に枯葉を集めてのせた。
ふっと、目を開けた伊豆守は、観念したような声で言った。
「甚兵衛、こうしていなければならぬか」
「左様でござる。しばしの間、動いては下さるな。必ず、戻ってまいり申す」
目を瞑った伊豆守の顔の上に、甚兵衛は、枯葉を盛って、ならした。
ぽっかりとあいた窪地の上空では、富士おろしが、ひょうひょうと鳴っていた。

二

甚兵衛は、林の底を這っていった。
林のはずれで、絶叫がわいた。同時に、血の臭いが風に乗ってきた。
「南無」
と、呟いた甚兵衛は、眼前の檜の下枝に舞いあがった。
下枝で一回転して、反動をつけた甚兵衛、次の瞬間には、空間五間を見事に飛んで、松の大樹の梢にとび移っていた。一気に、猿（ましら）のように、頂ちかくまではね上った。
骨の截たれる鈍い音が聞こえた。
しかし、甚兵衛は、松の頂に四肢をまわして抱きついたまま、動かなかった。
十人の近習が討たれるのは、致し方のないことだった。
三島の宿から、それが可能なら、伊豆守と二人だけで、甚兵衛は脱出したかったのだ。もし、それが出来たなら、行列の出発したあと一刻（二時間）もおいて三島を出れば、変装した伊豆守

と二人で、悠々と箱根を越えて、大磯か平塚あたりで、行列に戻れる可能性はあった。しかし、近習たちは、眦（まなじり）を裂いて、この甚兵衛の案に反対したのだ。仕方なく、甚兵衛は、長尾峠から仙石原を抜ける道をとった。
また、一人の近習が殺される音がした。
根来者は、無言であった。
出来れば助けたい、と甚兵衛は思った。しかし、それで体力を消耗させれば、討たれる危険は十分にあった。
相手は、根来一郎太一人でも、勝負はよくいって互角、十数人を超える根来衆をむこうにまわしては、逃げるほかに道はない……、奢（おご）ってはならぬ……、今は、殿のお命を救うのがおれの仕事じゃ……、と、甚兵衛は、松の木瘤（こぶ）に化したように動かなかった。
林の一角で、突如、凄まじい雄叫（おたけび）が湧いた。
甚兵衛は、目を開けた。
芒っ原を、脱兎のように駆けていく、近習の姿が見えた。
そのあとを、四、五名の根来衆が追っていた。近習と根来衆との距離は五間、それが徐々に、ひらいていく。
逃げきってくれ、と、甚兵衛は、祈るような気持で思った。その近習は、音もなく近づいてくる殺気に怯えて、逃げ出したにちがいなかった。
しかし、その近習の姿は、伊豆守と、全く同じだった。塗笠の三本扇の丸の紋所を、陽にきらめかして駆けていた。
北方で、また血臭が湧いた。

倒れた近習は、すべて顔を改められているはずだ。一人が逃げきってくれれば、十人を影武者に仕立てた意味は生きてくる。

思わず、甚兵衛は、呟いた。

「逃げきってくれ」

そのとき、芒っ原の一角に、音もなく現れた大兵の武士がいた。裁着袴に折れ笠をいただき、背には兵糧包みを斜に負っていた。

柳生十兵衛三厳であった。

十兵衛は、驀地に林の中に駆け込んできた。

しかし、甚兵衛は、これを見なかった。

突如、林の中で起った刃音に、甚兵衛は、うっ！　と、目を剝いた。

十兵衛は、根来一郎太の虚を衝いたのだ。

根来衆は、すでに八人の影武者を殺し、一人を追って五人が駆けていた。残りは、林の中を嗅ぎまわっていた。

一郎太は、樫の大樹を背にして、瞑目していた。一郎太の神経は、林の中はもちろん、あたりの芒っ原全体に及んでいた。遠聴の術を使っていたのだ。

しばらく後には、この稀代の忍者は、おそらく、枯葉の下に隠れた伊豆守の吐く、微かな息と、五体に脈搏つ血脈の音を聴きとっていたかも知れぬ。

幻幽斎は、芒っ原の一角に横たわって、大地に耳をあて、地表を伝わってくる音を頼りに、伊豆守の行方を探っていた。

その中間に、十兵衛は駆けこんだのだ。

というのは、幻幽斎の遠聴の術と、一郎太の同様の術が搗ち合って相殺されている地点に、十兵衛は、跳びこんだのだ。そして、この二人の遠聴の術が相殺されている一線上を、十兵衛は、風のように疾駆したのだ。

突如、目前にわいた殺気に搏たれて、ぱっ！　と、一郎太は目をあいた。

その頭上へ、十兵衛の白刃が降った。

一郎太に、術を使う余裕はなかった。身を沈めて、抜きつけの一刀で、これを払った。十兵衛の大剣は、宙にとんだ。しかし、次の瞬間、十兵衛の足は、一郎太の顎に飛んでいた。顎の砕ける鈍い音がした。

その音を、十兵衛の脇差が横一文字に薙いだ。

凄まじい血飛沫をあげて、一郎太の首は、宙に飛んだ。

しかし、それは、同時に、十兵衛の有様を、幻幽斎に知らせることになった。

樫の大樹の根元に、一郎太が崩れ落ちた気配と血臭を、幻幽斎は同時に嗅いだ。

幻幽斎は、しかし、それを、伊豆守と甚兵衛の襲撃と勘違いした。

幻幽斎の忍笛の音が、芒っ原に流れた。

林に走れと、それは鳴っていた。

芒っ原に散って走っていた根来忍者は、八方から林に走りこんだ。

樫の大樹の下に、十兵衛が、血刀を下げて立っていた。その足元に、一郎太の首が転がっていた。

根来衆は、十兵衛を中点において、卍の陣、を張った。

卍の陣とは、字の如く、中点に接触する人数は、常に四人である。その四人の後には、蛇の如

く、卍形に四列の人数がつづく。しかも、この人数は、追っ取り込んだ敵を軸として、水車のように、休みなく回ってゆくのである。

中点の四人を倒しても、そこには、四人の新手がいる。この陣を突破するには、四人を倒し、更に、二重の陣列を突き抜けねばならない。一歩誤れば、卍巴の乱陣の中に巻きこまれることになる。

十兵衛に、いかに鬼神の技があろうとも、かくまでに整然たる奇襲陣に対して、働きうる力には限りがある。しかも、幻幽斎は、いまだ健在なのだ。

しかし、十兵衛の心気は冴えきっていた。十兵衛は父但馬守の腹のうちは知りながら、父に命ぜられるままに、伊豆守に近づいた。伊豆守の働きと、その腹の有様を探るのが目的だった。しかしながら、十兵衛はいつの間にか、伊豆守を心の友と感じている自分に気付いたのだ。

伊豆守が、将軍家光の名代として、久能山にむかって江戸を立ったあと、父但馬守が、服部一夢斎を紅葉山の石牢に閉じ籠めていたことを知った。

十兵衛は、父の行為を激しく恥じた。しかも、但馬守は、公儀隠密団に、伊豆守の行列を護衛せよとは命じなかったのだ。

既に、そこには、一夢斎はおろか、甚兵衛も志乃もいないと知りながら、十兵衛は、西念寺の庵へ行ってみた。

囲炉裏の火は消え、床には埃がつもっていた。

しばらく、十兵衛は、すでに灰まで冷えた囲炉裏端に坐って、瞑目していた。ふと目を開いた十兵衛は、ならした灰の上に書かれた指文字を見た。

それは、〝無〟と読めた。

静かに庵を出た十兵衛は、東海道を駆け下っていった。伊豆守の行列が襲撃されたということは、小田原で知った。

とたん、十兵衛は、箱根三道の絵図を頭に浮かべていた。

一夢斎なら、鴉の甚兵衛なら、どの道をとるか——と考えた。即座に、仙石原から早川沿い、という答が出た。

伊豆守殿、生きていてくれ……、十兵衛は真直ぐ、早川沿いに北上した。仙石原で、芒っ原を走る伊豆守の近習の姿を見た。すべてが、同じ姿をしていた。その姿を見たとき、十兵衛は、伊豆守の生存を確認したと思った。そして、一郎太を倒した今、眼前に迫った根来衆の姿を見て、十兵衛は、はっきりと伊豆守の生存を信じた。来た甲斐があったと思った。

十兵衛は、五体に力が漲ってくるのがわかった。しかも、真昼であった。根来衆らは、得意の術を、陽光によって封じられている。一剣を振って、倒さずんば止まじ、十兵衛は、血ぶるいして、卍の陣の中に立っていたのだ。

十兵衛の五体は、旋風のように、敵の白刃内へ躍りこんだ。

稲妻に似た光が走った。

「うっ！」

「げっ！」

短い悲鳴をあげて、敵影が二つよろめいた。

とみた瞬間、四方から唸りをあげて、四本の鎖分銅が飛来した。

十兵衛は、地を蹴って、跳躍した。

がっ！

足元で、四本の鎖分銅が絡みあう音がした。一瞬、ぴんと十字に張った鎖分銅の上に、十兵衛は立った。

右足を軸にして、十兵衛の身体は、独楽のように回転した。敵四人は、十兵衛の大剣の刃圏内にいた。四人の首が、一挙に断たれて、血飛沫が噴きあがった。

そのとき、十兵衛は、もうそこにいなかった。一間を躍って、次の草地で、大剣を唸らせていた。その迅速なこと、人間の業とは見えなかった。

さすがの根来衆も、血煙をあげて倒れる味方を見るばかりで、一瞬、刃影の中に十兵衛の姿を見失った。それは、奇怪な魔物が荒れ狂うに似ていた。

「術は無用じゃ！　討ちとれい！」

幻幽斎の忍笛が、そう鳴った。

しかし、根来衆で、それを聞いた者は一人もいなかった。聞かなくとも、忍者の本能で、白刃による血戦あるのみ、そう決断した根来の手練者たちは、いっせいに抜刀して、十兵衛をおし包んでいた。

鴉の甚兵衛は、根来幻幽斎を狙って、そろそろと芒の根方を這っていた。

卍の陣は、既に崩れていた。阿修羅となって、荒れ狂う十兵衛には、卍の陣は、あまりにも整然としすぎていた。

根来衆は、一人一人が白刃そのものと化して、十兵衛の胸元に跳びこんでいった。

十兵衛の大剣が唸り、血飛沫がとんだ。

活路を開こうという意志を、闘いの当初に、十兵衛は、既に捨て去っていたのだ。幻幽斎を倒さぬ限り伊豆守を救う道はない、皆殺しにせずんば止まじ……、闘魂の固まりと化して、十兵衛

は、疾雷の如く、大剣を振い、奔転し、前後左右の敵を斬りまくった。

正面の敵を真二つに斬るや、次の瞬間には、振りむきざま、背後の敵の胴を薙ぎ斬っていた。とみるや、旋風の如く、前面の敵を斬って駆け、翻転して、うしろを斬った。左からの敵を撃つとみせて翳した剣は、突如、頭上で反転した。骨を断つ凄まじい音がして、右の敵が地に這い、十兵衛の剣は、そのまま横に走って、一人の忍者の頭蓋を砕いた。

しかし、根来衆もさすがだった。

一人、また一人と倒されながら、声ひとつあげず、気合ひとつかける者はいなかった。閃き、血飛沫をあげる孤剣を追って、縦横に迫り、一人として退く者はなかった。恐るべき敵であった。

事実、ある者は、柘榴の如く顔を割られてのけ反り、ある者は、皮一枚残して前に倒れた自分の首を抱いて、十兵衛に体当りを呉れた。屍の上に屍を重ねてなお、根来衆は、腰を低く落して身構え、一歩も退かなかった。のみならず、じりじりと肉迫していたのだった。

十兵衛のあまりの凄まじさが、彼らを狂鬼と化さしめたのか……、呻きつつ起とうとして、がっくりと膝をついた者、首から噴き出した血潮で、達磨のようになって横たわった者、すでに首のない胴を痙攣させている者、それらがすべて、白刃だけは、敵にむかってさしつけていた。

まさに、地獄であった。

十兵衛も、勿論、無数の傷を受けていた。

しかし、十兵衛は、痛みも、血の流れも感じなかった。敵の断末魔の声を、十兵衛は、風の音のように聞いていた。

十兵衛は、人間としての感覚を失ってしまったのだろうか——。

そうではなかった。この血陣の最中にあって、十兵衛の心気は冴え亘っていた。一人も生かし

ては残すまい、という決意が、十兵衛の鍛え抜かれた精神と五体から、通常の感覚を奪い、闘魂だけが生き生きとしていたのだ。

「きえーっ！」

目の前に躍り出た一人を、凄まじい気合とともに、十兵衛は斬り倒した。返す刀で、また一人、追太刀を唸らせて、つんのめった一人の胴を薙ぎ斬った。

とたん……、あたりに静寂がきた。

林から、芒っ原に出ていたのも、十兵衛は知らなかった。

足元の血海に顔を浸して、一人の忍者がひくひく痙攣していた。それが、最後の一人だった。

十兵衛は、血刀をさげて、台地に昇っていった。

〈幻幽斎はどこだ〉

十兵衛は、あたりを見まわした。

茫々とつづく芒っ原に、人影はなかった。

陽は中天にあった。

死闘

一

鴉の甚兵衛は、そのころ、根来幻幽斎を追って走っていた。

芒(すすき)の根を這って、幻幽斎の背後五間に迫ったとき、幻幽斎は、甚兵衛の目の前で、煙のようにかき消えてしまった。その後(あと)には、一本の枯木の杖が立てられていた。杖の先端には、長さ三寸ほどの、鏡のように磨かれた、八角の鉄片が付けられていた。鉄片は、陽光を吸って輝いていた。

幻幽斎は、一瞬の陽光の反射を利用して、甚兵衛の目を暗まし、附近に消えたのは明らかだった。

距離は、わずか五間であった。

先に動いた方が殺(や)られる、殿を殺るまで、幻幽斎は逃げまい。待つ——と、甚兵衛は決めた。

それが、甚兵衛の誤算だった。

幻幽斎は、甚兵衛が芒の底を這ってくる、と知ったとき既に、この闘いは捨てていたのだ。十兵衛の出現で逃げきってしまった近習の一人を、幻幽斎は、影武者の中の卑怯者と見た。そして、この勘はあたっていた。

しかし、甚兵衛が芒の根方を這って、じりじりと近づいてくるのを知ったとき、あれは、あるいは、本物の伊豆守ではなかったか、と、思った。

幻幽斎は自信がありすぎたため、読みすぎたのだ。甚兵衛め、わしとやるつもりか……と思ったとき、あやつ、殺られるのを覚悟で来たか……、ならば、伊豆めは、すでにここにはおらぬな、

やはり、逃げたあやつは本物であったか……、と、おもったのである。

思った途端に行動するのが、忍者というものだ。

幻幽斎は、甚兵衛ばかりでなく、十兵衛と闘っている下忍らも見棄てて、芒っ原から這い出していた。

凝っと、草地に這ったままの甚兵衛が、こういう幻幽斎の動きに気付いたとき、幻幽斎は、既に芒っ原を駆け抜けていた。

殿は、柳生の若が救い出してくれるであろう……、甚兵衛は、躊躇(ためら)わず幻幽斎のあとを追った。

しかし、早川の岸辺で、甚兵衛は、幻幽斎の足跡を見失ってしまった。

芒っ原に引き返そうか……、と甚兵衛は思った。しかし、幻幽斎に、密かに自分の動きを見張られているとすれば、それは出来ない。それは、殿は、まだ芒っ原だと教えるようなものだ、幻幽斎は、いまだどんな手を隠しておるやも知れぬ……、引き返すなら、幻幽斎を殺ってからだ……と、甚兵衛は、断崖から、慎重な目を落して、素早く、流れの模様を探った。

大蝦蟇(がま)に似た巨岩から、虎嘯(こしょう)の形をした二重岩へ跳び、二間ほど隔てて、白い泡をかんで飛沫に濡れている畳岩へ移り、更にそこから、そのまま僧正の墓碑にでもなりそうな桃形の岩へ移れば、あとは小さな飛び石伝いに、対岸へゆき着ける——と、甚兵衛は見た。

あたりに、人の気配はなかった。

しかし、幻幽斎は、どこから狙っているかも知れなかった。

よし！

跳ぶ、と、甚兵衛は決めた。

決めたとたん、甚兵衛の身体は、宙にあった。絶壁に生えた松の根、岩角二個所に手を触れて、

三度、空中でとんぼをきって、落下速度を弛めた甚兵衛は、軽々と大蝦蟇岩の背中におりた。

と、みた刹那、ぱっと身を躍らせて、虎岩の頭へ片足を掛けたか掛けぬかの迅(はや)さで、三番目の畳岩へ、三間を翔(か)けた。

しかし、畳岩に足が着いたとたん、岩の下から、さっと手が出て、甚兵衛の足を払った。

翻筋斗(もんどり)うって、甚兵衛は流れに落ちた。激流にもまれて、甚兵衛は、木の葉のように流れていった。

「童(わっぱ)め！」

と、吐き出したのは、幻幽斎だった。

幻幽斎は、畳岩の下に潜って、絶壁の上に現れる人影を窺っていたのである。

御小姓あがりの伊豆が、早川の断崖を、一人で降りられるわけがない——、この辺で待ち伏せておれば、伊豆めは、必ずや、断崖のうえをうろつきよるじゃろ……。

そう思った幻幽斎は、畳岩の下に隠れて、絶壁の上を見張っていたのだが、そこへ甚兵衛が現れたのを見て、幻幽斎の気持は変った。

〈伊豆め、一人で、既にこの渓谷を渡ったか！〉

で、あった。

幻幽斎は、畳岩のうえに、飛沫をあげて跳びあがった。

岩頭から岩頭へと、獣(けだもの)のように跳び渡って、対岸の絶壁の下に立った。

ひらり、頭上の岩角に舞いあがると、猿(ましら)のように岩角、木の根を伝って、またたくまに絶壁の上に立った。

桟道が、ゆるやかに、岩壁に沿ってつづいていた。

やがて、川辺は広がり、檜林のむこうに、小楢の林がつづく高原に出た。伊豆守が、一人で芒っ原を駆け抜けてきたとすれば、川は、この辺で渡っているはずであった。

まだ、日は高かった。

幻幽斎は、あたりの気配を、慎重に嗅ぎながら歩いていた。伊豆守が先行していたとしても、既に追いついてもいい距離まで、幻幽斎は来ていた。

山鴉が羽音もたてず、眼前を滑空していった。

ふと、人の気配を感じて、幻幽斎は立ち止った。

気配は、小楢の林の奥にあった。

はっきりとした息遣いまで、聞こえてきた。

〈忍者のものではない……、伊豆め、こんなところにまで来てかくれておったか〉

幻幽斎は、にたりと嗤って楢林の中に入っていった。

とたん、人の気配は消えた。

〈伊豆め、やりおる〉

幻幽斎は、林の中を探っていった。草地に出た。草地のむこうは、雑木林だった。人の通った跡が一筋、はっきりと草地を過っていた。

幻幽斎は、躊躇わず、その跡に足を踏み入れた。忍者なら、草地に路跡を残すような歩き方はしない。枯草が草鞋の底で躙られたような跡を見て、幻幽斎は、いっとき、欺かれたといっていい。

足元を、鼬が走りぬけた。

眼前の雑木林の上には、榎の大樹が枝をひろげ、光と影に暈取られた林の奥には、原始の森の

静けさがあった。

小鳥の声ひとつ、聞こえなかった。

一瞬、己が眼前に広がった草地が、濁り水をたたえた広大な湿原のような錯覚に捉われて、幻幽斎は、目を屡叩いた。

そのとき、彼方の木立の中から、一個の黒影が、音もなく現れたのを、幻幽斎は見た。思わず、幻幽斎は、目を見張った。それは、服部一夢斎に紛れもなかったからだ。

枯木のような痩身に、黒鞘の長剣を一本背負っていた。一夢斎は、無言で前へ出てきた。長剣の柄頭が陽をはじいて光った。

〈あやつ、このおれに尋常の勝負を挑むつもりか〉

両者とも、なみの忍者ではない。陽光の下で対決すれば、おたがいに術は利かない、ということは知っている。しかも、手のうちは知り尽した二人だった。ただ、剣を抜き合わせて、白昼対峙したことはない。

〈よし、伊賀の狐め、この度は、一刀のもとに仕止めてくれる〉

幻幽斎は、腰の一刀に反りをうたせて、草地を滑っていった。

一夢斎は、わずかに一歩出ただけで、うっそりと立っていた。

その立姿は、異様な静けさに充ちていた。

あの静けさは何だ――。

一瞬、幻幽斎は、己が目を疑った。その静けさは、それまでの一夢斎にはなかったものだったからだ。

しかも、一夢斎の両眼は、いまだ閉じられたままだった。

両者は、十間の距離をおいて対峙したまま、動かなかった。

二

幻幽斎は、一夢斎の、その不思議な静寂の謎が解けるまでは、動けぬと思った。
実は、石牢に閉じ籠められ、十四日もの断食をしたために、身体を害した一夢斎は、視力を奪われていたのだ。宮城野の湯で、十数日にわたって治療し、養生はしたのだが、いまだに、一夢斎の目は完全に回復してはいなかった。真昼でも、霧の降る夜にいる如く、一夢斎の目は霞んでいた。
しかし、うっそりと閉じた瞼の下で、一夢斎は、十間の彼方に立った幻幽斎の動きを、的確に感じとっていた。
相手の動きに従って撃つ——。
という猛気を秘めた、それは静けさだったのだ。しかも、今の一夢斎は、目の前に立った宿敵幻幽斎を、必ず殺す、と決めていた。
服部半蔵が、柳生但馬守の密命を帯びて、西念寺の庵に来たとき、一夢斎は、既にそう決めていた。幻幽斎の息の根をとめて、世を捨てる——と。
そのことを、柳生但馬守に知らせるために、一夢斎は、志乃をして、囲炉裏の灰上に、〝無〟の一字を残させてきたのだ。
今の一夢斎に思い残すことは、何もなかった。それが、一夢斎の立姿に現れていた。
一夢斎のこのときの心境は、そのまま、剣の心に通じていたのだ。
幻幽斎は、じりっと半歩出た。

一夢斎の気性の激しさを知っている幻幽斎は、一夢斎の立姿から、こやつ、このたびは、こちらが動かねば、動かぬな——、何のための時かせぎだ、と思ったのだ。
しかし、一夢斎は、目もひらかず、動きもしなかった。
幻幽斎に、微かな焦りが湧いた。
〈こやつ、ここで時をかせいで、伊豆守を逃がすつもりか〉
するすると、幻幽斎は前に出てきて、叫んだ。
「服部一夢斎、今や、勝負を決するときじゃ！」
一夢斎の口辺に、微かな笑いが浮いた。
剣の心に、水月というのがある。
広沢の池にて、仙洞の御製に、

　うつるとも月も思わずうつすとも
　　水もおもわぬ広沢の池

この心である。
一輪の明月が天にかかれば、すべての川が、ひとつの月を映す。月は、光をわけて水にあたえるのではない。ただの一水にも、万川が流れていれば、月は一万の影を公平に映す。月そのものは、少しも加損せぬ。月は、水の大小も、えらばぬ。ただ、水が澄んでいれば、よく映るし、濁っていれば、映さぬ。
これを剣の心にしたのが、水月である。
一夢斎は、巧まずして、この心境に達していたのだ。

「ぬけい！　一夢斎！」
幻幽斎は、また、叫びさま、腰の一刀を鞘ばしらせた。
とたん、一夢斎も、肩の上の剣欛に手をかけて、抜いた。
しかし、幻幽斎は、飛びこめなかった。一夢斎のあまりの静けさに、戸惑ったといえる。
逆に、一夢斎は、目を半眼にひらいて、静かに左に動きはじめた。
午後の陽は、既に、西寄りに傾いていた。
一夢斎は、陽にむかって、立とうとしたのである。
視界が霧の中にいるように暈けた一夢斎にとって、幻幽斎の影は、揺らめく黒い陽炎に似ていた。
しかし、幻幽斎が抜き放ったとき、陽光を吸ってきらめいた白刃だけは、見届けたのである。
六感に、この白刃のきらめきを加えるために、一夢斎は、陽にむかって立つ位置に、静かに移動しはじめたのだ。
この動きは、幻幽斎をますます、惑わせた。
普通の立合いでは、太陽を背に負うのを、有利とする。しかし、一夢斎は、逆に自ら不利の立場に移動していったのだ。
やがて、一夢斎は左に十数歩、輪を描くように寄って完全に陽にむかって己が五体を置いた。
これは、明らかに、背水の構えであった。敵に有利を与えることによって、その心を奢らせようとする構え、とも取れる。
陽は、一夢斎の顔を赤く染めていた。
やがて、

「ゆくぞ、幻幽斎」
はじめて、一夢斎は、言葉を発した。
しかし、これを受けた幻幽斎は、にやりと嗤った。
一夢斎め、業に於いては、とうていかなわぬのを見て、詭道をえらんだか、伸びてくる影法師を見て、間合を計り、潮合いをあわせる腹じゃな……、と読んだからだ。
これを、幻幽斎は、逆に、一夢斎の奢りと見た。
するっと、一歩前へ出て、幻幽斎は、徐々に、大剣を頭上にあげていった。
これを受ける一夢斎は、地摺りの下段。
きらりきらりと、白刃に弾ける陽光を見ながら、一夢斎も、爪先躙りに、前へ出てきた。
危険な賭であった。
太陽が、もし、その刹那、雲間に隠れて、陽光が絶たれたなら、真っ向う微塵に振り下す、幻幽斎の大剣を、一夢斎は、その刃音だけで受けねばならぬ。幻幽斎とて、尋常一様の使い手ではなかった。いかほどの猛気が一夢斎にあろうとも、果して、これを受けきれるか。
一夢斎の生死は、この刹那に分れるようであった。
幻幽斎は、なお三歩、音もなく前に出た。
一夢斎も、出た。
遂に、間合いは六尺に詰まり、両人は、お互いの刃圏内に、己が五体を晒した。
しかし、二人も、そこで、ぴたりと静止してしまった。
そのままの形で、動かない。
幻幽斎の影は、既に、一夢斎の膝に落ちていた。

幻幽斎は大上段、一夢斎は地摺りの下段である。
大剣を頭上に振りかぶった幻幽斎は、明らかに、有利に立っていた。
振り下す刀の方が、撥(は)ね上げる刀よりも威力があって当然である。しかし、幻幽斎は、動かなかった。振り下す迅さと、撥ね上げる迅さと、この何百分の一秒かの間に、勝負が決するとすれば、紀州大納言を将軍の座に据え、自らも江戸城に入ろうという野心のある幻幽斎は、さすがに動けなかったのである。
一夢斎も、真空の中に身を置いているように、動かない。
この対峙は、そのまま、無限につづくかのようにみえた。
芒っ原を渡る風、の音のほか、どんな物音もなかった。鼬や兎や栗鼠は草叢に息を潜め、小鳥さえ鳴かなかった。
しかし、人間と人間の闘争には、やはり、限りというものがあった。
突如、幻幽斎の大剣の切先から、無音の殺気が噴いて、一夢斎めがけて、一条の閃光となって降った。
瞬間、一夢斎もまた、鋭い一声を迸(ほとばし)らせ、身を沈めざま、己(おの)が白刃を電光の如く、撥ね上げた。
勝負は、その一瞬に決した。
地響きをあげて、幻幽斎が転倒した。すっくと立った一夢斎の前に、天を仰いで横たわった幻幽斎は、その脾腹から顔面にかけて、一文字に斬りあげられていた。
顎から、双の唇を真二つにして、左眼まで顔面を斬り割られた幻幽斎は、かっと一方の目を見開いて、言った。

「見事じゃ。一夢斎、止めを刺せいっ」
「よかろう。成仏せよ。幻幽斎、南無」
ぶつりと、一夢斎は、その胸に、大剣の切先を刺し通した。

終章

武蔵野

古人は、誌(しる)している。
草原、遠く長空に接して、涯際を見ず、月は、草より出でて草に入り、虹は、原より起りて原に跨(また)がる。帰雲空しく野に迷う。倦鳥何処にか翼を休む。
……一望蒼茫の間に、林樹茂れる小丘、彼処此処に散って、まさしく陸上の孤島。林外鯨鐘の鳴るは、古寺の在るところ。梢上、華表の聳ゆるは荒廟の坐(い)ますところ、夜陰冥色を破って、灯火の風にまたたくさま、自ら漁火の幽趣を帯ぶ。
まことに武蔵野は、草の海であった。
茫々たる草原の彼方には、秩父連峰が褐色の峰々を連ね、その東方には、富士が、その秀麗な姿をあらわしている。
既に、初冬の風が吹きはじめたころである。
この武蔵野の草原を一筋、真直ぐに延びた街道を、一騎の武士が疾駆していた。
その前を、盲縞(めくらじま)の着物に折れ笠という姿の、小者ていの男が、砂煙をあげて駆けてゆく。
やがて、武士は、井の頭池畔を駆け抜けて、青梅道に入った。
道端の楢、楓、欅などの林は、既に紅葉を散らし、林間の家からは、落葉焚(た)く煙が流れていた。
武士は、馬上、疾駆しながら、供の小者に言った。
「まだか」
この武士、松平伊豆守信綱であった。
折れ笠の小者は、鴉の甚兵衛に紛れもなかった。

「今すぐでござる」
甚兵衛は、振りむきもせずに答えた。
答えとともに、甚兵衛は、脇道にとびこんだ。
やがて、この主従は、芒(すすき)っ原を駆け抜けて、楢林の中の道を北にとった。
前方の野に、樫の大樹が、枝を広げているのが見えた。
その根方に、藁葺(わらぶき)屋根の小屋がひとつ。
小屋の主であろうか、前庭に屈(かが)んだ一人の老人が、落葉を焚いた。
馬蹄の音を聞いて、老人は腰を伸ばした。
「お師いーっ！」
と、甚兵衛が呼んだ。
この老人、西念寺の庵を捨てた、服部一夢斎であった。
一夢斎は、甚兵衛と伊豆守を見て、手を振った。
甚兵衛とともに庭に駆けこんできた伊豆守は、ぱっと馬からとび降りると、
「一夢斎殿、微行(しのび)じゃ」
と言って、笑った。
一夢斎も笑って、言った。
「久し振りでござる。しかし、伊豆守様、もはや、微行は止めた方がようござらぬか」
「なに、もはや大丈夫じゃ。十兵衛とおぬしのおかげで、仙石原の死地を脱したこの伊豆守、今や、野良犬のごとく用心深くなっておる」
甚兵衛が、焚火を掻いて、

「おお、お師。よう焼けてござる。あちち」
じゃがたら芋をひとつ、灰の中から拾い出して、掌のうえで転がした。
「馬鹿もの。忍者が、焼きじゃがたらなどを熱がってどうする」
しかし、そう言ったものの、一夢斎の目は笑っていた。
仙石原で、頭領根来幻幽斎と、上忍一郎太を失った根来衆は、ほとんど烏合の衆となりおおせていた。将軍の座を狙って、密かに策を巡らせていた紀州頼宣も、頼宣を助けて暗躍していた関口隼人正も、幻幽斎を失って、その野望を捨てていた。
伊豆守信綱が、その全精力を傾けて練りあげた、武家諸法度は、すでに、しっかりと幕藩体制の中に根を下し、闇の力を借りずしては、もはや、幕府は揺ぎもしないことを、頼宣も関口隼人正も思い知ったからだ。
慶安四年四月、徳川家光は逝った。
その後の伊豆守の活躍には、幕府要人だけでなく、衆人が目を見張った。
伊豆守の政治能力は、この幕府の重大時に於いて、いかんなく発揮されたのである。
この年、七月、張孔堂一派は、遂に、謀叛に立ち上った。
その内容は、
――江戸表での蜂起の総大将は、丸橋忠弥。これが、小石川煙硝蔵の奉行、河原崎勘右衛門の息子十郎兵衛と計って、煙硝蔵の煙硝三万駄に火を放つ。同時に、江戸城の外郭五個所、町筋三個所に放火。この騒動に乗じて、かねて用意の葵の提灯をかざして、江戸城警護のためと称して、江戸城内に駆け入る。
また、張孔堂七将の一、今田庄太夫が、一手を率いて、狼狽登城してくる諸侯、旗本らを、その途次に邀撃して、これを討つ。

山者天魔の三郎は、松平伊豆守信綱の首をあげ、駿府に走る。
さすれば、張孔堂門下、その他江戸在住の浪人どもは、変に臨んで、雲集するだろう。その総勢二千とみて、江戸城籠城若干名を残して、一時、駿府に走り、正雪の旗の下に入る。
一方、京坂では、金井半兵衛、吉田甚右衛門らが、浪人勢力を率いて、大坂城を焼き払い、熊谷三郎兵衛は、一手を率いて、二条城をおさえる。
正雪自身は、鞍馬の安以下の山者を動員して、久能山の財宝を奪い、駿府城に入って、倒幕回天の旗をあげる。
この間、張孔堂七将の二、渥美次郎左衛門は、楠不伝が諸国に散らした、腹心達が集めた浪人どもと連繫し、出没自在に陽動して、天下の形勢を動かす。
されば、諸国の浪人は、招かずして馳せ集まり、天下を手中にすることができよう――。
というものであった。
しかし、この計画は、伊豆守が、あらかじめ張孔堂に入れておいた腹心の察知するところとなり、正雪が謀叛に踏みきって、駿府にむかって江戸を立つや、まず、丸橋忠弥を捕縛し、正雪の一行は駿府に到着し、茶町の梅屋太郎左衛門方に宿をとると、隠密同心恩田十九郎をして、これを襲わしめた。
正雪らは、捕吏に踏みこまれる前に、すべて自殺して果てたが、このため、すべての計画は、見事に覆滅されたのである。
この天下の一大事に対する、伊豆守信綱の疾風枯葉を巻くような覆滅作戦は、天下の浪人どもを恫喝するとともに、紀伊頼宣をも震えあがらせた。

この事件で、頼宣も、改めて、伊豆守信綱の実力を思い知らされたのである。

焼きじゃがたらを頬張りながら、甚兵衛は言った。

「お師よ。近頃は、但馬守殿も人がでけてござる。如何でござるか。そろそろ、西念寺にお戻りになられては」

「ふむ」

と首肯いて、一夢斎は、また、落葉の山を焚火のまわりに掻寄せると、空を見上げて、言った。

「ここが、わしは一番じゃ。みろ、西には、天下一の富士の山。東には、江戸城の天守閣まで、ここに居れば、わしの一番好きなものが、いつも眺めておれる。それに、この野は、のどかじゃ。のう、伊豆守様」

伊豆守は、感慨ぶかげに首肯いた。

伊豆守の愛馬高千穂が、あたかも、一夢斎の言葉を理解したかのように、天に鼻づらをあげて嘶いた。

しかし、甚兵衛だけは、何故か不満げであった。

またひとつ、じゃがたら芋を焚火のなかから拾い出すと、

「しかしじゃ。お師、志乃殿も西念寺の庵で一人では淋しかろう」

一夢斎は、にやりと嗤って言った。

「馬鹿者、志乃は昨夕、十兵衛殿が嫁御になっての、柳生の里へ下っていったわ」

解説

磯貝勝太郎

時代小説作家として大きな存在であった柴田錬三郎の多くの作品を、おおまかにわけてみると、『眠狂四郎』シリーズの作品や『異常の門』『主水血笑録』などの伝奇時代小説、『剣は知っていた』『運命峠』などの戦国期を背景として孤剣に生きる青年剣客が活躍する諸作品、忍者を主人公とした『赤い影法師』『南国群狼伝』などの時代もの、歴史上の人物や事件を作者の新解釈で描いた『私説大岡政談』『徳川太平記』などの歴史ものという、四つの作品群によって柴錬の作品世界が構築されていることがわかる。

本編『徳川三国志』は、『私説大岡政談』『徳川太平記』などと同様に、日本史上の有名な人物や事件を素材として、作者の新解釈と想像力によって描いた長編小説である。『徳川三国志』には、歴史上の著名な人物が多く登場する。由比正雪、徳川家光、春日局などの諸人物は、ひとびとによく知られている人物である。だが、この小説に登場する人物や事件には、不明、謎とされている部分がある。その典型的な例が、由比正雪であり、彼の起こした慶安の変である。

由比正雪の生涯は、伝説に包まれてわからない部分が多く、慶安四年（一六五一）、正雪らの張孔堂一派が起こした、いわゆる慶安の変の真相や、この事件に関係していたといわれている紀州大納言頼宣にも不明な点が多い。『徳川三国志』に登場する多彩な人物のなかで、注目すべき人物は、由比正雪、紀州大納言頼宣、松平伊豆守信綱である。

正雪について確かにわかっていることといえば、慶安四年に慶安の変を起こし、四十七歳で自殺したということ、そして没年から逆算して慶長十年（一六〇五）生まれであるというにすぎない。伝説によると、正雪は駿河国（現在の静岡県）に生まれ、生地近くの寺で学んだが、生来、利発で、江戸では楠不伝から軍学を伝授されたのち、兵法の塾を開き、旗本や諸家の侍に軍学を教えたという。慶安四年、徳川家光が病死すると、これを機として浪人をつのり、江戸と駿府で騒動を起こし、幕府を転覆しようとしたが、一味のなかから訴人（密告者）が出たため、陰謀が発覚し、正雪は自刃した。この事件はわずか四日間の出来事であった。

慶安の変の目的については、四日間の出来事にすぎないので、不明な点が多いのだが、浪人救済のために幕政の改革を訴え、しいて倒幕を企てたというのが歴史家たちの通説である。正雪が生きた慶長から寛永・慶安にいたる時代は、豊臣家から政権を奪ったばかりの徳川幕府が、その体制固めに努めた時期であった。関ヶ原、大坂、両度の戦いで、およそ五、六十万人の浪人が発生し、新規に召抱えられた者を除いても、ざっと見積って約三十万人の浪人が巷にあふれ、厖大な数の失業浪人が全国にあふれた。そのうえ、幕府はあいつぐ浪人取締令によって、浪人の生活をきびしく制限した。幕府の力の政策によって、路頭に迷う失業者となった浪人たちは、幕府を恨み、反抗を示すようになった。そこで正雪は彼等を救済しようとして、倒幕の乱を計画したという。その他、正雪がキリシタンであったとか、尊王倒幕を図ったとか、明治のころまでは、正雪はおのれの野心から天下の乗っ取りを企てた梟雄であるといわれたが、こんにちでは、きわめて乏しい史料から正雪の真意を理解することはむずかしい。

紀州大納言頼宣は、徳川家康の十番めの子である。将軍家光には二歳年上の伯父にあたる頼宣は、戦国武将のように豪放な性格だったので、江戸将軍家や幕府から敬遠されて南海不便の紀州

に移され、「南海の竜」、すなわち「南竜公」の異名でよばれていた。このため、心中常に不満を抱いていた頼宣は、武芸にすぐれた浪人を多く召抱えるとともに、明国の鄭芝龍、鄭成功父子が日本に援軍を求めた際に、その乞いに応じ、明国の四百余州に勢力を張ろうという野心を持っていたので、浪人や外様大名に慕われたが、将軍や幕府からにらまれた。頼宣の野心は、その当時、評判となり、功名心にかられた浪人は頼宣の驥尾に付して、風雲に乗じようと願った。頼宣から軍学兵法の講義を頼まれた正雪は、頼宣の不満と内外に対する野心を見抜いていたので、講義に際して、自己の兵法によって訓練した頼宣の軍兵で天下を容易に取ることができるということを、暗々裡にほのめかしていたという説もある。

胸に一物を蔵する正雪だけに、不満を抱き、浪人に慕われる頼宣を利用しようとしたのは当然のことで、幕府転覆の未遂事件を起こすまでに頼宣の名をひそかに使い、謀叛に加担する同志を集めたといわれており、こんにちでは、頼宣が正雪をバックアップし、正雪が頼宣と密約を結んでいたという説は、ほぼ定説化されつつある。正雪は役人に召捕られそうになると、頼宣の家来だと称したり、箱根の関所では、頼宣からの手形を利用して通過するなど、「南竜公」とよばれた南海道の竜のひげを巧みに利用したのである。頼宣、正雪、慶安の変にまつわる謎や不明な点は多いのだが、以上述べたように、慶安の変の陰で、頼宣と正雪が、密接な利害関係で結ばれていたであろうということは否定できない。

松平伊豆守信綱は、将軍家光に信頼され、幕政に辣腕をふるった有能な政治家で、縦横の才気にあふれ、裁決流れるごとくであり、伊豆守に出世したところから、ひとびとは知恵伊豆（出ず）といって尊敬した。幕府の体制固めに努めた信綱は、豊臣恩顧の加藤清正の嫡子、加藤忠広や福島正則、あるいは家光の弟で、家康の孫の駿河大納言忠長などの血族や、外様大名、親藩を

問わず、大名の取り潰しをおこなったので、多くの浪人が全国にあふれると、こんどは浪人取締令で彼等の生活をきびしく制限した。たとえば、多数の浪人が江戸に集まりはじめた際に、万一の場合を考え、浪人の親類縁者たちが江戸に居住することを許さなかったため、浪人が不満を抱き、これが慶安の変を起こさせた原因のひとつだといわれたほどである。明の鄭芝龍、鄭成功父子が、わが国に兵士や武器の援助を求めたとき、第二の豊太閤を夢みる家光は、出兵して大陸侵略を企て、海外雄飛の野心を抱いたが、鎖国令を発案、法制化した信綱が反対したので、出兵は中止になったという。浪人取締り、鎖国令の堅持、慶安の変の処理などに尽力し、幕府創業の基礎を固めたのは信綱であった。

『徳川三国志』の正雪は、弁舌が立ち、剣にも強く、東海道で知り合った丸橋忠弥、金井半兵衛とうまが合うので協力し、江戸では有名な旗本奴の水野十郎左衛門とそのライバルで町奴の幡随院長兵衛との対立関係を、巧妙に利用して、次第に頭角をあらわす。したたかな策士である正雪は、水野十郎左衛門の弱味につけこんで、軍資金を出させ、軍学道場を開くことを企てるとともに、軍学者の楠不伝の養子となり、将門塚の前で、松平伊豆守信綱を怨んで切腹した徳永家遺臣、末次新左衛門の一件を利用し、楠不伝と組んで芝居をうち、幕府から牛込榎町に拝領地を貰って道場を完成する。この軍学道場の張孔堂に食いつめ浪人達が集まるにつれて、正雪の人気は高まり、張孔堂は江戸名所の一つになる。野心家で開明的な正雪だけに、倭寇とよばれて国外で怖れられている海賊と提携し、あるいは、外国に目を向けている頼宣を利用して、南海に新日本領を開拓し、浪人達の楽土を築くという夢を抱く。

明国の滅亡を喰い止めるため、日本に援軍を求めて来日していた鄭芝龍とその老師、河南少林寺の陳元贇と知り合った正雪は、二人から、援軍としての浪人義勇軍の編成を要請された際に、

彼等を利用して頼宣と接触し、頼宣の面識を得たのち、紀州徳川家の家紋を使用する許可を得るほどの信頼をかちとるにいたる。正雪が旗本奴の水野十郎左衛門と町奴の幡随院長兵衛との対立関係を利用して台頭してゆく有様や、倭寇の勢力、頼宣を利用して海外雄飛の夢を抱くなどは作者の新解釈として面白い。正雪と頼宣の関係について、柴田錬三郎は、昭和四十七年、NHK総合テレビで放映した「日本史探訪――由比正雪――」のなかで次のように語っている。

「この徳川頼宣という人は、これは史実に残っていますけれども、軍艦を造って水軍の練習をしています。これが和歌山の海ですね。鯨捕りの船で鯨をとる練習だと称して、実は軍艦の練習をやっているわけですね。で、これに目をつけたわけだな、由比正雪は。今までにそういう説はありませんけれども、私の推理では、ここで紀州頼宣の水軍を利用するということを考えたのではないか。そしてまたその時に、少年時代に浅間神社で見た山田長政のあの戦艦図絵を思い出したのではないか。山田長政は外国で活躍していますが、いっしょにやっているのはみんな浪人者ですよ。そのころは、ルソンにも安南（ベトナム中部）にも日本人町というのがありました。みんな浪人者で、しかも日本の武士として面目を保っています。日本の武士としての生活をちゃんと守っているわけです。そしてこれは非常に強いわけです、外国へ行って。だから、国家として軍隊を外国に送れば、これは侵略になりますね。ところが、移民という考え方をすれば、これは侵略にならないわけです。現代だってやっぱり、ハワイにもブラジルにも、皆、移民しているわけですから。だから、移民的な考え方が正雪の中に起きたにちがいない」

頼宣が折にふれて勇壮な捕鯨船仕立ての水軍調練を試みたことは事実である。熊野の田辺荘湯崎の海で、三、四百隻の捕鯨船を集めて水軍の調練をおこなった。この情報を得た幕府は、頼宣が水軍による反乱を起こすのではないかという疑いを抱き、紀州藩の在府の者を招き、事情を聴取したが、頼宣の真意をつかむことはできなかった。シャムに渡って国王になった山田長政は、正雪と同様に、駿河の生まれだといわれており、正雪は静岡の賤機山の南の臨済寺という寺に子供のころ預けられたという説がある。臨済寺の近くには浅間神社があって、そこには現在のタイ国（当時のシャム）に行って功績をたてた山田長政が送ってきた戦艦図絵の額が掲げられている。由比少年はこの絵をながめたことによって影響を受け、長政のような海外雄飛を試みたというのだ。正雪が長政の感化を受けたというのは興味深い異説であるといえよう。

『徳川三国志』の頼宣は、ことあるごとに幕閣に対抗し、将軍家光の弟、駿河大納言忠長と同様に、謀叛の企てを抱いているとされ、忠長の後楯だともいわれている。家光の側近である松平伊豆守信綱は、忠長が幕府に対して叛旗をひるがえせば、天下にあふれた浪人が〝好機ござんなれ〟とばかり、駿府へ馳せ参ずるにちがいない、しかも、頼宣が忠長の後楯だとするならば、なおさらこのことは幕府にとってゆゆしき問題だ、と考えて、唯一人で駿府に赴き、白絹の死装束の下着を身につけ、決死の覚悟で忠長を説得する。その際に、信綱は忠長が逆臣の牧野備後や紀州家家老関口隼人正らの策謀によって、たばかられているのだ、という口実を設けて備後を斬り、忠長を救命する。知恵伊豆の名にふさわしい賢明な処置である。第一章終尾のこの名場面の描写が印象的だ。この作品における信綱の行実をたどると、彼が幕府の基礎を築くにあたって実力を発揮した有能な人物であったことがわかる。

この長編小説には、多彩な実在、虚構の人物が多数登場する。主な登場人物は、正雪を中心とする丸橋忠弥、金井半兵衛、楠不伝、天魔の三郎の率いる山者集団などの張孔堂一派、松平伊豆守信綱を中核とした将軍家光、柳生但馬守宗矩、十兵衛父子、公儀隠密団を指揮する服部一夢斎、その弟子の鴉の甚兵衛、一夢斎の孫娘の志乃らの信綱一派、そして、紀州大納言頼宣を代表的な人物にすえて、駿河大納言忠長、根来忍者の頭領、根来幻幽斎、その手下の根来一郎太から十郎太にいたる怖るべき根来忍者群などの頼宣一派、以上の三つのグループに大別することができる。この三派が鼎立し、覇を競い、正邪善悪の争いを展開する有様を描いた、この作品の特色は、三派の中心人物、ことに由比正雪と紀州大納言頼宣の不明、謎の部分に、作者の想像力による光を当て、作者の新解釈で描き出したところにあるといえよう。

歴史上の人物や事件の史実には、かならず不明な点や盲点、あるいは死角がある。どんなに研究され、調べつくされた人物や事件にもわからない点があるはずだ。そこで歴史作家は、想像力や新解釈によって、その空白の部分をおぎなう作業をおこなう。柴田錬三郎は想像力豊かな作家だったので、史実に頼らない、すぐれた時代小説を書いた。ある文芸講演会で、柴田錬三郎は次のように述べている。

「私の書いた『男は度胸』というドラマがNHKから放送され、なかなか受けていたようです。『男は度胸』には、紀伊国屋文左衛門が出てきてみたり、八代将軍吉宗が出てきたり、大岡越前守だとか、大石内蔵助が出てくるんで、一般の方から、NHKや私のところへ、電話や投書がきて、『ひどいじゃないか』とか『でたらめを書くな』といわれました。しかし、これは年代的には同時代の人なんです。ところが、どういうものか一般の方々は、『大岡政談』、『忠臣蔵』は『忠臣蔵』というふうに、ばらんばらんにお考えになって

いるらしい。ですから、それを全部結びつけてしまうと、とんでもないでたらめをやるじゃないかと抗議を受けるわけです。仕方がないから私は、ＮＨＫの人に年表をつくって配ってくれ、同時代に生きてて、つまり五十年も違っているわけじゃない、たしかに同時代に生きていたんでまちがいないんだ、というふうにいってくれって、頼んだことがあります。

もっとも、いくら同時代でも、みなさん方が必ずしも佐藤栄作とお会いになってるとは限りませんね。それと同じで、紀伊国屋文左衛門が大石内蔵助と会っていたかどうかわからない。ただしこれは、当事者が全部死んでしまっているわけですからね、証拠はなんにも残っていないんだ。そういうところが、この『時代もの』のたいへんとくなところでして、こういうときには、そうとう自由に書けます。――もう一つ断っておきますが、歴史小説と銘うってですね、あるいはまあ歴史小説を書く人たちが、もったいめかして書きますね。それだって絶対に真実とは限らない。たいてい昔の記録というもので残っているのは、そのときの一番の強権者に対するオベッカであったりする。絶対に自由な状態において書かれた記録というものは残っておりませんから、『これはこうだったんだ』と記録をふり回してみても、それが必ずしも正しかったとは思えません。ですから、事実はどうだったんだか、これはもうすでに過去にすぎてしまったことですから、どうしてもわからない。そこが私のような男には〝つけめ〟なんです。まあ明治のころになりますと、たいへんはっきりしてますけども、徳川の中期から初期、それから戦国時代にかけますと、どうしてもわからないことが一杯出てきます。出てくるその記録に残らないところが、われわれ『時代もの』を書く人間の〝つけめ〟であります」

いささか長い文章を引用したが、この文章を、『徳川三国志』にあてはめて読んでみると、その特色がわかりやすく、的確に表現されていることに気づくと同時に、柴田錬三郎は、史実なるものが伝えそこねた不明な点や謎を、虚構のてづまで埋めることを好んだ作家であったということを痛感するのである。

昭和六十一年十一月二十五日

（文芸評論家）

文春文庫

徳川三国志

定価はカバーに
表示してあります

1989年10月10日　第1刷
1994年5月15日　第6刷

著　者　柴田錬三郎
発行者　堤　　堯
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-714312-7

単行本　昭和60年8月ペップ出版株式会社刊

柴田錬三郎　猿飛佐助　柴錬立川文庫1
柴田錬三郎　真田幸村　柴錬立川文庫2
柴田錬三郎　裏返し忠臣蔵　柴錬立川文庫3
柴田錬三郎　柳生但馬守　柴錬立川文庫4
柴田錬三郎　嗚呼江戸城　全三冊
柴田錬三郎　われら九人の戦鬼　全三冊
柴田錬三郎　徳川太平記　上・下
柴田錬三郎　徳川三国志
澁澤龍彥　高丘親王航海記
島田荘司　夏、19歳の肖像
島田雅彦　未確認尾行物体
志水辰夫　あっちが上海
清水義範　動物ワンダーランド　――ヒト特集

清水義範　ナウの水びたし
子母澤寛　剣客物語
子母澤寛　脇役
白石一郎　天翔ける女
白石一郎　幻島記
白石一郎　サムライの海
白石一郎　島原大変
白石一郎　海狼伝
白石一郎　長崎ぎやまん波止場　若杉清吉捕物控
白石一郎　蒙古の槍　孤島物語
白石一郎　オランダの星
白石一郎　海峡の使者
白石一郎　海王伝

城山三郎　鼠　鈴木商店焼打ち事件
城山三郎　一歩の距離
城山三郎　緊急重役会
城山三郎　学・経・年・不問
城山三郎　当社別状なし
城山三郎　忘れ得ぬ翼
城山三郎　甘い餌
城山三郎　怒りの標的
城山三郎　望郷のとき　侍・イン・メキシコ
城山三郎　「粗にして野だが卑ではない」　石田禮助の生涯
城山三郎　賢人たちの世
新藤兼人　小説田中絹代
杉本章子　写楽まぼろし

杉本章子　東京新大橋雨中図
杉本章子　名主の裔
杉本章子　爆弾可楽
杉本苑子　埋み火　上・下
杉本苑子　影の系譜　豊臣家崩壊
杉本苑子　冥府回廊　上・下
杉本苑子　冬の蟬
杉本苑子　穢土荘厳　上・下
杉本苑子　残照
杉本苑子　鶴屋南北の死
杉本苑子　雪中松梅図
杉本苑子　隠々洞ききがき抄　天和のお七火事
瀬戸内晴美　輪環

- 田辺聖子　鬼たちの声
- 田辺聖子　浜辺先生町を行く
- 田辺聖子　スヌー物語
- 田辺聖子　小町盛衰抄　歴史散歩私記
- 田辺聖子　私本・源氏物語
- 田辺聖子　ダンスと空想
- 田辺聖子　しんこ細工の猿や雉(きじ)
- 田辺聖子　はじめに慈悲ありき
- 田辺聖子　ブス愚痴録
- 田辺聖子　うつつを抜かして　オトナの関係
- 玉木正之　不思議の国の野球　ベースボール チェンジアップを16球
- 陳舜臣　中国任侠伝
- 陳舜臣　続・中国任侠伝

- 陳舜臣　青玉獅子香炉
- 陳舜臣　秘本三国志　全六冊
- 陳舜臣　小説マルコ・ポーロ
- 陳舜臣　異人館周辺
- 辻邦生　時の扉
- 辻邦生　風の琴　二十四の絵の物語
- 辻原登　村の名前
- 筒井康隆　48億の妄想
- 筒井康隆　馬の首風雲録
- 筒井康隆　大いなる助走
- 筒井康隆　美藝公
- 筒井康隆　原始人
- 筒井康隆　文学部唯野教授のサブ・テキスト

- 都筑道夫　名探偵もどき
- 都筑道夫　捕物帳もどき
- 都筑道夫　狼は月に吠えるか
- 都筑道夫　チャンバラもどき
- 都筑道夫　べらぼう村正　女泣川ものがたり
- 都筑道夫　風流べらぼう剣
- 綱淵謙錠　斬(ざん)
- 綱淵謙錠　戊辰落日　上・下
- 綱淵謙錠　殺(さつ)
- 綱淵謙錠　刑(けい)
- 津村節子　春の予感
- 津村節子　炎の舞い
- 津村節子　ガラスの階段

- 津村節子　冬銀河
- 津村節子　海の星座
- 津村節子　惑い
- 津村節子　海鳴
- 津村節子　流星雨
- 津本陽　闇の蛟竜
- 津本陽　明治撃剣会
- 津本陽　前科持ち
- 津本陽　薩南示現流
- 津本陽　南海綺譚
- 津本陽　黄金の天馬
- 津本陽　雑賀(さいが)六字の城
- 津本陽　薩摩夜叉雛

- 津本陽　わが勲(いさおし)の無きがごと
- 津本陽　剣のいのち
- 津本陽　宮本武蔵
- 津本陽　虎狼は空に　小説新選組
- 津本陽　富士の月魄(つきしろ)
- 津本陽　芥子(けし)のかおり
- 津本陽　幕末新人類伝
- 津本陽　柳生兵庫助　全八冊
- 津本陽　巨人伝　上・下
- 津本陽　黄金の海へ
- 津本陽　お庭番吹雪算長　上・下
- 典厩五郎　土壇場でハリー・ライム
- 土井行夫　名なし鳥飛んだ

- 戸板康二　家元の女弟子
- 東郷隆　人造記
- 藤堂志津子　熟れてゆく夏
- 藤堂志津子　恋人よ
- 豊田穣　長良川
- 豊田穣　ミッドウェー戦記
- 永井路子　炎環
- 永井路子　朱なる十字架
- 永井路子　乱紋　上・下
- 永井路子　流星―お市の方―　上・下
- 永井路子　銀の館　上・下
- 永井路子　一豊の妻
- 永井路子　美貌の女帝

文春文庫　フィクション

- 永井路子　北条政子
- 永井路子　噂の皇子(みこ)
- 永井路子　恋のうき世　新今昔物語
- 永井路子　裸足(はだし)の皇女(ひめみこ)
- 永井路子　長崎犯科帳
- 長尾誠夫　源氏物語人殺し絵巻
- 永岡慶之助　斗南(となみ)藩子弟記
- 中上健次　岬
- 中上健次　日輪の翼
- 中上健次　讃歌
- 中里恒子　時雨の記
- 中里恒子　綾の鼓―いすぱにやの土
- 中村正軌　元首の謀叛(ぼうはん)　上・下

- 中村正軌　貧者の核爆弾
- 中山千夏　ダブルベッド
- 南木佳士　ダイヤモンドダスト